女子文壇

短篇小説

定期増刊

第五年
第十一號



明治卅七年十二月十九日第三種郵便物認可　明治四十二年八月十五日發行（毎月一回一日發行）

女子文壇第三増刊

短篇小説目次

牧人の笛



（大江原色版製版印刷）

好評嘖々

前半期の女子文壇臨時增刊 一、二

新美文

全一冊美裝

定價金貳拾錢 郵税壹錢五厘

口繪 入選作家十二人寫眞及石版彩色樂聲三隅筆密刷

現代の若き女子は如何なる感情を抱きつゝありや又如何なる趣味を持ちつゝありや之を窺んとする者は本書を見よ、或は家庭を材とし或は自然を描き或は人事を歌ひ或は都會を寫す百人百様の觀察は讀者をして送迎に遑なからしむ、選擇の嚴正にして批評の痛切なる蓋し最新式の文章を學はんとする者には無双の寶典たるべし

▲附錄 名家新作

◎小寒日記……薄田泣菫
◎裏の家……吉江孤雁
◎憧憬……小川未明
◎一轉機……高須梅溪
◎女床屋……兒玉花外
◎拾て犬……岡田八千代
◎火葉……澤村胡夷

女子名文 新作家



口繪 原色名畫頗鮮麗 入選作者十七人寫眞光澤紙密刷

定價金貳拾錢 郵税壹錢五厘

若き女子が大懸賞懸募の小說、美文、詩歌俳の文藝を興味ある新式編輯法にて統一せるもの。別に日課表あり登載各自の住所年齡家庭等作物と對照し其人物を一目瞭然たらしむ。

▲附錄 閨秀作家短篇小說

○闇の夜……服部貞子
○敗者……加藤菊子
○火事……永代美千代
○氣まぐれ者……太田樂子
○新粧……尾島[illegible]子
○六月……山田くにえ
○姉……故田中久子

各紙數大判二百四十頁價格は最廉無比

東京市京橋大鋸町十二番地 女子文壇社出版 （振替口座東京第貳七貳九番） 賣捌 全國書店

最寄書店になくば出版元へ申込を乞ふ

(中挿の一)

女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

産科婦人科専門 醫學士北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病 自宅療法

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて。素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて、生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◎著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し左の各項に分ちて丁寧親切に詳説せり◎病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ。當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ。

目次

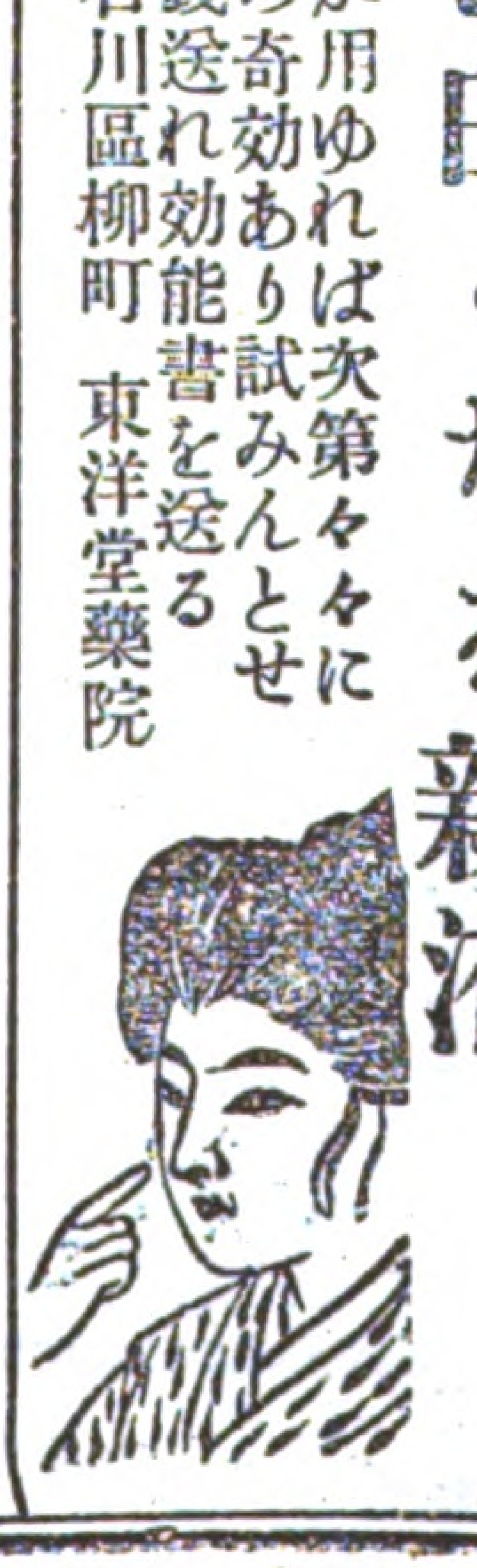
婦人病の總論◎子宮病血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◎神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◎しらちながちの病理及其根治法◎月經時の手當月經諸病の療法◎姙娠の原理、受胎すべき塲合、姙婦の衛生、つわりの養生法

發行所 東京築地新榮町四ノ一（電話新橋三千六百一）笹岡省三

色白くなる新液

色黒き人が用ゆれば次第々々に白色艶美の奇効あり試みんとせば郵券二錢送れ効能書を送る

東京小石川區柳町 東洋堂藥院



洋畫講義録

洋畫講義録は水彩畫を始め其他油繪木炭畫ペン畫鉛筆畫肖像畫等すべて一切の洋畫に關する事を詳細に講述す毎號美麗なる挿畫數多あり、毎月一回發行、一年卒業、會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

執筆者 三宅克己先生 岡田三郎助先生 大下藤次郎先生 中澤弘光先生 外大家十數名

新學期開始 東京市麻布飯倉四丁目

大日本繪畫講習會

繪畫講習録は日本畫の技術と之に關する各種の學科とを平易懇切に教授し如何なる初學者と雖も忽ちにして上達せしむ毎號美麗なる繪畫數葉を挿入す、毎月二回發行一年卒業會費月卅六錢、詳細規則無料進呈

繪畫講習録

執筆者 川端玉章先生 荒木寛畝先生 寺崎廣業先生 梶田半古先生 外大家十數名

妾の手がけた方で此病にて諸種の買藥して癒らぬ人も悉く治りし故夫れて皆様の進めにより御披露し升御問合せは往復はがきにて御申込あれ

ちゞれもくせも 一大奇法 もはへうけあい

女髪師 東京麴町區飯田町四ノ十六 安部歌子

女子文壇の廣告により御申込の節は其旨御書添を乞ふ

第二回新學期開始

實用女學講義錄

◉今や入會の最好機なり

此の好機を逸して悔を遺すこと勿れ◉

▲自宅に在りて業務の傍、高等女學校程度の學術技藝を修得せんと欲するものは速に本會に入れ、本會發行の實用女學講義錄は前記學課の外に我國家庭の事情に參酌して女子必須の諸學藝を遺憾なく講究せしむ。

▲會長　尾崎行雄氏自ら會務を監督し取扱親切也
▲講師　斯道に經驗深き專門大家拾數氏之に當る
▲組織　高女課程以外家政技藝等を加へ實用的也
▲講義　言文一致畫入れ假名付きにて誰にも判る
▲質問　不明の處は何回にても自由に質問を許す
▲雜誌　會員には講義錄の外機關雜誌を毎月進呈

▲本會は中學講義錄を發行して成巧せる深き經驗を基礎として新式の教授法により丁寧懇切に教授す、小學校卒業位の學力あらば何人にても容易に了解することを得べし

▲會員　の詩歌文章俳句は添削して雜誌に掲載す
▲會費　全學期の會費は都合半月の學費にて足る
▲入會　何時入會するも講義錄は第一號より送る
▲章票　會員には會員章、修業證、卒業證を送る
▲特典　此際至急入會者には入會金を免除すべし

◉先づ規則書を要求せよ

見本付き規則書無料進呈すべし◉

東京神田區駿河臺

大日本國民中學會女學部

（電話本局三〇〇四番　振替東京四二〇〇番）

（中付の四）

當選作家



太田喜志子君



佐藤滿壽子君



原田琴子君

當選作家



きみ子君



佐分華影君



みゆき君



特田繁子君

當選作家



木幡君子君



花岑淑子君



木村那賀子君



赤崎愛子君

水　　上



女子文壇の廣告によりて御申込の節は其旨御書添を乞ふ

秀才文壇第九卷大發展紀念 臨時増刊

處女作號

八月二十日發行 正價金貳拾錢 郵税金一錢五厘

△普く文壇に警告す!!

多年市に匿れて、密かに修養し、蘊蓄しつゝありし實力あり天分ある新作家を、汎くあらゆる方面に索めて、その最も態度の眞率なる、優に名家の壘を摩するに足る佳作を拔抽し、之を新たに文壇の水平線上高く、炳焜たる白熱光を放たしむべき光榮を完うせんとする爲めに、本誌は特に夏期增刊として「處女作號」を刊行し、强烈なる刺激を我が文壇に投ぜんとす。

崖下の家……永代靜雄
パン屑……小山集川
鷄……大倉淺男
詩……加藤朝鳥
寄寓……山口三郎
燈影……淸見陸郎
就職……奥瀨多比良
（以上本欄）

△荷馬車……平栗猪山
△下宿料……松島煙汀
△死兒……大菅胡果
△船待つ宵……尾知山靜波
△雨の日……金室紫村

附錄

○花より雨に……永井荷風
○隣の醫師……德田秋聲
○モウパツサン「ウーマンス、ライフ」梗槪

處女作の回顧（白鳥、秋聲、有明、薫、葉舟、青果、花外、霜川、未明、其他）

（廣告の一）

發行所 東京神田旅籠町一丁目 文光堂 振替口座九一五五
賣捌 東京堂 東海堂 北隆館 至誠堂

女子文壇の廣告に依り御申込の節は其旨御書添を乞ふ

國學院學士　小森松風先生編著

東宮侍講本居豊頴先生題詠
文學博士小杉榲邨先生序文
下田歌子先生題歌

女子美文作法

全一冊大判二百卅頁　賣價金貳拾錢　郵税四錢

美文の作り方を最も明瞭に解説し、加ふるに大家の名文を模範として擧げたれば、文章を作り、文章を愛する者には寸時も座右を離すべからざる良書なり

理學博士坪井正五郎先生序文
山田美妙先生序文

女子言文一致文範

全一冊大判二百卅頁　賣價金貳拾錢　郵税四錢

現代の文章は殆んど言文一致に限られんとす、言文一致體の文章を學ばずして現代の文章は作り難し、此書最も選擇に注意したれば言文一致の文範書として殆んど完全せり

報知新聞記者
中村木公君著

實地精査

女子遊學便覽

女學校長寫眞肖像入

賣價拾五錢　郵税四錢

子女を東京に遊學せしめんとする父兄も之を讀め自ら學校の選擇に迷ふ諸孃も之を讀め、一讀釋然として東京女學校の消息を知悉するを得む

出版元　東京市京橋大鋸町　女子文壇社　（振替口座東京第七九壹貳番）

賣捌　全國書店

短篇小說

女子文壇第三增刊



奉公人

島崎藤村

室賀の御新造は新に奉公人として抱へた百姓の娘を臺所の方へ連れて行つて、いろ〳〵と爲ることを言つて聞かせた。信州の山家のことだから、鍋釜を洗ふだけなら裏の流れで間に合ふが、飲む水を汲む爲には桑畠や野菜畠の間を通つて、共同の堀井戸まで行かねばならぬ。御新造はそれを言つて、それから炭、薪ボヤなぞの置いてある暗い物置小屋の戸を開けて見せた。御新造は又、爐邊に近い部屋の方へ娘を連れて行つて前に居た下女が敷いた蒲團を指して見せた、そこに寢道具が置いてあることなぞを言ひ聞かせた。

娘の名はりんと言つた。年は漸く十五にしかならないが、家に居る時は繼母の子供を負ひ乍ら、勝手をさせられたものであるといふ。給金は別に定めなかつた。盆暮に仕着せをして、平素は御新造の古かなにかて着せて、暑くなく寒くなければそれで澤山だ、そのかはり讀書と針仕事とを仕込んで貰ひたい、斯の約束て來た。其晩から、りんは室賀の家の爐邊で寢た。

御新造は二人子持である。いづれも女の兒で、延ちやんは五つに成るし、福ちやんの方は三つに成る。何時の間にかりんは斯の二人の女の兒に忸れた。それから御新造に敎へられて、爐邊で食事の仕度が出來た頃には、旦那の居る部屋の方へ行つて手を突いて、

「旦那さん、御飯におやんなすつて。」

斯う言ふやうに成つた。

旦那は旅のもので、小諸へ來て田舍敎師をして居たから、十一時頃に成ると御新造が大きな曲物の辨當箱當箱の中へ御飯とお菜を一緒につめる。りんは其風呂敷包を提げて、子供を連れて、例の堀井戸の方から菓子屋の前を通り、湯屋の角を曲り、それから鐵道の踏切を越すか、さもなければ水車小屋の方から乘合馬車の通る廣い道路へとつて、子守の多勢集る停車場前へ出て、石垣桑畠の間を通つて、それから學校の門を入ると、小使が出て來ては旦那の辨當を受取るのが常だつた。

午後の三時過に成ると、旦那は洋服に下駄穿で歸つて來る。庭の林檎の樹も可憐な花を持つ頃で、何處か斯う遠くの方で呼ぶやうな、寂しい蛙の聲が風に送られて來る。旦那が同僚のことを言つて、『三枝さんが彼の二階で、夜獨り蛙の鳴くのを聞いてると、寂しくて堪らないと言たつけが、每年今時分に成ると一番旅の感じがするね。』斯う家の者の一緒に集つて居るところで言つた。

りんも思出したやうに、

『ほんとに、田圃の側なんかを夜獨りで通る時に、蛙が鳴くと、なんとなく心寂しいものだねえ。』

斯樣なことを言出した。その言ひ方がいかにもマセて居るので、旦那も御新造も笑はずに居られなかつた。

『ヒヨイ〳〵〳〵〳〵。』りんは蛙の鳴聲を眞似て聞かせた。『蛙は親の言ふことを聞かないてねえ、親が河へ埋めて呉んろと言へば山と言ふし、山へ葬けて呉んろと言へば河と言つたッて……そんな親不孝な奴だけんど、親が死んだ時は、親の言ふ通り山へ葬けてやつたッて……それて、雨でも降ると、親の墓が流れる〳〵ッて、哭くんだッてーネ。吾家の婆さんが話して呉れたっ』

丁度、家に居て父親と繼母の顏を見比べるやうに、りんは斯の室賀の家へ來ても、主人夫婦の顏をジロ〳〵見比べた。

延ちやんが斯様に大きく成らない時分は、兎角人見知をした。近所の子供が來ても一緒に遊ぶことを好まなかつた。どうかすると友達が來て積木をして居る間に。延ちやんは見えなくなる。そして人の居ない部屋へ入つて、獨りで鉛筆なぞを嘗めて何か書く眞似をして居る。御新造が連れて來て遊ばせやうと思つても、延ちやんはもうショゲ返つて了つて、急に母親の方へ行つて泣出したりなぞする。斯ういふ女の兒が、何時の間にか近所の子供と遊ぶことを覺えるやうに成つた。『この野郎、打つぞ。』——斯様な荒い言葉遣ひまでも見習ふやうに成つた。眞實、延ちやんはりんの手にオヘなかつた。りんばかりではない、御新造の自由にも成らなかつたのである。

例のやうに、りんは福ちやんを負つて、延ちやんを連れて、城跡の方へ遊びに行つた。『桃から』だの、『龜さん』だのは、延ちやんの好きな歌で、りんと一緒に樂しさうに歌つて歩いた。無邪氣な延ちやんは勝手に道草を食つた。路傍に螢草の花でも咲いて居やうものなら、延ちやんは其方へ氣を奪られてりんの言ふことなぞを聞入れない。りんは無理にも歩かせる積りで、嫌がる子供の手を引き〳〵しては歩いた。りんは未だ年が年で、自分でも遊びたいのである。あまり延ちやんが言ふことを聞かないので、終にはりんも口唇を嚙んで、何の氣なしに柔軟な子供の手を引張つた。しかも、それを強く引張り過ぎた。延ちやんの左の方の手はダラリと垂れて了つた。

日暮に近い頃まで、りんは延ちやんを連れて歩き廻つた。延ちやんが家へ歸らうと言へば、りんは種々に機嫌を取つて、今度は自分の方から花を摘むやら草を採るやらして呉れて、どうかして延ちやんを引留めたいと思つた。

『延ちやん、體操して御覽。』

と、不圖、りんは思付いたやうに言つて、自分が先づ左の方の手を揚げて見せた。

其時延ちやんも思はず兩手を揚げた。そして、微笑んだ。りんは腰の手拭で延ちやんの顏を拭いて呉れて、ホッと深い溜息を吐いた。

「さ、行かう……オバケ來るから早くお家へ行かう……」
斯う言つて、りんは喜び勇む子供を連れて、主人の家の方へ急いだ。
黄色い南瓜の花の咲いた垣根の側には、御新造が立つて、子供等の歸りを待詫びて居た。
「今頃まで何處を歩いてるんだねえ」と御新造は怒を帶びた調子で言つた。「延ちやん—早くおいて。」
斯う言はれて、延ちやんは母親の方へ馳けて行つて、その兩手に縋り付いた。急に延ちやんは聲を揚げて泣出した。

「今晩は。」
斯う聲を掛けて、近所の娘達が入つて來た。この娘達は、夕飯の終る頃から手習の草紙を抱いて、御新造のところへ通つて來るのである。
「どうぞ、お上んなさいまし。」と御新造は入口の庭の方へ福ちやんを向けて、自分も一緒に蹲踞み乍ら言つた。
「まあ、福ちやん肥つて居なさること。」と娘の一人が言つた。
他の娘も笑ひながら、「福ちやん、シイコが出ますかネ。」
福ちやんは半分眠つて居た。御新造は子供の兩足を持添へて、「シー」とさせて、やがて奥の方へ連れて行つた。
延ちやんは最早眠つて居た。延ちやんの枕許には人形が大事さうに寐かしてあつた。御新造が福ちやんに寐衣を更へさせて居るところへ、りんは線香の粉にしたのを紙に包んで持つて來た。福ちやんは股擦がして、傷さうに爛れて居る。そこへ御新造は線香の粉をなすつて、襁褓を宛てゝ、それから人形でも搏る

やうに福ちやんの足を搦つた。

御新造が横に成つて子供を寐かしつけて居る間に、近所の娘達は洋燈の周圍へ集つた。りんも臺所を片付けて來て、手習の仲間入をさして貰つた。兎も角もりんは尋常科だけ卒業したと言つて、前に居た下女のやうに假名の『か』の字を右の點から書き始めるやうなことはなかつた。

しかし、りんは性來讀書が嫌ひである。奈何に他の娘達が優美な手紙の文字を書習はうとして骨折つて居ても、りんはそれを羨ましいとも思はなかつた。やがて御新造が起きて來て、ヨモヤマの話が始まる頃には、りんは默つて引込んでは居ない。りんは他の娘達よりも喋舌つた。無智な彼女はまたそれを得意にして、日頃繼母を『叔母さん、叔母さん』と呼んだことや、その繼母は曾て隣家の寡婦であつたことなぞをノベツに話した。斯の娘の口にかゝつては、大抵のものは喋舌りまくられる位である。

誰の口眞似かは知るものもなかつたが、りんは自分の繼母を斯樣な風に評した、

『ナニ、あの人は小言をヤカマしく言つても、腹の無い人ですから――』

それを聞いて、御新造も、他の娘達も腹を擁えて笑つた。其日は、旦那は學校の生徒を連れて遠足に出掛けたが、遲くなつて草鞋穿て歸つて來た。

十月の末に成つた。中庭にも、臺所の裏手にも、柿の枝が重さうに垂下つた。豆腐屋の子息は賴まれて來て、先づ裏の方の樹へ上つた、山家では柿の實の熟する頃て、樂しい秋の日の光が射し入る。旦那や延ちやんは裏へ出て見る。御新造は福ちやんを抱いて勝手口に立つて居る。斯ういふ時には、りんは夢中て、陰日向に成つた霜葉の下を歩き廻つた。

急に、どゝゝゝと音がした。枝のへシ折れる音もした。豆腐屋の子息は落ちたかと思はれた。これは

笊の繩が切れた爲に、捥ぎ留めた柿の實が一時に落ちて來た音てあつた。柿は桑畠の方まて飛んだ。りんは延ちやんと一緒に成つて、嬉しさうに彼方此方と拾つて歩いた。

「繩ぢや切れて不可。りん、細引を持つて來い。」斯う旦那が言つた。

りんは勝手口へ飛んで行つて、「御新造さん、細引を頂戴」と言つた。りんはもうキョロ〳〵四邊を見廻して居た。

裏の柿は「こねり」と言つて、日あたりの好い故か早く色づいた。臺所の板の間はごろ〳〵する柿て一ぱいに成つた。中庭の「甘露」の方はまだ青いのがあつて、豆腐屋の子息は半分ほどしか捥がなかつたが、それでも縁側に山ほど有つた。丁度日曜て、隣家の娘も話しに來た。この娘は茶斷だと言つて、御新造がすゝめる茶は飲まずに柿だけ取つた。皆な縁側のところへ集つて食つた。「第一、大屋さんへ進げなくちや。」と御新造は言つた。りんは柿を入れた笊を抱いて、隣近所へそれを配つて歩いた。

「りん、これを岡本さんへ持つておいで。」と旦那が言つた。岡本さんとは、矢張旦那の同僚である。

「斯樣に澤山！」りんは眼を圓くした。

御新造は笑つて、「お前、途中て食べて居ちや不可よ。」

「まさか。」とりんが答へる。

「りんのことだもの――」と御新造は意味有りげに言つた。

「りんのことだから、食べてなぞは居ないナア。」と旦那が笑つた。

「へゝゝゝゝ。」

とりんも笑つて、柿の笊を攫へながら飛んで出て行つた。やがてまた馳けて歸つて來て、「行つて參じやした。」と言ふから、旦那が「先生は居たかい。」と聞くと、「先生はどうだか見えませんてしたが、御新造さんが出て來ました――御新造さんは奧の方てねえ、二十錢銀貨だと思つて、めた喜んだら、五厘銅貨だつ

た、ツマラないナアなんて言つてました。」

「無駄口を利くな。」

斯う旦那に叱られて、りんはすご／＼引下つた。

「りん、りん。」

返事がない。南の明窓からは、朝の光が薄白く射して來た。戸の透間も明るくなつた。ランプは細目に暗く赤く點つて居る。

「りん、りん、りん。」

と復た御新造が續けざまに呼んだが、未だ返事がない。

「あゝあゝ、驚いちまつた。」

御新造は歎息した。斯の呼聲に、りんが眼を覺まさないで、子供の方が眼を覺ました。急に福ちやんは泣出した。「それ、うま／＼」と母親に言はれて、福ちやんは餘計に烈しく泣いた。

「ハイ。」

とりんは呼ばれもしない頃に返事をして、起きて寢道具を疊んだ。

りんが臺所の戸を開ける頃は、隣家の方では塵拂をかけたり部屋を掃除したりする音が聞える。水車小屋の方では鷄の聲が起る。りんはボヤを取りに裏口へ出て見たが、早起の隣家のおばさんは最早裏庭を奇麗に掃いて、大きな芥取に落葉を掻取つて、それを裏の竹藪の方へ捨てに行くところであつた。

「どんなにお前を呼んだかしれやしない‥‥いくら呼んだつて、返事もしやしない」。

斯う御新造が起きて來て言つた。

りんは答へなかつた。默つて釜の下を焚付けた。暗い、噎せるやうな煙は、煤けた臺所の壁から高い草

茸の屋根裏を這つて、爐邊の方へ遠慮なく侵入して行つた。家の内は一時この煙で充たされた。

黄ばんだ日が映つた。收穫を急がせるやうな小春の光は、植木屋の屋根、機械場の白壁をかすめて、激しい霜の爲に枯々に成つた桑畠の間を通して、室賀の家の土壁を照した。家毎に大根を洗ひ、それを壁に掛けて乾すべき時節が來た。毎年山家での習慣とは言ひながら、斯うして野菜を貯へたり漬物の用意をしたりする頃に成ると、復た長い長い冬籠の近づいたことを思はせる。

隣家のおばさんは裏庭にある大きな柿の樹の下へ蓆を敷いて、ネンネコ半天を着た老婆さんと一緒に、大根を乾す用意をして居た。まだ洗はずにある大根は山のやうに積重ねてあつた。斯の勤勉な、勞苦を勞苦とも思はないやうな人達に勵まされて、室賀の御新造も手拭を冠り、ウハッパリに細紐を巻付けて、りんを助けながら働いた。時々隣家のおばさんは粗末な垣根の所へやつて來て、御新造に聲を掛けたり、お歯黒の光る口元に微笑を見せたりした。りんは隣家のおばさんと同じやうに荒れ性で、皸の切れた手を冷たい水の中へ突込んで、土のついた大根を洗つた。

俗に『地大根』と稱へるは、この荒寥とした土地でなければ産しないやうな野菜であるが、室賀でもこれを白い『練馬』に交ぜて買つた。地大根は、堅く、短く、蕪を見るやうで、土地慣れない御新造が縄で縛らうとするには大分時が要つた。

學校のひける頃、旦那は小倉の行燈袴を穿いて歸つて來た。やがて洗ふものは洗ひ。縛るものは縛つて、半分ばかりは乾される用意が出來たので、りんは旦那を呼びに行つた。旦那は勝手口の方から梯子を持つて來て、それを土壁に立掛けた。それから、旦那の力ではやうやく持上るやうな、重い大根の繋いである縄を手に提げて、よろよろしながらその梯子を上つた。女共は、笑つて、動れる梯子をおさへた。

冬至には、室賀の家でも南瓜と蕗味噌を祝ふことにした。南瓜はその爲に取つて置いたのが、南向の部屋の床の間に殘つて居る。蕗の薹は御新造が裏の方へ行つて、桑畑の間を流れる水の邊から、頭を持上げたやつを摘取つて來た。

『お寒う。』

斯う聲を掛けて、大屋さんの娘が家の側を通つた。

御新造は爐邊へ鍋を持出して、手製の蕗味噌を作らうとして居たが、ふと大屋さんの娘で思付いたやうに、『りん、そこから覗いて御覽よ――大屋さんから取りに來たかナ。』と言出した。

りんが臺所から流れの方を見ると、大屋さんの娘は寒さうな樣子をしながら、石の間を探し歩いて居る。

『默つて皆な取つて了つて、惡いことをした。』と云た御新造が氣の毒さうに言つた。『探したつて最早有りやしない。それぢやねえ、りん、このお味噌が出來たら大屋さんへ持つておいて。』

りんはジロジロ御新造の顏を見た。やがて蕗味噌が甘さうに出來た頃、御新造から小さな蓋物を受取つて、それを風呂敷包にして提げて出た。復た雪の來さうな空模樣であつた。誰も見て居ないところへ行くと、りんは獨て恐かしく笑つた。そして、室賀の家の土塀について、枯々な桑畠の間を通つて、大屋さんの裏手にあたる小高い石段を昇つた。

御新造はすこし風邪の氣味で、春着の仕度を休んだ。胡燵であたゝめた寝着に着更へさせてから、延ちやんも福ちやんも寝て了つた。押詰つてからは、提灯つけて手習に通つて來る娘達もなかつた。御新造が胡燵のところに頭を押付けて居るのを見ると、りんも手持無沙汰の氣味で、アカギレの膏藥を火箸で延ば

して貼つたりなどして居た。

寒い晩てあつた。時々部屋の柱の凍割れる音がした。りんは自分から進んで一字ても多く覺えやうと思ふやうな娘てはなかつたが、主人の思惑を憚つて、申譯ばかりに本の復習を始めた。何時の間にか彼女の心は、蝗蟲を捕つて遊んだり草を藉いて寢そべつたりした樂しい田圃側の方へ行つて了つた。そして、主人に聞えるやうに、同じところを何度も何度も繰返し讀んて居るうちに、眠くなつた。終には、本に顔を押當てたなり暫時そこへ打臥して了つた。

急に、福ちやんが聲を揚げて泣出した。復たりんは讀み始めた。

『風邪を引いてるぢやないか。ちつとも手傳ひをして呉れやしない。』

斯う御新造が言つた。御新造はもう我慢が仕切れないといふ風て、いきなり胡燵を離れて、不熱心な奉公人の前にある本を壁へ投付けた。

『喧ましい！』

りんは止すにも止されず、キヨト〳〵した眼付をしながら、狼狽へて居る。

『何事も爲て呉れなくても可いよ。』と御新造は鼻をすゝり上げて言つた。『居眠り〳〵本を讀んて何になる——もう可いから、止してお休み——』

間もなくりんは自分の床をとりに行つた。北側の庭に降つた雪は消えずにあるので、旦那の居る方は餘計に凍る。その寒い部屋の唐紙をすこし開けて、『お先へお休み』と御辭儀をしに行つた時は、旦那は未だ書を讀んて居た。りんは爐邊へ返つた。蒲團の上へは自分が脱いだ着物を掛けた。それから、冷たい寢床の中へ潜り込んて、旦那や御新造へは聞えないやうに啜泣をした。

『どうして彼樣に子供を泣かせるんだねえ。彼樣に泣かせなくつても濟むぢやないか。』

と御新造はりんの前に立つて言つた。隣家では朝から餅搗を始めて、それが壁一重を隔てゝ地響のやうに聞えて來る。室賀でも、春待宿のいとなみに多忙しかつた。門松は最早入口のところに飾り付けられた。旦那は南向の日あたりの好い場處を擇んて、裏白だの、讓葉だの、橙だのを取散して、子供を相手に注連飾の用意をして居た。

貧しい田舍教師の家にも最早正月が來たかと思はれた。旦那は裏白の付いた細長い輪飾を部屋々々の柱に掛けて歩いたが、何か復た子供のことで御新造が氣を傷めて居るかと思ふと、顔を澁めた。旦那の癖て、見込のない奉公人よりは御新造の方を責める――理窟が有つても、無くても、一概に旦那は使ふ方の人がワルいとして居る。だから、奉公人が增長する――斯うまた御新造の方では殘念に思つて居る。

『そりや、お前が無理だ。』斯う旦那が御新造に言つた。『未だりんは十五やそこいらぢやないか――子供ぢやないか――其樣に責めたつて不可。』

『誰も責めやしません。』と御新造はさも口惜しさうに。

『責めないつて、左樣聞えらア。』

『私が何時責めるやうなことを言ひました。』

『お前の調子が責めてるぢやないか。』

『調子は私の持前です。』

『お前が母親さんに言ふ時の調子と、今のとは違ふやうに聞えるぜ。』

『誰が親と奉公人と一緒にして物を言ふやつが有るもんですか。斯樣な奉公人の前て、親の耻まで曝さなくつても可う御座んす。』

『解らないことを言ふ……なにも其樣な譯て親を舁ぎ出したんぢやなし……奉公人は親ぐらゐに思つて居なくつて使はれるかい。』

奉公人そッちのけにして、旦那と御新造はつい斯樣な風に言合つた。其時、延ちやんが飛んで來て、何

事が起つたかと言つたやうな眼付をして、親達の顔を見比べて居た。りんはりんて、隅の方に小さくなつて、震へて居た。『奉公人のことて、言合をするなぞは——馬鹿々々しい。』と旦那は思ひ直した。『旦那は何事も知らないからだ——傍に居て見ないからだ。』とまた御新造の方ては思つた。

この奉公人の前て言はれるといふことが、御新造には一番イヤだつた。御新造は旦那が奉公人といふものを克く知らないと思つて居る……奈何にりんが自分の命令を守らないか、奈何に延ちやんをヒドくするか、そんなことはもう一向お構ひなしだ、斯う思つて居る。

『今日は。お餅を持つて参じやした。どうも遅なはりやして、申譯がごはせん。』

斯う大きな百姓らしい聲て呶鳴りながら、小原の在の米屋が表から入つて來た。

『お餅！お餅！』と延ちやんが呼んだ。

小原の百姓は家の前まて餅をつけた馬を引いて來た。『ドウ、ドウ』など〻言つて、落葉松の枝て出來た垣根のところへ先づその馬を縛いだ。

正月が來た。春とは言ひながら、山家は未だ全く冬の光景てある。寒い北向の草屋根からは、二三尺もあらうかと思はれる長い劍のやうな氷柱が垂下る。庭にある草木は溶けない雪のために深く埋もれて居る。十五日の宿入には、りんも村の方へ歸ることを許されたので、前の日からその仕度て騒いだ。御新造はりんの爲に、着物を縫つて呉れたり、下駄を買つて呉れたりした。

りんはすこしも沈着いて居なかつた。同じ主人の子供ても、りんは幼少い妹の方を贔顧にして、『福ちやん、福ちやん』と言つて人形のやうに愛して居たが、其日も人の見ないところへ福ちやんを抱いて行つて、福ちやんの柔軟な頬邊に自分のを擦着けて、

『福ちやん——りんはもう彼方へ行つて歸つて來ませんよ。福ちやん、い〻の？……りんが彼方へ行つて

了つたら、福ちやんは奈何な他の御子守に子守られるの？……」

斯う掻口説いた。

日は短かゝつた。午後の三時に部屋の掃除をして、四時半には夕飯を濟ました。燈火の點く頃から、旦那の同僚が訪ねて來て、奥で兎狩の話などが始まつた。炬燵のあるところには、御新造へ女の客もあつた。りんは御新造に言付けられて、爐邊で餅を燒いたが、老婆でもするやうな嚔が三つばかり續けざまに出た

「あゝ、何處で噂してるかナア。吾家で噂なんかする氣遣ひが無い。叔母さんが一つ、姉さんが一つ、それから……」

りんの心は最早逢ひたいと思ふ人達の方へ行つて居たのである。

其晩、りんはマンジリともしなかつた。一番鷄の鳴く頃には、りんは起きて暗い臺所で働いた。それから、夜のうちに悉皆纏めて置いた自分の荷物を持出して、まだ主人が知らずに眠つて居る戸の外を通つてその風呂敷包を土塀の側にある大きな石の間に隱して置いた。

御新造は、りんが流許で氷を碎く音に眼を覺ました。起きて來て、ションボリとした五分心の洋燈の影で、りんの爲に髮を結つてやつた。りんは手が震へた。御新造も寒さの爲に震えた。まだ夜は明けなかつた。

薄い朝日がポッと屋根の雪に映り始めた頃、りんは新しい宿入の着物を着て、その上から頭巾を冠つて、旦那や御新造に挨拶して出た。

「氣をつけておいでよ。」

と御新造は人の好さそうな調子で言つた。

りんが室賀の家を出る時は、小さな手荷物一つしか持たなかつたが、やがて土塀を一廻りして、野菜畠や桑畠の側を急いで行く頃は、大きな風呂敷包を負つて居た。乗合馬車の通る往來まで行くと、最早喇叭の音が起る。眞綿帽子を冠つた人達も寒さうに通る……（終）

水死

一

森田草平

朝おそく、私は枕の上で眼を開いた。高い窓の障子に一杯日が當つて、天井から壁紙にだら〳〵と鼠の小便をかけた跡が際附いたのさへ、蚊張越しに明るく見える。何となく身體がぐつたりして、眼だけはぱち〳〵動かして居たが、どうも起上りたくない。偶と氣が附くと、ちん、かん、〳〵、〳〵と、鍛冶屋で鐵を打つ音が單調に聞える。靜としてそれを聞いてると、次第に音が遠く成つて、そろ〳〵睡眠を誘はれる。

何時の間にか寢入つたと見えて、はつと思つて眼を覺ましたが、直ぐに寢卷のまゝで飛び起きた。窓を開けると、すうと朝の風が這入つて、蚊張の裾をひら〳〵と動かした。晝間の蚊張ほど間が拔けて見えるものはない。いきなり四隅の釣手を外したが、摺むのは面倒だから、その上へ座つた。机の上には百枚餘りの原稿が重ねてある。昨宵一時頃までかゝつて、漸く書き上げたのだ。思つて見りや、昨宵ほど面白く筆が走つたことはない。殆ど何を書いたか覺えがないほど早く書けた。こんなに脂が乘つて書いた時には、明くる朝になつて、日の光の下で見ると、急に意味のない文字に變つて仕舞つてゐるので、恰度烏賊の甲の粉末をまぜて書いた文を開いて見て、白紙を取出した時の樣に落膽することが間々あると聞く。そりや誰にも左樣だとは云はれなからうが、私だけには特にそんな辻占が能く合ふやうに思はれて成らぬ。今も机の上の原稿を直ぐ手に取つて見たい樣でもあるが、又見たくない樣でもある。

私は去年の冬から此寺に下宿した。七月の卒業間際にひどい神經衰弱にかゝつて、療養がてら久らく伊

豆の大島に滯在して居たが、そこにも飽きて此地へ戻つて來ると、その日に、此寺へ宿を取つた。それからは爲すこともなく、半年餘りも日を送つたが、一人二人はあつた友達の所へも訪ねて行かないから、向ふから訪ねても來ない。人と口を利かないで暮れる日もあつて、まるで法師の樣な生活をした。心からそんな孤獨を樂しむ譯ぢやない。寂しい、堪へられん程寂しい。只、私にやその寂しがつてる自分を見るのが嬉しかつた。つまり寂しけりや寂しいほど嬉しい。併しこんな不自然な心持が何日まで續けられるものぢやない。愈々怺へ切れなく成つた時、私は小說でも書いて見やうと思ひ立つた。實は餘り人にや云はれない追憶の種を島に殘して來たので、そいつを書いて仕舞つたら、少しは眞人間に歸れやうかと、それから一箇月餘りも一室に閉籠つた。

昨宵漸とそれを書き上げた。何んな物が出來たか、思ひ通りに忌憚なく自己をゑがき得たか、私は一切知らぬ。私は未だ自分の冷かな眼で此草稿を批評するに堪へない。

只表題だ。表題がまだ附いて居ない。いろんなのを想ひ附くが、何うも全躰の心持が浮かんで來ぬ。外になけりや、「千鳥」としやう。千鳥は平凡かも知れぬが、私にはそれで好いんだ。一先づそれと極めて置いて、楊子を啣へて立上つた。

廊下を傳つて、庫裡の椽側へ出る。そこから下駄を突掛けて、墓地の木戸の傍へ行くと、榎の大木の下に閼伽井戸がある。車井戸の繩を四五十手繰り上げると、大きな釣瓶が上つて來た。井戸側の漆灰が一尺許り減つて低く成つてる所へ、釣瓶の底を當てがつて、ざあと冷たい清水を打明けた。

やがて又庫裡の椽側へ上つた。座敷の襖を明け放して、柱から柱へ引張つた繩に、紅絹裏の着物を裏返しにかけて、土用の虫乾しらしい。床の間には、墨繪の楊柳觀音が掛けてあつた。見ると、其床柱の下に突伏して、一人の女が泣いてゐる。お須磨さんといつて、此寺の梵妻の連子ださうな。聲も上げず、音も立てない。泣いて居たとて、何故泣くかと訊ねて呉れ手が有らうとは思つて居ないのだらう。私は一寸足留めたが廊下を傳つて、本堂の裏手に當る自分の居間へ戻つた。

廊下の欄干に凭れて、晴れた空を見上げた。鱗の様な薄い雲が棚びく。三十分も經つてから、やつと梵妻が座箒と箒とを持つて來て、部屋の掃除をして呉れた。五十餘りの色の白い女て、一寸見ては年を取つてるのか若いのか分らない。平生無口な人て、一寸した事にも顔を赧らめる癖があつた。一通り掃除が濟むと、朝飯の膳を持つて來た。黒塗の椀に煮詰つた味噌汁が乾鹹い。

机に向つた。別に何を爲やうと云ふ當てもない。毎日坐る所に坐つたまでだ。さうして何心なく又原稿の紙をはぐつて行つた。

私は物を書く時には、何時もこれ切り自分は書くことが無く成る樣な氣がする。それだから書くのが惜しい。書くだけ自分の生命が減つて行く樣に思ふ。一字一句に魂を削るほどの苦心をする。書いて仕舞つたら嘸嬉しいだらうと思ふ。それが思つたほど嬉しいものぢやない。只氣抜けがしたやうて詰まらない。空洞の樣な念に堪へない、何か與へられたい。誰かの傍へ行きたい、こんな時ほど、寂寞な感じのすることはない。此感じは物を書いた覺えのある人てなけりや、談しても分らない。切めて未だ人に示さぬ間は、書いた物が自分の所有の樣にも思はれるが、一たび公けにしたら、最う自分の所有ぢやない。自分とは永久に離れたものだ。幾許自分の名を署して置いたとて、小説の中へ出た感情は最う自分の感情ぢやない。それが堪へない。何うも公けにしたくない、活字に組むで貰ひたくない。こんな心持は私一人のものかも知れぬ。こんな心持は自分の書いた物に淫するのだらう。それでも構はない。

私は錐て穴を開けて、紙捻て綴ぢて見た。紙數を數へて見た。それでも未だ讀んで見る氣がしない。

外は空の色がだん／＼紅くなつた。

炎天の下の都大路ほど寂かなものはない。表通りを時たま電車がきいと鋭い音を立てゝ通るが、それが消えて行くと、後は死んだ樣に閑かだ。其中にちん、かん、／＼、／＼と云ふ鍛冶屋の音がつゞく、絶間なく眠た相に響いて來る。

ちん、かん、ちん、かん、／＼、／＼。

窓を開けると、下は一面に古い墓場で、黒さびた石塔がごろ〳〵と倒れてゐる。中程に青桐が廣い葉をうな垂れて立つてゐる切りで、外には草一本生えて居ない。その幹に捕まつて、油蟬がぢい〳〵鳴く。墓地の端れに、疎らな杉の生墻が往來の界をしてるが、杉が大抵枯れたので、そこに垣根があるとも云はれない。それへ持つて行つて、醬油で煮染めたやうな褌だの、二布だのが、枯枝に引かけて乾してある。

巾二間許りの往來の向側に、五軒續きの棟割長屋が見える。その眞中を二軒打通して、鍛冶屋の作事場にした。朝早くから夜業までかけて、金床の上に槌の鳴る音が絶えぬ。十四五に成る小僧が、毎つも親分の向ふ槌を打つ。色の青い小僧が折れさうな腕に槌を振り上げては打下ろして、又振上げる。午過ぎになると、音がだん〳〵懶けて來る。晝間だから火花も散らぬ。ぶう〳〵鞴にかけて煽り立てる炭火さへ、暑さにめげて黄色く見える。黄色い爐から青い炎が立つ。硫黄の臭がする。鐵の燬ける臭ひがする。ぶうと顔へ吹き附ける熱氣が、皮膚をしや白く水膨れにしなければ止まぬ。親方は默つて下を俯向いたまゝ、金床の上で、眞赤に燒けた鐵を廻して居たが、ふいと顔を上げて、「弱虫め、もつと強く打て」と、怒鳴り附けた「何處へ大飯喰やがるんでい。」

小僧は細長い頸に汗をたら〳〵流しながら、眼を閉つて金槌を振上げた。後は又、ちん、かん、〳〵、〳〵と、單調な音がつゞく。

馬子には馬子の唄がある、船頭には船頭の唄がある。それに鍛冶屋ばかりは唄がない。親方と小僧とは向ひ合つたまゝ、默つて、赤く燬かむだ鐵を打つ。何時迄も默つて打つ。炎天の下に、都會が死んだものゝ樣に見える時に、只鐵槌の音だけする。

此小説を書きかけてから、飽いて來ると、いつも窓に腰かけて、鍛冶屋の仕事場を眺めて居た。槌の音や、爐の炎が、寂しい私の心を誘つて、何處かへ連れて行く。遠い空ぢやない。地の底の冷たい、物を言はぬ國へ連れて行く。

如何いふものか。私は始めから彼の小僧が目についた。偶に若い者が一人二人來てることも有るが、大

抵は一箇月位で居なく成つて、又代りの職人が來る。昨日居ても、今日居ないことゝある。それが此小僧だけは何日でも居る。身丈が低いのに、頭の鉢が開いて、いつも營養不良の樣な顔色をしてる。偶に寺へも來るので、私とも顔見知りだが、別に談話をしたこともない。何日か、盆の藪入り前に、お須磨さんに仕着の浴衣を縫つて貰つて、明日の朝の一番汽車で、千住から粕壁へ歸るんだと云つてるのを聞いた。粕壁が在所だと見える。お須磨さんとは能く話をしてたこともあるから、此小僧の身の上を知つてるかも知れぬ。

　小僧は箒を杖にして、茫然墓場の中を眺めて居る。向ふから見ると、私の居る窓は只暗い四角なものに見えやう。

二

机の前に倒れたまゝ、私は二三時間も動かなかつた。一面には、最う思ふことや考へることさへ無い身に成つて仕舞つた樣な、寂しい心持もしたが、矢張樣々のことを思つたり考へたりして居た。何をそんなに考へて居たか、此處ぢや言ふ必要もないし、又言ひたくない事許りだ。

　偶と、障子の隙間から部屋の中を覗いて見て、其儘廊下を引返して行く者がある樣に思はれた。私はむつくり上體を持上げた。そして後姿を見定めやうとしたが、其時は最う見えなかつた。何うもそれがお須磨さんらしい、何だかそんな氣がする。お須磨さんだとしたら、何しに來たのだらう。此寺へ下宿をしてから彼是半年の餘にもなるが、此女は滅多に出て來たことがない。何日も部屋へ閉籠つて裁縫をしてる。人に顔も見せないが、又人の氣にも附かない女だ。この家に居るか居ないか分らない位にしてるので、私もつい此女のことを念頭に置いたことが無い。それが如何したのか、今日は朝から少し氣にかゝる。

　ついと立上つて、庫裡の椽側から勝手へ白湯を取りに行つた。お須磨さんは座敷に虫干しの着物を疊むで、それを一々簞笥へ藏つて居た。下を向いたまゝ、側目も振らずせつせと疊む。元から斯うして居たや

うて、今其邊を歩いて居たものとも思へない。お須磨さんは足音を聞いて、ふと顏を上げたが、毎もの表情のない眼で一寸目禮した切り、又俯向いて仕事にかゝつた。その色の蒼いと云ふよりは寧ろ色のない顏を見ると、今朝この女の泣いて居たことが思ひ合はされた。女が泣く。それに意味はない。只此女でも泣くのかと云ふやうな心持が、此時始めてした。――お須磨さんは下を向いて、着物の皺を延してゐる。私は急いで、自分の居間へ戻つた。

毎日顏を見合せて居ながら、全然氣にも留めなかつたのが、何かの拍子から急に氣に成り出すこともあらう。それ程でもないが、あの女の無意味な顏が、何となく意味がある樣に思はれ出した。髮が薄いのに、雀斑があつて、唇の色が白い。一體若い女には何處か人を引附ける所があるものだが、此女にはそれが無い。寂しい顏だ。阿母さんと云ふ人にも餘り似て居ない。それが、お須磨さんは此阿母さんの連子だと聞いた。弟と妹と一人づゝあるが、ずつと歳の違つてるのも、その爲めだらう。

連子といふものゝ運命は、それだけ聞いて想像したゞけでも、山もあり谿もあるやうに思はれる。お須磨さんは此寺の和尚に對して、何んな感じを抱いてるだらう。いや、それよりも、彼の阿母さんといふ人に對して、何んな心持がしてるだらう。又阿母さんがお須磨さんに對して、何んな心持がするだらう。母子差向ひに成つたら、二人で何んな談話をするだらう、何んな話もしないかも知れぬ。只口でしない許りてなく、腹の中でも別段何も考へちや居ないのだらう。何うも世の中は左樣したものらしい。私は生れ附き如何いふものか、何でも無い物にまで意味を着けたがる。さうして、一人で幻影を拵へて、一人で其幻影に捕はれる癖がある。――見ると、障子の棧を足の長い蜘蛛が匍つてゐる。此蜘蛛を殺して、これが殺される時に、人間と同じ樣な苦痛を感ずると思つたら間違ひだ。苦痛を感じやうにも感じるだけの機能が發達してないから、如何にも感じやうがない。一般に女性といふものは、それと五十歩百歩なんだらう。單純な頭には、複雜な刺戟は素通りをして仕舞つて、何んな反應をも起さない。複雜な頭を持つた者ばかりが、複雜な感情を味はひ得るのだ。隨てそれだけ苦痛も多いのだ。だから單純なものが複雜な人に同情

することも出來ないが、複雜な頭で其まゝ單純なものに同情しやうとするのは、最そつと間違つたことであらう。——手に持つた鉛筆の尖で前の蜘蛛を抑へやうとすると、蜘蛛はいち早く上の方へ逃げて仕舞つた。

左樣はいふものゝ、どうも彼の女のことが氣にかゝる。幾つの歳に此寺へ來たのかは知らぬが、幾歲な娘目に逢へば、それだけませた智惠もつく。一かど物心が附いてから、母親が再緣して行くと極つたら、娘の心には何んな心持がするだらう。母親が嫁づく先きへ隨いて行つて、これ迄見たこともない男を又新たに父と呼ぶ身に成つたら——それも可い、新しい父の出來たのは未だ可いが、現在自分を生んだ母親が、何日か又新しい弟や妹を生むのを見たら——こんな事を想つて、私は可厭な心持がした。それや世の中に有勝ちのことて、現在この寺にも有るんだが、無垢な少女の心には餘り好い影響は與へない。お須磨さんは平氣て居たらうか。どうも此女の身の上が最少し深く知りたい。女の心持がそのまゝ聞いて見たい。勿論聞けば云はぬだらうし、第一云ふことが出來なからう。それにしても自分があんな境遇に置かれたとしたら——その積りに成つて。あの女を書いて見やうかと云ふやうな心持が、偶と起つた。

併し他人のことが書ける私ぢやない。自分以外に何が書けるもんか。矢張自分のことを書く外に道はなからう。書く、〳〵、何日迄も自分のことを書く。

斯う思ひながら、私は二たび『千鳥』の草稿を手に取つた。書き上げたら直ぐ送る筈に約束した、雜誌社の原稿〆切りの時日も切迫してる。それが何うも手離したくない。

お須磨さんは小說が解るだらうか。今迄小說など讀んで居た處を見たことがない。小說を讀まない女に、却て小說が分るかも知れぬ。聞いて呉れるなら、私は『千鳥』の草稿をひとりお須磨さんの前だけて讀みたい。さうして、あの女がぼろ〳〵淚を瀉して泣くのを見て、其儘篋底に藏つたまゝ、何日迄も世の中へ示さずに居たい。

三

日暮れ、角の郵便函へ「千鳥」の原稿を入れに行つた。寺の門まで戻つて來ると、突然子供が二人飛び出して、兩手にぶら下つた。元から私は餘り子供を好かぬ。大人が少し言葉優しく出ると、何處までも附上るから煩さい。殊にこの寺の子供はいやだ。兄の方は狡猾さうな眼附をして、子供の癖に、額に二筋ばかり深い皺が刻まれてゐる。一度も離して遣つたことなぞはないに、如何してこんなに絡り着くのだらう。面倒だから、其儘歩くと、二間許りぶら下つたまゝ引摺られて來た。

「まアお前さん達は」と、椽に出て居たお須磨さんが窘めるやうに云つた。

「何だい、お多福、默つてろ」と、男の子は惡口を吐いて、ばた〳〵と石壘の上を門の方へ駈けて行つた。妹も後から隨いて走つた。

お須磨さんは一寸其跡を見送つたが、直ぐ又側を向いて、

「女物が一枚と、浴衣が二枚、これて皆なてすからね。今日迄來てたのは。」

鍛冶屋の小僧は椽に膝坊主を突いて、及び腰しに成つて、風呂敷を包むで居たが、

「あの、主婦さんが訊いて來いと云ひましたが、この後直ぐ最う一二枚願はれませうか。」

「左樣ね」と、お須磨さんは少時考へてゐるやうに見えたが、「私ね、此處しばらく裁縫が出來ないかも知れんから、如何もね、折角何だけれど、外で遣つて貰ふやうに、左樣云つて呉れませんか。」

「左樣てすか」と、小僧は風呂敷包みを傍に置いて、椽側に腰かけた。一日の仕事を終つてから、一通り水て拭いたものらしいが、未だ小鼻の邊に黑いものが殘つて、どこか顏が隈びて見える。私が庭に立つてるのを見ると、側へゐざる樣にして通して呉れた。私も下駄を脫いで上らうとして、そこの柱に手をかけたまゝ、又しばらく立つて居た。小僧は何かもぢ〳〵してる樣に見えたが、懷から薄汚れた端書を取出して、

「これ、内へ出すんだが、私に又端書一枚書いてお呉んなさらんか。」

「過日の返事なんてすか」と、お須磨さんは一寸私の方を見て、「左樣ねえ」。

一藪入りに內へ歸つた時、私が何ても無いこと云つたもんだから、親爺が心配するんて困つちやつたんてす。それてね、最う後二年て年期が明けるから、矢張今の家て辛抱する氣に成つて、無事に奉公してるて安心して吳れと、左樣書いて遣つてお吳んなさい」。

お須磨さんは默つて受取つた端書を見詰めて居たが、

「阿母さんが逹てたのね」。

「え丶、私が總領て、阿母の違つた弟妹が未だ八人も有るんだからね。親爺も可憫相てさ。そんな譯だから如何したつて、私が辛抱する外ない」。

小僧はませた口の利方をした。これも貧乏が智慧をつけるのだらう。

「それだけて好いの。それぢや一寸此處て待つておいてな」。

お須磨さんは端書を持つて奧へ這入つた。

小僧一人殘して、私も居間へ戾つた。

夏の夕べは崖から落ちる樣に暮れて行く。殊に私の居間は本堂の裏手の片隅にあるから、一層暗く成りやうが早い。灯火を附けやうと思つて、戶棚の下を開けて見たが、洋燈は寺の男が掃除をしに持つて行つたまゝ、未だ返さないのか、其邊に見當らぬ。戶棚の隅からぐわあと蚊の呻る音が一時に聞える。そこて蚊遣香の筒を椽側へ持出して、燐寸を擦つて火をつけた。ぷす〳〵と螢の樣な火が燃え上つて、上の穴から有るか無きかの煙が上り出した。

私は後ろ向きに成つて、机に背を凭せながら、一人考へに沈んだ。最うお須磨さんのことを思つてゐるのてもない、小僧のことを考へて居るのてもない。矢張自分のことを考へてゐた。昔――自分の前世に在つたやうな、遠い昔の或夕暮れを想つて居た。それが何日のことゝも分らぬが、只大島の濱に殘して來た、生々しい憶出ぢやない。

どうも蒸し〳〵する夕暮だ。ひとり者には、悔ひある身には、思ふこと儘ならぬ身には、堪へ難いほど

切ない、怖ろしい夕暮れだ。

いら／＼して立上つた。椽側へ出やうとすると、お須磨さんが洋燈を兩手に持つて、眩し相に横を向きながら這入つて來た。長い廊下の薄暗がりに、灯火を持つて歩く女の姿が好い。私は立つたまゝ、それを迎へた。

「何うも濟みません」と、お須磨さんは洋燈を机の上に置いて、私の方を振返つたが、「お出掛けに成るんて御座いますか」。

「いゝえ」と、私は又机の前に坐つて、「蒸暑い晩ですね」。

お須磨さんは其まゝ背後へ退つて、片手を障子の枠に掛けたが。

「何處か、お納涼にでも行つしやいますと」。

「矢張人込みで暑いでせう」。

「左様で御座いませうね」と云ひ差して、何と思つたか兩手を膝の上に置いて坐つた。

少時言葉が途切れた。餘り繼穂なさに、「あの小僧さんは」と、私が言ひかけると、お須磨さんがひよいと顔を上げた。

「あの隅田川と云ひますと、――矢張淺草の方へ參るので御座いませうか」。

「隅田川と云つても」と、私は質問がやゝ意外なので、少しく躊躇つた。「えゝ、吾妻橋は公園の傍なんだが、しかし、納涼にでも行くにや何の邊が好いでせうね」。

「淺草へ參るには、矢張池の端へ出て參るのでせうか」。

女は一向きである。私は思はずお須磨さんの顔を見た。

「さ、池の端へ出ても行かれるでせうが、――貴女は淺草を知らんのか」。

「えゝ」と、口の中で言つて、お須磨さんは少し俯向いた。「少さい時に、一二度行つたことが有る切りで御座いますから」。

東京に生れて、東京て育つて、今年廿四に成つて、未だ淺草を知らない女があると云ふことを、私は此時始めて知つた。それと共に、此女の素性や心持をもそつと深く知りたいといふ氣が、又むら〱と起つた。切めて幾つの歳に此寺へ來たかと云ふだけでも訊いて見たいと思つたが、矢張口へは出ない。で、

「そんなに能く内に引込むで許り居られますね」と、平凡なことを云ふと、

「えゝ」と、顔を上げて、「出つけないと、そんなに出たいとも思ひません」。

お須磨さんは斯んなことは折々云はれつけて居るらしい。その平氣でゐる所に憐れが深い樣に思はれて聞く者の心に沁みた。

「私などよりも」と、女は言葉を途切らしたが、「毎日彼樣して書いて許り被坐しちや、嘸、お氣が詰ることで御座いませうね」。

私はそんな事を云ふお須磨さんの顔を見ると、何となく微笑まれた。

「氣が詰るだけでせうか」。

「側で拜見して居ても、隨分お苦しいやうで」。

「苦しいだけでせうか」。

「何だか、日に〱痩せていらつしやるのが目に見えるやうで、お氣の毒な」。

私はこの女の口から、此一語を捥ぎ取つた。自分で意識しながら、無理に云はせたやうなものではあるが、それでも好い。先刻から斯んなにして迄、私はこの女から憫れまれたかつた、氣の毒など云つて貰ひたかつた。男の胸から血を絞るやうな思ひして、やつと物を書き上げて、ほつと息を吐いた時、私はそれが旨いと云つて讃められるよりも、氣の毒だと云つて貰ひたい、可憫相だと云つて貰ひたい。其方が私の情調に合ふ。お須磨さんの此一語を聞くとひとしく、ぶる〱と身が顫へて、私の眼には涙が渦高く、今にも頰へ傳ひさうに成つた。泣きたい、聲を上げて泣いて見たい。

「彼方へ行つて下さい」と、私は下を向いたまゝ手を振つた。

お須磨さんも譯は分らないが、私の聲が普通ならぬで、急いで立上つたもの丶、そこに立つたまゝ、私の容子を見てゐるらしい。

「彼方へ行つて居て下さい、ね、しばらく。何でも無いんだから」。

私は劇しく手を振つた。お須磨さんは徐と障子の外へ出て、ばた〳〵と向ふへ走つて行つた。

その後で、私は机の上に肘を立てゝ、兩手で眼を抑へたまゝ、涙を流して泣いた。何時迄も冷たい涙が流れた。こんな風にして泣けるのは私一人かも知れぬ。こんな人工的な工風をして、それでも涙が出るものだとは、私も此頃始めて知つた。此頃の私の張詰めたこゝろは、恰度水を滿々入れた鉢の樣なものだ。その中へ木の葉の樣でも一枚落ちさへすりや、直ぐひた〳〵と溢れて出なければ止まぬ。

私は涙の出るだけ泣いて、しばらく靜として座つて居た。

やがて立上つた。一人で蒲團を敷いて、一人で蚊帳を釣つてごろりと横に成つた。その佗しい寐姿を見て居たものは、矢張私一人だつた。

四

明くる朝、私は起きると直ぐ着物を替へて、袴を着けて、ひとり上野の圖書館へ行つた。黒ずんだ綠の樹蔭に白煉瓦の建物が見える。しばらく玄關前の草原に寢轉んで、八時の開館を待つて居たが、やがて皆んながぞろ〳〵と行く後から、私も切符を買つて閲覧室へ這入つた。窓が人の身丈よりもずつと高いので、地上の草や木は見ることが出來ない。たゞ空の白い雲が北へ〳〵と動くのが見える。此穴倉の樣な室の中に、人間の黒い頭がうぢやうぢや〳〵並んで居るが、皆んな口を噤むで、一人も物を云ふ者はない。それで居ながら、蠶が桑の葉を喰むやうな音が絶間なくぽちや〳〵として、凝乎と耳を澄まして居ると、終ひには頭の中が海綿の樣に穴だらけに成るやうな氣がして、可厭な心持だ。

そんな可厭な心持がしながら、私は此頃よく圖書館へ這入る癖がついた。別に本を讀みに行くのではな

い。只圖書館の中て一日を送りに行くのだ。あの中に居れば、大勢の顔を見ながら、一日中誰とも口を利かないて濟む。それが私の今の心持に適ふのだ。生きた人間の中に狹まつて居ながら、自分の心が底の知れないほど寂しく成つて行く。人間の數が多いだけ餘計に寂しく成つて行く。

夕ぐれぶらりと圖書館を出た。谷中の墓地を一まはりして、下宿してる寺へ戻つた。庫裡には、座敷の眞中に洋燈が一つ點けてあるだけて、其下には誰も居ない。私は其處を素通りして、自分の部屋へ這入たまゝ、その夜は誰とも言葉を交はさないて一人寐て仕舞つた。

次の朝、何日になく下男が膳を運んだが、別に氣にも掛けないて、朝飯を濟した。恰度茶を飲むでる所へ、梵妻が妙にそは／＼した容子をして飛び込むて來たが、そこへ膝を突くと、いきなり「あの――」と言ひ掛けた。眼の色が變つて、餘程狼狽へて居るやうに見える。私は茶碗を下に置いて向直つた。

「あの昨夜からお須磨の姿が見えないんてすが」。

「お須磨さんが」と、私の聲もはづむ。

「昨夜八時頃迄は確に家に居たのてすが、――一躰、如何したんて御座いませう」。

「お須磨さんの行方が分らないのてすか」と、私は念を押した。

「八時頃迄は確に内に居たのてすが、それだけは分つてるのてすが」と同じ事を繰返すばかりだ。

「おや、昨夜から分らないのてすね」。

「えゝ、それから顔を見せませんてしたけれど、多分彼娘の部屋て寢てることだと思つて、私共も臥せりましたが、今朝に成つて、餘り何時迄も起きて來ないのて、行つて見ますと、何うも昨夜寢た樣子がないのて御座います」。

私は只息を詰めて聞いた。

「はつと思ふと、私も氣が顛倒して仕舞つて」と、おろ／＼聲に成つて、「何うも昨日一日、彼娘の容子が變だとは思つたのてすが」。

「何處か親類にてもお泊りに成るやうなことは有りませんか」。
「彼娘に限つて、他所樣に泊るやうなことは、何んな事にも有りませんし、是迄滅多に戸外へも出ないんで御座いますから」。
一昨日の夕方、お須磨さんが此室に坐つて談して行つた事が想ひ合はされる。廿四に成つて、淺草の方角さへ知らぬ女が一夜家の外で明したとすれば、何うも普通ぢやない。それに薄々聞いた彼の女の身の上と、徒に想像して見た女の心持が、萬一事實と符合しやうものなら、今頃は最う何に成つて居るかも知れない。
「若し書置の樣なものでもと云ひかけて、私は自分ながら其言葉が妙に時代違ひに聞へたが、「そんな物ても見附かりませんか」。
「それが、全然手懸りが無いんで御座います。彼娘の物は簞笥から何からすつかり開けて調べて見ましたが、何にも見當りません。て、若しや貴方に伺つて見たら」。
「私が知つてる筈はないが」と、やゝ不興氣な顔をしたが、「如何ですか、警察の方は最うお屆けに成つたのですか」。
梵妻は默つて差俯向いた。……
「未だですか、一刻も早く屆けた方が可いんですがね。」
「それが」と、又言葉を途切らして、「何うも住職が寺の名の出るのを厭がりましてね、――今し方心當りを訊ねると云つて、出て行くにや行きましたが。」
これを聞くと、今度は私の方が默つて仕舞つた。しばらく二人の無言が續く。
「おい、阿母さん、おいてッたら」と、男の兒が傍へ來て袂を引張つた。
梵妻も始めは其儘にして置いたが、何時迄もしちくどく呼ぶので、
「何ですよ、煩さいぢや有りませんか」。

「鍛冶屋の主婦さんが來たよ」と、聲を低うして、ぼそ〳〵と囁いた。
「ふうむ」。
「それからね、彼處の職人が云つてたがね、昨夜庄公が逃げて行つたとさ」。
「庄公が」と、思はず膝を立てゝ、「あの小僧さんかえ」。
「あゝ、彼奴だよ。俺の細螺奪つて仕舞つて返しやがらねえ」。
「そりや何日のことだ、矢張昨夜なのかい」。
「あゝ昨夜だよ、うゝむ、今朝だ。や、左樣ぢやない、昨宵だよ」。
「一寸御免下さいまし」と云ひ捨てゝ、梵妻はばた〳〵と駈けて行つた。子供も隨いて走つた。
私も何心なく廊下へ出て、二足三足庫裡の方へ行かうとしたが、又戻つて、欄干に凭れた。いろ〳〵な刺戟が一時に頭へ押寄せて、しばらく何にも考へることが出來ない。一時間も經つて、庫裡へ行つて見ると、梵妻は頭が痛むと云つて臥せつた相だ。
その日の一時頃である。玄關に案内を賴む聲がするが、下男も居ないと見えて、誰も出て應ずる者がない。だん〳〵聲が高く成るので、私が出て行つた。小倉服を着けた小使らしい老爺が一人立つて居て、私の顏を見ると、頰を膨らして、何やら口の中でぶつ〳〵云ふ。やつと南千住の分署から來たと云ふことが分つた。一葉の紙片を渡されたので、見ると、「水死人の身元について糺したいから、住職に即時出頭せよ」と云ふのである。私は其處へ棒立ちに成つた。やつと氣が附いた時は、こんな報知を自分が一番先きへ受取つて、自分が外の人へ傳へなけりや成らぬ地位に立つたのが、いかにも分らない。
思ひ切つて、紙片を握つたなりに、つか〳〵と奥へ行くと、梵妻は蒲團の上に横に成つて、襖を見詰めたまゝ大きな眼を開いてゐる。私が這入つて來たのを見ても瞬きさへせぬ。朝見た時とは、又げつそり窶れた樣である。
「南千住の分署から使が來たのですが、住職に直ぐ出頭せよと云ふのです」。

私は突立つたまゝ一口に云つた。
「えッ」と云つたなり、梵妻は死破と跳ね置きた。「何て御座いますか、最一度、最一度何卒讀んで下さいまし」。
「南千住の分署から、住職に直ぐ出頭せよと云ふのです」。
「南千住と申しますと、あの、矢張千住の大橋の方て御座いますか」。
「え〻、まア左樣です」。
梵妻は兩手で顏を抑へたまゝ、聲を上げて泣き出した。
私は凝乎とそれを見て居たが、紙片を枕元に捨てゝ置いて、玄關へ引返さうとすると、
「あの、使の人は、未だ玄關に居りますか」と云ひ〳〵、後から追ひ縋つて來た。
「え〻、未だ居ます」。
それが耳へ入つたのか入らないのか、玄關へ走つて出て、何か云つてる樣であつたが、私は其儘自分の室へ戻つて、それを聞いちや居なかつた。
夕暮れ、人顏の定かに見えぬ頃、お須磨さんの死骸が寺へ釣込まれた。其時も私は一寸二人の子供が屏風の中を覗くなと云つて、親爺に叱られてるのを見た切り、部屋から外へ出なかつたので、何にも知らない。其夜の中に亡骸を火葬場へ送つたと云ふことも、後で聞いた。
その夜、枕の上で私はたゞお須磨といふ女の越し方許り想ひ續けた。一ばん深く私の心に沁み入つたのは、女は默つて居ても死ぬものだと云ふことだ。嘗て、私は知識の發達しない女に深い感じはないと思つた、複雜な情緒はないと信じた。併し彼等は只自分の持つてる感情に名を附けることを知らない許りて、今の世に生れた女は、矢張今の世の人に限つた感情に動かされて、昔の人の知らなかつた苦痛を感ぜずには居られないのだらう。自分の感情を解剖することを知らないだけに、彼等の苦痛は一層烈しい。先づ新しい感情の名を敎へられて、夫から其感情を味はひに取かゝるやうな、われ〳〵程度し難いものはなからう。

お須磨さんは何の爲に死んだか分らない。私は今後永く其死因を知らうとは勉めまい。それだけが切めて彼の女に對する私の手向だ。左樣心を定めて、私はやつと眠りに就いた。

夜が明けると、毎日もの通り鍛冶屋の音が聞え出した。昨日の朝逃げ出したといふ小僧は、相變らず親方の前で向ふ槌を打つて居た。後で聞くと、兩國の停車場で追手に捕まつて、連戻されたと云ふことだ。

五

今日は朝から蒸暑い、晴れたかと思ふと降り、降るかと思ふと晴れる。狂人の樣な天氣だ。氣分も苛々して、人間迄狂氣に成り相である

一直線的に成つた。思ひ返しが無く成つた。表へ飛び出して、何處でも可い、足の向いた方へ行つて仕舞ひたく成つた。人間に突當つて見たい。電信柱にでも突當つて、卵の樣にぐしやりと潰れて見たい。

雨間を見て、帽子も被らずに、ぶいと街へ飛び出した。雲の間ひから日光の射したのを見ると、最う日暮れに近い。當なしにすた／＼と歩いた。歩いてる間に、だん／＼心が鎭まつた。さうして自分が今坂本の通りを歩いてることが分つた。私は足を緩めて眞直に向ふを見た。街の上に人影は餘り見えない。時々荷車が自分を追ひ越して行く。盲縞の手甲をはめた若い女が車の後押をして行く。雨上りの水潦が白く見える。

偶と、あの夜お須磨さんが此街道を歩いたんだなと想つた。その前の日に、お須磨さんは隅田川へ出る道を訊いた。大方吾妻橋へ行く積りで、道を間違へて、此通りを大橋へ出たのだらう。人通りの絶えた眞夜中に、身丈の小さい女が街燈の光を避けるやうにして、とぼ／＼と行く姿が眼につく。あゝ、眼に見える。

何時の間にか、大橋の袂へ出た。此時は最う四邊が薄暗い。橋の上を見ると、二三人の白い浴衣を着た男女が橋の欄干に凭れて、凝乎と暗い水の上を見詰めて居た。一人も物を云はぬ。今にも此男や女が一齊

に水の中へ飛び込みはしないかと思はれた。私は傍へ寄つて行つて、一々其人々の顔を覗いて見た。皆ンな顔を背向けて、欄干を離れた。二三間向ふへ行つて、又川の中を覗いて居る。私は前の男が凭れて居た所に倚つかゝつて、水の面を眺めた。退潮と見えて、芥の浮いた、どろ〳〵した水はずん〳〵下へ流れる、箭の様に流れる。此橋の上から——この私の手の觸れて居る所から、お須磨さんは飛び込んだのだ。水の底にお須磨さんの寢てゐる姿が見える。眼を開いて此方を見て居る。私はぐら〳〵と倒れさうに思つて、一二歩欄干から離れた。さうして命拾ひしたやうな心持て、そこを立去つた。

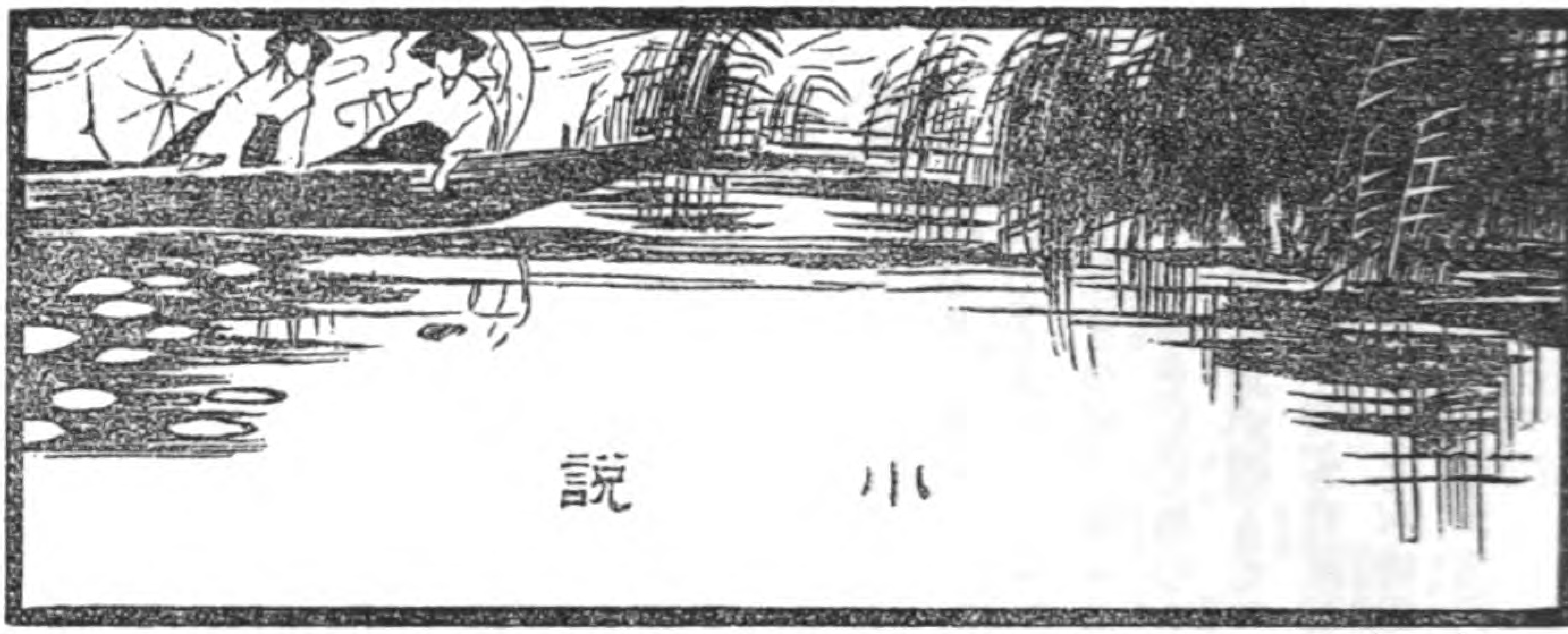
ばら〳〵と村雨が又降りだした。

* * *

夜の十一時過ぎに、私は谷中の寺へ戻つた。くゞりは何時でも開放しだから、門を這入つて、玄關脇の戸を敲くと、寺男の爺さんが起きて、戸を開けて呉れた。私が肌迄びつしより雨に濡れてるのを見て、爺さんは吃驚したやうであつが、別に何とも聞かなかつた。

手探りで廊下を拔けたが、本堂の佛前には、いつになく、御燈明が一つ點してあつた。その光りに照らされて、壇の上の埃にまみれた金色の蓮の造花に挾まれて、小さい白木の箱が見える。お須磨さんの遺骨を納めた壺だ。御燈明の光が弱いので、遠くへは屆かない。御堂の中は廣く黑み渡つて、日比炷いた抹香の匂ひが床しく通ふ。

私は腕組をして突立つたまゝ、何時迄もそこを動かなかつた。



一等

破疊

秋葉清子

お房は今日も、一日大汗になつて川畑の叔父の所へ行つてきた。あまり急いだので、ついうつかりしてゐて、幼ない従弟妹に土産を買つて行くのを忘れた。

お房の養子の話も、随分久しい事であつた。兩親は亡くなるし、たつた一人の兄は大阪で一家をなしてゐるので、已むを得ずかういふ話も起つたのであるが、いよ〳〵、今度、或人の世話で、もう殆んど九分九厘まで話がまとまつた。先方は瀧田とかいふ所の農家の次男で、以前、城野の町の雑貨店へ奉公してゐたが、昨年から暇をとつて、兄の代になつてゐる自宅の農業を手傳つてゐる。年は二十七、血統は申分なく、人物も至つていゝ——これは世話人が、其村の古老から聞いた所であつた。お房は今日、いろいろな相談やら打合やらに、川畑で小學教師をしてゐる叔父の所へ行つたのだ。

いくら兩親がないとはいへ、この農家の忙しい最中に、帶などしめこんで、三日に揚げず出歩いてゐる自分——あゝ他人は何と見るだらう。と思ふと、泌々情ない氣がする。お房はことし二十六だ。兩親さへ生きて居てくれたら、兄さんさへ此地に居てくれたら、こんな年齢をして……道々この事ばかり、狭い胸の裡を往來した。始めは、仕度とか準備とか、さういふ當面の問題に紛れて、うか〳〵と過して來たが、こゝ二三日前から、つく〴〵と結婚後の事を考へるやうになつた。が、それも唯樣々な、とりとめもない事

を思ひ煩ふに過ぎなかつた。

村へはいつたのはもう暗かつた。眞白に乾いた縣道を一直線に、瓦葺の我家の前へ來ると、腰卷に襦袢一つの、妹のお勝が、淋しい顏をして、駄菓子の箱を抱へちや、せつせと家の內へしまひこんでゐた。

『遲かつたなあ……』と言つて、お勝は髮の後れ毛をかき上げ乍ら、ジロ／＼と姉の後姿を見た。

『あゝあ……暑い暑い、今日はもう往生した……』

お房は疲れ切つたといふ風で、暗い家の中へはいつたが暫く上り口にへたつて、股の邊を撫でゝゐた。

『お勝、手紙は來なんだか？』暫時して聞いた。

『兄さんから？いゝや、何處からも來なんだ……』

『もう來さうなもんだがなあ……兄さんの氣の永いにも惘れて了ふ……』

お勝はだまつて、ガタ／＼戶締りしてゐた。やがて竈の前へ立膝をして座つて、茶釜の下を焚きつけた。ブブ──と木葉が燃えて、お勝の丈夫々々した顏と手が眞赤に見えた。お房はモゾ／＼と上へあがつたが、衣服を脫ぐと、そこへ兩脚を投げ出し、片手を冷たい疊について、ボンヤリ竈の方を眺めてゐた。

お房の十四五の頃は、家は露店商人であつた。田舍の事だから、平生は農業をやつてゐるが、春と秋の祭禮と、盂蘭盆とに、一里位の所なら、何處へでも出かける。祭禮はさうでもないが、盆にはいつも夜おそくなつた。一時──二時頃になると、もう踊り狂ふてゐた人々は散じ盡して、跡は洪水の引いたやう。賣れ殘りの玩具や菓子を皆箱へしまひ、車に載せると、お房がパツ／＼と凄じい油煙の上るカンテラを一つだけ提げて先に立つ。父が車の梶棒を握ると、母親が先の綱を肩にかける。かうやつて親子は無言でそこを立退く。世はもう寂莫として、車の音がゴト／＼と耳につくばかり、天心に冴えたる月は、淋しい田舍道に、親子三人の影を印した。

あの時分の事ほど、お房の幼ない頭腦に、深い印象を殘したものはなかつた。それも一ト昔となつた今日……あゝいふ光景をマザ／＼と胸に描いて、無口な質朴な父、氣の小さい正直な母──一生これといつて樂しい目もしなかつた不幸な父母の、敬虔な六十年の生涯を思ふと、ひとり淚がこぼれる。

兄は其時分二十上だつた。徵兵の時は鬮で免れた。親に似ず、大の先走て、なんでも一寸珍しい事があると、タヾては見過せぬ性質だつた。小學校を出ると、

もう家に落付かず、料理屋使こそしなかつたが、村に倶樂部を拵へて演説したり、新聞で新發明品の廣告を見て、賣れもしないのに電報打つてまで澤山取寄せたり、其時分、切手や葉書を賣つてゐたので、家を三等郵便局にするんだと言つて運動したり、東京で當時破竹の如き勢あつた或る大きな煙草屋へ、縣下の一手販賣をさせてくれといふ長文の手紙を出したり、縣會の速記員になると言つて、にはかに其書物を買ひこんだり、代議士選擧の時は、郡の某名士の運動員になつて定紋のついた馬乘提灯を振廻し乍ら、徹夜で走り歩いたりした。其他、兄の手をつけ事は數へきれない程あるが、一つとしてやり終せたものはなかつた。

其内に年もとり、考も眞面目になつて、やつとの事で始めたのが呉服屋であつたが、二度まで盗賊にはいられ、それやこれやで、いざ廢業といふ時には、過半以上の貸金を踏み倒された。これで、年老つた兩親が露店など出して、蟻の餌のやうに、チビ〳〵貯めた、血の滴るやうな金も、すつかり耗つてしまつた。

さうして奮然として大阪へ行つたのは、今から五年程前であつた。三年の後、兄は獨力で事業を始め、妻も娶つて、遂に大阪で一家をなしたが、暫くして兩親は相次いでコロ〳〵と死んだ。

家には姉妹二人殘つた。さうでなくてさへ淋しい家が、恰度火の消えたやうになつた。僅かな田畑は、何の財產もない、兵隊戻りの從弟に任し、家は、十年一日の如くやつて來た、切手と葉書と煙草と駄菓子とを賣り、それに兄の仕送りとて、母親に似て茶好きな姉妹は、毎日ガブ〳〵茶を飲み乍ら、川畑の叔父の所から借りて來た、從兄の『靑春』だの『天うつ浪』だの『破戒』だのといふやうな小說を讀んだりして、遊び暮してゐた。——

やがて茶釜がシユー——ンと鳴り出した。

『姉さん、御飯にしやうよ……一寸ランプつけて……』お勝はさう言つて、頭の手拭を外した。

『あゝ……』とお房は搾り出すやうに返事したが、ガチヤ〳〵とお勝が準備をしてしまつた時分に、のそりと起き上つて、煤けた石笠の釣ランプを點した。

姉妹はボソ〳〵と食べ始めた。

『あ……』と暫時してお勝は思ひ出したやうに箸を休めた。『さう〳〵、今日庄助さんが來てね……』

『ふうん、何か言ふてゐたか？』

『えゝ……世話人の事を……何してた……』庄

助といふのは遠い親類になる老人て、今度の事て、大分あちこち奔走してゐるのだ。

『世話人がどうしたて？』お房は目を光らせた。

『あの……清次さんていふ人ね、あれがかう言ふんだつて、私も以前は相當な米屋だつたんだけれど、今はもう――あの失敗つて、他家へ奉公してる身分だから、到底も表面だつて人樣の御世話申すつていふやうな事は出來んから、眞實の媒介人には……別に誰かに頼んで與れるやうにつて……』

『それて自分はどうする意り？』

『自分つて……だから、私は、ほんの双方の橋渡だけをさせて貰はうといふのよ……』

『ふゝ……』お房は淋しく笑つた。『おかしな事をいふ人だね、別に身分に世話して貰やしまいし、奉公してやうが乞食してやうが……』といひ乍ら二口ばかり食べて、『一體あの人からして、そんな大層な事を言ひ出すもんだから、萬事に事が面倒になるんだよ、先方ぢやお前……兄が子盛りて、とても仕度よ何よといつてはようせんから、ほんの身體だけ……貰つてくれつて言つてる位だからね……』

『それに……あの……結納とかいふものも……ね』

『さうよ……』と言つてお房は眼をおとした。

『姉さんはそれでもよいと思つて？』

『何故？』とお房は心持ち赤くなつて、『それあ……もう私なんか……どうでもいゝさ』

『けど……』とお勝は言ひ難くさうに、『此間も川畑の叔父さんが來た時、彼奴等あ、まるで猫の兒を貰ふも同じやうに思つてやがるつて、大層怒つてた……』

『それや今日も言はれたよ……うんと……』

それから姉妹は、あの紋附を仕立直すなら、奧裏を更へなくちやいかんとか、半襟や何か買ふにも三圓位はいゝとか、そんな事を話し乍ら飯を食つてゐた。

食後、奧からボロけた經机を持ち出して來て、お房は其前にペタリと座つた。大阪の兄へ手紙を書かうと思つたからてある。が、急にかゝらうともせず、筆の先を嚙み／＼、ふと疊の破れに目を止めて、あゝ、疊もかう破れて眞黑になつちやお了ひだ。否でも應でも一つ買はにやならんが――何所かに古物て見られるやうなのはないか知らん、と思つた。

『兄さんは本當にどうしたんだらう』と續いて思つた、

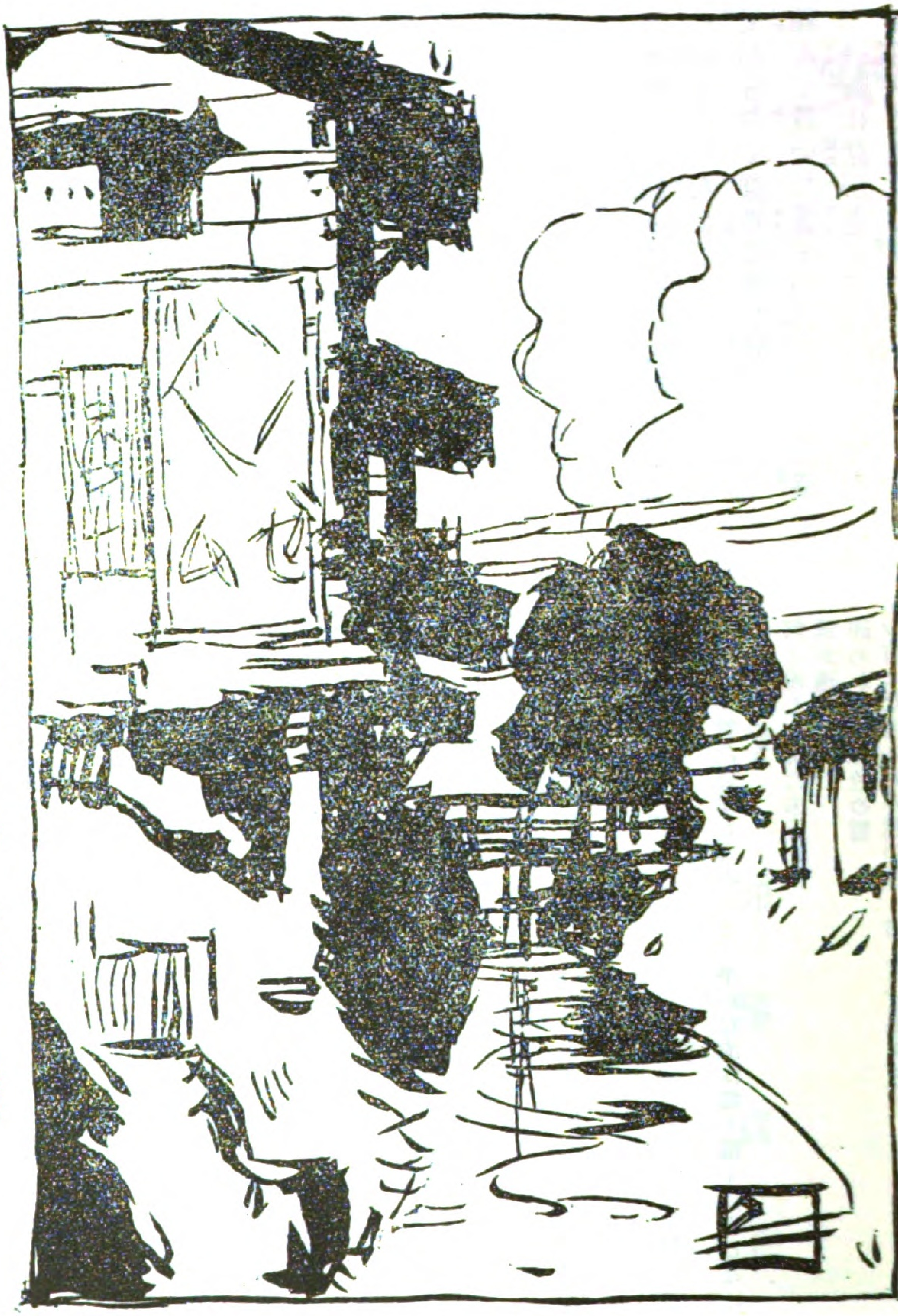
全く自分一人だ。譯の分つた親切な川畑の叔父は遠いし、頼りにする兄は居ず、村に伯母は二人もあるが、皆毒にも薬にもならん人で、一向力にもならぬ。

『どうしても一人だ』と強く思つて、お房は巻紙をひろげた。お勝は火鉢の傍で、だまつてフー〳〵茶を飲んでゐる。

前便以後の新しい出來事と、今日川畑へ行つた事とを、ネチ〳〵と二尺ばかりも書いた。

それで一寸一段落をつけて、ボンヤリとランプの光を見詰めてゐたが、今度は行を少しあけて

昨日また東京より手紙まいり候……



（一等）川添の家　京橋　くに子

と書いた。東京といふのは爲造といふ伯父の事で、東京で或呉服屋の一番頭になつた、長男の作太郎といふのが、この春、家屋敷を賣つて了つて、親子同胞、すつかり東京へ引取つたのだ。十日程前、その伯父が腹膜炎とかで死んだといふ電報を受取つた。お房は二圓香奠として送つた。

爲造さんのゆいごんだとか申し、何時村へ歸るやらわからんといふやうな、先方にとつてはずいぶん都合のよい事ばかりならべて居り候。私も知らんかほして居ますゆえ、兄さんの方へも、どんな事をいふて來ても、けつして甘つたるいような返事はお出し下されまじく候。いくら私等が、きようだい二人で、さびしうくらしてゐても、あんな家もない人たちに、ぞろ／＼と歸られてどうなります……

お房はコロリと筆をおいた。何とはなしに両手を重ねて、ヂッとその上へ顔を當てたが……

今日歸りがけ、叔父からやゝ意外な事を聞いた。以前から、方々へ頼んで置いた養子の口が、不思議にも此頃四つばかり、一時に話が進んで、イザと言や直ぐにも纏まりさうな樣子になつて來て、中には、叔父が深く信用した人もあるといふ。お房は實に不思議な氣がした。唯夢心地で叔父の話を聞いた。

『けれども迷ふな、決して迷ふな。得てからいふ事といふものは、妙に後から聞いた奴に未練が殘つて、いかにも惜しいやうに思ふものだが、迷ふなといふのはそこの事だ。最初に取定めたのが眞の緣だぞ。天の授けだと思へ……』と叔父は力をこめて言つた。決して迷はぬ。未練もない、惜しいとも思はぬ。假へどんな事があつても、自分の運命だと諦める。お房は立派に答へた。叔父もそれで安心だと言つて

『今度といふ今度こそ、世の中の事は案じたものではないといふ事を、つく／＼知つた！』と言つた。

お房はそれを思ひ出した。胸が板のやうになつて、何かは知らず熱い涙がポロ／＼と卷紙の上へ落ちた。

水上

K女

水の上に首だけ出してみると、平かな海は遠く遠くはてしない空に
つゞいてゐる
何と淋しい海だらう
雲が湧く
薄あかい褪紅色の雲
夕方になるとあの雲の色も消えるであらう
淋しい海のはての淋しい雲よ
めつたに此方へ來ることはなからう

二等

女客

加藤貞子

澤村の母娘から、この夏は墓參かた〴〵歸鄕すると云ふ葉書があつてから、須山の一家は忙しかつた。一家と言つても、六十を越へた老夫婦の俊平とお正と、他に九つになる君子だけてある。お正は急に蒲團の洗濯をするやら、新しい座蒲團を縫ふやら、老婦の身一つては遣り切れぬので、外孫に當るお咲と云ふ娘まて借りて來た。それから既う十日になる。

「ねえ、お祖母さん、もう被入つてもいゝ頃てすわねえ。」とお咲は襷を外しながら云ひ出した。

「ほんとに、何だか馬鹿にされたやうだ。お卷さんだつて、何日頃てなければ行けないとか、何とか云つて寄してもいゝのだがねえ、此麽にして待つてるのに。」

とお正は張合のなさ相な聲て言つた。

「もうお前も暇になつたんだからね、蒲團も夜着も出來て……さう何日迄お前を借りとく譯にも行くまいから、今日位は歸つて貰はうと思つて居たのだがね」

「いゝえ、どうせお役には立たないのですけれど…………」

と莞とりして涼しさうな目容をした。

「ゆつくり遊んて夕方歸るがいゝよ。」

「ぢやねさう爲ますわ、呼んて下されば何時ても來ますから……」

とお咲は緣側に出て低い軒先の空を仰いだ。もう八月も末て、北國の山〴〵には、紺碧に澄んだ空の奧にもどこか秋らしい色があつた。小さな低い茅葺きの家を包むやうに、周圍の畑には、栗の木や柿の木や桃の木などが植つてゐる。木には蟬が鳴いてゐた。

「姉さーんー」と遠くから呼び乍ら、お下髮にした君子がまつはるやうに走つて來た。下駄を履いて庭に下りると、西に向いた竹格子の窓から、瘦せた老皺のあ

る俊平の顔が見へた。

「お手傳ひはもう濟んだかの？」と、お咲を見て和綴の本を伏せた。狹い三疊の床に古い和本が幾冊となく重ねられて、床柱には短冊も見へた。

「濟んだんですけれど、澤村の叔母さんは如何したのでせう？」とお咲は片手て君子の頭を撫てゝゐる。

不意に門前へ俥がとまつた。

「姉さん、誰か來てよ」と君子は丸い目をする。

「あら！」とお咲は、今俥から下りた肥肉の品のいゝ女と、廿二三の丸髷に結つた女を見て、「澤村の叔母さんだわ」と云ふと、俊平は顔をくづして起ち上つた。

お咲と君子が裏を廻つて走つて來た時には、「どうもお久し振りてすこと」と澤村の母娘はもう玄關に立つてゐた。

「まあ、何から話していゝのやら……」

とお巻は四十を五つ六つも通り越した年輩てあるが子供や家族の繫累がないだけ、何處か若々しさうに見へる、切れのいゝ目を、眩しさうに細めて皆を見た。

「ほんとにね、何だか……突然なので茫乎してしまつて……」とお正も目の縁に皺を寄せた。

「話は後からでもゆつくり出來る。早く酒だ、支度をしないか。」

俊平は自ら立つて、餉臺などを運び出した。

「伯父さんはほんとにお元氣で被居しやること……。」

母には似ない面長の、何處か軟々したやうなお巻の娘の初子は、低聲で言つて口を窄めた。母親と顔を見合した時、些と目配せして玄關に置いた包みを持つて來た。

その中からゴツ／＼取出して、種々な土產物が配られた。これは兄さんにと言つて、お巻は樽づめの鰹の鹽辛を出した。

「これには非常に骨を折つて持つて來たんですよ、何しろ重いのに、汽車や汽船の乘換など面倒がかゝる者ですからねえ。」とお巻が憚りのない聲で云ふと、俊平は些といやな顔をした。

これは姉さんにと云つて美しい絲織の反物を出して、「縞が少し若いやうてすけれど、京阪は大變流行るんですよ。」とお巻は燥いて說明する。

なほ鰹節、半襟、品々のものがあつた。

「煩くする者ぢやない。」と叱られながら、君子は美しい反物を物希らしく弄つた。お咲は陰に小さくなつて

お正の見た後を、耻かしさうに手に取つて、打ち返し〳〵眺め入つてゐた。

「ねえ、阿母さん。氣の利かないことをしましたわね」と初子はお咲をチラと見ながら、

「お咲さんが居やうとは思はなかつたものだから、つい何も用意しなくつて……」

「さうてしたね、お咲さんにねえ……」と母親はやさしくお咲の方を見て言ふ。

「いゝえ、どう致しまして」とそれも口の中て言つてお咲は顔を赧らめた。

「お咲さんの大きくおなりだこと、あゝもう十七に……私の別れたのが、君ちやんより少し大きいくらゐの時てしたからねえ。」とお巻は感じた樣に云ふ。

お巻が娘と一緒に東京に出たのは、夫が亡なつて間もなくてあつた。遺産と云ふのも僅かばかり、それて漸やく九段のある女學校に出さして、初子の發育を樂しんてゐる中に、丁度その學校を卒業した年、郷國出身の相當財産もある人て初子の保證人にまてなつてくれた人が、才色を見込んて初子とその息子とを結婚させたのてある。息子と云ふのは某大學を出たばかりて、ブラ〳〵してゐたが、自ら進んて關西のある中學へ招かれる事となり、お巻も引き取られて一緒にその任地へ行つた。澤村の家には始めて春が來た。

其頃から、お巻の評判が俊平などの間によくなかつた。東京て貧窮してゐた時はお巻の處からよく補助を頼む手紙などが間斷なしに來たのてあつたが、關西の方に轉じて、豊かな生活が出來るやうになると、時候見舞の外、葉書一本よこさぬ月があつた。俊平は度しがたい奴だと云つて怒つたけれど、今度歸郷すると云ふのては、有繫に嬉しかつたのてある。

「十年振りてすねえ、」とお巻は云つてお正を見ながら「姉さんも大變白髪が多くなりましたね」と云ふと、

「お前は併し、何日までも若いの」と俊平は擽ぐるやうに云つて、勢ひよく銚子を取り上げた。

「さお前はたしか、いける口だつたの。どうせ田舎て何もないが飲んてくれ。初も晩酌のお相手ぐらゐはして、飲めるだらう。」

もとより畑のもの山のものゝ手料理て、お巻母娘に取つて何ひとつ甘いものはないのだが、其ても老夫婦が精一杯の心盡してある。

「今日は愉快ぢや、さ飲つてくれよ。俺は酒さへあると愉快になる。今に「鉢の木」ても謠ろうかい。」

と何日になく俊平は上機嫌であつた。

お卷は京阪の、凡てに華美な綺麗びやかな風俗などを話した。お卷の着てゐる市樂の袷もお正には羨ましかつた。襟にハンカチを當てたのも餘程氣取つて見へる。お咲はツンと澄してゐる初子が氣になるやうに、自分の見すぼらしい姿を恥ぢた。初子は時々嘲すむやうな笑を見せた。

お卷は、彼の地の割合物價の安い事、今自分等の借りてゐる家は、元立派なお士族のお屋敷で、大きな庭があつて、長屋のある事などを手眞似て話した。

「それで家賃はたつた廿圓なんですよ」と付加へた。

「まア……」とお正はその話に驚いた。その境涯を羨やまずには居れなかつた。

「何だ其麼はなしは休せ〳〵、その變りに飲でくれ。」

と俊平は醉ひの廻つた顏で、酒杯を突きつける。

「いゝえ私しはもう……」とお卷は手をふる。

「自宅でも些しは飲るのか？」

「は、時々ね。灘の極くいゝのを二合と極めてゐますよ。灘を飲みつけると、他のは舌觸りがわるくつて………」

と云ひかけてお卷は有繋にハッとした。然し又をつとりした靜かな調子で、

「別に贅澤と云ふのぢやないのですが、他國へ行つてると、身躰に障らないのをと心掛るもんですから………」

と隱し切れぬ誇りがの色を見せた。

「さうかの」と灘の酒を飲んだ事のない俊平は、

「う、身躰を大切にする……其が何よりだ。」

と幾らか顏を顰めて云つたが、女だけにお正は、堪へがたい不快を感じた。

「ほんとに不甘いもの許りですが喰つて下さい。さ初子さんも」とお正は底意地さうに云ひ出した。

「あゝその膾でも食つてくれ、今態々買はせたのぢや」

俊平はこの山國に產れて、又そこに老いた。殊に古學崇拜の、評判の一こく者で通つてゐる。佳肴と云へばいきの可否も知らぬ、只魚でさへあればいゝのだ。

「はゝ」とお卷は首を伸して、「もう彼地にゐては魚には食ひ飽きてゐますから……」と笑つた。

「返つてね、この胡瓜揉みの方が甘美くつて……」

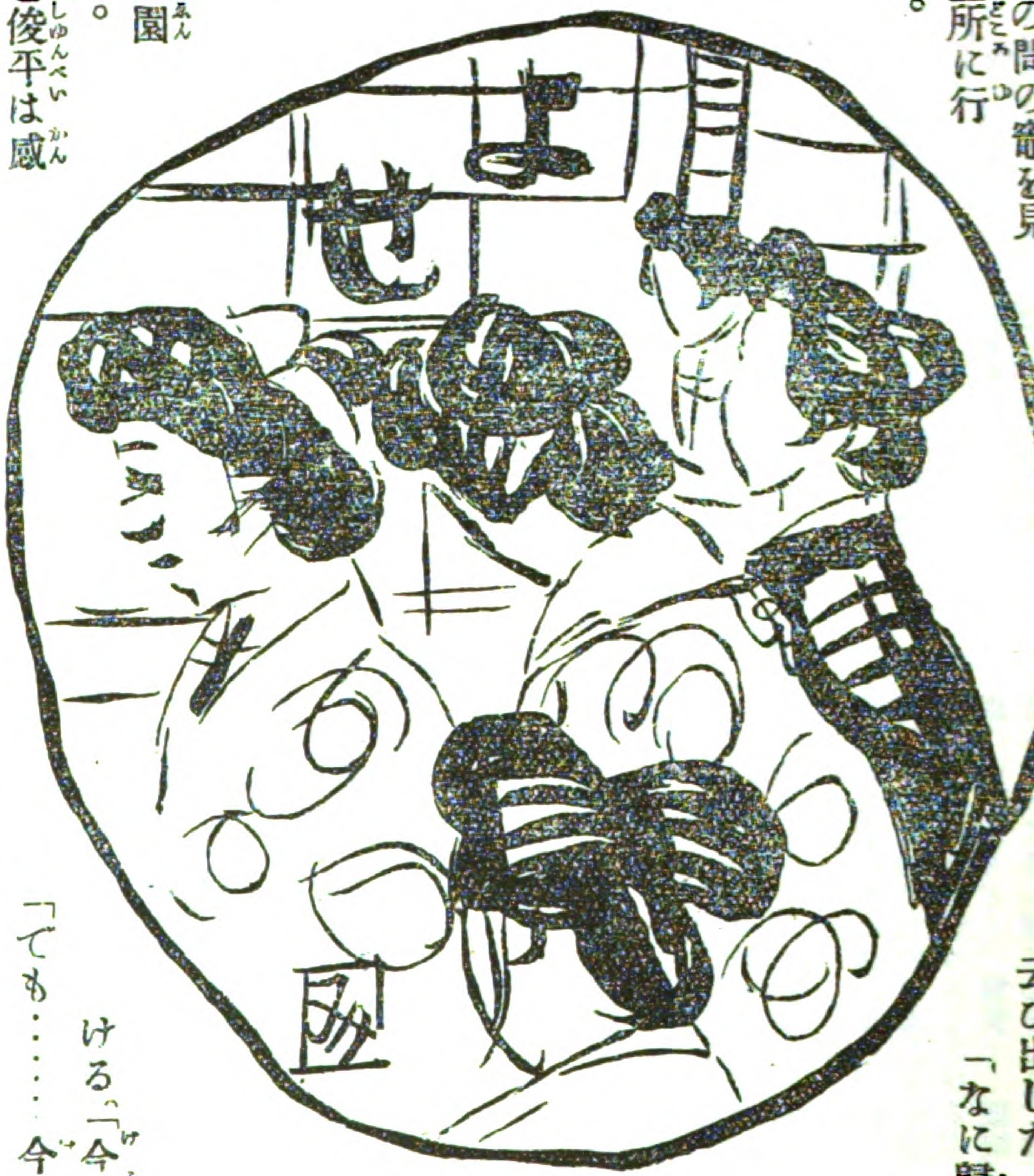
と初子は取持つやうに云ふ。お咲は、何て憎らしい事を云ふ人だらうと思つた。

「さうでせうとも……お好きだつたと思ひましたから今枝豆を煠てゝゐるんですが。」と猶且りお正は恥かしさうに、次の間の竈を見返つた。お咲は立つて臺所に行き、火を燃やしはじめた。

「お巻！俺はなア全くお百姓になり果たぞ。」

かう言つて、なほ暑さうな夏の日が、裏の芋畑に照つてゐるのを見ながら俊平は嘆じた。長い間、土地の小學教師をつとめてゐたが、新らしい時代の流れと並行する事は出來ない、老朽扱ひにされるのが心外さに、斷然田園生活に入つたのであつた。

「あゝ俺も老年つた。」と俊平は感慨の深い目色をした。



（二等）　よ　せ　紀伊　稗田みつ子

少時すると、初子は母親と面を見合して、

「お暇しませう、」と堪へかねたやうに云ひ出した。

「なに歸る？……」と俊平は酒杯の手をその儘餉臺に置いて目を瞬つて。

「まア如何して？……貴方。」とお正も驚ろいた。

「宿屋にも歸るからつて言つてありますし……」

「何だつて宿なんか取つて來たんだ！馬鹿な！」と俊平は頭から叱りつける。「今日は是非泊れ！」

「でも……今日はね」とお巻が口籠ると、

「いや不可ん。何て先きに俺の家へ來ないんだ！」

「昨夜は着いたのが晩かつた上に、隨分荷物も御座いましたから……。」

「晩くとも來て下されば宜かつたのに。大變待つてゐたんですよ」とお正も怨めしさうに言つた。

「伯父さん、良夫も校長さんを御案內してこの東山溫泉へ避暑に來てゐますて……」と俊平の顏色を候ひながら初子が辨解けしだした。「母も一緒に宿を取つたので御座いますから、今日だけは失禮致しますわ。いづれ明日でも良夫はお伺ひするんでせうから……。」

「いゝや不可んぢや。如何でも泊れ！」

と俊平は如何かすると吃りさうで舌が縺れる。顏が赭黑く光つて、初子はヘッと首を縮めた。

「兄さんさう仰有つても……」とお卷が笑ふと、

「ぢやねえ、今日は……」とお正は調停し氣味に、

「明日は是非宿を引き拂つて、來て下さいよ……」

と襟ぐられるやうな氣持で賴むやうに言つた。

「は、明日か明後日の中には此方でお招びいたしますから……御一緒に入らして。」

とお卷は愛想よく言つて起ち上つた。お咲は送つて出ながらも、一緒に手傳つて兩人を待つた自分を、澤村の叔母は何とも思つてゐないと思ひ、込上げるやうな情けなさが感ぜられた。

二人が歸つた時分、秋近い日は黃色く暮れかゝつてゐた。「お祖父さん、小母さんが來たら、幾日も泊るつて、何故歸つて仕舞つたの、もう來ないの？」と君子が不思議さうに訊いたので、お正は苦しさうに笑ひ乍ら、悔しいと云ふ思ひを籠めた眼て老夫を見た。俊平は飲みさしの酒杯を下に置き、默然として考へこんだ。

光

「不思議!! 不思議!!」とといふ情がしみじみと胸を。眉をあつめ、唇むすんできと灯を見つめる――。光――光？これはまあ何としたもの。あやしい私にはこの光まであやしい。わかりたい。知りたいものと思ひつめてしまつて紅さし指のべて、ほごしに光にふれやうと――。櫻色せる柔い爪はひかつて、指は桃色に見える、血が透く何故？何か知りたい。ふしぎてならぬので。私の此朱の唇、燃ゆるくちびる!! かのこはく色てある光！二つが一處に合したらどう。愉快――歡樂！、身をのべて唇を擬せんとして、待て！待て！私は狂してるかしれない。待て！待て！と心中の叫びによびもどされて目を閉ぢる。ああ我れ人ともに「戀」を步んでこのやうな感情をおこして來たのだつた。

――長曾我部菊衣――

三等

町の出水

赤崎あい子

その日は朝から大雨が降つた、黒々とした雲が厚く重り合つて、人々は頭を壓しつけられるやうな不快を感じた。特に身體の弱い人は鼻血が出るなど〻言つてゐた。雨の家根を打つ音――轟々といふ雷の響き――電光はピカツ〳〵と、氣味の惡い程戸の隙間から光つた。お花は二つになる赤子を抱いて、心細い思ひながら寢てゐた。雷の鳴る度、電光の光る毎に、眼を閉ぢたり耳を掩たりした。亭主は暢氣相に晝寢してゐる。が、それも正午頃になると、何時しか止んで了ひ、雲もだん〳〵に切れて、青い澄み切つた空から、激しい夏の日光が洩れ初めた。と同時に、高木町や笄町やそれから青山墓地から流れ出る水は、皆新霞町に集つた。其所は四方高臺に圍れてる盆地なので、見る見る間に新しく建てられた町一面水に浸された。溝は皆溢れて、汚物が所嫌はず流れ出る。

「水が出た！」

といふ聲が、新開の町に響き渡つた。お花は吃驚して飛び起きて店に出ると、赤黒く濁りに濁つた水が自分の家の床まで逹いてゐる。他所の人々もみな店口に立つて、困つたやうな顔をしてゐた。何んとも言はれぬ激しい恐怖が、突如として彼女の心を衝いた。

「八百屋のお内儀さん、大變なことになつて了ひましたねえ！」と前の道具屋の女房がお花を見て言つたが、

「え〻」と答へたまゝ、お花は青くなつて奥に駈込み

「お前さん、た、大變だよ！」と亭主を起した。

「うーむ。」と亭主は未だ寢てゐる。中々起きさうも無い。それがお花には非常に甲斐無いやうに思はれて、唯ハラ〳〵とした。そして、

「お前さん、お前さん、早く起きてお呉れよう」と肩に手をかけて續け樣に搖つた。横ては火のついたやう

に赤子が泣き出す。
寝てゐる時は中々起きなかつたが、眼が醒めると亭主も遉がに狼狽てた。
「何？水が出た？何處に？」—恁ふ言つて彼は立ち上り樣店の方へ飛んで行つたが、間も無く「うむ、これや大變だ！」といふ叫聲がお花の耳に聞えた。赤子をあやしたり外の事を心配したり、心の小さなお花は、最早氣が遠くなつたやうになつて衝立つてゐた。その瞬間には恐怖も無く、夫、子供といふ感念も無く、唯自分は今此處に立つてゐるのだな位の事しか思はなかつた。併し、
「お花！早く來ねえか、何してゐやがるんだい、大根が皆流れちやうぢやねえか。」といふ亭主の聲を聞くとハツと我に返つて、走るやうにして店へ出た。水量は益々增すばかり、先刻から見ると二寸位上つた事は、床を越えた事でも知れた。
「ボンヤリしてゐねえて、サツサと働かねえかい、おい、サツサとしろつてえ事よ！」
褌一つで水の中で働いてゐた亭主は恁う言つた。水は彼の腰の邊りまである。お花は亭主の言葉を聞くと衣服着たまゝ夢中になつて水の中に飛び込んだ。疊の上に投げ出された赤子は再びワーッと泣き叫ぶ。
水は北から南へ可也の速力で流れてゐる。お花の足には棒切れだの材木だの、その他種々の物が衝つた。その度に彼女はヒヨロ／＼とよろめく。そればかりでは無い、足の下の地面は、未だ埋立てゝから僅かの年月しか經ないものだから、流れが急になるに從つて、ゾロ／＼氣味惡く堀れて行つた。
「おい、サツサと、お前も氣が利かねえな、ホラ彼方にも流れて行かあ、此方の籠を上げねえか！」
亭主は絶えず怒鳴てゐた。お花は唯惝惶いて、よろけてばかりゐる。空は名殘り無く晴れて、太陽は更に激しい光を投げた。家々の屋根からは水蒸氣が昇り初める。前の道具屋では早く氣がついたので、何一つ流失された物も無くつて濟んだ。そして老夫婦揃つて八百屋の狼狽を眺めてゐた。お花はその手前も亭主にがみ／＼言はれるのが、何んとなく耻しく思つたけれど唯氣が急くばかりて、手足はどうしても動なかつた。
「新さん、激い水ですねえ。」道具屋の女房が八百屋の亭主にお愛相を言ふと、道具屋の亭主も傍から、
「此の邊は土地が低いんですからね。」と禿頭を暢氣相にツル／＼と撫てた。勿論水に這入つて手傳ひする樣

子などは無かつた。

「真個に、晝寝なんかやつてましたもんですから、此の通り大弱りなんて、へゝゝ」と口では恁う答へたが、八百屋の亭主は心の中で、「お世辭なんか幾ら言はれても難有くないから、大根の一本も拾つて呉れ」と思つた。

比較的高い所に置いてあつたので、他の青物は助かつたが、大根は大分流された。それでも亭主と女房とで三四十本は拾ひ上げた。

「もう無えや、可い加減に切り上げやうぢやねえか。」

「ですけれどねえ。」

「ですけれどつて、今更どうも仕方がねえや、お前が早く起して呉れりやどうかなつたけれど、折角昨日目黒まで行つて買出して來た奴が、滅茶苦茶になつちやつた。」

「そんな事言つたつて、あんなに起したんだけれど、お前さんが起きないんだもの。」

八百屋の夫婦は恁んな事を言ひながら、亭主が先に立ち、女房が後になりながら疊の上に上つた。水は未だ減きさうも無かつた。赤黒い流れは尚更濁つて、芥や木切れは未だ澤山流れて居た。

丁度此の時分、此所から一丁ばかり離れた、青山墓地の崖が壊れた。その下は未だ少し田圃が殘つてゐてその中に一軒のあばら家があつた、それが丁度崖の眞下に當つてゐた――家の中には六十ばかりの腰の曲つた老爺さんと、七つになる男の孫とが住つてゐた。

初め老爺さんと孫とは、水の出初めた頃晝飯を食べてゐたが、前の田圃に水がだん／＼溜つて來るのに驚いた。孫は面白がつて、船だと言つて板を探し出してバチャ／＼初めた。「おうい坊、身體に惡いだにのう」と老爺さんがヨボ／＼した聲で言つても、聞き入れなかつた。

老爺さんの一人息子は、子供を老爺さんに預けて台灣に行つて了つた。そして月々僅かばかりの仕送りして呉れるのが、此の暗い冷い一家の生計であつた。老爺さんも最早餘程老ぼれた、時々は何も考へないで、唯一人ポツネンと墓地の石碑を見てゐる事がある、併しその癖、自分の息子と孫とは此上無く可愛がつた。

「あれでも老父と思へばこそ、恁うやつて毎月送つて呉れるだからのう。」と彼の息子自慢は有名なものであつた。會う人ごとに皺だらけの眼を細くして、例の自

慢をしない事は無い。新聞も讀まず、他に種々社會の事出來事を聞かして呉れる人も無いのだから、息子の事以外に話の出ないのも無理は無い。

孫のバチャ／＼してるのを見ながら、彼は「危險いよ／＼」を繰返して、そして息子の事など考へた。その中に水も愈々增して來る、孫も怖く成つて上つて來た。上りながら孫は、

「お爺さん、何かお呉れよう」と甘つたれた。

「今は何も無いから後でのう。」

「いやだ／＼、今欲しいんだ。」

老爺さんは眼を細くして、さも可愛いといふ風に孫の顏を見てゐた。今何か買つて來てやつたら、どんなに孫が喜ぶだらう！さう思ふと、その喜ぶ顏が老爺さんは見度くなつた。で裾を端折つて水の中に這入りかけたが、餘り深いので急に怖氣がついて止した。我儘な孫は「いやだ／＼」と言ひ續けた。

「のう、お前にさう言はれると俺あ最早堪らんから、もう少し待つとくれよう」老爺さんは憫れみを乞ふやうに恁う言つた。細い眼には涙が浮ぶ。

水がダン／＼增して疊の上に達いた頃は、孫も最早何とも言はなかつた。言はなかつたばかりではなく、小さな胸は恐怖で充されて、「怖い／＼」と言ひながら老爺さんに獅齒みついた。老爺さんは戸板を外して横にし、その上に疊を一枚敷いて、孫を座らした。自分は水の浸した疊の上に立つて、息子の事を再び強く胸に畫いた。そして淋しいやうな心元ないやうな、堪らぬ感じに襲はれて、孫の身躰を抱きながら、

「お父さんはどうしたらうのう」と言つた。孫は怖い／＼と泣き叫んだ。外には水の流れの音が轟々と聞える。恐怖を通り越した心は當惑であつた。

「助けて呉れえ！」と叫んだが、皺涸れた聲が一丁離れた町に聞えやう筈が無い、水の流れは哀れな響きを譯も無く消した。

その時であつた、凄しい音が背後の崖に起つた。孫と老爺さんが慄えながら、抱き合つた時分、天井が頭の上に落ちて來た。——二人ともグワンとしたかと思ふと、氣が遠くなつた。

此の崖崩れの音響は、新開の町全體の空氣を慄はした。八百屋のお花は青くなつて、

「お前さん、何んの音でしやう？」といふと、

「崖でも崩れたんだらう！」と投げ出したやうに亭主は答へた。心の中では大根の損失を數へてゐた。

午後四時頃、流れが急に早くなり出したと思ふと、水は新霞町の端を通てる大溝にドン／＼注ぎ込んだ。一時間ばかりの中に見る間に減いて、五時頃になると往來には地面が露はれた。崖崩れ！誰いふとも無しに人々はゾロ／＼田圃の方に集まつた。お花も居た、亭主もゐた、道具屋の夫婦もゐた、總てゞ三四十人。西日に照らされて臭氣を放つ水後の地面の上に群集は立つた。

「偉い音がしましたからね。」

「人が死んだといふぢやありませんか。」

口々に恁んな事を語つた。

崖は可なり激く崩れた、緑の草の間から、崩れた土が赤々と見える。栗の木が一本土と共に倒れて、あばら家の屋根の上に乗りかゝつてゐる。それを西日は黄ろい激しい色彩に照らした。あばら家は屋根から戸にかけて壊れ、老爺さんと孫が埋れてる邊りからは、水蒸氣がほのかに立昇つてゐる。



（三等）散歩　青森　松尾千代子

「あん中に人が死んでるんですつてねえ」と恁う言てお花は、ヨボ／＼した老爺さんと、愛らしい孫との面影を胸に畫た。そして限無い淋しみをひし／＼と感じた。亭主は道具屋の主人と共に、「水の出た後は赤痢が流行相ぢやありませんか。」「さうだつてえ話ですね、赤痢といふ奴は恐ろしい奴でね。」などと話し合つてゐた。

四等

桃代

佐藤萬壽子

「ね、後生だから行て來ておくれよ、頼むから」「だつてあんなとこへ行くの否だわ」とつんとする「まあそんな見識ぶつた事云はずに、どうぞ御孃樣御頼み申ますよ、其の代りおつかいちんに是を上樣」美喜雄は袂から白絹へ菊の縫ある半かちーふを出して、桃代の膝の上へをく、桃代はふと行て見たくなつた、だけど何だかはづかしい樣な氣がする「行きましようか、でも何だか氣まりが惡いわねえ」今もらつた半かちーふを、丸めたり開たりし乍云ふ「何ちつとも氣まりの惡い事なんか有りやあしないよ、お前向ふの家知て居るかい、「え、たしかあの横町を曲つて右側だつたわね」「そうだ、松葉家と云ふ家だよ」桃代は點頭て着物を着かえ乍ら、どんな女かしら德さんの義理の妹だと云ふ事だけれどやつぱり、あんなかしら、まさか、等と好奇心にかられて仕度もそこ〳〵きちんと桐の箱に仕舞てあ

る三味線を持て家を出た、道々もいろ〳〵の事を考へながら、神樂坂の中程を右へ曲つて直ぐ左へ行くと藝者新道が在る、桃代は右側計り見て行くと五六軒目の小じんまりした格子戸の中に、松葉家と書いた御神燈が下つて居て格子戸とならんだ一間の窓には、青簾がかゝつて内から艶かしい笑聲が聞えた、桃代は、はッとして立止た、そして、むら〳〵と不快な感じが起つて足早に通り過ぎて仕舞た。

二三軒先の藝者屋から、十二三の半玉が出て來て、桃代の頭から足のさきまでぢろ〳〵見乍ら、すれ違つて三足四足行くと、ふり返つてぷッとつばをする、桃代は餘りの惡らしさに、つとふり返ると四ッの目はひたとあつた、半玉は小まちやくれた顔に「ふん」と嘲笑をのこして、つんと澄して小股に步て行く、桃代は堪らなそうにかけ出して本多横町から毘沙門前へ出

て、ほつと息をついた、目には口惜涙を浮めて。

かまはないッ此のまゝ歸て仕舞はふ、何しかられたつて、桃代は夢中に半町計り歩いたが、忽ちぶる〳〵ッと顫へて立すくんだ。

桃代は四月計り前の事を思ひ出した。

月の清い春の夜だつた、兄から頼まれて兄の上つて居る、清元の師匠の處へ手紙を持て行た時、何やら家内てお花を引て居る樣だつたので其のまゝ歸つて來てそう云ふと、何うしたのか何日も優しい兄が顔色を變へて物をもいはず、自分を引倒して力一ッぱい三ッ四ッ打て、まだあきたらぬのか、目を血ばしらせて兩親のない兄妹だ、兄の云ふ事を聞ぬのは親の云い付を守らぬも同樣、兄たるをれが成ばいするッと云ひ樣、用簞笥から昔父樣が御さし遊ばしたあの小刀?お〳〵思てもぞつとする、……自分はあの晩、夜通し庭のすみて泣き明したッけ、跡で聞けば五年の内に二三度位、一寸した事からのぼせ上る事が有るのだそうな「おいッ、あぶないよッ」とつぜん、後に大きな聲がした、桃代は喫驚して横につと身を開いた「ハヽヽヽ驚いてらあ、姉さん大丈夫ですよ」「いよう、べつぴん」見ると夕河岸から歸て來たと見えて、車に半臺を幾つも載せて四五人の若しゆが勢よく傍を通つた、桃代はほつと顔をそめて、すご〳〵と元來た道を歩いて行く、日は西へまわつて美しい金色の光を、松葉家の青簾半面に投かけて居る「御免下さい……」ほそい顫聲で跡はきえて仕舞う「はい、誰方」りんとした聲が聞えて直ぐよし戸をあけたのは、十八九の意氣な藝者、「あのお染さんと被仰る方、あの居被いますか」胸のどうきは、はげしくうつてやつぱり聲が顫へる「はあ染は妾で御座ますが……」一寸三味線の箱を見てにつこりと點頭て「あの貴孃失禮で御座ますが、もしや美喜さんの御妹子樣ては御座ませんの」桃代は眞赤になつて俯首て居た顔を靜かに上た「え、そうなんてす、貴女がお染さんてすの」少しをちついて上氣した顔を半かちーふてそつと押へて微笑する、お染は心の内でお美しい、とさけんだ「さあどうぞ御這入なさいましよ……お母さんあの美喜さんのお妹さんが入被ましたよ、さあ貴孃もつとづつと此方へ入被いよ」「え、有難う」一寸首を下げて體をなゝめに風呂敷のむすび目を解いて居る、お染は茶を入れ乍ら「一昨日の晩にね美喜さんが居被たんてすつてね、調度妾が御座敷へ出て居たもんてすから知らなかつたんてすがね、あの

明日か明後日妹をよこすからつと仰被て御歸り成すつたんですつて、だもんですからね首を長くしてお待ち申して居りましたのよほゝゝゝさあどうぞお一ッ」お染はぼんの上に、かすてらと茶を載て出す「あのう、三味線どうも有難う存じました、其れから此品はほんの御禮のしるし計りに　あの妾のとお揃ですのよ」桃代は小さなゆびわのサックをお染の前へ出す「まあそんな事して下すつちやあ困りますわね」桃代の持て來た三味線箱を横手の方へ片付乍ら云ふ、お染の後のよし戸があいて、此家の女將が手にアイスクリームとバナヽを載せた盆を持て這入て來た「をや入被い、此のまあお暑のによくねえ」と云ひ〳〵下へおいて「さあ、冷い處一杯召上れ」始めて逢たのに、こうなれなれしくされて桃代は、どぎまぎし乍ら美しい兩手を並べて、丁寧にじぎをする、女將は、桃代の顏や姿を恍惚と見て居たが、一寸お染の袖を引て「實に美い子だね」と小聲て云ふ、お染もうつとりし乍ら點首た「貴孃、御名前何と仰被るの」お染はバナヽのかはをつりとむいて桃代の前へ出して「さあ、貴孃一ッ召上れよ」「は、有難う、妾桃代つて言ますの」「まあ宜いお名てす事」女將は年の割には若々しい面をお染の方へ向けて「ねえ容姿とよく合て居るじやあないかねえほゝゝゝ」「あの、女將さん小藤さんが來ましたよ」下女が不作法に首丈部屋の内へ差入乍ら云ふ「おやそうかい、大變早いじやあないか、まだ支度も仕ないんだよ、早く情夫の顏が見たいのかねえほゝゝゝ」と座を立て「貴孃どうぞ御ゆつくり」一寸ゑしやくをして出て行く。

桃代は暗い處から始めて明るい處へ出た樣に思はれて何日も藝者屋と云ふ物を聞く度に起る不快の念は洗去られた樣にきゑて只、はなやかな暮しと許り思つた「面白そうな方ね、どちらへか居被るの」今までになない艶やかな笑を浮めて持て來た扇子ではた〳〵と煽ぐ「えゝ、芝居の連中てすの、お染は何か言惡くそうにもじ〳〵して居たが「あの貴孃の御隣りに君子さんとか仰被る方が居被るてしよう」「え、よく御存じですわねえ」「はあ小さい時學校へ一所に參つて居りましたから……」と偸む樣にそつと桃代の顏を見て「よく御宅へ居被る事」「えゝ毎日居被てよ、だけど妾餘りあの方好きじやあないの」と懷しそうにお染をじつと見る、お染の顏にはあり〳〵と安心の色が浮んて思はずにつこりと「なぜ」と云ふ「だつて」と甘へる樣に首

をかしげて「妾女の姉妹が無いてしよう、其れだから、自分よか年の上の方を見ても、下の方を見ても直ぐ懐しくなるんてすけれど何だかあの方は嫌よ」桃代はもう親しい友にても話す樣にこう云つて扇子をおもちやにして居る、お染は堪らなく可愛らしそうに、だんだん傍へ寄て來て其の愛らしい顏を窺く樣に「宜じやあ有りませんか、其の方を兄さんの御嫁さんにしたら……ほゝゝ」と戯談そうに笑ふ「ほゝゝ否だわ、兄さんがもらうつたつて、妾がもらわない事よ」華やかに笑つて、ふと氣が付くと電氣はもう、とッくに來て、表は薄暗くなつて居る「あら、此樣にをそく成て仕舞て……あの妾もう、御暇致しますわ」「まあ宜じやあ有りませんか、今ね誂物したんですから」「でも兄さんがお夕飯戴けないで困て居るでしようから」「あゝそうく、此間美喜さんがそう云て居被たつけ女中が出ちやつて困るから一人世話してくれつて、でも貴孃御一人でよくねえ」と感心した樣にじつと見る「ほゝゝゝ其が一人で出來りやあゐらいんですけれど、兄さんと二人で一日中、御座敷や臺所でごたくして居るんですものほゝゝ」お染もつりこまれて思はず莞爾する、そして自分と美喜雄とが幾月かの後に此の美しい妹と三人で、おひな樣の樣な所帯を持つ樣に思はれてならない、と、其の時の樣が活動寫眞の樣に自分の目の前へ浮び出る、自分はそれをどこまでも追て行く。

「左樣なら」桃代は御馳走になつた御禮をのべてこう云つたが返事がないのでどうしたのかしらと、お染を見ると天井をじつと見まもつてにてくして居るので不思議に思ながら「左樣なら」と今度は少し大きな聲て云つて立上つた。

始めて氣が付て美しかつた空想からさめたお染は桃代が立たので驚た樣に「おや眞に御歸りなさるの、もう少し居被ればいゝに」とさもく惜しそうに云ひ云ひ立て靜に歩いて行く桃代の後から、たぼばさみをはづれて下つてゐた後れ毛を、一寸はさんでやる。

玄關へ出て見ると、先き女中が來た時に揃へて置いたのかきちんと並てゐる「どうも失禮、御歸りに成つたら兄さまに宜しう」と自分で先きへ表へ出て居る「え」「此のまゝでは嫌ですよ、又屹と入被い」

夕風がそよくと心地よくふいて向の藝者屋で、水調子で三社祭をさらつて居るのが聞える、五六間行てふりかへると、お染がうつとりとして立て居た。

桃代は歸て來てからも、お染の濃い眉や小鼻の高い

事や、あのきゆつと締りのある口が物云ふ度に愛嬌が出るのを今考へて不思議に思つて居る、そして何だか懷しくつて戀しく思はれてならないんだ。

隣の君子はどうしたのか此處二三日少しもかげを見せぬので、好きではないと云ふもの丶、自分より外に女と云ふ者が居ないので琴のけいこから歸つて來ると、人なつかしくつて堪らないので、庭下駄のまゝ隣へつゞいて居る木戸口から這入て君子の部屋の前へ來ると「早く行てお出よッ」と例の甲高な聲が聞える『君子さん居被て」桃代が部屋を覗くと「あら桃さんなの、玉や、もう行かなくつても宜よ、今貴孃の處へ御迎ひ上樣と思てたのよ、なぜ貴孃尋ねて下さらなかつたの、早くお上んなさいよ」君子は何か丶んしやくを起して居る、桃代は上へあがつて見ると、友仙模樣のめれんすの敷ぶとんの上へ座ッて、讀みかけの小說を投出して、きッと此方をふり向た、『どうしたの風邪、え、』『……』『餘程惡いの』『そんな事どうでも宜わ」ぱつちりした險のある目で白眼樣に桃代の顏を見て「貴孃一昨日どこへ行たの、さ、其れを被仰よ」桃代は一トすくみになつて「妾、一昨日お琴から歸つてから、兄さんに賴まれて神樂坂まで……』『ふん、神樂坂の松葉家へ行たんでしよう、兄さんから賴まれて、何を持て行たの、え」けはしい目をして、毛一本動かすのでも見逃すまじと云ふ樣にじつと見詰められて、桃代はだんだん俯首て仕舞、君子は小氣味よささうに「ほ丶云へないでしよう、貴孃の左の手を見せて御らんなさい——あ丶是れだ、慥に違ない」と腹立しそうに、自分の手文庫から一ッのゆびわを出して、桃代の前へ叩き付た「これを御らんなさいよ、貴孃のと同じでしよう、そうして……」と聲を顫はして「此のゆびわは、いえ是と同じゆびわが、もう一ッ松葉家のお染が持て居るはづよ、其の持て行た人は……桃さん貴孃じあ有りませんかッ……」顫ふ聲を、努めて押へ付乍ら、氷の樣に冷やかな眼は、驚いて、つと顏を上た桃代の二ッの目へ、電氣が感じる樣に、強く〳〵射た、桃代は長い袖を顏に掩つて忍音に泣き出した。君子は其れをしり目に白眼んで、心地よさそうに、ほ丶丶丶丶と笑つた、其の笑は勝ほこつた心を示すのでもなく、冷やかな嘲笑でもなく——生れてから始めての戀に敗けた失望と、其のふくしゆう、と云ふをそろしい思を含んだ、すごい笑であつた。

桃代は袂を顏に當たま丶、しほ〳〵と座を立て、緣

側の方へ歩みを移すと「桃さん、一寸、此手紙をあの薄情者の美喜さんにやつて頂戴ッ」ぽんと桃代の足元へ投た手紙を桃代はじつと涙の目で見て居たが、「何思つたか「此樣ものッ」と云ひ樣、ぴり／＼と引さいて仕舞た「おゝッ」君子は思はずさけんで立上つたが、餘、怒りのはげしいのと昨日から、むしやくしや腹に



（四等）農家　京橋　くに子

御飯を食べなかつたので、ふら〳〵ッとしてばつたり倒れた「おぼへて被居ッ」眞に血をはく樣にこう云つてびり〳〵と着て居た浴衣の袖を引さいてかみしめ乍ら俯伏て身を顫はして居る。

桃代は庭下駄をつゝかけるや否やとゝゝとかけ出して我家へ這入た。

此のづゝと前から庭の入つてのかげに二人の話しを立聞きして居た男があつたが桃代が自分の家へかけ込んだのを見ると、につたり、薄氣味の惡い笑をもらして君子の部屋へ這入て行つた。

かれは其の名を伊藤國治と云つて〇〇堂時計店の店員だそうな。

五等

朝顏

吉田古磨

姉さんとはいふけれど、實は從兄の嫁なのでつまり他所から來た人である、同じ村の大きな農家から十七の春嫁入つて來たのだが其當時の事は妾は夢の樣に覺えて居る、舅（妾の伯父）は村の學校が出來てから四十何年間繼續して奉職して居たので、中には祖父から孫まで三代敎へたのさへあるとか、姉も其生徒の一人で成績は佳良、性質は從順田舍の事とてまだ其頃には女で高等小學校まで行くのは殆稀であつた、姉が高等科の三年になつた頃には女生徒は姉一人になつて仕舞たので、姉もとうとう退校して仕舞つたそうである。それからは裁縫と機の稽古をしたので、嫁入つて來た時には風通織、絣織の樣な事まで何一つ知らぬものはなかつたが、農家の生れにも似合はず極かよわい體格で、女郎花か月見草を見るやうな氣がする、どちらかと云へば少し額の出たお福立ちといふ方ではあつたけれど、丸顏の透徹る程色の白い、兩頬に深い笑くぼの

あるやさしい顏であつた、それに眉が書いても書けない程氣高く美しいので、妾は姉の眉を見ると、雨上りの空にすつきりと浮き出た虹を仰ぐ樣な氣がするので、姉の事を思ひ出すと一番にきれいな眉が先に浮んで來る。

他所の姑は、まめ〳〵しい從順な姉を非常に羨ましがつたと同時に、嫁にやさしい姉の姑を他所の嫁は羨んだ、從兄は陸軍の中尉であつたのだが日露の戰に出征して彈丸に胸を貫れて死んだ、肉は死んだが美しい名を殘した、かよわい樣でも道に明るい姉は、夫の戰死の報に接した時でさへ髮の毛一筋みださなかつた、それからといふものは病氣で動けない時の外は、每晩々々夫の墓參を丸三年續けた、暮れて行く淋しい野道を、油注ぎと線香入れとを持つてとぼとぼと行き歸りするのをいたわしいと見ぬものはなかつた、妾は何だか每晩墓塲へ血を運ぶ樣な氣がして、氣のせいか次第に姉が瘦せて行く樣に思はれた、一寸見ると勝氣に見えるけれど全たく情の人で情の塊であつた、小說が非常に好きで一通りのものは大抵讀んで居た、いつか妾が行つて居る時であつたが、日が暮れるのに姉が二階から降りて來ないので急ぐ縫物でもして居るのかと思つていつて見ると、本の上で泣いて居るので、「何つ」て聞くと、淚の顏を擧げて、又「不如歸よ」、何度讀んでも矢張り泣いて仕樣がない浪子はどうして肺病なんか病らうたのだらう」なんて氣狂じみた子供の樣な事を云つた、「姉さんも何だか肺病で死にそうに思ふわ」つて云つたら、美くしい眼でニッと笑つて、「肺病病む位だつたら結構だけれど、肺病は血のある人の事よ、妾の樣に水も通つて居ない樣な體は血を吐いて死ぬなんてそんな華やかな死に方は出來やしないわ、どうせ丁度朝顏の花が日に逢つた樣に、萎へて仕舞ふのよ」、といつた、「マアいや〳〵」といつたら、「ほんとうよ」と笑ふ、戲語の樣な口調ではあるけれど肺腑から出た言葉であつた。妾は此淋しい姉といつまでも一しよに居て慰さめたいと思つたけれど、何だか姉の後には黑い影が付いて居る樣で便りなかつた、伯父は始終滋養物と運動することゝを切にすゝめた、それでどこかへ姉が遊びに行く時には、きつと妾を呼びに來るので、其度に妾は年の割に少ない薄い髮をきれいに束髮に結つて上げて、一しよに行つた、他愛もない事を云ひあつて近邊の名勝は大抵行き盡した、姉は色々な草花の種を集めるのが好きで、道を一しよに步いて居て

も、立ち止つては何かして居ると思ふと、名もない花の腐つた樣な種をとつて大事さうに紙に包んで四季袋に入れて居る、灰色や、鼠色や、土色、茶色の樣な死んだ樣な色の種を、土にさへ埋めて置いたら若い芽が出て花が咲くのが何かなし嬉しくて好きなのだつて、一開張の箱に一ぱい色々な種を、種物店でもする樣に集めて入れてある、去年の夏、伯父が素燒の鉢を澤山買つて來たから、何になさるの」と尋ねたら、姉が朝顏の花に凝つて居るから、これに植えさそうと思つて、つまり慰さめてやるのだといつた、姉は鉢を見て少女が人形を貰つた樣に喜んだ、其笑顏を見て伯父も淋しげに笑つて居た、やがて其の鉢には色々な花が咲いた、姉がそれに水をやつて居るところへいつて花をいぢつて居たら、「古磨さんは花を育てるどころかいぢり殺すのだ」つて怒られた、「だつてこんなに根が飛び出て居るからよ」つて土を搔いたら、「あんなにして掘り出すのだものせせつかしい子、邪魔したら水かけるよ」つて持つて居た如露の口を向けて掛ける眞似をする、「あら姉さんの水のかけ方が荒いからですわ、根が出てゐるがハイカラていゝわ」つて自暴に引つぱつたらとうとうぬけて仕舞つた、姉は笑ひながら又それを植えた、

其時に姉は、お父樣が花がお好きだから斯うして御機嫌をとるのよ、それにこんな鉢まで買つて下さるものだからネ」としみじみいつたので、妾は先に伯父の云つた言葉を思ひ出して來て、何とも云ふに云へぬ淋しい感が胸を搔き廻す樣なので、何も云はず紺絣を着た肉の薄い姉の肩をじつと見入るのであつた、然し其頃にはどうしたものか大變顏色がよかつたので、或時姉にそう云ふと、「エ、當てにならん虹見た樣なものよ、大方戸惑ふた血が殘つて居つたのだらう」なんて人事の樣に取合はない、「いゝえ、きつと運動するからですわ、ほんとにいゝ色よ」と云つたら、「ホヽヽ！御大師樣の御かげですか」といつたが、何か可笑しい事を思ひ出したのか口に手を當て、誰やらの樣に、ホヽヽ、御參詣もしない内から御辨當々々つて騷ぐ樣な人が一しよだから猶よう効く事よ」つて笑ひ轉ける、「あらあんな事、姉さんだつて贊成して置いて」といつたら、なほ笑つて「發言者は誰だつたの」つて白いきれいな齒を出して後へそり返つて笑つた樣子が目に付いてゐる、またどこかへ行きませうと都合のいゝ日を待つてゐる内に、學校で養蠶の講話が始まつたので、姉は伯母と二人でそれを聞きに行くことになつた、或日講話

から歸つて來た伯母が小さい聲で「今まではあゝてもなかつたのに今日姉の後で腰掛けてじつと見て居たら、マア姉の息遣の忙しい事つたら、丁度姙娠の人の樣に肩がかう〳〵なるのだもの」つて伯母は形まてして見せて、「大事ないのか知ら」と伯父に云つた、默つて聞いて居た伯父は暫くして、「六ヶ敷いな」と云つたきり、煙管を自暴に叩いて手を組んだ、妾は思はず吐息を吐いた、不幸にも伯母の心配は當つた、養蠶の講話がすむ頃から姉はぶら〳〵床に就いた。

　咲いては萎へ萎へして居た朝顔が、もう大方種になつて仕舞つた頃に病は重つて、見違へる程痩せて來た、只一つ眉計りは際立つて昔の儘に美しうて一層氣高う見へた、伯父は咲き殘つた朝顔の鉢を持て行つて枕元に置いた、姉は淋しい眼でそれを見て居たが、妾を呼んで、「古磨さん此の種の名を間違はない樣に書いて置いて頂戴」と云ふので、直ぐ姉に聞いて居た通りを誌して置いた、朝顔が蔓まで枯れて、萩の花がホロ〳〵とこぼれる樣になつた頃姉はとう〳〵亡くなつた、それはそれは、靜かに靜かに、穩かに穩かに此世と永別れた、いつか自分て云つた通り朝顔の花の樣に萎へたのだと思つて妾は泣いた、全く姉の云つた、水氣も通はない樣な脆い體は、萎へて枯れて秋風に落ちた、アーアー三十一だもの厄年てあつた。

　今年も朝顔の鉢は去年の通り庭先に並んで居る、子にも婦にも先立たれた伯父は、婦の片身の朝顔の種を蒔いて六十八といふ年に眼鏡も掛けず、氣長う朝顔を育てゝ居る、昨日伯父は大分延びて來た蔓を竹にからまして、花は枯れても又咲いて來ると獨言を云つて、年々歳々花相似を小聲て吟じて居るのを私は陰て聞いた。

貸間

捨菊

　父が公務を帶びて樺太へ出張してから家は急に淋しくなつた、それも一月位で歸つて來るなら兎も角、半年以上も彼地に滯在する豫定なので、母と私等姉弟の女所帶は火の消えたやうに滅入つて了つた。で同居人でも置いたならいくらか賑やかになるだらうと、母と相談の上二階を貸す事にした。

　二階は六疊で南と西とに窓があるので隨分明るい私が下手なりに「貸二階、但婦人に限る」と半紙へ筆太

に書いて、窓の格子へ斜に貼りつけた、そして什麼人が借りに來るだらうかと想像しながら待ち受けてゐた。すると夕方になつてから一人の男が來て、職業學校へ行つてる從妹の爲に貸間を捜してゐる者だが、二階を拜見さして頂きたいといふので案內すると、押入を開けたり、窓から覗いて見たりして後、大分氣に入つた容子で貸してくれといふ。間代や家內の樣子なども聞いて、今晩すぐに荷を運ぶからその御心算て……と叮嚀に念を押して歸つた。

二時間も經つた頃、車夫に荷を曳かせて、先刻の男が十八九許りの女を連れて來た。大きな柳行李二個に寢具、立派な机本箱に琴など、それは到底も女學生の持物とは見られぬ程澤山なものであつた。

母がお茶などを勸め乍ら

「御郷里は？」と聞くと

「群馬縣です」と男は言ひ乍ら鉛筆でサラ〳〵と女の現籍地を書いて母に渡して

「東京に親戚も知己もないので、萬事都合が惡くつて困ります」と物馴れた調子でいふ。そして出來ないといふ賄まで無理に賴んだ。

女は俯向き加減に座つてゐたが、血色のよい、豐頰の、愛嬌のある美人である。

母と私と手傳つて荷物を二階へ上げてから、田舍者の事ですから何卒くれ〴〵も御願ひ致します、と男はくど〴〵賴んで歸つて行つた。

女は神田さんといふのだ。神田さんは毎日欠かさず學校へ行く、そして四時迄には歸つて來たが、餘り勉强もしない樣子で始終雜誌や小說を讀んだり、手紙を書いたりしてゐる。神田さんの許へは平均日に二本は屹度手紙が來る、男の名のも少くはなかつた。

來た當時は內氣な方だと許り思つてゐたが、此頃はなか〳〵快活になつて、夕方など窓に凭れて時々唱歌を歌つてる事がある。そしてよく外出する、一寸友達の所まで行つて參ります、など、夕方から出て行くが、それでも八時半か、晩くも九時迄に必ず歸つてくる。

神田さんが學校へ行つた留守に二階へ上つて見ると、これが若い女の部屋かと思ふ程、座敷一杯に取亂してある。

日曜には欠かさず從兄だといふ人が遊びに來る、そして二人で琴など彈いて騷いだ擧句、夕方には歸つて行くが、偶には雨の日など泊つて行つた事もある。

或日曜の事である、神田さんと從兄と二人で散步に

出た留守へ、私達のまだ知らないハイカラな男が神田さんを尋ねて來て、二階で待つて居た。間もなく二人が歸つて來たので神田さんに其事を話すと、神田さんの顔にはさも當惑したやうな色が現はれたが、何か密々話して從兄を歸して了つた。それつきり從兄は一度も來なくなつたが、例のハイカラな男がちよいく〜來て遠慮もなく二階で戯けるので、母は頻に眉を蹙めてゐた。

或晩、神田さんは一晩歸つて來ない事があつた。家では心配して十一時半頃まで待つて居たが、どうしても歸つて來ないので寢て了つた。すると其晩は遂々歸つて來なかつた、日曜ではなし、學校もある事だから朝は早く歸つて來るだらうと思つて居たが、矢張り歸らない、如何したのだらうと心配してゐると、十一時頃例のハイカラな男が來て、



（五等） 惱める子 麹町 前田榮子

「長々種々御世話になりましたが、神田は郷里の方の都合で、今度私の親戚へ寄宿する事に致しました、實は神田も一件に上らなければ濟まないのですが、唯今學校へ行つて居りますから、夕刻にでも御禮に上らせます、どうか惡しからず……それに私の親戚の方が學校へも近いものですから……」と斯麽ことをくどく述べ立て、轉宿の事を申出した。無論家では別に彼此言ふ事もないし、それに内も神田さんの擧動に呆れてゐた折なので一も二もなく承知した、男はそわ〜〜した調子で近所の車夫を呼んて來て荷物を載せさせ、勘定も濟して幾度も禮を言つて歸つて行つた。

神田さんが其夕方來なかつたのは無論のこと、其後一度も來た事がないので、今は何所にゐるか少しも分らない。一月許り前に妹が青山行の電車の中で、神田

さんが男の人と一緒に乘つてゐたのを見たと言つてゐたが、其男は例の從兄でも、ハイカラな男でもなかつたさうだ。
　母も神田さんて少し懲りたやうな樣子だつたが、この世智辛い世の中に、これでも貸せば每月幾何かづゝになるので、明けておいてもつまらないと、一週間許り經つてから又前のやうな貸間札を貼つた。すると二日目に四十近い淋しさうな女が來て貸してくれといふので貸す事にした。
「御家内は？」と尋ねると、
「いゝえ私一人です」と蒼い顏に淋しい笑を浮べた。
　すぐ荷物を運んて來たが、荷物といつても行李と寢具と自炊の道具がある許りてある、聞けば昨年の秋に區役所へ勤めてゐた夫が亡くなつてからは、裁縫の賃仕事をして生活を立てゝ行くのだといふので、家でも出來るだけ便宜を與へてやる事にした。何所となく病的な人て、姓は小山さんといふのだ。
　仕立物の看板を二階の表通りへ出したが、餘り賴みに來る者はなかつた、それでも何所からか仕事を持つて來て一生懸命に裁縫してゐる。每日朝から晚まて靜に座つてゐるので、二階に居るのか居ないのか分らないやうな人だと家ては言つてゐた。
　炊事の用意に下りて來た時に。
「まあお話しなさい」と言ふと
「えゝ有りがたう」と例の淋しい笑ひを見せて、二階へ上つて了ふ。
　以前の神田さんとは異つて年も老つてゐるので、時々家では留守を賴む事などがある、すると其都度に其邊へ出して置いた物が紛失する事があるので不審に思つてゐた、炭などは始終減る。私は的確小山さんの所爲と思つた。
「小山さんは如何も手癖が惡いやうね」といふと、
「私だつて丁と睨んてゐるよ」と母は呆れたやうな顏をしたが、
「でもそんな事を言ものじやありませんよ」と嗜めた。
　或日急に小山さんは、これから他家へ引越すと言ひ出した。餘り突然なので止めても見たが、何うしても移るといふので、强つて止めもしなかつた。
　小山さんが越して了つてから母と二人て、何うして越したのだらうと話し合てゐると、妹が傍から、
「小山さんは厭な人よ、今朝私がお勝手へ行くとね、小山さんが家の香の物を蓋物へ入れてるのよ、それだ

からね、私が、其香の物は臭くつて駄目よ、ていつたら、恐い顔して私を睨んだのよ―とさも手柄らしく話すので、小山さんの引越した理由は解つた。

「いゝ年をしてほんとに呆れた人だよ」と母も笑つた。母ももう懲々したといふので、それつきり二階は空いてる。そして其事を髪結のお初さんに話すと、お初さんは

「さう悪い人ばかりはゐませんから、今度は私が温和しい正直な人を御世話致しませう」と言つた。が家ではもう貸すまいと思つてゐる。

生垣

はな

華奢て、美しい嘉子が、廿三といふ、本當の歳を云ふ人は有るまい。

今日も嘉子は、初夏の片側町を急いて居る。

――傑男さん、良い名だ。身長の高い、白い帯の短かく下つた後姿――。と、昨夜の男の風采を思ひ乍ら歩いた。

軈て、嘉子は、通りを左へ、細い路を透して見た。

大きい溝の、落水の凄い音、高い木立の疎な、其れても邸町の杉垣を透して、淡い街燈の光が射す。

其處に、セルの單物を着た、傑男が見えた。

女は小走りに近づいて、並んで立つ。

女が笑顔を爲ると、男も笑つて見せた。

「好く出られましたね。」

「は。都合して。」

又莞爾して、

「昨夜、貴女は、あれから考へると言つたでせう、考へましたか？」

「えゝ。」

「何様な事を？」

嘉子は笑ひ乍ら、

「貴方が、私より、弟さんだと云ふ事を。」

男は少し驚いた。

「え？左様か。未だ其様な事、分りやしないぢやありませんか。」

「否。初めから私は、左様思ひました。」

男は幽に、吐息して、

「年下だから、愛されないの？」

「…………。」

「一體、僕には、貴女が分らないよ。飾らないで言つて下さい。嫌ひなら、嫌ひだつて。」

嘉子は、考へて、

「貴方は、眞面目？」

傑男は、怒つた顏をして、

「眞面目ですとも！眞面目で無くつて、此樣な事が言へますか。一生懸命言つてる事を、はぐらかされる位、腹の立つ事は無い。だから……だから言つたでせう、僕は貴女の爲には、多年の宿望も捨てゝ良い覺悟ですつて。男が……、學生が、自分の大望を捨てゝもと言ふのは、容易じや無いのですよ。」

傑男は、力を入れて若い事を言ふ、

「貴女は、知己を得て、嬉しいと思はない人か？冷血なのか？僕が若し知己を得たら、泣いて喜ぶ。が、なか〳〵得られるものぢやないでせう。」

嘉子は、侮辱された樣な氣がした。憤として、男の顏を見すゑた。

「其れとも、僕の言ふ事を、本氣に聞いて居なかつたのぢや無いか。ねえ、左樣ですか？」

「御免なさい、私、如何しても、如何仰有つても…………」

「僕が嫌ひですか？」聲が反跳んだ。

「いゝえ！」強く首を振つて、

「私は嘘は申しません。貴方は私、大好き」やさしく、

「けれども、私は最早……。」口籠つて、つら相に吐息して、

「彼樣に高かつた御望みも、私の爲に捨てゝ下さる、其樣に思つて下さるのは嬉しいのですけどね……。傑男さん。私は其れより貴方がもういつそ、私の事を忘れておしまひなすつた樣に、御勉強して頂きたいと思ひますの。」と言ひ乍らも嘉子は、其れが何となく、暗い陰に爲つて、自分を急に淋しい者にしてしまふ樣な感じがした。

「又貴女は、其樣な事を言ふ。」

「だつて……、貴方は二人の交りが永久に續けられるものとお思ひになつて？」

「何故？」

「私は、唯一人の子ですもの。」

「其れで？。」

「あの……、結婚の出來ないものが……。」
「出來ない事は無いでせう。」
「其れでも……、出來ない事情が有ります。」
「左樣ですか、貴女は僕と結婚が出來ない。」
嘉子は愈々言ひづらくなつて、何とも云へない。
「如何して、え、嘉子さん？」
嘉子は、默つて、男の胸に、ヒシと懷きついて、もう泣いて居る。
傑男は、驚いた。瞬間に險しい顏になつて、
「アッ。貴女は、もう一度、マレージしたね。」
刹那に二人の顏が、闇にもキッと合つて、セイ／＼と肩で息して居ると思ふと、嘉子が幽かに、聲をたてて泣き出した。そして強く男の腕を振つて、
「あんまりです、あんまりですわ、私は未だ……可哀相に……」。ヒイッと泣いて、なか／＼止まなかつた。
「左樣ぢや無い？左樣で無かつたら僕が惡かつた。僕はね、唯、何となく時々、左樣思つたから……。」と云ひ譯して、
「其樣なら、何故出來ないの？」
「…………。」
「ねえ、嘉子さん。僕は、如何したら良いのか分らない。唯もう、今は、貴女が僕を愛したのか、愛さなかつたのか、其れ丈でも知りたい。貴女は其れを表はして呉れないぢや有りませんか。」
「如何して表はして宜いのか……。」
「如何ても宜いでせう、貴女が思つた樣に。」と言ひ乍ら、自分にも如何して、如何表はして貰つたら、滿足なのか分らなかつた。
軈て、嘉子は、決然として、男の顏を仰いだ。
「私が惡かつた。貴方に御氣を揉ませて、私、何處迄も自分の秘密を守らうとしたのですよ。つらい、もうつらくつて私、貴方になら何でも言つてしまいます。」
「秘密？」ギョッとして、
「聞きませう！仰有い！」
傑男は意氣荒く、身を反した。胸の鼓動は自分の耳にも響く。
嘉子は低頭れて、思ひ入つた樣に、
「私はねえ、」と自分の胸を懷いて、
「もう一度、熱烈な戀を經て來ました。」
一息に言つてしまつて、ホッとした。
傑男は、烈しく胸をついたのである。一時にカッと

なつて、赤いものが、眼の前で破裂して、火花が散つたと思つた。心臓の血は、波の音をたてゝ、節々へも打當る樣に流れた。嘉子は最早騷がない、

「貴方は嘸、私が之れ迄秘して居たのを御怨みてせう。堪忍して下さいますか……」ッと男の顔を見て、

「私もつらかつた。實は私、最初貴方が私を思つて下さるのは、惡戯の樣に思ひました。堪忍して下さい。其れが、其の内に、私はもう貴方が自然になつかしい樣な……妹弟だつたら、と云ふ樣な氣になつて、……自分の事もつひ話せなくなつたんてすの。貴方を詐つたのぢや無いと、私は、信じて居りますよ。其れても、貴方が愛して下さるのが、何となく、つらかつたのてす。」

傑男は無理に、心を靜かに裝ほつて、

「其して今も、其れが……貴女がたの……」がたのに力を入れて、

「……戀が繼續されて居るのですか？」

「否、其れはもう……。」

「破れたのてすか？」

「え！」

「如何して？」

「其れは申上げられません。」

「もう、言つてしまつて下さい。」

「どうぞ、言はせないで下さいまし。」

「貴女から破つたのか？」

「私からと云ふのぢやございませんけど……私の心にすまない事が有りまして……。」

「其れぢやア、矢張り貴女から破つたんてせう。貴女は實際、冷血だねえ。冷やかに女を後眼にかけた。芳子は口惜しくなつた。男を見かへして、

「否。誤解です。……一旦、契つた女をよそにして、不潔た行をする人なんぞは……。」嘉子は口を結んだ。傑男は、足下で鳴る水勢に、目茶々々に爲つた頭が、こんがらがつて、渦を卷いて、持つて行かれるかと、フラ〳〵となつた。

暫くして傑男は、振へながら、

「何故、最初から、斷はつて呉れなかつたんてす。僕は、好い樣に爲れた樣な氣がします。こんな者ても、男が下つた。全然心の空になつた人に戀して、苦んで……」漸く氣が荒くなつて、

「僕は馬鹿だね、ねえ、嘉子さん。愛して下さるかの……表はして下さらないから、どうのつて。フヽン。」

「堪忍して頂戴。傑男さん。」
「謝まる事なんか有りませんさ。」其れでも怒つた口振て有る。
「否、謝まらなければなりませんわ。彼様にお好きだつた御本も、私の爲に此の頃は、全然、捨てゝいらつしやるつて仰有つたんてすもの：：：あゝ私、如何しませう。堪忍して、ねえ。」
「其様な事、言ふ必要が有りますか。」
「私の心が少しでも安まるのてすから。」
「口て許すと言はれたら、其れて貴女は良いんてすか。」



（六等）夏の朝　紀伊かづ子

嘉子はもう何とも言へなかつた。泣く様な顔をして、
「私のつらい事も少しは察して頂戴、ねえ、傑男さん。私は貴方を心から思つてるんてすよ。私が貴方を思ふのはふわ〳〵した戀じやないと思ひます。貴方が私を思ひ續けに思つてゝ下さるよりは、學校でもちやんといらつして、御勉强なされば、何様に嬉しいかと思つた位でした。辨解の様てすけど、私は貴方に冒した罪は無い様にも思ひます。ねえ、傑男さん。貴方明日から又元の理想の高い傑男さんに爲つて下すつた

ら、貴方が、私を、何樣に怒つてらしても、私、何とも思ひますまい……。傑男さん。貴方、怒つていらつしやるの？え？怒つてらしても宜うございますがね、明日から、學校へいらつしやいよ、ね。」

傑男は、嫌な顏をした、

「貴女は、僕を、いつでも子供扱ひにしますね。僕は其れては嫌だ……。否、最早嫌も糞もなかつたんだ。其樣な事は、如何でも宜い」

「私の言ふ事は、もうきかないと仰有るの？」

男は怨めし相な、女の顏をつく〴〵と見て、

「學校へいつて何になります。こんな人間が。糞ッ。」

垣の、青葉を捲つて投げ付けた。

二人は默して、おもひ〳〵の事を思ふ、高ぶつた心と心とが暗闘してるのだ。凡、三十分も、眼を合せては、吐息して、立ちつくした。

と。不意と二人の間を目映い光線が走つた。ビクリッとして振り向くと、角燈の光が搖れ乍ら近づいて來る。

二人は思はず手をとつて、當惑の眼を合せた。

角燈の光は益々自分達の方へ迫つて來る。

二人は胸を、どき〳〵爲せ乍ら、動かない、動いたら卑怯な樣な氣がした。

角燈が一間程先き迄來た。其れが郵便配夫と知れた。

二人は密かに胸を撫でたのである。

四邊は又寂寞にかへつた。

二人は手を握つた儘、離さないで居る。

「嘉子さん。僕は腹が立つ。腹が立つけど、貴女の傍に居て、惡いことはない。」

嘉子は涙ぐんで、

「許して……。傑男さん。」

「謝まる事は無い。」

「矢張り、謝まらせて下さらないの？」

「僕の、自業自得だ。」

「…………。」

男は思ひ切つた樣に、

「しかし、最早おそい。別れませう。」

「そ！……其れては……。」

嘉子は急に家の事が、胸一ぱいに心配になつた。もぢ〳〵して居たが、思ひ切つて悄々と黑い路を別れて行く。

三間程、經つた時……

「嘉子さん！。」傑男があわてゝ呼ぶ。

「え？」

「僕はねえ……。もう昨後日頃、故國へ歸ります。」
「えゝ？お故國へ……。」驅け寄つて、
「まあ！貴方は……。」
二人は抱き合つた。寂寞を破つて、すゝり泣きの聲が止まなかつた。

暴風雨の朝

朝倉さよ子

一

一夜暴れ狂ふた暴風雨も、天明近く治まつて、血のやうな朝燒が東の空を染めた。夜通し眠れなかつた人々が、明けるのを待つて出て來るので、街道筋は朝早くから人聲が絶えない。濱はカランとして、海鳴の音は未だ止まぬ。

中島先生の家では、朝細君が裏の畑中の井戸へ水汲みに行くと、南瓜棚が崩れて、井戸は木の葉が一杯だ表へ廻つて見ると、圍の棒杭が折れて、往來へ倒れてゐる。

急いで家へ入つて、
「お父さん。お父さん。」
と呼んで見たが、返事が無いので、上つて蚊帳の吊手を外して、
「あなた起きて下さいよ。圍がもげて、路の方へ倒れてゐますて、私が起して見ましたが、とてもわたしの手頃には行きません。」
「今起きる。そんなに風がえらかつたのか。」
「まあ起きて御覧なさい。早く起さぬと、今に車が通ると邪魔になりますよ。それにね、かやの木が今にも轉倒びさうになつてゐますから、何か支へ柱でもやつて下さい。」
「さうか、濱の方も餘程やられたな。」
「へえ、護岸が崩れて了つたとか云つてゐました。さあ、亘さん、亘さんもお起きなさいよ。濱がどうて賑かだから、顏を洗つて見ておいてなさい。」
先生は、顏を洗ふ前に、鳥渡裏口の障子を明けて見たが、思つたより彼邊の光景が、荒んでゐるので、楊子も使はず、急いで顏を洗つて、唐鍬を持つて表へ出ながら、
「亘お前もおいて。」
三人して、えんやら〳〵圍を起してゐると、前の駐

在所のガラス戸が開いて、何時も眠たいやうな顔をした細君が、子供に乳をふくませ乍ら現はれた。

「お早う御座います。」

と、何時になく、先方から挨拶して、氣のない顔にニコ〳〵する。

「大降りで御座いましたね。」

と、先生の細君が云ふ。

「あの雷さんは奈何でせう。私は蚊帳の中に居たんですが、どうにも、斯うにも胴震ひがして堪らないんです。加之、この子が私に似て、それは雷嫌ひで、あれが鳴り出すと、確乎わたしに抱きついて、火のつくやうに泣くんてすから、ほんとに怎うなる事かと思ひました。」

「私は又、地震は恐いのてすが、雷様はそれほどには思ひません。」

「まあ、左様てすか。私は、もう稲光りを見たゞけて頭がぐら〳〵するんてすよ。それに宅は窓がガラスてすから、眞青に照り込んて、庭木がすつかり見えるんてす。それが堪らなく厭なんてす。目をしつかと瞑つてゐても、光る度に矢張り見えるやうな氣がしましてね。」

と、如何にも恐さうに言つたが、内て主人が呼んだので、

「はい。」

と返事をして入つて行く。

「あの人、餘程雷様が恐いと見える。」

と、先生の細君は笑つた。

「學校を見て來る。」

と、先生は、唐鍬を細君に渡して、青い木の葉のちらかつた坂を下りて行く。坂の下の橋の下では、がさ〳〵と云ふ水の音だ。

二

先生の家には、裁縫敎師の星見さんが同居して居る。夫は海軍兵曹て、臨月の大きな腹をしてゐた。

先生が學校を見て歸つて來ると、星見さんは、今起きたところて、太つた青い顔をして、雨戸を繰つて居たが、如何にも憶劫さうだ。

「怎うてすか、御氣分は。」

と、先生が聲をかけた。

「今朝は大分快方ふ御座います。濱の方はどんなにかえらいてせうね。私は雷様だけは知つて居ましたが後はぐつすり寝込んて、何も存じませんてした。

と、呑氣な事を云つてゐる。

恰度、學務委員て、家主のお爺さんが、裏口から、聲をかけて入つて來たので、先生は、表に立つた儘挨拶をする。

「どうかね、別に破れたやうな所はありませんか。」

「圍が倒れて、今起したとこてす。外には別にありません。」

「それはよかつた。」

「今學校を見て來ましたが、職員室の瓦が三枚許落ちてゐました。それから、尋常の方の廊下へ、大變な水が溜つてゐますが、あれをどうか一つ汲み出して了ひたいてすが。」

「學校は僕も見て來たが、汲み出すと云つたところて仕方がないて、東の方の敷居下を堀つて、それから流し出すやうに、と思つて、人足を頼んておいたがね。」

「さうてすか。それはどうも御世話樣てした。」

「君の家の井戸も一變更へにや要かんだが、今はとても忙がしくて仕方がないてね。」

「井水は奇麗てすからいゝてすよ。何へかお出かけてすか。」

「府相に課長がをるて、見舞に行つて來うと思つてね。」

「府相邊は水害がえらいてせう。」

「なんと云つても地味が低いからね。町の方は大抵浸水したどらう。」

「さうてせう。當村の方はどんな風てすか、役場も報告をしなければなりませんから、中々厄介てすね。」

「大した事は無さゝうだ。風とは云つても、海岸通りだけて、相樂の方は高見て、山だからね。」

と云つて、お爺さんは端折をして、澁傘を抱へて出て行く。

三

見廻りから歸つて來た役場員の談話に依ると、浸水家屋が七軒、護岸が崩れ、破船が六、田畑が海岸通り三町ほど、砂が冠つて荒れて了つたと云ふ。

何しろ、えらかつたには違ひない。坂の上から見たゞけても、製糸工場の烟突が折れ、崖下の店の庇が飛び、お寺の杉が倒れてをる。

濱へ通ふ路は、行つたり、來たりする人が絶えない。日曜て、製糸が休みなので、赤い湯卷をした群れが、番傘を傾けて行くのも見える。海には風が習々と吹き渡り、空は未だ曇つて、ともすれば雨を降らしさうだ。

先生が座敷て新聞を讀んで居ると、晝近く、亘さんが濱から、籠を携げて歸つて來た。籠の中には、潮の香のする海藻に交つて、波に洗はれて奇麗になつた芋が入つて居た。

「お母さん。お母さん。」

と、亘さんは、元氣な聲て呼んで、

「芋を蒸して下さい。」

と臺所へ入つて行く。

「まあ澤山、濱へ流れて來たのかへ。」

と、細君は、亘さんの手から、水々した籠を受け取て傾げてみる。

「藻の中にからまつて、いつくらてもある。僕はもう一度行つて來るだて、早く明けて下さい。」

と云つたが、

「お父さん。お父さん、海から木が流れて來てね。一本拾ふと、三錢づゝ與れるげなて、僕も行つて拾つてもいゝね。」

「お前なんかて拾へるものか。こんな日に海なんかへ入りや、流されて死んて了ふ。」

「死ぬもんか、みんな入つてをるもの、敏さんだつて拾つてらあ。」

と亘さんはいきまく。

「亘さん、そんな海なんかへ入つちやいけませんよ。今に雨が降つて來ますから、濱へ行くのはもうお止しなさい。雨に濡れて、風邪でも引くと、學校へも行けんやうになつて終ひますよ。そのかはり、お母さんが芋を蒸して上げますから。」

と細君が云ふと、亘さんは、

「早く蒸して下さい。今蒸して下さい。」

と、無理を云つて、せがんて見たが、その内に雨がザー〳〵降つて來たので、濱行きは斷念して、お母さんと並んて竈の前に坐る。

「それお見、行かんてよかつたとを。こんなに大降りになつて來た。」

と細君が云つた。

「敏さん達は乾度濡れたね。濡れると風邪を引くね、お母さん。」

と、亘さんは、火箸をチヤラ〳〵云はせる。

「あゝ引くとも、そして頭が痛くなつて、學校へも行けなくなつて了ふ。」

「僕行かんてよかつた。」

と、如何にも行かんてよかつたと思ふやうな顏をす

る。釜はもう水が煮立つて、白い湯氣が蓋の間からしゆう／＼と音をたてゝゐる。

四

間もなく、蒸みて、星見さんの所へも大きなのが三つほど持つて行かれる。

「御馳走さま、まあ珍らしい。」

と星見さんが座敷で云た。

「新物てすから、七十五日壽命が延びますよ。」

と細君が云つたので、星見さんは、「ほ、、、、」と笑つた。

味がない、味がないと云ひ乍ら、先生は誰れより澤山食べた。亘さんは、直ぐ飽きて了つて、お飯を食べにかゝる。先生は晝飯は食べたくはないと云つて、烟草を喫ひ乍ら、

「新居へ見舞をやらにやならまい。」

と云つた。新居は細君の在所である。

「新居はえらいのですか。新聞に出てゐますか。」



（七等）水のほとり　陸奥　井上よし子

「遠州は總てえらいやうだ。」
「ては次手にね、鷲津の伯母さんの所へも書いて下さい。先達の梨の御禮を云つて。」
「伯母さんと云やあ、健次は未だ家へは歸らんのかへ。」
「今じや、あの女とは別れてね九州の方に居るとか云ひました。」
「何か商賣でもして居るのか。」
「そんな風ではないやうてすから、矢張ぶら〳〵してをるてせう。」
「彼奴め仕方のない奴だ。」
と、先生は座敷へ行く。
沖は雨で煙つて居る。
夕暮れ近く、星見さんが急に容態が惡くなつて、家へ歸ると云ふので、細君は急いで俥を雇つて來た。
「餘り心地が惡いやうなら、却つて此所に居た方がいいてせう。」
と先生が云ふと、
「どうせ醫者へ參りますから、次手に歸ります。それから明日は學校は欠席いたしますて、どうぞお頼み申します。」
と、星見さんが幌の中で云つた。
「お大事になさいまし。」
と細君が送つて出る。その時はもう雨も歇んで居た。ガラ〳〵と云ふ音が、坂を下つて、見えなくなつてからも霎時聞えた。

同居

しげ子

午後の三時頃であつた。尾本の方の細君は風の氣味で今日は寢てゐたのであつたが、いつそ髮でも解して見たら爽然するかと思つて起て來たが、依然頭痛がして氣分が惡い。お腹の加減も少し怪しい。時節柄たゞの風邪ではないかも知れないなどゝ、何となく不安な心持で、一番明るい客座敷へ無意識に來てぼんやり垣根を眺んでゐると、倉島の方の娘がつか〳〵入つて來た。そして其處に坐つてゐる奥さんの後姿を見て一寸驚いた。此娘は利かぬ氣の母親に育てられて中々人馴れてゐるから廿才以上の人の様な智識を持つてゐる。

「あの、毎度すみませんが何卒お膳を少し拜借。」

奥さんは弛んだ官能をぐいと突とばされた樣にどきどきッとして機械的に振向た。

娘は黑く肥つた顏に深い皺を入らして今の詞をくり返した。少し舌ッ足らずて、甘つたれた樣な物云をする娘である。

承諾を得るとさつさと立ていつて、縁側の隅の戸袋を兼た――ランプでも入つてゐさうな開きを明て、入用の品だけをさつさと持つて行く。行しなに、

「お客樣ですか、」と聲をかけると、

「えッ」、と深い會釋をして、噯より先に姿を消して了つた。

尾本の奥さんは大儀さうに茶の間へいつて髮を卷直し、顏を洗ひに臺所へ行くと倉島の細君が、車力の樣に汗みどろになつて七輪を煽いでゐる。竈にも薪がどん〳〵燃てゐる。醬油の煮たつ匂ひが炭酸瓦斯に混じて臺所はむんむとする。

「おや、如何です、おたづねも致しませんて、」と袂の先てめちやくちやに汗を拭てゐる。

此細君は娘そつくり色が黑くて肥つてゐるが、元氣のいゝ故か何となく若々しい。御亭主は餘程前に大連へ往つたきり、手紙と爲替だけ時々よこす。尾本の家へは一昨年――今の奥さんの來るずつと前から同居してゐる。玄關の脇から短い廊下をつけて、本家とは大分木口の違ふ古家に母子二人――もう一人細君のお母さんが有たが、中風て遂々此間死去た――「お女中代りに」といふ條件の下に無料て住てゐる。

尾本の奥さんは、だらしのない寢衣の裾を膝の間に挾み〳〵金盥に水を取て、臺所は餘り散らかつてゐるので、坐敷の縁側へと持つて行く。

「どうもすみません、おうるさいでしやうねえ。」

「いゝえ、」と云捨て來る道て、ふと思ひ出した。

「明日はもう十日祭なんてすよ、嫌になつちまひますねえ、」と昨夜倉島のが入の字を寄せて云つた時、餘り其氣兼が氣の毒に思はれて、

「ほんとにお大抵ぢやありませんねえ、何か私の方てお間に合ふ品があつたら御遠慮なくお使ひなさい」、と云つたのを、今日は身體の惡いのに氣を取られてすつかり忘れてゐたのであつた。

「今にまたかまがはらが始まるのか、」と思ふと同時に、ふいと、「熱がある」といふ自覺が欝としさうな顏

に浮上る。
倉島の方の八疊に、透谷の羽織や背廣や黒繻子の帶の並んだ頃、尾本の主人は保險會社より歸つて來た。頭の少し禿た、格幅のいゝ人て、此奥さんとは大分年が違つてゐる。
夕飯の時には倉島の娘が冬物じみた銘仙の單物に着かへて支那繻子の帶を締め、ちやんと足袋を穿て口取や甘煮や、いろ〳〵お母さんの手料理を、小さなチヤブ臺の上に所せまく押並べた。
「あゝすみませんねえ此方へ迄、」と奥さんは娘の服裝をぢろ〳〵見てゐる。
「もう十日になるかなあ、早いもんだねえ、えお繁ちやん、」と主人が云ふと娘は、
「えゝ……、」と何か云ひかけたが、一寸奥さんの顏を見て默つてにこ〳〵してゐる。
「お父さんから、あれから又手紙が來たかね、」
「えゝ、」ともう中腰になつて、
「お構ひ申ません、よろしく召上れ」、と丁寧にお辭儀をして去つて了ふ。
奥さんはお粥の熱いのを一膳喰たので大變汗が出て來た。身體をもだ〳〵しながら溜息ばかり吐てゐたが、唐突に、
「ねえ、どうしてあんなに沈着てゐるんてしやう、あの娘。」
主人は甘煮の堅い鳥を一生懸命に嚙んてゐる。
奥さんは懷へ手を入れてぢつと考へてゐたが、
「私大變熱があるんてすの。」
「さうか？」と遂々諦めた樣に鳥を茶碗の蓋へ吐出して、
「冷るといけないよ、氣分が惡いだらう。」
「えゝ、それに倉島がごた〳〵してゐるんてしやう、ほんとに嫌になつちまふ。神道つて何だか嫌なもんてすねえ。」
「なぜ、」
「なぜつて――、いやてすわ。あの奥さんの御亭主は何をしてゐるんです？」
「何をしてゐるかなあ。先に俺が○○組に關係してゐた時分に、先生その――一寸した事務員だつたのさ。おとなしい人、」と箸を擱くと直ぐ手を廣げて頭の後に組合せながらごろりと仰向に寢ころんて了ふ。
「そりや實際おとなしいねえ、かなり學問もあるし、何ても生れがいゝんだねえ、彥根の士族だらう、人品

も中々立派だよ。」
「それてどうしてあんな奥さんを持つたんてしやう、養子なんですか。」
「さうぢやなからう。」
「だつて――、お繁ちやんは其人の子ぢやないんてしやう、此間死だおばあさんだつて奥さんの方のお母さんなんてしやう。」
「うむ……。」
生返事をしてゐるので、奥さんはつまらなさうに顔を撫ては溜息を吐く。
「あツあ嫌になつちまふ。」
「どうして。――寝てゐたらいゝだらう。」
「えゝ、」と奥さんは身體を反らして天井を見ながら、
「もうぢきお盆が來る。」
「お盆が來たつて神道なら平氣なもんだ。」
奥さんは頻に溜息を吐きながら食卓の上の汚れ物を、どうやらかうやら臺所へ運び盡した。
「どうだい倉島は、」
「中々賑かですよ、てもう濟んだんてしやう、いろんな儀式は。」
「さうか、俺も一つ後て何して來やう。どうだ羽織ても着ていかなくつちや惡いか。」
「いゝてしやう、」と奥さんはチャブ臺の上に突伏してゐる。

令孃

喜久

一

「御客様なの」幸子は客間の方をみて小な聲てきく、
「ハ、アノ、近藤様とか」と小間使の菊は心配さうに答へた、
「近藤さん？」幸子はみる〳〵不安の様子をして「お一方？」
「イエ御あとからまだ御見えになるとか仰せて御座いました」
「ツウ？」と一段聲を低く「御母様には何卒知れない様にしておいて頂戴よ、竹やにもそういつて置いて、いゝ事？」
「よろしうございます」
幸子はことし十七に成た、姉の隆子は十九、孰れ劣

らぬ花あやめ、三好の姉妹といへば評判の令嬢である。
客間では樂しさうな笑聲が聞える、幸子はホッと嘆息して姉樣は何故、あんな大膽な事をなさるのだらう、母樣に知れないうちに御止めになる樣にと氣をもんで居るのだけれど、もう世間では何とか云つて居るらしいし、」

幸子は力なく部屋の机によりかゝつて居たが、また氣をとりなほして、袴をぬいで、叮嚀にたゝんで、羽織をきかへて、英語の本を開いて今日の復習にかゝつた。

「幸ちやん歸つてらして？ いらつしやいよ、御客樣よ、ホヽヽッ」とあとの笑聲は客と顔見合せてわらひだしたらう、

だまつて居るわけにもゆかず。

「姉樣、私少しあしたの支度しなければならないのよ、も少しゝたら上つてよ」といふと

「さう?!」と少し不興氣な聲。

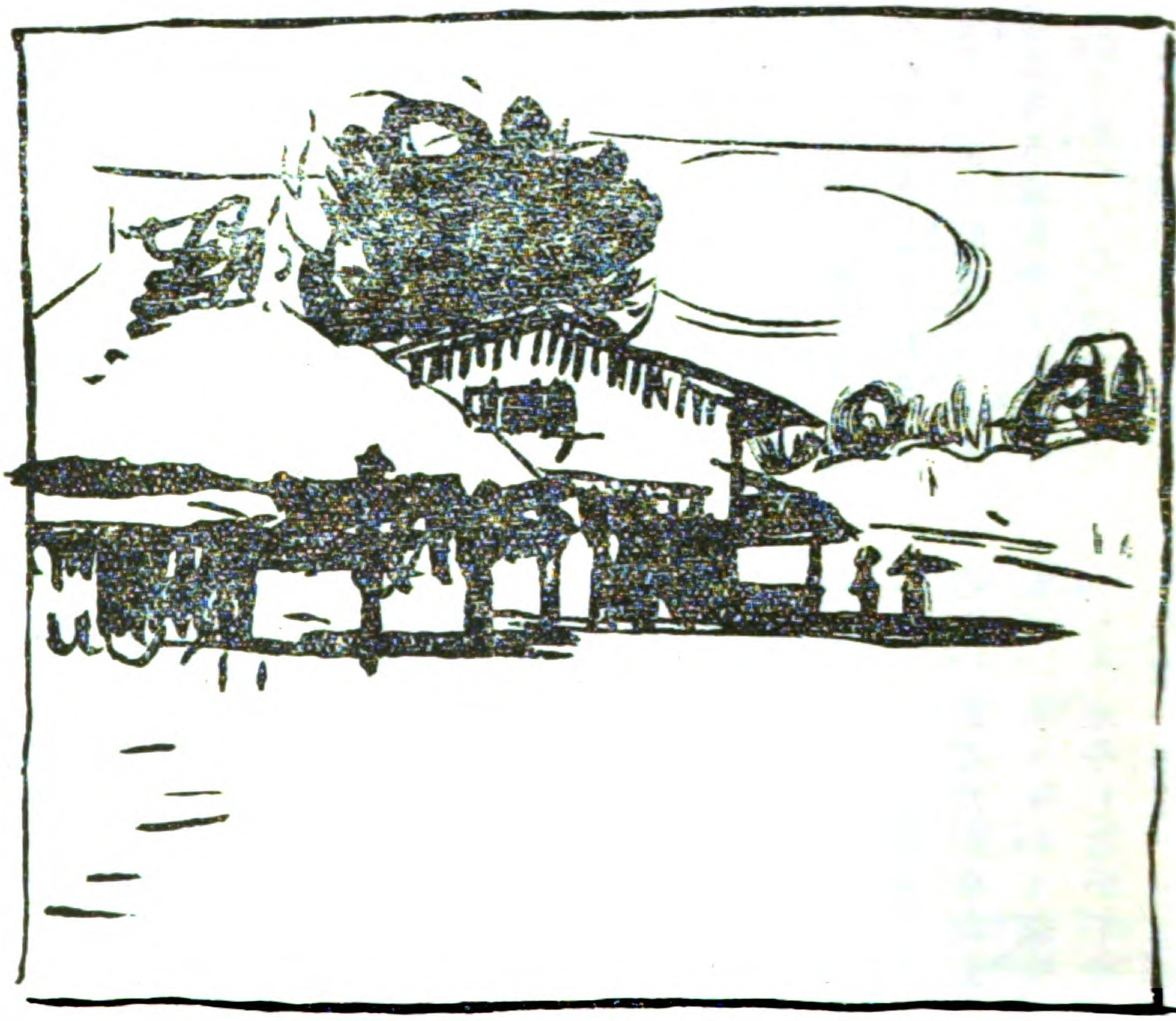
「そんなら早くしていらつしやいよ」位云ふかと思つて幸子は待つたけれど、別に何とも言はず、また何か一生懸命に話して居る。

英語を調べながらも幸子は奥の事が氣になつて、ともすれば一寸樣子を聞かうとする、暫時經つとまた一人青年の聲はふえた樣だ「御風呂は如何遊ばします」と聞きにきた菊に「どなた？」ときくと「あの御方が近藤樣の御從弟樣ださうで、淸さんと仰しやつていらつしやいました」といふ。

御夕飯すんでから姉樣と御一所にするから、そのつもりにしておいて頂戴よ」と菊をあつちにやつて、幸子はひとり默想へて居た、兄樣だつてこれを御知りになつたら、まあ如何遊ばすだらう。

「隆はおとなし過ぎるから人に馬鹿にされる、すくなくとも男子の玩弄的に出來て居るんだからね」と此春門司からいらしやつた時に仰しやつた、あんまりな事を仰しやると腹が立つたけれど、兄樣にはこうなる傾向がちやんとわかつてゐらつしやつたのだらう、多勢の人から投げ込れるいやらしい、文を腹がたゝないのだらうか、「幸ちやん、こんな事書いてよこしてよ、馬鹿だわね、」といつて御みせなさる、「御よしあそばせよ、こんなもの封きらないで捨てるなり返すなりなさるものよ」つていふと「見たつてかまやしない事よ」つて笑つてらつしやる、暢氣ならのんきでいゝけれど、もう十九にも御なりなすつて、いづれ何處かに嫁らつし

やらなければならないのだのに、私ひとり心配しても、ほんとに無効、御病身なお母様の御耳に入ればどんなにか御心配なすつて、また御加減が惡くなると大變だから、一生懸命にかくさなければならないし、姉様にはいくら申上げたつて、私のいふ事なんかまるで取上げては下さらないし、近藤さんなんて角田さんの御兄様の御友達だつていふので御近づきに御なりになつたのださうだけれど、あんな女みたいな人、御話して居ても氣持の惡さうなものを、三日にあげず電話かけたり、時々おゝして訪ねて來たり、お母様が葉山に行つてらしやるから、人は誰でも注目して居るのに御留居をいゝ事にして居らつしやる姉様があんまりて、



（八等）　村はづれ　陸奥　釜澤ひて子

ふと座敷から、

「幸ちやん、いらつしやいよ、四人てなくつちやつまらない事よ、家族合せして居るのだから。と姉の聲。

「ハイ」といつて樣子を伺つて居ると隆子が出てきて、

「幸ちやん、來て頂戴、後生だから、私一人ぢや困るぢやないの、よ、幸ちやん、少しは私の事も思つて下すつたつて……」うるみ聲になる。

「姉様私いつ、あなたの御爲を思はなかつて？、御爲を思つて居るからこそ」といひかけると、

「ホラ、もうそんな事をいつて私をやりこめるのね、

まあ、今日だけ何もいはないでつきあつて頂戴よ、もうすぐ歸るから、さ、幸ちやんに居てもらはないと具合が惡いから、さ早く」と手を引ぱる、

「待つて頂戴、今羽織をとりかへるから」

「それでもいゝのに」と隆子は立つて見て居た。

二

「幸ちやん昨日はほんとに有り難かつてよ、」と隆子は針の手を止めてこういつた。

「何仰しやるのよ姉樣もう今朝から何度だかしれやしないわ」

「何度でも御禮いひ度くなるのですもの」と笑つて、

「近藤さんつて恐い人ね、私あんな恐い人とはしらなかつたのよ」

「私はね、初めからほんとにいやな人だと思つて居ましたの、昨日初めはほんとに家族合せの人數が足りないからだと思つて御座敷に行たのよ、そしたらねえ！」

「はじめに幸ちやんよんだてせう、あの時は一寸よんてみたのよ、だけど二度目の時はもう幸ちやんが來て下さらなかつたら、如何しやうかと思つたわ、淸君が僕の切なる熱情は知つて居ます、なんて淸さんと二人づれて言はれた時には、私もう魂が身にそはないつてあの事だと思つてよ、」

「そしてどんな事いつて、？」

「私よく覺えて居ないのよ、だけどもね、私は一生あなたの友であり度いつてそしてね、こんなものでも兄と思つて下されば一生の光榮でとか何とかいつてよ、青春のページをかざる花だとか何とか、變な事を長たらしく云つてたわ」

「まあ驚いた、私の方にはちつとも聞えなかつたのよ」

「小い聲で云つたのですもの、」

「そして姉樣何といつて御やりになつたの？」

「近藤さん今日に限つてそんな事仰しやると何だか氣味がわるいからよして頂戴つて云つたのよ、そしたらこの切なる思ひを一笑に附し去るのは無情だつて………」氣味惡さうに笑つた、

「そして手を？」と恐ろしさうに幸子はきいた。

「えゝ、だからあなたのところに行つて來てもらつたのよ、あなたが來たもんで體が惡いんであんなにすまして、ホヽヽいゝ氣味だつたわ」

「もう來やしないてせうね、」

「來ない事よ」とさも斷定した樣、でも幸子はやつぱり心配して居た。

「ほんとに困る樣な事が起りやしないてせうか、あの人が腹立まぎれに何するか知れない事よ」と大人せた口振。

「大丈夫かねのわきざし、先の原田さんみたいなもんだわ。」

「原田さんつて、園子さんの御兄樣？」

「エヽ、あなたにまだ話さなかつて？話したつもりだつたのよ、あら、さうだつてねえ」と首をかたむける

「原田さんと何か有つたの、姉樣、私其事はちつとも知らないのよ、話して頂戴な、可いのでせう」

「え、えゝ話すのは譯ないけれども、つまらない事よ、私面倒くさくなつたから、ほかの話にして頂戴よ」

何氣なく云つた隆子の顏には曇つた樣子があらはれた、すぐに見てとつた幸子は强いてとはいはず、たゞ胸にたゝんで、

「お姉樣餘程面倒くさがりに御なりになつたわ」

ていつて笑つた、隆子も一所に笑つた。

「門司から御たよりがない事ね」幸子は口を切つた、私御手紙あげ樣と思つて居るのだけれどゝ

「書きませうか、是から、」

「可い事よ今日でなくつたつても」と隆子。

それから夜に幸子は明日の歴史を調べて餘念もなつた、九時頃すつかり片附けて隆子の部屋――隣の――を覗いて「まだ御寢みにならないこと？」と云ふと隆子は書きさしの洋紙の上に肱をついて

「幸ちやん、先に御寢なさいな」ハ、と氣づいて、

幸子は何となく物悲しい氣がして、

「えゝ」と返事はしたが悄然座つて居た。

隆子も無言で電氣の笠を眺て居た、

夜廻りの拍子木がカチ〳〵と響く、

隆子はぬすむ樣に幸子の方を見た、そして

「寢やうかしら」と聞える樣に獨語した。

木偶

秋山欣子

「お木偶さん、お木偶さん、妙な名ねえ、いくらあだなだつても、と一時はムツと思つたけれど、成程甘くいつてある、自分ですら解し難い性格をよくもてう諷したもの、と今では全く感心しちまつた、けども、月代玲子の名をきいて第三者が想像すれば、木偶の又名

は少々振つた對照でせうねえ、まあ何しても木偶とはよかつた、これで以ても現代の女性の思想、否觀察眼かもしれない——の單純さが思はれるわねえ、座に」淋しさうな頰に強い笑を浮べて凝と私を見詰る、避けるともなしに青白い電燈に目をやつて私はうなづいてみせた。

「併、今日の送別會の一件はねえ下枝樣、實のところ非常に痛快だつたのねえ、あゝ胸が空いた、名劒でスッと刺れたやうに氣持がよかつた、つまり一時的慰安に過ぎぬけれど、」兩手を胸に確重ねてハヽと冷笑する默つて林檎を剝いて出すと、その儘一口にたべて、「これもやつぱし新代の空氣に生育した果實だ、本然の味を失つてる、」いふなり、苦い顏して吐き出して仕舞た。忌憚なく大膽に批評するのが特徴なので、格別氣にも爲なかつたが、さればつて御機嫌とるでもなく、まあ壁を隔てに喧嘩をみる格で——其癖互に深刻に性格は解し合つて居ながら——果物の一片を含んだまんま、半眼に何物か暗示するげな灯をにらんだなり、過去の山路を振り返つた。青森行の最終列車上から。

浮き出すやうなヴオロンの弦聲や、轉がる樣なピアノの高音やが、若葉の匂仄めく天空に、微妙な合奏樂しつゝ溶け行いて、何とはなしに、暮くれがたの哀愁がしみ／＼と胸によばれる五月の日である。

我校の卒業生送別會は、例によつて例の如く開かれた同鄉の玲樣は高等科を、私は普通科を終へて、今日は校門を後に、はる／＼家路につく。

「いよ／＼ねえ、玲樣、」何とはなしにこんなことといつてうしろからだしぬけに默想の人をよぶと、「なあに、」とつまらなさうな返辭をして、淡泊と快い色に青煙つたアカシヤの木蔭から、瘠せた上品な顏をチラと見せながら、特有の寂しい笑かたをする。

黒髮つたら惜しむでもなくグシャ／＼に卷いて、お揃のヴルウ色のリボンは風情もなくグッと突とほしてあつた、見るから痛ましげなので、そつと寄つて直してやつてると、「あ、月代樣こゝに、」と笑ましげなこゑがして、晴やかな微笑をみせた山科先生が、そゝくさとかけていらしつて、「どこへにげたかと思つて、そりあ心配しましたよ、さ被入い、兎に角謝辭だけもよんで下さらないと、實際惡いですからねえ、」「式はもう始つてるんだし、何か私が貴方の肩斗りもつようにとられるから、」一寸眉をひそめて小聲におつしやる、二人に取つては唯一の味方だつた文科の先生——獨身者

ていらつしやる。「あら始まりましたんてすか、まあ一寸も知らずに居て何つてこつてせう、」いひ〳〵玲樣の手を引張つて遮二無二かけ出す、道すがら、先生は、「ねえ月代樣、貴方決して失望せずに、神から賜つた貴方の尊い使命を必度果すてせうね、それはもうこの百折の人生の行路てあるから、今首途する貴方の清い風姿を望んては、暗い洞穴から、愛ふかい主のみこゑをして魔が呼ぶこともあらう、けども、月代樣、私は確信します、どこまても貴女が主の御ひざの前に奮闘なさるだらう、そして區々たる一家の母に甘んぜずに、幾多罪の子を救ふ聖母となるだらう事を、」極めて強い語調、其中にはいはれぬチャーミングが潜んて居た、其優しい瞳には涙が漲つて居た、三人は心から誓つた

式も濟んて、茶話會の頃は皆美くしい頰のあたりに、流石愁を留めて、今更の樣に壁へさわつてみたり、ラケットに接吻したりいろ〳〵懷しげな科をした、ピアノの鍵の上に顏を埋めて忍音洩す人もあつた、けどもお木偶樣は相變らずお木偶樣の本領を發揮して、謝辭よむこゑも水のやうに澄んて流れた、友の話もよそに窓へよつて、絕えずさげすむ樣を笑を明眸の底に閃めかした、無論口は開かうともしない。

「ちよいと、お木偶樣にも惘れちまうぢやないの、ねえ、いかに傳導師になるからつて、あれぢやまるてアニマルさながらだわ、」誰かゞいつた、「ほんと、ひつぱつてこようぢやありませんか、そして演壇へ立たせちやどう？」「賛成よ、ねえ、」人はいつた、私は密に危ぶんだ、多勢に圍繞された玲樣はフラ〳〵しながら演壇に立つた、が急キッとなつて、

「校門を去るに望んて木偶より皆樣に一言申殘します、それは、皆樣は皆樣個々の性を自覺して、健全に、眞面目に生活せねばなるまいといふ事てす、木偶の名に甘んじて今日まて經來つた私が考へるに、どうも皆樣は——否皆樣と一部をさすより、世を擧てといひたい——自己たる一人の價値をよりよく出さうと務めて居るらしい、否、或は全々零なるものを十若くは百にみせやうと企圖して居るかもしれない、從つて一一が一たるべきものを一一が十乃至百になさんと望むそれが九或は九十九の矛盾を生ずるやうに、より大なれば大なるだけ、それに比例した大なる苦痛を伴ふてせう、つまり木偶たるべき實質を失つて、表面だけ只美なる京人形にすぎぬ人々と思はれるんてすが、ホヽ、お怒りになつても苦しかありませんよ、私の聲は僞のこゑ

ぢやありません、て私は衷心から皆様に反省を促した い何卒皆様、眞の自己なるものを愛して下さい、そして本然の我に歸つた時、木偶なる名に就いて深く味つていたゞきませう、木偶々々曇つた眼鏡の後からのぞいた空は、美しく晴れながらもなほ鮮かには映りませんわねえ、私は木偶の名を呼ばれて感謝します、けども皆様は果して、私が捧げた京人形の美名に満足なさいませうか、果して、「意味深いこゝろ、強い笑を洩して壇上に屹と肩を張つた姿、折からの夕日を眞白い額にうけて、名畫の精が脱け出たかともみえた、室は靜寂打々互み代りに白い吐息を吐いた、一樣にうつむいた頸筋がしつとり沾ふて、今更らしく不安氣な眸を輝しあふ中に、ひとり私は洪然と胸を張り、膝を打つた、そして壇上の友へ會心の笑を交してズルリ皆を見廻したまんま心密に絶叫した、あゝ――と。一種の誇に驅られて。

それから何時間か過た、汽車は今、露に濡るゝ夜の鐵路を、北へ〳〵と高く軋つて行く、其の何物をもおびやかしてやまぬ轟たる跫音に、涯知らぬ我沈思の翼をのせて、兩の世に容れられぬ靈魂は、夜深き沈默の境にぬけいでゝ束縛なく、かびろき大自然の胸に温い啓示を求めるのであつた。

ふと、微かな赤兒の啼き聲が聞えた、さまよへる魂は棲所にかへつた、二人は等しくそのこゝろを辿つた、極めて靜かな聲である、二人は併し其中にはいふべからざる力が籠つて居る、二人は靈魂界から再人界に引戻された不滿を胸にたゝんで、其こゝろにきゝほけた、闇に吸はれる樣な幼い肉聲の名殘が、クー〳〵と律音を奏でて、弛んだ神經へ鋭く泌みる。

と、人のさわめく氣配がして、薄青い灯影にポット黑いものが動いた、みると赤い手柄をかけた丸髷の、びんのあたり少しそゝけた、廿に足らぬ母親である。胸を割つて白い乳房を握ると、そつとなめてあてがふらしい、赤兒は一寸啼きやんだが、烈しい動搖と、夜の寂寥に堪へかねるのか、又してもオウオウと聲をあげる、「おゝ、よし〳〵、そらお乳、さおあがりよ、おゝいゝ兒、いゝ兒ねえさあちやんは、」はゞかるやうなこゑてしきりとすかす、それでも赤兒は啼いた、悲しげに「おい、やかましいな、乳をやれ、ええ、乳をよ、」ムクムクと五分刈頭が闇を動かしながらいつた、商人體の若い男である、「やつたんですけれどね、何だかむづかつて、」と困つた態、後向きに柳行李の大きいのへよつ

て寢て居たのだ、男はやけに舌打して、「やかましい奴ぢやねえかふんとに、ねられやしねいや畜生、」つゝかゝるやうにいつてクルッともとのやうに頭をさげた、「やかましいからつてあんまりだ、」いひ〳〵ゆすりあげるやうにすいとたつた、何のうたか小聲てしほらしくうたひながら、ふとてちらむいた顔はいはうやうない淋しさてあつた、女は暫立つてたが思あまつたらしくそがひに腰かける、赤兒はまたしきりになく、「うるせいやい、うつちやつちめへ、あしたあどうなる身だと思つてやがる、えおい、いつまて女學生流て通せるもんか、しらぬ他國へはる〴〵出稼にいくんだぜ、確しろい赤兒なんかにかまけちや居らんねえや、第一各自の口からして怪しいてい塲合ぢやねえかえゝ、」と詰るやうなてゑ、女はピチリともせずにうつむいた、赤兒は漸々鼻息になる、グーグーと男はいびきをかきだした、暫すると女は再てちら向きになつた、しげ〳〵とあてがれるやうな目をして二人をみる、自分をみるそして情ないといつた態をして、ついと眼をそらす、が其下からまたそつとぬすみゝてはほろ〳〵と泣いてる、

「一寸、どうかんじて？」袂を引いてそつと訊いてみる、

「えゝ、どうつて？」とまご〳〵したが、みる〳〵自そしる様に笑つて、「やつぱし一個の京人形さね、つまり自己の眞價も知らず、また生の何なるかをも意識せずに只虚榮にあこがれた結果が、涙だらうと想像されるわ、けども――」と目を閉ぢて重々しく「もしかすると、自覺せずに生を送るのが却



（九等）學校歸り　本郷とみ子

つて幸福かも分らない、憖高い教育をうけて僞のこゑに泣くよりか、無意識に現代の風潮に投つて衆人相率いて行く方が安心であるかもしれない、けども醒めた日の私には其幸は遂に望まれないのねえ、人は春に醉ふ、其醉ふた人の愛を私は疑はずにはゐられない、從つて人を思ふといふやうな事も望まれないわ、幸か不幸かは分らないけども、」と語を強めたが一寸思入つて、今あの人は自分の立脚地をひどく恥ぢてる樣子だけれど、木偶ならぬ我友の上にも早晩あの涙をみる事を思へば、私は私が木偶だつた事を衷心からよろこぶ、同時に友の前途に涙を注がれてならなくてよ、」沈んだ聲音、涙がキラッと光つて零れた。

「御同感よ、醒めた私達は御互に幸福者ねえ、玲樣、意味ある生涯を送るべくいつまでも軌道を外れずに揃つて行きませうね、そして醉い易い現代の女性に、健全な思想を吹きこむ事を以て、ふかい主の愛に報ひませう、一家の母でなく、子等の母に成りませう、果して奏功するかどうかは疑問だけれど、土と朽ちるまでは絶對的に努力しませう、あゝこれが眞の私のこゑよ玲樣、貴女もこうねえ、」と心からにつこりした、

「えゝそれは——」といつになく落つかぬさまて凝と私をみたが、意久地なく涙を流して、「あゝ今となつては、詮方ないけども、私、私!!」胸を抱いて苦しげな語調、ギョッとして、「まあ玲樣ッ」不思手を取つた、と強く握り返してぱつちりと張りきつた其美しい瞳には何かしら決意の色がみえた、私ねえ、いつそ告白してよ、實はねえ下枝樣、あなたの清い決心の前に恥ぢたのよ、そして告白するの、あゝそれより前に貴方にねえ高等科へ入る事を取消していたゞきたいのよ、」思切つたさまていふ、ピリッとして「まあどうして?」

「あの實はね下枝さん、私ねえ、此頃しみ〲寂寥をかんじて、何の事なしに魂はあくがれるの、何物にと聞くのは罪よ花のやうな青春の時代を、冷たい蠟をかむ樣な學理研究によつて無上の快樂を得來つた私は、遂に何物にも醉はなかつた、そして純潔な處女の誇を貴として居たばかりでなく、醉ひ狂ふ若き人を白眼に見下して、絶えず冷笑を四邊に注いでは一種の儚い慰安を覺えて居た、そして再かへらぬ人の世の春はまさに暮れがたの光淡く消えやうとする刹那、ふと私は幼い赤兒の啼聲によつて、わづかな誇を傷られて仕舞つた、下枝さん私の面に唾して頂戴、あゝ私は單純な今日迄の徑路を顧て行先を思ふてつく〲飽いてしま

つたの、私はむしろ無意味でも變化のある華美しい生活が望ましくなつた、意志が弱いと笑はれやうけれど。」とや丶無言私は片唾を飲んだ、赤兒が微にまた啼く、玲様は蘇つたわね、併よく考へてみると、人と生れて一度はあゝした境遇に泣くのが本來なのかも知れないわ、あの境遇に打勝つてやがて來るべき成功をまつ、そこに偉大な慰安が潜んで居るのでせう、すればあの女は慥に幸福者といはねばならない、その幸福なる事を自覺せずに表面のみ見よげな私達を羨むらしい態度だけが、哀にも思はれるけれど、併自覺しないながらも夫と共に社會の惡戰と奮闘しやうとする決心が、やがて成功の基をなすのぢやないでせうか、それをよそにみて、また、父母の意に背いてまで、己一身を清くしよう、惡戰場に捲きこまれるのを避けやうが爲に儚い努力をする自分らが、却つて生の意義に反するんぢやないでせうか、」と深くもまどへるさまである、「父母の意に背いてまで――」と私はガックリ胸にこたえて、おのづと首は下つた、

「あゝ併山科先生、先生を思へば、私はどうしても從來の主義を變更する事は出來ないんだ、私は山科先生の御心を察します、先生は一家の母たらずして人の子の母たれと仰つた、私は固く誓つて仕舞つたもの、下枝さんあなた先生を幸福と思つて?」「え私、そりあ幸福と思つてるわ、清い身を神に捧げて、あまたの人に崇拜されてほんとに理想的――」いひかけて玲様をみると思ありげに默つて笑つて、「違いますよ下枝さん、私も貴方の時代にはさう見えたの、けども山科先生は目下寂寥の人でいらつしやる、悔悟の人で被居る、清い處女の身を神にさゝげて人の母たらんと望んだ先生の、若い日の努力に對する報酬は現在の淋しい涙でした、先生はもだえて被入る、けども泣いて被入るけふもなほ私に對つて御自分の踏み來つた道を再ふませやうとなすつた、そこに儚い女のヴニチーをみる事が出來る、我が子を死の手にとられて、あらゆる子の生を呪ふ母に等しいその態度に深く私は同情する、これからも必度お慰めして少しでも笑をみせてあげよう、全時に下枝さんの高等科入學をよしていたゞきたい、そして刻一刻と世の潮流に遠ざかり行く我なるものに、温い慰安を與へて頂戴、ね御願よ下枝さん、

「あゝやつぱし私も木偶ぢやなかつたか――」上向いて深い息を洩した。私は何ともいへぬ感慨に打たれて、赤兒の方を遠目ながら見た、强かりし父のそば、母が

懐に小さい顔を半埋めて、彼は深い眠に落ちて居る、絶えず面伏のさまして光さにそがひし彼の母は眠つたのか後姿クツキリと塑像のやう。
思異なる三人をのせて、汽車は滞なくすべつて行く、窓々より夜は明け離れんとしてゐる。

女

江原田鶴子

白井樣。
その後御便り差上げやうと思ひ乍らつい〳〵御無沙汰して御免し下さいね。三年といふ歲月！妾は染々ともう三年といふ私の一生の中に二度ない年月の過ぎ去つて了つたことを、今度家へ歸つて來て悟りました。その間妾は御地て、眞個に夢のやうに三度の春秋を送つて了つたのてすもの！
あゝ妾等はまだ少女てすね！まあ私が今度歸つてから見聞きしたことを筆に任せて書いて見ますから、御覽なすつて下さい。私は『女』といふものゝ運命を、眼のあたりに見たやうな氣がいたしました。

その子樣

東京にて しげ

ある夕方てした、（それは恰度家へ歸つてから三日目の夕方）私は二階の欄干に掴まつて往來を眺め乍ら、また時々、紅くなつた西の方の夏の夕雲を眺め乍ら、いろ〳〵物可懐しい幼い時代や昔の追懐に耽つて居りますと、下の方で私の兄と誰か話して居るものがあります。それが聞いたことのあるやうな聲音てありますので、誰だらうと思ひますと、小さい男の子を抱いた女の方なのてす。兄の姿に隱れて、橫顏が半分だけしか見えませんのて、誰方だらうと思ひ乍らも、何れ近所の方だらうと思つてそのまゝにして居りますと、その方は、
『しい出るかい、もう出るてせう、一遍ね……』
さういつて、兄の處を離れて、一寸裏の所へ入つて子供に小便をさせて居りました。その調子が如何にもお母樣らしい調子なのてす。裏へ來たので、その姿はよく見えました。初めはうつむいて居りましたが、しいをさせてから子供を抱いてまた兄の所へ行くのを見ますと、それは春ちやんといふ、その時分十四の、私

より三歳年下の裏のお師匠さんの子てはありませんか、私吃驚いたしました。見ると、髪は銀杏返しに結つて、瀟洒した浴衣を着て、帯をうしろに結びつ放しにした所は、ほんとによいお内儀さんてす。

初めは私の眼を疑りましたが、どうしてもそれに相違ムいません。昔はあんな温順しいよい子であつたのに、今は如何てせう、もうそんな風！なるほど何處かにまだ幼い中の俤は殘つて居りますが、私はその餘り變りやうの激しいのに驚いて了ひました。

春さんはまだ兄といろ〱話をして居ります、それはみんな世間じみた話てす。私は急いで階下へ下りて行つて妹に、

『春さんはもう子供があるの？』

さう尋ねますと妹は、

『え丶去年產んだの、あの子はもう二歳よ……』

さう申しました、そして附加えて、

『春さんはもうお母樣の跡を繼いで常磐津の師匠になつて、今では近所の若イ衆や女子供を敎えてゐるの、そして春さんの御亭主は、そのお弟子の中の若い人と一緒になつたの……』と、これだけは小聲で申しました。

私は吃驚して了ひました。春さんは私と三歳違ひだから、今は十七の筈です。私は春さんはそんな子供てはなかつたと思つてゐたのに、もう二歳の子供のお母樣になつてゐるのですもの……。

……私の眼には子供を抱えた今の春さんの姿がまざ〱と浮びました。私は何だかだし拔かれたやうな、侮辱されたやうな、そんな氣がして、胸が穩やかてありませんてした。

窓の所から聞いて居ると、兄と話してゐるのが、よくは聞えませんが聞えるやうてす。兄は何だか、私の歸つてきたことを話してゐるらしい、『さう、〱』と受け應えする春さんの調子は大人振つた、事もなげな調子てす。

兄の話を聞いて居ると、私が御地にゐる時の、袴穿きの姿が思ひ出される。私はそれを聞いて居ると、自分が恨めしいやうな、情ないやうな氣がしました。

緣日——、私の家の前の通りに、昔から夜商人が店を張ります。それは二十一日の大師樣の日て、私は子供の時分からこの緣日が好きてした。今夜は恰度その

當日――。

夕方から商人等が車を曳いて來てこの通りへ集まつて、緣日の店を廣げはじめました。それを見ると私の胸には不思議な、幼い時分の匂ひがするやうな氣がしました。

緣日商人はどれも見覺えの顏はありませんが、色々の手遊を並べ初める手遊屋や、かんざしやなどを見ると、その荷物を並べる一つ〳〵に私の記憶も展げられるやうで、幼い時分の種々の事を思ひ出し、倦かず眺めてゐました。

夜になつてもう緣日の出揃つた時分、私は緣日を廻りに出かけて見ました。流石に暑い時候でありますから、涼みがてら出る人も多いと見えて、人がぞろ〳〵と、何處の店にもカンテラやラムプが輝き、見るから夏の興といふものを語るやうに見えました。――緣日はほんとに都の夏をよく語ると思ひます――。

だん〳〵歩いて植木店の出てゐる方へ行きますと、植木には如露の水がカンテラの光りに輝いて、初夏の樹の葉がみんな靑々として居ります。前の方には小さい盆栽や、撫子、西洋草花の鉢なぞが並んで、赤や紫や美しい。

私も見惚れ乍らだん〳〵歩いて行つて、ある植木店の前で、一人の四十五六のパナマの夏帽子を被つた旦那といつたやうな風をした男が、草花を一鉢値をつけてゐるのに逢ひました。旦那は植木の鉢を手に持つてゐました、するとその背後に、一人の女が立つてゐた、そしてその旦那に一言云ひました、旦那が「え？」と振り返ると、女は何だか手巾を口へあて〻「ホヽヽ」と笑ひました。

私がその女を見ると、それはどうでせう、舊小學校で同級の伊藤いち子さん！　前髮をつぶして出した、商賣人の結ふやうな銀杏返しに結つて、姿まで粹な姿！　ふと私と顏を合せて、冷やかな侮蔑と反抗といつたやうな色を見せた顏をして、ぷいと傍を向いて了ひました。

旦那は草花の鉢を買つたやうです、そして二人で並んで、やがて人込みの中に隱れて了ひました。

妾――！　私の頭にはある怖ろしい思ひが廻轉しました。そしてしばらく佇んだまゝ見送つてゐた。

尤もいち子さんの家はお父樣に死なれてから隨分困るやうな境遇にゐました。だから或はさうかも知れない。

私は家へ歸つてからもいろ〳〵と考えて仲々眠られませんでした。

歸つてから三年振りで、私は神田の姉を尋ねました。神田の姉の家は米屋をやつて居ります。ある日の午後で、私が姉の家へ行きますと取り散した中で姉が帳面をつけて居りました。兄さんはゐないやうな樣子でした。

上つて行くと、子供は二人晝寢をしてゐて、上の女の子一人は學校の本を復習して居ました。

『まあサア〳〵』

と姉は喜んで出迎へてくれました。

私は上つて、すぐ子供の多い、忙しい、姉の家の大變狹く汚いのに知つて居乍ら驚きました、けれどもそれも止むを得ないのだと思ひました。



（十等）月待宵　紀伊　稗田みつ子

私の記憶えて居るのは姉の結婚してから三四年の間のことで、その時分はまだ今の上の女の子一人しかゐなかつたし、まだキチンとして居ました。この頃のやうに小さいのが多くなつてはみんなさう構つてゐられないのでせう。家の中を見ると唐紙は破れ、壁は瑕がつき、並んでゐる簞笥には子供の惡戯らしい墨がついてゐる、手がとれてゐる。瓦斯の笠の上には米屋だから白い糠の埃が積つて居るやうです。座敷の隅に吊してある、何かの造花も眞白になつてゐました。

いろ〳〵話をしました。姉は一體もと弱い方だつた

のですが、この頃は壯健なやうで、顏付も大變よいやうです。あまり外に出ないで家にばかりゐると見えて、色が眞白て、それに（髮は薄い方でした）額のあたりの毛が薄く、何處か皮膚なぞは脂肪が尠いと云つたやうな風でした。これはよく產などをした人に見る所です。

いろ〳〵な話があつて、それから私は晝寢をして居る姉の子を見ました。二人共男で、私が漸く笑ふやうになるのを見て行つた京一といふは今年四才でよく肥つて居る。その下の二歲になると云ふ男の子は、これは病身で始終醫者の藥を飮んでゐるさうです。だから顏や手なども瘠せてゐました。

私はこれが姉の子だらうか？と思ひました。姉がこんな子を二人產んだのだらうかと、何だか不思議な感じがいたしました。

姉の腹からこんなものが……と、私は兄さんに似てゐるのか、姉に似てゐるのか知らない、この二人の子供の顏を眺めました。

姉さんは三人の子供のお母樣だ！とツク〳〵思ひました。

間もなく、子供を育て乍ら、又家事に忙しい姉に別れて、私は何だか女といふもの丶運命を暗示せられたやうな氣がいたしました。

（私の今度東京へ呼び寄せられて歸つたのは、實は私の結婚問題です。ほんとに私はどうしたらい丶でせう、私いろ〳〵と是等の問題を考えて居るのですけれど、私は矢ッ張り女ですからね。女はみんなあ丶なるのでせうか、あ丶なるのが女の運命なのでせうか。白井樣あなた何かい丶思つたことがあるなら知らして頂戴な、待つて居ますから……。十日夜。）

渡鳥

筆子

私が自分を占つて見た話をしましやう、と淋しい笑を浮べ、友の一人が語り出した。

…………

一體、私ほど表情の乏しい人間はないので、喜怒哀樂を容易く顏に顯はす事が出來ません、其癖、或る場合には非常に感情に走る方で……變屈とても云ふの

て有ましやう。少さい時から友達とて御座いません、學校なぞても大方、運動場の隅の木蔭から、皆の遊ぶのをぼつねんと見て居りました、其時分よりして私の性質は形作られましたのか、一時親友が出來ても、其人が矢張り他て面白相に笑つたり、痴戯たりしますと、何だか私は疎外された樣な氣がして、腹を立つより寧ろ情なくなりました、そんな弱虫の癖に、妙な反抗心を起し、向ふが隔てなく打解けらるゝ程、小癪に障つて、遂餘處々々しい態度をとる内何時か疎遠となり、結局大風にてもさらはれた樣な別れを致しますが、又別れて見ると其人が忍ばれて、何故私には親友がないのだらう、なぞと返らぬ愚痴も出るのでした。

私は先天的孤立すべき運命を持つて、十年經つても、二十年三十年、取る年波の皺が出來ても、猶獨ぼつちなのかしらん……と不安に伴なふ悲哀の影がひしと胸に刻まれ、其影は日々深刻になり果は茫然、黄昏の空を仰いて、今迄別れた數々の人のことを考へ出しては泣きました。

斯やうな私ても、遂ひに異性の友を得たのてすが、内心は熱し易い私――若い血潮の搖らぎにお耻しいが戀に落ちて了つたのてす。渥美と申して、兄とは早稻田時代の學友てありました。扨其戀は圓滿て御座いましたろうか、渥美との中を知りました私の一家は、擧つて反對を致しましたのて、若い同志はお定まりの、儘よといふ氣て、丁度上野の花がちら〳〵散る頃、無分別にも二人て飛び出し汽車に乘つたのも何もかも夢心地、伊豆の伊東に參りました。

彼時分は渥美も愛してくれましたし、私は猶更松に搦まる蔦蔓と云ふ體て、戀の美酒には越し方行末を思ふ暇なく、渥美が笑へば私も嬉しく、萬一眉に愁の色てもあつたなら、それこそ例の別れを思ひ「捨てられたら奈何しやう」と繰り返し〳〵恐怖の念に打たれました。

そうかうして他愛なく數日を過す内、遂々追手に見付けられ、おめ〳〵二人は引戻されたといふ、容色の惡いお話。

て、前にも申た通り、無口で表情の乏しい私ですから、此方て思ふ程、渥美には此心が解せなかつたのてすか、其後は平氣で會社に通つて居ます、其歸りをば私は、家の嚴しい監督の眼を盜んては、時々逢ひました。實に私は親兄弟の情より、渥美との間が遠くなる

のが、何よりの苦痛てありました。

ある時兄が、「お前は渥美を買ひ被つて居るんだ、彼奴の頭はそり　あ冷かなもんだよ　結局あゝいふ性格は境遇に寄つてだね、何しろ繼母に迫害されて日蔭の草の樣に生長したんだもの、弱い奴なら枯れて了ふか、氣力のない人間が出來上るのさ、渥美は意志が強い……惡るく云ふと圖太い方だから、何時の間にか繼母の鼻息を伺つて、甘く小使にても有付くのを覺えたらしい」

「眞逆、兄さん一層の事私を叱つて下さい、何も、那麼、中傷らしい事を有仰らずとも可いわ」と云ひますと、兄はむつとした樣でしたが、猶色を和らげて「今更お前達の中へ、水を差したつて始まるものか、秀さんが處女てあつたら知らんこと、僕は實際の渥美を評して居るのさ、全體先生のは、世の中は冷酷なものといふ印象が、頭に染み込んで居るから、人情だの道徳だのを說いた處て不可能さ……そう〱。何時か這麼事を云つたよ、(僕は或る時、人の苦痛を見ると、一種の痛快を感じるよ)と無論串戲らしく云つたつけが、大體性格が解るぢやないか」

私は眞赤になつて、「兄さんの樣に云ふと渥美さんは滅茶々々ですわ、ぢやあ全て惡魔みたいね、私は什麼人間ても、人情の無いものは無いだらうと、思ひます、そりやあ……奈何せ私達は惡るいんですけども、少しは同情やつて下すつても可いぢやありませんか」けれ共兄は、至極冷靜に「ぢやお前の觀た渥美と、僕の見たのとを搗き雜ぜると、完全な人間が出來る理由だね、、、兎に角、渥美は戀人といふ名目だけには、可い人間かも知れんが、眞底から——質實な戀をする人間ぢやないよ、諦らめてお仕舞ひ、お前の爲めだから……」

それでも私は、空吹く風と聞き流しましたが、成程遂々馬鹿な目に逢つて了ひました、と云ふのは、渥美が近頃、下谷の何とか云ふ半玉と浮名を流して居るのですもの、淺猿しくも嫉妬の炎に私は、蛇にでもなつて二人の皮肉をば、食ひ破つても飽き足らぬやうに口惜しう御座いました、これが以前の友達同志なら、その心なら……とそれ限りにもなりますが、戀を知つた身は假令、縋つた袂を拂はれても再び裾に縋り付くといふ考へて、捨てられたとは存じましても、未だに殘る胸のほとぼり、而してあの別れを、此處に致すのが異樣に恐ろしう感じられました。

憂々と閨へ還るを見た兄が「奈何だ、渥美の冷酷なのが解つたらう」と其憐む樣な調子が妙にこの心を見透された樣に僻み、「……」かぶりを振つて突俯して了ひました、すると兄は暫らく凝と見て居りましたがやがて絞り出した樣な聲で、「馬鹿だなあ」と云つた限り、別に小言も云ひませんでした。

思へば自分の不品行をも顧もせず、一かど理窟のある樣な我儘者を、親なり兄なればこそ叱つたり慰めたり、實にもう一方ならぬ苦勞を掛て了ひました。

春秋を夢と過ぎ、次第に渥美との間は、隔ての垣を生じました折柄、不義理な借金がかさみまして、彼は突然行方を晦まして了つたのです。噫、私は曾つて恐れて居た。其離別が目前に來て見ると、最早涙も出ませんでした。空蟬の心を抱いて、多少は觀念しまして宅に働ひて居りましたが、不圖這麽手紙が參りました、然かも渥美が走り書きて、

世渡りに失敗した私は飄然、波浮港に上陸しました、洋々たる波路をへだて丶、霞かゝる伊東を、秀さんは忘れたでしやうか、實に私は後悔して居ます、然しもう手紙は差上ません、噫、私は再び東京の地は踏めんのでしやうか。

私は不安と煩惱とがむら〳〵と起りまして、無性に人なつかしく、覺めたる戀を現實に捕へんと焦せり出しました。

私は此手紙を持つて兄の許へ參りました。五月雨がしと〳〵と軒打つ晩、何處やらて、弱々しい赤兒の啼くのが聞えます。默讀する兄の眼色を伺ひながら「兄さん……あの渥美さんは……：無分別をなさりはしませんでしやうか」と恐る〳〵口を切つたもの丶、お腹の中ては、何卒兄が渥美の借財を返し下さる樣、而して舊交を復しながら……彼は義理と情の縛り繩て身動させず、吾が手許を放したくない、後悔したる男の前に、情熱の勝利をそぞろ、暗示せまほしく思ふたのです、處が兄は「何だ這麽手紙、要するに彼奴は虚僞の糸をからくつて、お前の愛情を引張り出した上、借金の始末てもさせ樣といふ手段なんだ」と一言の許に彈ねつけられ、加之に母迄が「渥美さんに娘の操を破られたと思ふと、私は恨めしくつてならないのだよ、何卒お願ひだから諦めておくれ、此上彼樣人に欺されておくれてない」と涙ながらに云はれました。

其後、差上ぬと云つた彼の手紙は、只一度名古屋から來た限り、杳として消息を知りませんが、近頃は、

渥美が死んだ處や、又は海岸を二人て彷徨つて居ると、俄然大嵐が起つて、あれよ、あれよと云ふまもなく、丈餘の怒濤の中に卷き込れたり、本當にもう、厭な夢ばかり見るのですもの、つまり惡緣とでも申すのてしやう。

　ある朝の事、兄の部屋を掃除して居ますと、机の上に一葉の寫眞が載つて居たので、何心なく採つて見ますと、何處の令孃てしやう、高島田の優姿、其手に持つ百合の花にふさわしき人よと、飽かず眺める途端、次の間て「そりやあ、お前の氣にさへ入つて居るのなら、私は奈何ても可いのだよ、彼寫眞はもう嫁として申分はありませんがね、只秀子との折合が心配てね、彼通り疵物にはなつてゐるし、私ても眼をねぶつたら、兄の厄介で……緣てもなかつたら……彼樣、身分のある嫁の手前、さぞ肩身がせまかろうと……」と母が鼻を詰らせて、兄に云ふのが瞭然と聞えました時、私の血管は鳴動して、覺えず棒立ちに突立つたが、刻刻とさめゆくごと、母の言葉が染み渡つて、堪へきれずに顏を被ふて了ひました。

　實に慘酷な運命てはありませんか、果して、鬼千疋の小姑て一生厄介者て居らねばならぬか……嫁には惡まれ、否、否それより孤獨の生活がつゞけ得るてありましやうか、噫人が戀しい、考へれば考へる程、賴むは渥美ばかりて御座います。かく思ひ詰めては天にも地にも身の置き處なく、さながら三惡四趣の道に捕はれたか、色々に湧く妄念は吾ながら淺ましう御座います。懊惱はほと〳〵と、覺めきらぬ螢火て、澤邊の草の露よりも、はかない戀に憧憬ましたが、それも遂々第三の渥美が手紙て、

人の心は賴むまじく候、小生は無情漢にてもよろしく東京の喰詰め者ても結構に候、然しながら曾つてより敵視せし社會、ある一部へ鼻をあかせしかと、聊か痛快を覺え又、二人の戀も終りを告げしものと存候

と最後の宣告を下されました。

餘はお話致しますまい。唯、今日理性を以つて、吾か運命占ふて見ますれば、孤獨よりほかは御座いません、兎角自然を放れたがるのは人間て、アダムとイブがエデンを墜落したと同じに、私も持つたる自然を失墜しました、然しお蔭て煩惱即菩提とやら、今後異性の爲に此悲劇に繰り返さず、どうやら故鄕に歸れさうてす。

兄は近々結婚致します。其處て私の後半生はいよいよ、曠野をかける渡鳥が、塒も定めぬ生活を致すのて御座いましやう。

寺

きみ

光子は戀の成功者てある。結婚當時等は、世に自分程幸福な女はあるまいと思つた。だから夫の地位名望や資産を誇る同級の人々の綺羅めきを、安蒔繪の金箔だと思つて居て少しも羨まなかつた。光子は如何なる苦痛も、愛の熱力はよく其等のものを熔かして了うて、心の内はいつも平和なるべきを信じ切つて居たから。

然し、結婚後家事に立ち入れば立ち入る程、平和なるべき胸に、波が起つて來るのてあつた。

一體光子は東京の神田邊て、可なり幅のきく煙草商の娘てあつて、朝から晩迄銅貨の臭ひ銀貨の響きの絶えない、金錢上の話て持ち切つてる家に育つたのてあるが、却つて拜金主義一點張りの父とは正反對て、金儲けをするのは、渡世の方便に過ぎない、金をためたばかりて、人の義務を盡したといひ得るものぢやないと常に思つて居た。光子は詩人、書家、宗教家等いふものを如何にも聖く想像して、貧しくとも平和な、美麗ならずとも朴直な生活をあこがれあこがれて居た。

光子は常に和歌新體詩等を作つて居たが、三年ばか



スケッチ　新潟　村山ぎん子

り以前、現在の夫金井と戀仲になつたのである。其の頃金井は大學に通つて居た。極眞面目な信仰の人で殆んど文學を生命として居た。

二人の戀は始めは藝術上の戀であつたが、いつ迄もそれに滿足し得るものではない。二人の間に往復する書は、一信々々毎に近づいて來たが、遂に手をとりあつて未來を約した。

一日金井は光子に『僕の故郷は實に淋しい町なんですよ』つていつた。光子は活々した眼に笑みを湛へながら『淋しい所でも、私には淋しくない筈だわ』『僕の家はあなたの御家のやうに豐かぢやありませんよ』『まあ、なぜそんな事を被仰るのよ』と、驚いた顔をして居る。金井は其のあどけないやうな顔を見て笑つた、喜んだのだ。そして『有り難う、僕は幸福です。永劫に消えぬ生命を得ました。僕は僕が佛陀に授かつた務を、立派に全うする、現今僧侶の墮落せるものを悉皆改善するなんてことは、僕の微力、勿論出來まいが、切めて泥中の蓮となつてなり、靑年の指導者となるべく勉めやう、ね――光さん』と力を入れていふと、光子は輕くうなづいた。瞳は美しく輝いて居る。此の時から光子は、田舍の古木大木か小暗い程繁りあつてる境内に、靜かにたつて居る神々しい伽藍を想像した、そしてその內からは、燃ゆる程熱心な說敎の聲が漏るゝてあろう。說敎をきゝに來る人々は、皆眞面目な、質朴な、賴母しい靑年、壯年が大部分て。又月のいゝ、彼方此方に笛、尺八の音等のきこゆる晚があつたら、自分は木深い中からヴァイオリンを響かして人々の心を淸く〳〵拭うてやる――そんな生活の內に二人は老いるのだ等と考へては、どんなに嬉しく思つたらう。然るに實現したる今日、僅か一ヶ年にもならぬ今日と、光子は今更に理想と現實といつたやうなことを、深く感じて居る。美しい長閑とした生活を追慕しながら其の實、汚れた齷齪した日を送つて居るのだから。

今日は例の地藏講て、三四十人の年寄が集まつて、御詠歌といふものを、腹の底から絞り出したやうな聲を張り上げて唱へては、調子にあはしてカーンと鐘を打つて居る。

今しも光子は、一心に針の道を辿つて居る、と『光子や』とそこへ來たのは姑て、半白髮の世話好きらしい婆さんてある。『ハイ』とあげた光子の面には淋しながら笑みが浮んて居た、が忽ち不安の雲は額を掩ふた。姑の顏に暗い色が見えたからてある。『光子、又

秀は御說教が厭だつて部屋へ入つた切り出て來んのだよ、阿父樣は氣を揉んでなはるし、困つたことになつた、お前、秀の所へ行つて、よく話して來て吳んなさい』と姑は詮方なげにいふ。光子は『ハイ……』とさえない返事をしたが、立つて夫の部屋へ行つた。

障子を明けて入ると、夫金井は、兩手を机に頰杖したまゝ、東むきの桂窓から靑葉の中をジーッと眺めて居る――考へ込んで居るのだ。光子は懷かしさうに夫の傍に座しながら『あなた……』とのぞきこむやうにしていつた、が金井は默したまゝまだ靑葉の間も見つめて居る。光子も庭の方へ瞳を移して、默して了つた。

軒をのぞいてる梅は、鈴なりになつた實に枝はジンナリして窓をおほつて居る。そして床しい靑葉のにほひが、しめじめと身に迫る。

光子の眼にはいつしか露がにぢんで居る。突然金井は『クソッ、飛び出して吳れやうか』と叫んだがフイと光子に氣づいたらしく『阿母樣か誰れかに、何かいはれたかね』と今度は優しい。『いゝえ別に……』『別にどうした』『あの……ね、說教をなさらなきや困るつて』。金井は又默して了つた。『あなた……』それは丁度哀願するやうな聲で。腕を拱いて考へて居た金井は、それには返事もせんで、不平をいひ出した。『何て僕が、あんな婆連に、凝り固まつたセメントのやうな心のものに、心にもない事を、說教だなんて喋れるもんか。僕がなすべき說教、僕が人に勸むべき信念は最も眞面目に、最も美しいもので、そんなその、ビードロ仕掛の說教ぢやない、僕が靑年會を組織しやうと思へば、若い者どもは信心が薄くて賽錢上げる事も知らない、そんなものを集めたつて、寺は損をするばかりだ等言語に絕したることと敢ていふし、あゝ光子僕は、を一度、あの東京の靑年團の中のやうな所で、火を吐くやうな演說をして見たい』金井はこゝ迄語つて、堪へがたげに頭をかゝへて身ぶるひをした。

光子は、うつむいたまゝジーッときいて居る。『一體阿父樣のやうな坊主ばかり世に多いから、佛陀の光は曇るのだ、寺の本堂で酒を飮んで、淫猥聞くに堪へざる俗歌を口ずさんで少しも恥ぢない、そんな奴等は片時も早く、濟度するが當然なるべきを、却つて其の機嫌をとつてるとは情ないぢやないか』とけは〳〵しい語調で罵詈した。

光子は、袖で顏を覆うて居る。『光子、泣いて吳れる

なね、僕は、お前に泣かれると實に面目ないんだよ、こんな家庭に連れて來て、泣かせるんだものね、こゝ暫らく、ゆるして呉れね、その內方法を講じて、必ず御前をよろこばせる』光子は面を上げていうた。『私が弱いから涙も出るのですわ、阿父樣や阿母樣がいらしてもいけないから、泣顏なんか、もうしませんわね』と少し身を後にひいて、前髮の亂をかき上げながら、『御臺所の方に用があるかも知れませんからね、私行かなくては……、あの、家內がやかましくなりますからね、其の時ばかり、あなたは眞のあなたが物をいふのぢやないと思つて、して下さいな。アラ、御念佛の鐘がやんだわ。ねー、して下さいね』優しく願ふやうにいうた、が然し、光子とても時代の敎育を受けて居る、何て現今僧侶の狀態に滿足出來やう、唯嫁といふ立場よりして、舅姑の前には包んで居るのであつた。

金井は、胸の不平を吐いた。光子が同情と慰藉とは少なき一兩語の內にもこもつて居た。卽ち、金井の色は少しく和らいで來た。丁度、光子が立たうとすると、後の障子が明いて、ヒヨイと金井の父がそこに現はれた。『世間の人はな、大學卒業した子が、おとなしく傍に居て、幸福だといふがな、俺は、ちつとも嬉しくないぞ。年をとつた親に氣ばかり揉ましてな』と忌々しげにいふ。額には混がらかつた靑筋がありありと見える。金井は庭の方にむいたまゝ何ともいはない。『親の眞情が子にわかるもんか、お前が親になつて、親を思ひ出す頃には、俺はこの世の人でないかも知れないぞ』といつた聲はふるへて居て、哀れみを乞ふやうに響いた。『今ぢきに說敎でも何でもするからいゝぢやありませんか』さすがに、我を折つて『光子、法衣と袈裟とを出せ』と投げ出すやうにいつたが、依然と庭の方にむいて居る。光子は部屋を出て行つた。『早くせんといけないぞ、もう皆樣が、待つてるだろうよ』と前とは打つて變つたをだやかな言葉を殘して出て行つた。親の心は實に憐なものである。金井が胸には故知れぬ涙が、湧いた、其の時。

金井は光子の持つて來たのを着ながら、『光子、僕は法衣を着けて殊勝顏して、人の前へ出るのは眞實厭になつた。僕は、世界の混亂の最も烈しい中で、何かかう、うんと働いて得た金で、生活して見たいよ』『私も』と光子は聞えぬ程の聲で答へた。

金井は悄々と出て行つた。光子はその後姿を見送つて、ホーッと溜息をした。そして、あゝこれが一度は

大學の制服つけて、意氣揚々東京の町を濶歩した秀さんかと、つく〳〵思つた。つゞいて其の頃の自分をも思ひあはして、老木の影に苔の生へそうな、淺ましい因襲を守るべき運命となつたのを、さすがに口惜しく感ずるのであつた。『なにいゝわ、勿體ないけど、私共の時代になれば、必と大改革をするから』とつぶやいた、が社會の一般が自分等に對する思想はどうだろうと思ふと、自分等の前には恐ろしい暗雲がふさがつて居るやうな氣がしてならなかつた。

光子は、茫然机の前に座つた、とふと、夫の日記帳が目についたので、何の氣なしに開いたら「夕方になつた。爺は鐘をついて居る。あゝあの鐘の音が、この小つぽけな町に響き渡る時、希望の光を見失つた、苦悶の内にあるやうな人でもあつたとしたら、あの鐘の音をきいて、心から佛の御名を呼ぶてあらう……宗敎なんて皆こんなものだ、詩なんぞもさうだ」と、こゝ迄讀んで光子は、日記帳を閉ぢ、机に伏して泣いた。

愛の力は、すべての苦痛を打ち消すと思つた光子の考へは違つた。愛の力と此等の苦痛とは、相並んで居るのみて決して融和すべきものではなかつた。否、愛の力は却つて苦痛を増さしめた。愛は二人を苦痛の内にも繋いて置くのである。あゝ自分も、他の人々のやうに容易く離縁し得る程のものだつたら、幸福だつたのに等とさへ、考へて見た。

こんな事を繰り返しながら、亂れた頭を机にあてゝ居ると、どや〳〵と人の音、說敎がすんだのだ。光子は緣側へ出て障子を締めた。金井は入つて來るや否やあゝッと歎息して何か口の中で、つぶやいて居る。光子は障子をあけて入つた。光子の顏は美しかつた。泣いた名殘の消えぬ顏、それは何ともいへぬ床しさが、匂うて居たのである。

金井は法衣と袈裟とをぬぎ捨てゝ『そんなもの捨つちやつて置きな』つていひながら、つと光子の手を取つたと思ふと、力一ぱい光子を抱き占めた。その時二人の胸には何ものもなかつた。――二人の魂は、一つとなつて、美しい神の境に飛んだのだろう――。

午後の三時頃、集まつた年寄連は大騷ぎをしながら歸つて行つた。まもなく姑は茶の間の火鉢の傍て、賽錢の勘定を始めた、ホク〳〵笑みながら、一厘錢、二厘錢、銅貨と別けて、カチャ〳〵音させながら。

光子が隣室て法衣をたゝんて居ると、姑は前掛に賽錢を入れたまゝ入つた來て、包み切れない微笑みを、

口の邊に見せながら『今日はの、御天氣がいゝもんだから、參詣人が澤山あつての、御賽錢も滅多にない、五十一錢と――七厘あつたよ』。此の言葉、光子の胸には蘇とたとへやうか、然し光子は如何なる瞬間にも反抗心の起る時、嫁といふ叫びを、心の奥にきくのである。光子は、例の淋しい笑みを浮べながら『ようございましたわね』と氣のない返事、然かし姑はそれには氣づかないだろう。

姑が行つた後で、あゝ五十一錢と――七厘、どうせ錢のにほひを臭ぐなら、五十一錢七厘ぢや、あまりに可愛さうぢやないかと、竊に憤慨した。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

此の翌年、光子は可愛い女の子を、生んだ。此の子が四つの時、又男の子が生れた。

結婚後六年にして金井の父は死んだ。

金井は心ならずも、自ら年寄連の機嫌をとるやうになつた。光子も葬式、法事等の多くあるやうにと考へることがあるやうになつた。

印象

南海漁婦

今日に能く似た晴朗とした天氣模樣の、初夏の或日曜日の午後の事でした。何でも森川町の伯父の宅を出ましたのが、二時過ぎてしたと思ひます。大學前の小さい店でノートブックを求めまして、本郷三丁目で電車に乘りました。乘客は釣革にさがる程は御座いませんでしたが、其でも兩側の腰掛には座はあいて居ませんでした。私は片端の六十位の田舍人らしい老爺さんに、少し詰めて貰ひまして、先刻伯母から聞いた、美さんの――私の從姉で其一月前工學士に嫁つたのです――京都の新生活を色々と想像して、一人興がつて居ました。電車は強い動搖と共に停留りますと、車掌の本郷一丁目、一丁目と呼ぶ聲が致します。フト頭を上げると私の前に――直ぐ入口てす――新調しい麥藁帽子を被ぶつて、飛白の單衣に白ッぽい縞の袴を着けた、脊の高い學生が左手に強くステッキを突いて、何か一心に眺めてるのてす、私も遂何の氣なしに横の硝子から覗きましたが、何も見えない、と此時二頭仕立の立派

な箱馬車が横丁の角を、勢能く曲らふとして居ました。電車が進行始めましたので、頭を捻ぢ向けました私の瞳と、斜に前に腰掛けた先刻の學生の眸とが出合頭に衝突ました其瞬間に、濃き眉の下、一重瞼の切長い眼の表情は、彼の心の狀態を分明語りました。と私は何とも云ふ事の出來ない一種の、心の動搖を覺えました。其時から終點迄再び顏は上げませんでしたが、帽子の徽章で大學生である事は知つて居ました。私は譯なしに唯もう氣が重く、人に顏見られるのが五月蠅く、洋傘を深くして車で家に歸りましたが、心の動搖は依然として、否、一人で部屋の内に居ると、其に色々な附の感情が伴つて、益々心は亂れて參ります。何かしてゐても、かう學生の意志の强さうな、冷つこい眸が、



お客樣　　青森　松尾千代子

私の心の底迄……果は一體私は如何な生涯を送るのだらう?如何樣な人の妻となるのだらう?男子つて如何な人だらう?才あり學ある男子は、榮華の夢を追つて權門にばかり集り、自信あり、智あり、能ある女子も、多くは身分の低い爲遂に生涯埋れて終るのではあるまいか?……雖然犧牲にされる女子は一層可哀想かも知れない?……今日の學生は後日どうなるだらう?儚ないやうな、淋しいやうな、今迄嘗て考へた事も感じたことも無いことが譯もなく、私の若い血を湧かしたり、冷したりするのです、而して私は何の爲斯心が纏れるのだらう、唯眸と眸が行逢つた迄ではないか、何も自分に對して……と斯う解釋しやうとすればする程霞に包まれた如にぼ

んやりして來るのです、私は悶えのあまり、寧ろ此空想を續けられる丈續けて見ようと云ふ氣になりました。

而て遂々家人には頭痛がするから、少し庭に出て來ると、無意識に木の多い植込の、人の見えない方へ、見えない方へとばかり這入りました。雖然此時は早始めの若き悶えてはなく、自ら嘲るやうな心持でした。而して心裡の壓力に押されて歩くと云つた樣子で足にまかせてやたらに庭の内を漫歩ました。泉水の周りも三度廻りましたし、築山にも二度登りましたし、常には行かない蜘蛛の巣だらけの茶亭にも這入ましたし、卯の花の咲いてゐる間を通りましたが、慰安となる物は、何も見當りませんでした。手には例に依つて「天地有情」を持てゐましたが、其すら一度も開けられませんでした。

歩き疲勞て始めて、西隅の栗の根方に腰を下し四邊に眼を止めました。

隙間もなくみつしりと、植込が青葉の枝を張つて、水分を澤山含んだ葉は、差入る夕陽に映えて、何とも云はれない鮮明な色に光る、其が夕の軟風にザア〳〵と私言く如な聲を上げて、葉裏を返すのでキラ〳〵と閃くのでした。

直ぐ眼前は立木をすいて、早稻田大學に續く高台、赤土の階段形のやゝ青草の平地、一直線の往還、雜木林、西洋館、瓦屋根等がらちもなく弱い入日に照つて、何となう淋しい都の中に居て、何處か斯う荒れ果てた榮華の跡でも見せられる如な氣持がするのです。

雖然、耳を澄すと汽笛、汽車の轟、人力車の轍音、雞の聲がこんがらがつて、都會の激しい生存競爭を想像せる、近くて鑿の音も聞える、私は暫時——無意識に耳に這入るから——と如に傾聽ました。

フト氣の付いた時には何程か、頭の中がすつきりした如に思はれましたが、扨彼事だつたと思ふと、再元の亂想に戻つて私は何者かに、追はれてもしてるかの如に急に速足て其處を去りました、が何時の間にか歩調はゆるんで、立木の間をくゞつて再び逍遙ました。

頭を垂れ、かう兩手を帶の間に突込んで、白い足袋の指先を見詰めた儘歩きました。而して時々は立止まつて顏を上げ——息をつくと云ふ樣に——空を仰ぎました、木の枝を、葉の隙を漏れて柔かさうな白い空が見えました、前の方で雀の鳴聲、枝を飛びかへる音が聞えましたし、其影も見えましたが、何の興味も、感じ

も引きませんでした。

私は逐々歩き疲れて今度は綠の草の上に、ハンカチーフ敷いて座りました、手當りに周圍の草を摘つては捨て、摘つては捨てして居ますと夢の如な、仄な聲が輕く琴線に觸れる如に感ぜられます、私は耳を澄して頭を傾げました、と今度は明瞭とした聲で

わがつみをあらひて
ゆきよりもしろくせよな……

細い高い聲が頭の上の私言の間を拔けて、高い高い空の白い雲の上に消えたとよふと思はれる頃、私は眼を向ふの泉水の方にそゝぎました。其所には妹の淑子が木の株に腰掛けて、編物しながら餘念なく歌つて居たのです、私は聲を掛けやうかとも思ひましたがまた思ひ返して、今度は樫の鬱然とした間に隱れて、其所でも時の三十分も茫然としてゐましたでせう、此時はもう私の頭は何の働きもしてはゐませんでした。

新綠の薄暗い間に、一人でじつと、座つて居ますと――一種の靜寂な、若葉の香が、靜ともつれた頭の裡に滲み込んで――乾いたパンに水を掛けた時の如――しつとりと落ついて參りますと、始めて今迄自分のして居た事が如何にも馬鹿氣て……誰か見て居なかつたらうか知ら……?と急にはづかしい如な……。

實際日頃から私は他人より感情は強い方で、常に泣いたり、笑つたり、怒つたり隨分氣狂ぢみた事も多う御座いますけど……まあ、何にしろ人間の心裡つて妙な物ですね――?男と女に依つて意に働くと、情に働くとの差はあつても、心の發達に伴ふて變遷する狀態は、異りは御座いますまい?

私は此事があつてから、青春さ感情の意義を痛切に味はつた考りで居ます、そらもう隨分思ひ切つた方に、思想を馳らして見ました、どんな……つて?

私だつて一通りの教育は受けてるんですもの、そら勿論今迄だつて若い男子とは度々電車の內や、途中では平常逢つて居ますし、杉崎の從兄さんでも雅さんでも乙也さんでも、宅に入らつしやれば、一緒になつて騷ぎ廻つて居たのです、雖然、彼樣な、妙な悶えと云つたらおかしゆう御座いますけど……兎に角彼樣…………彼樣感を抱かせられた事も、抱いた事も先にも後にもないんです。斯うして女は女らしくなつてゆくのでせうか。

心の底

ぎよう子

私が女學校へ入つたのはもう六年の昔になる。急に茫とした世界に放り出された樣な氣がして、何だか或るもの〻なつかしく、運動場の桐の木かげにた〻ずんではよく上級生のテニスや遊動木に餘念ない有樣を眺めて居た。が其中に黑い髮をわざと前髮はとらず、背のすらりとした、何處か寂しみのある、しかも優しらしい顔付の人があつた、年はもう二十才位であらう、それが即ち明星さんなので、同級生からは一目上に見られ、時に先生より大なる勢力を生徒の上に持つて居た、とある雨の日である。私の成績を妬んでる沖津さんと云ふ人に「錦織さんがあんなに豪ら相に云つたつて何て師範の試驗など出來るものですか」なんて云はれたのが、遂ひ私の誇を傷けられた樣な氣がして、一人自習室で泣いてたが一人二人とだん〳〵友達が集まつて樣々に問ふてくれる、チリン〳〵とけた〻ましく鳴る授業開始のベルの音に、機嫌をとつてた人も皆教室へ行つて終つて、跡には明星さんが一人殘つて居た。

「錦織さんどうしました」フイと窓から首さし入れて、教室へ行きかけの畑野先生がこう云はれると、明星さんは氣の落ち付くまで泣かせておいて下さいとか何とか云つてたが、先生は容易く「よろしいです」とうなづいて行つてしまはれる、あとで明星さんはいろ〳〵と親切に慰めて下すつて、お互に打とけて話しなどした。明星さんは枕の草紙位は能く分つて居るので國語の時間は何時もこの自習室ですごすのだ相だけども自分自身では一向そんな事を云つた事はなかた。とにかく私の目には明星さんが此上なく豪く見えて仕方がなかつたのだ。

其の後の事である。教室の掃除をすませて、歸りに一寸裁縫室へよると、楓會と名づくる五年生の有志が、明星さんの事を種々に取沙汰して居る。「あの邊であの亂行を知らぬ人は一人もない」「お宅へは始終男子の方許りが出入りして」などゝ口々に云つて居た。けどもそれは兄樣のお友達であらう。明星さんに限つて決してそんな事はとひそかに同情したのであつた。

かくして私は日一日と明星さんに親んで、二人の仲は誰知らぬ人もない位になつて來た。

柳の木の立枯れた堀沿ひみちを二人肩を並べて學校

から歸る頃は、もう日が落ちかけて、城山の上で群鳥がカア〱と立ち騒ぐ、明星さんは例の意味深か相な目でジッと高い空を仰いで、物音をとろかす樣な艶な氣取つた聲で「あゝ私には秋は餘りに酷だ、淋しくて」なんて私を引き入れて終う。そして路で同年位な青年に合ふと丁寧に向ふから頭を下げる。すると明星さんはハッとする程華やかな笑を見せて、輕く御辭儀をする。それは女に對しても左樣であつたが私の宅と明星さんの宅とは少し方向が違つて居たが、それでもその得意の文學論や宗教論をきくのが此上なく面白くて、いつも廻り道してまで、歩ける丈け一しょに歩いたものだつた。

一體明星さんは文學が好きで學校の文藝會の時などには自作の詩を獨誦したりする。私も趣味が同じであつたものだから、いつもよく分らぬ乍らも小説などの批評をしたりして居た、ある日「自然と人生」をかりる約束で、學校から歸りに始めて家へ入つて見た、暗い家！實際暗い家だ、外には時雨がふる。誰も居ないガラッとした、無裝飾の室の床には、小説類が山の樣に堆まれて、それらは尋常小學を卒へてから去年女學校へ入るまで讀んで居たものだ相な「お母さんは早く死ぬる！、兄樣は米國へ行つてるしお父樣と二人でこんな空屋の樣な家に住んで居るのよ」などゝ明星さんが燈火もつけず語つて居る所へ、ガラッと戶口が開いて、白髮の小やかましい相な爺さんが、のぶえ、お菜をまだ煮んのか」と云ひ乍ら入つて來た。私はおそろしくてすぐ辭し歸つたが、實際あんなでは嘸毎日が氣不味い事であろう。のぶえさんに結婚の申込みがあつても絶對に承諾せぬ所から、屢々親子の間に爭論が出來て、近所の人が仲裁に入つた事もあるとやら、親不孝の噂さは近所一般へ知れ渡つて居た。けども何しろ小學校を出た計りの私には、その獨身論がまだ、少なからず私を動かせていよ〱明星さんを信じて終つた。其内私は師範の入學試驗に見事落第して人々を驚ろかせたが、明星さんは一向そんな風もなく「それも藥になつてよかろう」と云つて居たが私も腹はすこしも立たなかつた。

かくて私が明星さんを思ふ度合は、ます〱熱烈なものとなつて終つた。明星さんが五年になり私が四年になつてからは、餘り物もよう云はない樣になつて終つた。其黑目勝な目で見られるのさへも、美しい笑を浴せかけられる時も、私は消え入る程はづかしくて、

明星さんの前では碌々人にも挨拶が出來なかつた。何だか眩しい樣に感ずるので……勉强してゝも、明星さんの姿が夢の樣に目の前に浮ぶ。男女間ではあの樣な戀はとてもようせないだらう、明星さんが私を愛してくれた事も勿論である。

てある夜、口で云へぬ思ひを到々筆に訴へて見た。姉樣と呼ばせて下さいと云ふ意味をなが〳〵と鉛筆で走りがきして、翌日笑ひ乍ら渡すと「これは何?」とも何とも云はず、何氣なく受取つて、そつと懷に入れて終つた。次の日は顏でも見られはしまいかと、はづかしがり乍ら學校へ行つた。やはり何時もの樣にすました顏だ。オヤ手紙の事は忘れたのではないか知らと思つたが、云ひ出しもせず一しよに歸ると、別れ際になつて「ハイお返事」と云つて封書をくれた。私の心は躍つた。家へつく間ももどかしく、歸る路々よんで見ると意外々々實に意外、今年十七の私には冷血無情など〻云ふ事は考へた事もないのだもの。明星さんの横町の足袋屋の前頃から涙が流れ〳〵ていつの間に家へついたかそれすら知らなかつた。その文言は大體次の通りであつた。

拜見致し候。淺學不才のわれをかくまでとうれしくも亦はづかしく候。誰か君の如き秀才を友として好める道をゆくをうれしとせざらんや、誰か君の如き優しき人を妹とよぶを喜ばざらんや。されども君に、余は君の願ひをきゝ入るゝ程左樣に濃情なるものには候はず(略)かく云へば君はあやしみ給ふべし、余は冷血無情をもて世に立たんと欲するもの、濃情多血は余の最も嫌ふ所に候。余も二年三年前までは濃情多涙をもて誇りしもの（畧）余は孤立を愛す。孤立を喜ぶ、人に賴らず人に謀らず。君に何とて人に謀らるゝの人たるを得んやに候。君に於て表面のわれと内面のわれとかく異なるをいなみ給ふとも、余に於て何かあらん。君よゆるし給へ余の情のうすき事を。君は常道を行き、世の常の人の上に出づべきの人、我れは世の裏面を歩みて裏面に終る心ものに候。余はおそろしき人、罪多き人にて候ぞや

（下畧）

私は書齋の中で手紙を抱いて泣いた〳〵。そして幾度も〳〵よみ直して見た。表面裏面、いまゝで春の樣な溫い美しい人情にのみふれて天國の樣なのどかな世を夢みて居た少女の胸はいま破られてしまつたのだ。「人に賴らず人に謀らず」左樣だ、左樣しようと決心

して、漸く涙のつきた夕ぐれ時明星さん方へ行くと、恰度臺所を片付け終へた所らしかつたが、何氣ない顔てまあお上りなさいと云ふ。上つてあつさりと笑ひもせず二人は語つた。「もうあんな事は仰つしやらないで唯の友達として交りませうねえ」と明星さんは云ふ。私は默つていろ／＼と明星さんの話をきいて、そして二人の手紙を集め二人の前で燒きすて、終つた、二人は夕暗の中を天にのぼりゆく煙の末のみを見つめて、て私はそれから書齋にのみ籠つて、人知れず、譯もない涙を流して居たが、母はどう思つてか毎日詰問して止まなかつた、それからがひどい神經衰弱にかゝつて、遂に人には頼らぬ始終變りのない神の愛に頼つてと到々洗禮を受けてクリスチャンとなつてしまつた、明星さんは其後何と思つてか、卒業間際に中途退學をして田舍に引きこもつて終つた、そして今までに見なかつた紅色などを交へた帶をしめたりして度々私の宅を訪ねてくれる。書計りを友として一年計りは隨分と煩悶を重ねたらしかつたが、遂にさる官吏の妻となつて、今は二人の子を儲け、全くの世話女房然として居る。近頃になつて明星さんには初戀の人があるのを知つた處からその名を云てからかつて見ると眞赤になつて笑ふ、やはり冷血無情はうそなのだ。全く二重の假面をかづい



田植　　陸奥 井上よし子

て居たので、元の多情の上へ冷血をよそほひ尚其上へ多血らしい鍍金をかけてる。今でも何が何やらさつぱり分らない事が多い。が明星さんは二三人の男子に失戀の苦しみを與へたのは事實なので「余は罪多き人恐ろしき人にて候ぞや」の解釋が始めて今出來た。

昨日も一寸買物の歸りを寄つたら、乳をはだけて、幼ない子に乳をふくませ乍ら「錦織さん、もう結婚なすつてもよいでせう」などゝ、昔の獨身論はどこへ行つたと云つた風な顏をしてる。

私はもう明星さんに對して、何等の尊敬も戀愛もゝつて居らぬ。六年來の古き友として互に親しくはするものゝあの忘られない手紙事件などは双方共忘れた樣な顏をして居る。又同情するらしい言葉などはお互に云つた事はないが、其實夢見の惡いにつけても友の身の上を思つて居るのだ。

かく美くしく化粧して、おとなしやかに向ひ合つてる處などを昔の友に見せたら「あの男見たいな人が」と必つと驚くだらう。私もとつて二十一才明星さんから讓り受けた獨身論の前にも、もう降參しかけて居る。

二階から

陶山すゑ

朝御飯が濟むとお時はプイと二階へ上つて仕舞つた。

『髮でも結はうかしら』と鏡臺をグイと持つて椽側に持ち出し、そゝくさと束髮をほどいた。二三遍梳いて根を結んで直ぐくる〳〵と束ねて仕舞つた。あんまり茫々して居るなと思つたが『何に什麼だつて介意やしない。どうせ離縁された身軀なんだもの』と語尾を震はして居た。前髮を梳き乍らあんまり凄い顏してゐると思つて左の手で眉を撫でゝ見た『矢張私の境遇が恁麽にしたんだ』と勢のない顏をして『馬鹿ナ』と云つて一寸笑つたが、其笑顏にハッとして『あ。笑顏がまた變つたな。嫁時代には媚びるやうな笑顏だつた。娘時代には無邪氣な笑顏だつた。それが恁麽、怨むやうな笑顏になつて。本統に……』胸の中がカッとした。『甚麽に成つたつて介意うもんか』と眼をキッと据ゑたが、又勢なく立ち上つてフラ〳〵と表二階の方へ行つた。道路に面した格子にブラ下るやうに確と握つて

凝乎と下を視た。

道路の兩側に植ゑた柳の木々の一本が、丁度窓の正面に茂つて居て、朝日が照る。初夏の風が吹く。それがひよつと癪に觸つた。日常なら活動の夏が來たと淸々する筈なのが、今日に限つて、否此夏に限つて妙にひねくれて厭な氣がした。

グッと視線を轉じて斜に通りを觀ると、仕立おろしの袷の人や、新らしい洋傘の人やが、乾ききつた土の上をいそ〳〵通る。魚屋が眼玉を飛び出しさうにしてクックと行く。不意とお向家の淺黃の幕が眼に入た。

『あ今日は御祭禮だつた』とお時は落膽した。

が、別に御祭禮だから何か故障が在ると云ふ譯では無いけれど、何かなしに氣が落ち込んだのだ。

『何だつて私は恁麽にひねくれになつたろう？從順な無邪氣な娘だつたのに……二年の間に恁麽根性に化つて仕舞つた。然うだ溫かく赤かつた血は冷い黑い者にされて。けど誰を怨んでも仕樣がない。境遇がしたんだ。社會がしたんだ』

身體がゾウと冷たくなつて、溫かい情や美しい愛なんか離れ去つた殘骸のやうな氣がして自暴自棄ぎみの笑顏をしてまた通りを觀た。

觀るとお時はズーッとかけ離れた處から、社會を眺て居るやうな氣がする。取り澄して行く人、腹立紛れにけん〳〵と步むやうな足つきの人、愁を包んだ風にうつ向いて行く人、其人等の裏面の樣子や心持ちを知りたいと思つた。

ワアッと聲が涌いて祭禮の屋臺が二軒置いて隣の横町から曲つて流れ込んで事た。

『や。屋臺だ、屋臺が來た』と大聲に叫んで飛び出す小僧、首出す女、嬉しさうな顏々を見渡して、お時は冷笑した。木遣り節や太鼓の音、揃ひの法被着て鉢卷してかついで行く大勢の若者の、旺な活々した樣子を一瞥してお時は又冷笑した。

『何に今に勞れて仕舞うわ。魂だつても。肉だつても、』憎らしさうに呟いた。が不圖、自分が無形の戰ひに敗れて勞れて、其敗け惜しみを云つてるんぢやないかと思つた。

夫れが通つて仕舞ふと騷々しさが稍靜まる。お時の氣も稍落付いた。それて下に降りかけた時、下の座敷て赤坊の泣き聲が聞える。『あ。叔母さんがまた來たな秀ちやんを連れて……。フム下に行くと又御世辭云つたり赤坊抱いてやらなくちやならないから厭だ。眞

個に人つて煩いもの」苛々思ひ乍ら自分の部屋に引き返して本箱の前にどしんと坐つた。そして本箱から小説本を五六冊引きずり出して、とある一冊を讀むともなく一枚一枚めくつて看た。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

其夕方であつた。叔母さんと母さんは御祭禮に行き父さんは會社から未だ御歸宅がない。女中は二人して女中部屋に引込んで居る。

其時、お時は裏二階で復讐の是非や、悔悟なんと云う事に就て考へて居た。

突然――。

「え私は死んで仕舞ひます。えッ放して下さい」

「ま。待て!!氣を、落ち付けて。氣を沈めろ」

「――奥樣、氣を落ち付け遊ばして――」

「……ウム……」バタ／＼と狂ふ音。

「叱ッ靜かに……外聞が惡いから靜かにしろ!」

「え丶私が生きてたら倘外聞が惡い。惡い。えッ口惜しい」

「御義兄さん外聞が惡いたら何故善いやうにしません。貴方が恁麽にさせたんぢやありませんか。貴方什麽して下さるんですッ。噫御姉さん!!――」

と泣き聲。

あ。隣りで又やつてるな。」とお時は小氣味のよさ丶うに笑つた。可憐いさうでも何でもない。死ぬつてつたら死なしてもよい。又人が大勢居る時を見て死ぬなんて……ホ丶丶、あの人等の心理を解剖したらさぞ」

お時は勝利を得たやうな氣がした。そして侮蔑の色を浮べて嘲笑ひ乍ら

「ホ丶丶二階から見てると、種々の事が有つて世間て眞個に面白い」

小野さん

原田琴子

小野さんはまた結婚するさうだ。もうこれで私が聞いただけても五度目。廣い世間にはこんな人もないではあるまいが、まづ大抵の女なら三度目となるともううんざりして終ふ。けれども小野さんはよく戯談の樣に、「私は貞女兩夫に見えずなんて杓子定規な事を、御規則的に守りやしないわ、相愛の戀しい夫にでも死に別れたら、それこそ尼さんにでもなつて神妙に菩提を

葬ひますがね、氣に入らないで出されたものなら、何度でも相手のある限り結婚しますわ」と云つてゐた。全くさうかも知れない、して見るといつも嫌はれ口と見える、と可笑しくなる。

一體小野さんは、おとなしい女らしいと云ふ性の人ではなかつた。二十世紀式のお俠だ。藝者肌の人だ。地方の或る女學校の卒業生で、私とはもとより學友ではなし、外に親しく交際したと云ふ譯でもないから充分なことは知らないが、五年前の夏だつた、私が眼を病んで病院へ通つてゐた頃に知合になつた。やはり眼が惡くて私よりは半月程前から通つてゐたさうだ。前を廣くとつた前髪をつんと出して、ゆるく下髮につけてぐつと根をおとした銀杏返しの粹な人だつた。袴をはいた人とはどこから見ても見えなかつた。容貌は良いと云ふ程でもないが、色白の丸顏でぱつと人目に付きやすい、はでな顏であつた。まづ見たところからこんなであるから、私はあまり親しくしなかつたが、毎日々々時間で間違なく顏を合はせるのだから、知らず知らず、會釋する樣になつた。一言二言口をきく樣になつた。尤も私の方から進んで話すのではなくて會釋するから、會釋をする、話をするから返事をすると云ふ機械的に接してゐる中に、小野さんの人となりを知るに至つた。とにかく一風變つた人である。他人の私に何でもしやべつて終ふ。

お母さんも恐ろしいヒステリ――て――私はむしろ狂人に近い人だらうと思つた位い――毎日何をするでもなく朝から晩迄長火鉢の傍で片肱を付いて小說本を讀むのが仕事だから、あの鋭い光つた眼で内中の人の、殊に私には特別に、睨み付けてゐるのだから堪らない、皆がチリ〳〵してゐる、それに私が橫着者ですから折々、あんたの躾が惡いからだ、とお父さんの處へ餘波がゆく、お父さんはぐうもすうもなくへたばつて終ひなさる。私は傍でどうしたらいゝかしらとビク〳〵してゐる。私はお母さん程きつい恐ろしい人はあるまいと思ふ。お母さんの顏を見るとどつとあるものが胸へひゞく、聲をかけられると全身がピク〳〵として電氣にでもかゝつた樣になつて、進みもならず退きもならずそこに立ちすくんで終ふ。靑筋の立つた額、細くて鋭い目、尖つた鼻、一つとしてやさしみのあるなつかしみのある處がない、私は顏からして恐ろしく出來てると思つて傍へよるのも嫌で嫌でならない、出來ることなら、お母さんの手から放れて終ひたいと思ふ、

だから着物一つお母さんにはねだつたことがない、母の愛を知らないほど不幸な者はありませんよ。と小野さんは云つてゐた。

お父さんはあまりよくない家から養子に來たのださうな、小野さんの家は堀川通りの材木屋でかなりの財產家である、ところでお父さんはお母さんの前に頭が上らない、お母さんは虎のやうな勢で一人で家中をひきまわしてゐる。少しでも氣に入らぬことがあれば三日でも四日でも寢たきり頭も上げない、お父さんはほとんど持て餘して燒けたゞれた金にでもさわる樣にオヅ〳〵してゐるとか。兄弟は兄さんが一人ぎり、この兄さんは至つて靜なおとなしい人でお母さんのお氣に入りださうな。この妹に生れた小野さんはすつかり性質が變つてゐる。花やかな花やかな人だ、針でついた程も憂の色は見えなかつた。

小野さんには戀人があつた。命をも捧げた人かどうかは知らぬが、兎に角はなれがたい人があつた。松川と云つた。二三度病院へ呼びに來たことがあつた。

或る日私は診察がすんで玄關へ來ると、下駄番の婆さんに、

「小野さんは來てゐるか」と尋ねてゐた男があつた。

あれが松川だつたさうだ、あとで給仕に聞いた。二十七八の頭をテカ〳〵に光らして、金緣をかけてゐた、格別に大い目で私の出て來るのをギロリと眺めた、いやな男だと思つた。

また小野さんの家からは少しでも歸へりが遲いと小僧が「まだすみませんか」と尋ねに來る。もうお歸りになつたと云ふと、お母さんがとこ〳〵やつて來る。それ位なら人を付けて置けばよからうにそれ程でもなかつた、それかと思へば小野さんは、早くすむ日と遲い日とある、歸りが不同では家で叱られるからと云つて、早い日は病院で遊んでゐたりしたこともある。こんな風だから小野さんは自由に飛びまわつた。

それから二三日たつてまた松川が病院へ來た。下駄番の婆さんが、

「小野さん松川さんが來ましたよ」と知らせに來た、

「私いやだわ、居ないと云つて頂戴」と小野さんは一寸眉をひそめて云つた。

「それでだまつて歸るもんですか、またとこ〳〵上つて來ますよ」

「だつて私あんな人に逢ふ必要がないもの、もう歸つたさうなと云つて頂戴」と突慳貪に云つて、暗室へか

くれて終つた。
婆さんは「ほんとにあの人にも困つて終ふ」とぶつぶつ云ひながら去つた。
あとで「ねえ、私どうしようかしら……なにしても私がだまされたのが悪いわね」と云つてゐた。
けれどもどこにも心配らしい色なんか見えなかつた、いつもの花やかな顔でニヤリ／＼と笑つてゐた。
その翌日だつた。
「昨夜私の處へ盗人が入つてね」と云ひ出した。
「え、盗人が」と私は小野さんの顔を見詰めた。
「エー二時頃にね、私ほんとに恐かつてよ」とあたりを一見まわした。
お父さんもお母さんも兄さんも皆が母屋で寝る、私と下女とかはなれて寝る。裏の塀を越えて植込みをぬけるとすぐ私の部屋だ。あついせいか寝苦るしいのでふと目をさますと何だかコト／＼と變な音がする、やがてざわつと音がした、どうも斬切頭が障子にさわつた音の樣だ、ゴホンと咳拂がした、私はハツと胸にこたへたことがある。ブル／＼しながらそつと床を出て次の室にねてゐる下女を起して番頭を呼びに行つて呉れと云ひつけると、行くも恐いしあなたを一人殘して行くのも心配だと云ふ、それぢや私が行くと云へばあとへ一人殘るは尚恐ろしいと云ふ、だつて二人は行けないし仕方がない早く行つて來て呉れと無理に走らせて、私は簞笥の蔭にかくれてぢ



肖像　矢名氏

つと息を殺してゐた。障子が少し開いた樣だ。私は心を大きく持つてうむと力んで、いざと云ふ時には女ながらもと丁度傍にあつた二尺ざしを持つて身構へたがそれも形ばかりで、今にも飛び込みはしないかと思ふと、わけもなく體がすくんで終つて齒もあはないほどぶる〳〵して、天井をバタ〳〵する鼠の音にもひどく胸をおどらしてゐた。そこへ下女と番頭とが走つて來た。番頭はすぐ私の部屋へ行つた。私は尙かくれて樣子をうかゞつてゐた。障子ががらりと開いて。

「コラッ、貴樣は何だ」と番頭の聲で云つた。

「うむ僕は何でもない、こゝの娘に用があつて來たのだ」

私はハッとした、あの聲はたしかに松川に相違ない。

「何だと娘さんに用がある、生意氣なこと云ふな、用があるなら何故晝玄關から來ない、どうせ金が欲しくて來たのだろう、どぶへ捨てる金があつても貴樣等にやる樣な金は無いわい、サッサと歸へれ」と番頭は早口でどなりたてる。

「馬鹿ッ、金に不自由する樣な、俺ではないぞ。俺は立派な娘の夫だ、すでに娘は姙娠して居るぞ、それでも貴樣は疑ふのか」松川はだん〳〵落ち付いて來る。

「貴樣氣が狂つてるな、サッサと歸れ」

「君に用はない、娘を呼べ」

「娘さんは居ない」

「居ない、きつと居ないな、うむよし、居ないなら居ないとしておけ、聞けば近い中に嫁入するそうだが、どんなことがあつても俺が邪魔をせずにはおかんからさう思へ」

私はどうなることかとわな〳〵してゐる。下女は傍で何やら小聲で云ふ、けれども私はそれどころではなかつた。まだ何か云ひ合つてゐたがどうやらかへつたらしい。私はまづ胸を撫でおろした。後で二人にさんざん說諭された。召使風情にこんなことを云はれるなんて私は馬鹿らしくていま〳〵しくてならなかつたが、私にそれだけの弱みがあるのだから仕方がない、だまつて半分は上の空で聞いてゐた。かわりに今夜の事はお父さんやお母さんに內々でおいてもらふことにして私はやつと床へ入つた。

小野さんは語り終つてまたあたりを見まわした。こんなことを話しながら左程心配らしい顏さへしなかつた、いつものいやなニヤ〳〵とした笑ひ方をしてゐた。寧私の單調な身を淋しくはないかと云つた樣な、そ

して何人にもたやすくは得がたいと思はるゝ子と云ふ誇の色が表はれてゐた。

私は「まあ」と云つたきり何とも云へなかつた。心でそう思つた。親にも云はないこと迄私に話すなんて、かのお母さんの血を受けただけにこの人も餘程變つてると。

またいつてあつたか、

昨日七ツ寺に琴の溫習があつて見に行つた歸へりに知らぬ男が、

「姐さんあなたはどちらですか」とふいに聲をかけたので私は一寸びつくりしたが、

「堀川の方です」と云ふと

「お父さんは何してるの」とつかねことを聞くから

「車引です」と云つてやつたら

「えゝつ、ぢやお母さんは」

「灰買ひです」

「兄弟はありますか」

「兄さんがあります」

「何してゞす」

「棒手振です」

「あなたは」

「下女奉公してゐます」

「女中がそんななりをしますか」

「これは借着なんですもの」

あまり一々聞くので馬鹿らしいから、口から出任せに成丈下等の者を云つてやつた。尤も男は眞面目で聞いてゐなかつたが、そこへ二三間先にゐた小僧が戾つて來て

「孃樣、早く行かないと叱られます」と云つたので、男は「それご覽」とぽんと私の肩をたゝいて横町へ折れた。とこんなことを云つた。

「よくそんな事が云へましたね」と私は呆れた。

どうしたつて若い娘が、男に聲をかけられて、そうべら〳〵しやべれるものでない、顏を赤くして逃げ出すだろうと思ふ、私だつてさうだ。そこが小野さんの小野さんたるところだと妙なところで感心した。

一兩日だつたから私がいつもの樣に診察所の入口のわきの壁にもたれてゐると、小野さんはあちらへ行つたりこちらへ行つたりぶら〳〵してゐたがつと傍へ來て、「岡田さん、私此頃變な氣になつてね、どうしても死にたくなつたわ、あなた一緒に死にませんか」と戲談の樣なさうでもない樣な妙な一種獨得の小野式の調

子て云つた。
「馬鹿な、私あなたと心中なんかすることいやですよ」
と云つてやつた。
小野さんはニヤ／＼笑つて、「死ぬとはいやですか」
と云ふ。
「何も死ぬ理由がありませんもの」
「私だつて理由はありませんわ」
「それぢや何故死ぬの」
「何故つてたゞ死にたくなつたからさ」
「それ位なら大丈夫、まだ百年位いは死にませんよ」
と茶化してやる。
「誰だつてさうだわ、これ／＼と云ふ確實な原因があつて死ぬのではなくて、そりや中にはさういふ人もありませうが十人の中九人迄は、たゞ何かなしに此の世が嫌になつて、死にたくなつて死ぬのだと思ふわ、それを局外者がやれ何か原因のどうのと死人に口なして勝手な理由を付けるのだわ、やはり死神がつくのよ、あなただつて今はさう云つて入らつしやるが、そこへ死に神が來てそつと肩へ手を置てご覧なさい、きつと死ぬ氣になりますよ」と少し眞面目になる。
「ほゝゝまるで曾我の家式ね、私はさうぢやない、到底此の世に生存の出來ない敗者が、社會から自然に陶汰されるのだと思ふわ」と云ふと、
小野さんは何か云ひかけたが、看護婦が「小野さん／＼」と忙はしく呼びに來たので診察所へ行つた。歸つてから眼をこすりながら
「昨日とう／＼買つたの」と分らぬことを云ひ出した
「何を」
「藥をさ
「藥つて」
「硫酸を、あのね昨日小僧が銀行へ行く時に、お父さんの判を一寸借りて……」と少し聲を低くして、
「えつ、よくそんな大それたことが出來ましたねえ」
と思はずたしなめる樣に云つた、
「だがね今は死ないの、分ると小僧が可愛さうですから、も少し過ぎると海水浴に行くから、その時行衛不明になつてね、そして死ぬつもりなの」
何だか馬鹿らしくなつて來たので、
「おや／＼用意周到ですね、それ位いなら藥なんか買はなくても海へ入ればそれぎりぢやありませんか」
「でも海なんかへ入ることはいやですもの」
「死ぬにいやのなんのと我儘だわ」

「どうせ死ぬのですもの我儘も云ひますよ」

「それで買つた位いなら早くお死なさいな、手傳つて上げませうか」と混つかへしてやつた。

一體この人は何を云つても上辷りがしてゐて、心から出たことゝは思へない、そしてニヤ〱と笑ふのが癖であつた、それでこんなことを聞かされても氣の毒とも何とも思はない、同情なんかし樣にもし樣がなかつた、私はこんなに情が薄いのかしらと自分で自分を疑つたこともある。けれども實際誰れてもさうだつた、給仕なんかも「小野さんの云ふことなんか何だか分りやしない」などと云ふてゐた。

四五日後に私は用があつて廣小路へ行つた時に、日の出軒のあたりで小野さんが松川と歩るいてゐるのを見た。私の顏を見るとニヤリと笑つて洋傘で顏をかくした。

波紋

横瀬文子

「ひやあ、もう此蕗も今月限だて、はんげになつちや食へねへだ。」薄らぬむい梅雨時の日が一ぱいにさして、汚く黑光りしてゐる椽端に、葉ごとの蕗が山の樣に積むであるのを、莚の上にダラリと坐つて、呑氣そうにゆつくり、皮をむきながら、母親のお德は獨語ちた。

油に汚れた、半白の少ない髮を小さくおばこに結むで、錆びた鐵の簪で止めてゐる上から、薄汚のした手拭をふはつと被つて、日に燒けた、皺だらけの頰を齒のない爲か妙にむごむご動かしてゐる。

「どうしただな、お春は、遲へぢやねへか。」呟いた。

ガタゴトと簞笥を拔差する音が、十分ほど前に漸く止むで、小きざみな、吾妻下駄の音が、臺所と入口兼帶の暗い長土間に、次第に近づいて來る、娘のお春だ。一張羅の新銘仙か何か、細い飛白の單衣を、それでも裾長に着て、めりんすと唐繻子の腹合せ帶をキリッと結むでゐるのは、流石、一年でも横濱に奉公しただけあつて氣持がいゝ、それて田舍には、一寸稀な、色白だけに、村の若者等に戲言の一つもかけられるを母のお德は心私に自慢らしい。

「お母さん、じやあ行つて來るよ、だが、奥樣に逢つたら何ていふの？……」「何たつて先さおらがゆつ

た樣にいやい丶だわよ、そいから歸りにな、中屋で中白買てきてくんな、百匁だけ。」「そう、じや行つて來るわ、お茶になつたらね、戸棚にい丶お團子が入つてゐるからね、清坊が歸つたら畑へ持してやつとくれ。」「そうか、成丈早く歸つてきなよ。」「あ丶。」甘へた樣に返事していそいそ出て去つた。

　僅な給金を大事に貯めて、横濱の勸工場邊りで買つたら！い、オリーブ色の淺張をパッとかざして裏口から田圃へ出た。

「お春ちやん、どけ行くだ、いやに粉粧でるじやねへか。」後の方で出拔けに男の聲がした。

「おや誰かと思つたら、壯さんかい、まあ、寄つといてな、お母がゐるよ……」なんの氣なくお春は云つた。「だが、お前どけ行くだあね、又、辰雄とかバッ雄とか、目鏡のとけ、行くんだな……」「知らないよ、私しや、お母の用で使に行くんだわよ。」見向きもしないで、例の東下駄をカラコロと可愛い音さしてスタ〳〵行つて了つた。

　壯と呼ばれた若者はボンヤリ見送つて、如何にも大樣に、「カラ〳〵」と笑つたが、何處か淋しかつた。

　二十八九の眉毛のピン〳〵した、巖丈そうな大男だ。盲目縞の仕事着の上に筒袖の印半天着て、ぐるぐる卷した腰の三尺には切の好さそうな、木鋏が挿てある。

「壯さんじやねへか？」お德は聞き付けて呼んで見た、「お丶お母あ、ゐるのか、い丶天氣になつたな。」「お丶、お前、なに笑つてたゞよ、」「なに、裏口でお春ちやんに逢たゞがな、馬鹿に美い女になつたなあ……どけ行ただね？」「なにさ、大庭樣へ地所の事つて使へに行ただがな、いけねえよ、あいても十八だて。」「そうか、躰が大きいから二十位にや、見へらあ、もう嫁物だな……」「あいでも貰へ手があるかな……」かうはいつた物の嬉さは包みきれず、ニコ〳〵して壯の顏を見た。男は感じの惡さうに澄した顏して、鉈豆煙管でスパスパやつては、ボン〳〵とはたいてゐたが、「アヽア丶」と如何にもだるそうだ。

「どれ、行くべえ」重そうにいつて煙管を藏つた。「まあ、い丶じやねいか、澁茶でも吞て行きねへ……」

「なあに、晝休みにちよつくら、來ただよ。」「そうか、今どこの仕事してるだね。」「中原の別莊だがな、いま一月もか丶るべえ。」「ふうん。此間豪へ立派な植木が入つたつていふじやねへか？」「お丶女松だ。だが、駄目だ、森本の旦那の樣にやあいかねへ。」「そうかな……

……「じやあ、お母あ又くべえ。」「そうか、じやあ、晩方ゆつくりきなよ、お春も歸つてくるから。」聞えたのか、聞えないのか、壯はいらへもせずに、ノソノソと出て去つた。

此の家は、土地に相應の田地も有して、先年、お春の父親が歿してから、今は兄の代になつて、至極質朴に田園の空氣を吸つて、黃金波打つ秋を樂しんでゐる。で、此春櫻の盛り頃、お春が横濱の奉公先を、末子育ちの我儘から、辛いを言ひ譯に、無理やりに暇を取つてきたが、根が初心だけに、嫂との折合もよく、長い事、續いた、紛紜が元て、東西も分ぬ乳呑子を抱へて戻つてきた、姉のお定も中へ入る人があつて兎に角、無事に緣家へ納り、家には一人孫の清一も、大のお祖母さん子とてもう此頃のお德は、それはホク／＼物だ。



かやり　水戸　北川うめ子

漸く剝いた蕗が、アク出し桶に一ぱいになつたので、お德は一寸立つて、伸をしたが、二布の前掛をざつと振つて、被つた手拭ひを取つた。肥つた體をだるそうに運んで、圍爐裏の端に、暫うとうとしたが、清一の足音に目を醒して、ニコ／＼しながら、焚火に燻つて眞黑になつた大戸棚の重い戸を、力一ぱいに、ガタ／＼開けて、山に積んだいも團子の皿を出した。上の方を五つ六つ、清一にやつて、自分

も二つ三つ、食べたが後を大きな四角な盆に上せて、側に三つ程、茶呑茶碗を伏せて、茶澁に汚れた、瀬戸の大土瓶に湯を注しながら、「父ちやんや、お母が待つてるべえから、早く持てゝやんな、好い子だからな。」

お祖母さんは可愛くてならない樣な顔して言ひながら、つと立つて、一月程前に圍爐裏の上につるした、手製の松魚節をさわつて見た。

清一は、素直に首肯いて、手に持つた、團子を懷中に押込み、兩手で重さうに、茶受けを持つて、小走りに、畑の方へ行つた。

「清ちやん、お茶かい？」優しい聲して、お春が歸つてきた。

二三日前から巣についた、雌鷄を眺めて、ボンヤリ立つてゐる。「お春、馬鹿に早えじやねへか、何したゞよ。」お德は氣遣かはしげに言つた。

「何もしないよ。」投出す樣に言つて、幾度か水に入つたらしい紫の風呂敷を解いて、ふつくりひねつた、菓子包を出した。

「お母さん、奥樣が下すつたんだよ、何だらうね、まあ、奇麗だ、横濱にゐた時、吉田樣のお孃樣がよく下すつたつけ、本當に好いお孃樣だつた。」うつとしさうに後れ髮を撫上げながら、紅白のマシマローや、バナ、ケーキを、お德の前に置いた。

母親は何かなし、嬉しさうに、一つ、つまむで、「奥樣は何と、言ひなすつたな、辰雄旦那は御出でだつたかな。」お春の勞を謝する樣に、優しくいつた。

「奥樣がね、何れ私が上つて、お母さんによく、お話するつて、おつしやつたよ、辰雄樣はお留守さ。」

「そうか、今日は日曜だつて、いふじやあねへか？」

「あゝ、横濱のホテルに會が何かあるんだらう……。」煩さそうに言つた。

「ヤレ〳〵お忙しいこつた。」といつて又お德は横になつた。

「お母さん、私の留守に誰か來て？……」「おゝ、壯さんが來てな、お前の事、豪へ賞めてたよ。」

「まあ、いやな奴。」お春は一寸顔を染めたが、眞實、いやそうな顔をした。

お德はいつか、目を瞑つてうと〳〵してゐる。

「呑氣な人だ。」冷かに、口元で笑んで、結ひたての髮形を自棄にがり〳〵梳てゐたが、不意に氣が付いた樣に、戸棚から錆びた、ブリキの鑵を出した、ザーと買つてきた、砂糖をあけて、空の袋を少さく丸めて、ボ

ンと土間に投げ付けた。

そして力なく、太い柱に身を投げて、どんより曇つてきた梅雨空を眺め入つては、惚りして、「此儘ズッと氣持よく、死て了ひたい。」などゝ思つて見た。

「ア……」と、太い溜息したが、急に思ひ立つた様に、「着物を着換へ様」と、奥へ入つた物の、さて、着かへるでもなく、グタリと箪笥へ寄かゝつたので、グラッ／＼と、揺れて、上に立掛けた、小さい懐中鏡が落ちた。

お春は慵げに、鏡を取上げて、チッと、見つめたが、ニヤ／＼、笑つて投出した。

始終、伏目勝ちに、牡丹を彫つた、帯止めの金具を幾度か、はづしたりして、妙に沈んだ。

田舎少女の、清かりし、お春の胸も、遂も、強いバニチーに燃たのだ。

「あゝいやだ、田舎育ち無教育、お安さんだつて、さして教育があるとも、思へないわ、笑談にしろ、奥様の前て、口惜しいわ、何しても口惜しいわ、奥様が私の髪をお賛になつたのが、それ程、腹が立つのかしら、高が、小間使。」

今日、お春は使ひ先きて、何か烈しい侮辱を感じたのだらう、イラ／＼する胸をおさへて、ホロ／＼、熱い泪を溢した。

「私しや、何故、こんな百姓家に生れたのだらう、もうつくづく、田舎に愛想が盡きた、いつそ、若い中に思ひ断つて、ても此の間、辰雄様のおつしやつた事、田舎、それほど美しいかしら、あゝ、私だつて、私だつて。

キッと振り仰いだ、張りのある目は、美しく輝いた。

突然、コケーコーと、血を吐く様な、雄鶏の聲に、愕然して、着物を着換へた、

面倒くさそうに、外行着を繻絆重ねたまゝ、煤けた、釘につるして、急いて庭に降りた。

「水をやるのを忘れたのだ、」と思つて、手近のバケッをさげて、井戸端へ行つた。

清い清水をためた、井戸は溢れそうになつて、柄杓が浮てゐる、お春は汲まふとして井戸側に手をかけたが、ふと、水に寫る自分の顔に氣がついて、暫し見入つてにつこりした。

鶏は一齊に、聲をか、、らして、水を待つてゐる。

お春は「今、直ぐ、あげるよ。」となだめる様に、優しくいつて、柄杓を沈めた、刹那、スーと大きな波紋が

出來て、クッキリと浮いたお春の笑顔は消えた。

盗難

岡本喜代

今日はお休みの晩てある。素山は切々と書き續ける。
「貴郎！尙お書きなさるの？もう十時てす。」
と、細君が云ふ。
素山は煩いから返辭をしない。
細君は縫ひかけの浴衣を押し遣つて、机の傍に寄る。
「ねえ貴郎、……貴郎つたら貴郎！」
「何だ！」
顏見合せて莞爾する。
「近頃は物騷だから、お留守だと、妾恐いわ。」
と、甘える。
「恐い？何恐いことがあるもんか。恐いより淋しいんだらう。」
素山は筆の軸て細君の下豐の頰を一寸突く、突かれた處が笑靨になる。
「泥棒が入つたら、妾何うしよう。」
「泥棒が入つたつて、何も盗られる物はないぢやないか。」
素山は室內を眴して、これて簞笥があると可いんだが、と思ふ。
「だつて、お鍋一つ盗られても滿らないわ。」
「月夜に釜を拔くつて、いろは骨牌にあるが、闇夜に鍋を盗る、そんな卑吝な泥棒はあるまいよ。」
と、笑ひながら欠伸する。
「氣樂な事ばかり被仰つて、もし出齒龜が入つたら何うします。」
「はゝゝ、お前の標致ぢや、まア其樣な心配はなからう。」
細君はプッと膨れる。
素山は笑ふやうなものゝ、もし其樣な事があつて、細君の節操を盗られちや、それこそ一大事だと、眞面目になつて、細君と相談の上、これから細君の枕下に護身用の短銃を置くことにした。
今日は早い、と被仰つたから、もう歸つて入らつしやるだらうと、細君は鏡に對つて鬢を搔く。圓髷に結つて、赤い手絡を掛けてゐる。色は白いが、口は大き

い。寤めて見て嗒然する。火鉢の前に坐つて、鐵瓶を觸つてみる。火を埋ける。さて所在がない。お腹が空いた。食卓の上の香の物を撮むで、お茶を飲む。甘しい、漬けて二三杯飲む。

「編物でもしようか知ら。」と、編掛を取りに起つ。編棒がない。ない筈はないと、針箱を引繰返す。ないものは矢張ない!

「アヽさう〳〵、此間原稿綴ぢるんだから貸せつて、錐の代りにお使ひなすつたッけ。」

ゴト〳〵机の抽斗を探す、此處にもない。

「何うしたんだらうね。」と、肘を突いて頬を拄へる。

跫音がする。ソレ歸つて入らしッた。と、急遽机の上を片附ける。話聲がして通り過ぎて了ふ。オヤ〳〵。

細君は原稿展げて、讀むともなしに、四五枚撥ねる。眼に著いた一節がある。——

良人なる者曰く、細君は信用の置ける留守番なりと。留守する細君こそ氣の毒なれ。今夜も亦、お歸りがないのかねえと、怨めし氣に時計瞻げて、嫠や、もうお寢!細君は眠られもせず、火鉢に凭れ、鐵瓶の湯の沸き返る思ひなるべし。

「まア厭な!此樣な事書いてらつしやるんだよ。早く歸つて入らつしやれば可いに、……」

チン〳〵〳〵。隣家の時計が鳴る。

「四ウ、五ウ、六ウ……十一時だよ。遲いこと。お隣家ではお寢みなすつたらしい。森としてる。」

臺所でゴトリとする。ピクリと心が躍る。

「鼠か知ら、シッ〳〵!」

ガラ〳〵ッと車の音がする。

「遲くなつて俥で歸つて入らつしやつたんだ。」

聽耳立てると、四五軒手前で、お歸りッ!と車夫が叫ぶ。

細君は萎頓して了ふ。

「眞實に何う爲すつたんだらうねえ。……情死か何か有つて、忙しい所を、色川さんが復何處かへ繁込んだんで、代りに書いてゐらつしやるんだよ。乾度爾うだわ。それでなきや此樣に遲くなる筈がない。それだと、お歸りになるのは未だ却々だ。妾御飯食べッ了はうや。折角お所好なフライを拵へて待つてるのに、社て天丼か何か召上つてゐらつしやるんだよ。……色川さんは何ていいと、内のを引張り出して遊びに連れて行かうとするんだよ。内のが堅いから安心だけれ

ど、……彼樣な厭な人つたらありやしない。男の癖に緋縮緬の襦袢なんか燦して、冶けてるけど好い男だわ。女の子がヤイ／＼云ふのも無理はないねえ。けれど妾は嫌ひさ。矢張内の人の方が……。

細君は一人で噴飯しながら、枵腹に健か食べる。氣が重くなつて睡魔が魅した。愆うなると待つ氣もない。例の通り枕下に短銃を置いてグッスリ寝る。寝込むと、ドン／＼敲かれても却々覺めない。

枕下でガサ／＼する。

夢現で、「貴郎てすか。」

「ウム。」

細君はドシンと寝返りを打つて、ムニャ／＼／＼。

不圖眼が醒めた。急いで上圊する。

白々明けて天が蒼い。

「オヽ好いお天氣！今日こそ早く起きて洗濯しましよ。……オヤ、昨宵歸つて入らつしやらなかつたのか知ら。……」

と、細君は熟と、夫れからそれへと考へる。確に枕下に置いた短銃がない。

「サア大變！泥棒が入つた。アラ！羽織が、……帯が、……」彼もない、此もない。

細君はベタリと坐つて茫乎となる。

素山は頭がフラ／＼する。胸がむかつく。顏が膨れぼつたい、人に見られるのが恥しい。急いで柴垣と板塀との露路を入る。出會頭に乳屋が「お早う！」と云ふ。胸に反響して、「お早う。」と云ふ。ぼやけた聲だ。向ふに井戸がある。棹釣瓶が乾いたまゝだ。何家も起きた樣子がない。井戸端から右に曲つて、三軒目の、突當りが其れだ。

素山は鈴の鳴らぬ樣に密乎と木戸を啓けた。隣近所を憚つて、トン／＼と剝喙する。耳を澄して、

「オイ、松子さん！オイ／＼。」と、小聲で呼ぶ。

返辭がない。憤乎としてドン／＼叩く。

「貴郎？」

「早く啓けんかッ！」

「た、大變よ。」

細君はガラリと啓けて、ワッと哭く。

「ど、何うした。泣かんでも可いぢやないか。」

素山は細君の背を撫て／＼樣子を訊く。

昨夜泥棒が入つて、妾の大事の／＼帯だの羽織だの盗られたと言ふ。

素山は悴乎とした。
「其様な物は何うでも可い。何か他に盗られた物はないか。
「盗られようたつて、此上盗られようがないぢやありませんか。」
「ナニサ、お前のその、……大事な、それ、……」
「何ですよう。じれッたい！」
細君の節操を盗られた様子もない。素山は吻とした。心に疚しい所があるから、盗られたものも致方がないさ。もつと好いのを拵へて遣る、泣くな〳〵。」と、細君の御機嫌を取る。



オールドミス　青森　松尾千代子

細君も諦めて機嫌を直した。
帯はなくとも、羽織はなくとも、鍋釜はある。御飯を食べるに差支ない。奇しく隣家と同じ時刻に朝飯が済む。お疲労でせう、一睡遊ばせと、何も知らない細君が床を取つて、小掻巻を掛けた。
素山は長々と足踏み伸して、
「アヽ〳〵、矢張家の方が寝心地が好い。」と呟いた。

野菊

くれなゐ女

主人の出勤を玄關に送つて、私はそのまゝ書齋に引きかへした。そこらを片づけてから獨りツクネンとして今朝の新聞をひろげた。論說や小說から、三面の情死未遂や電車事故まで殘らず見つくしたので、ヒヨイと裏をかへすと山中ちせ子儀と云ふ四號活字が、妙に目についた。オヤッと思つて見直すと、黑枠のある廣告である。山中ちせ子……たしかに、あのちせ子樣に相違ない。それにしても、ちせ子樣が……まあどうして?……私には何だか夢の樣にしか思はれない。兼ねて病氣の處……そしたら平常から御病氣だつたらしい。まあほんとに夢の樣だ。そんなに御弱い方でもなかつたのにと思ふと、ちせ子樣がダンス遊びした時のスタイルが、あり〳〵と見える。ラッケットふりまわしていらつした時の御樣子が眼の前にちらつく。何でも今から三年前だつた。ちせ子樣とは、牛込の女學校の同級で、然も寄宿では不思議にいつも同室だつた。私の寢坊なのに、引かへての早起き。私の目をさます頃には、チヤンと御仕度が出來ていらした。房々とした、美しい御髮を無造作に結んで……濃い紫紺の御袴が、いかにもよくうつつた。野菊の花が好きで、よく裏の垣根の處から、一輪摘んできては、「ねえ可愛いてせう」と、ほゝえみながら机上の花瓶に、さして入らしたもの。いつも快活な、何となくうれしいと云つた樣な面持て、其處いら中に愛嬌をふりまくのが御上手だつた。が時に妙に、かうふさぎこんで仕舞ふことがある。玉をのべた、兩の手を前の腰紐のあたりで、しつかと組んで……椽の手摺にもたれては、暮れがたの空を、ヂッと見つめて入らしたこともあつた。ホット深い溜息をついて、星の樣にかゞやいた眼に、一ぱい露をふくんだまゝ、拭はうともせず考へこんでいらしたことも見うけた。わけを知らない他の室では、「まあ、ちせ子樣にも似合はない、妙な、エキスプレッションを遊ばすこと」位て、別に氣にも、とめなかつた。が、私は同室だけ、多少それに就いていろ〳〵と想像して見たこともあつた。

　何でも六月の末頃だつたと思ふ。いつになく、其晩、私が寢返りをすると、「あや子樣」と、ちせ子樣が仰有る。

「はい、どうかなすつて」ときくと、
「いゝえ別に、だけどあなたは羨しいのね、よく眠れて」
「え、私は眠れ過ぎて却て困りますわ」
「その方がいゝわ、私チットモ眠れなくて」
「まあ、御やすみにならなかつたの？、ヂャ、淋しかつたでせう」と云ふと、
「え何だか、詰らないことばかり考へて」
「さうでせうね、ヂャこれから少し御話致しませうね、私も何だか目がさめたやうですから」と、私はむき直つた。
「さう？御毒の毒樣ですわねえ、ヂャ濟みませんが、少しの間目をさまして、頂戴な」と、いかにも、くるしさうに、私の方に枕をよせて、
「ほんとに、濟まないわねえ」
「そんなことはありませんわ、さ何か御話して頂戴な、私も、枕を蒲團の端によせた。
「さうねえ、あや子樣、あなたはね、私は快活な性質だと御思ひになつて？それとも沈鬱だと思召して？」
「さうですねえ、私、あなたばかりはわかりませんわ、何だか快活な方かと思ふと、ふさいでいらつしやるし」
「さうでせうか、私自分でもわからないのですもの……だけど、天性は、どつちかと云へば、快活な方かもしれませんわね」
「それになぜふさがなきやならないの？」
「なぜつて、……私にもそれ〳〵心配がありますもの」
「あなたに？、もし御差支えがなかつたら、きかして頂戴な、ねえ、御互樣に御友達ですものね、力になりあつて參りませうね、私も御力になれたら……」
「え、ありがたう、實はね、あなた丈には御話しやうと思つてましたの、ヂャ聞いて頂戴ね」と、私の手を、しつかりとにぎりしめながら、話して下すつたのは、かうであつた。

ちせ子樣の御家は、千葉で屈指の財産家であつた、ことは、疾うから知つてた通りてあつた。母樣が、ほんとでない、と云ふこともかねて聞いて居た。大學に通つていらした兄樣の、御友達で法科に居る、高城さんと云ふが、あつたさう。兄樣と親しい間柄なので、夏冬の御休み毎には、キット遊びに來ると云ふ、關係から、ちせ子樣と相思の仲となつた。

それは、後でわかつたのだが、高城さんには、實は、きる素封家の一人娘と、許嫁の約があつた、――勿論親同志の約束て……それが大事の大事の箱入娘で敎育と云へば、昔氣質の兩親から　女大學的の躾を、うけたに過ぎぬ。新しい時代の敎育をうけた青年に、喜ばれなかつたのも無理はない。話をしても、ハキ〳〵とした、所謂新敎育をうけた、ちせ子樣と、意氣投合したのも、止むを得ないかも、しれぬ。

一年ばかりの間は、事もなく、互に初戀の甘い香に、醉つて、世は永久に春と思つたのも夢……高城さんが、大學を卒業すると共に、許嫁との結婚問題が起つた。こゝて悲劇の序幕は開かれたのである、高城さんは、長い間、煩悶した結果、これを、ちせ子樣に打ちあけた。今更驚いても、悲んでも仕方がない。とあきらめをつけた、ちせ子樣は、私一人決心をすれば、事は落着するてせうからと、返事した。

それては、ちせ子樣に申譯がない、それぢや自分だつていやだ、もと〳〵自分が惡かつたのだからと、云ふ樣な譯て、高城さんは漂然として南米に去つた、と云ふのである。

「それぢや、今ても、あめりか…いらつしやるの」

「さ、それがよくわかりませんの」

「向ふの娘さんの方は、どうなすつたでせう」

「仕方がないから、外からでも養子を貰つたでせう、それだからつて、私が高城さんに、嫁く譯にも行かないてせう、てすから、これからさき私は、どうして身を處して行かうかと考がへると、ほんとに、悲しくなりますの、あの時は、あんなに强さうなことを、云つても人間てすもの、女てすもの、一人てどんなにか、泣きましたか、義理も人情も、名譽も、全くいらないと思ひましたわ、母なんかは、そんなことは若い中には、あり勝だから、いゝかげんに、あきらめて、外へても嫁つたがよからうとすゝめるてせう、もう私、くやしくて、それ位なら何も煩悶することはないぢやありませんかね、私、生涯もう尼さんになつた積りて暮しますわ、慈善事業か何かしてね……、何にしても、私の前途は暗てすよ、ほんとに暗よ、てゝ仕方がありませんわ、これが私の運命なんてせうから、……」

と、しみ〳〵仰有つた時、語尾は流石にふるえた。

話がとぎれると、急にあたりが寂として、隣室の、かすかな寢息のみが、すう〳〵ときこえるばかり。

夜はだん〳〵と明けそめたと見えて、雨戸の節穴か

ら薄光をもらして、蚊張を通す、そして大理石で刻んだ樣な、ちせ子樣の半面を、すごいほど青白く照らす。

枕元の時計をさぐつてマツチをすると、丁度四時を指して居る。

「起床のベル迄まだ一時間もありますよ」と、云ふと

「さう、もうそんななの、濟まなかつたわね、少しでも御休みなさいな、明日の御稽古にさしつかへたら大變よ」

「イヽエ大丈夫ですよ」と、云ひながら、いつの間にか、まどろむで仕舞つたことがあつた。

其中に暑中休暇になつて、ちせ子樣は千葉へ。私は、名古屋へと歸つた。そも／＼これが御互に、永久の、御別れにならうとは知らなかつた。

二學期の授業が始まつて、二週間になつても、ちせ子樣は、御歸りにならぬ。御手紙をあげたら、少し後れますからとのこと。間もなく退學することになつたからと、云つてきた、が委しいことは書いて來ぬ。私は大方あれだけの御決心でも、母樣には勝てなかつたのだらう‥‥‥何れ御嫁にでも‥‥‥と思つてゐた。

翌年、私は卒業して、その暮にこの家に嫁した。そして、一人の赤坊に、母ちやんと呼ばれる今日迄、忘れるとはなしに、忘れて仕まつて居た‥‥こんな譯だから今この廣告を見ておどろいたのも、無理はないあの時代のこと、特にこの晩のことなどが、いろ／＼と頭に湧いて來る。やつぱり山中とある處を見ればあの時御嫁に、いらしたわけでもなかつたらしい。

ぢや、あれから、どうなすつたか知らと順々に、想像すると、途方もない方面にまで、それが廣がつてゆく。勝手に自分で想像しておきながら、まさかとまた自分で取消しても見る、何だか、しばらくの間、私は惡い夢でも見てるかの樣‥‥

手箱の中から、二人で寫した寫眞を出して見た。氣の故か、美しい瞳の間には、何となく暗い死の陰が潜んでるかのやうに思はれた、私は、机の塵を拂つてその寫眞を置いた。そして、野菊を一輪、摘んで、手向けながら、また／＼追想の糸をたぐつた。

選者曰く、以上本誌に採用した小説各篇の作家を其住所に於て區分してみますと東京の拾一人を最大多數とし、東北では羽後と常陸に各一人、東海道では駿河、三河、名古屋各一人宛、關西では大阪、阿波、伊豫に各一人宛です、外に未詳が二人ある、してみると東京の人が最も優勢であることは言ふまでもなく、東西とも文運の消長に比例して寄稿家のあることが分ります、更に右各篇の選者の批評意見は一々卷末に於て述べてありますから參照して下さい。



朝顔の葉裏に闇の殘りけり　花讃

天

美文

廻り逢ひて

本郷　千とせ

餘り廣くも無い通へ自動車が來たので、左側へ避けると摩れ違ひに一足先へ出やうとして、一寸振り返つて踏み止つた青年と、ハタと視線が合ふてオヤッと思ふ途端「ヤ、芳井のお孃さん……」「アラッ」「是は誠に暫くてしたな、つい〳〵御無沙汰計致して居りまして何とも申譯がムいませんが皆さん御丈夫で被入い升か……夫りや何よりて」横町から勢よく飛び出て來た車夫にハイヨと聲掛けられてツト私の傍へ寄り添うて、「矢張弓町にお住ひてすか」と稍首を傾けて片手をヅボンのポケットへ突込むと、赤いネクタイに白いチョッキ事々敷胸間に掛けた時計の鎖が目に立つて、體溫に蒸された香水の變な香ひが鼻を打つ「今お宅へお歸りに成るんてせう……デはお話仕乍らそこ迄お供致しませう」一チックて黑光りに分けた頭へそうつと麥藁帽を戴せて歩き出した、まさか厭とも云へぬのでのそ〳〵從いて行くとパンパンパンとロシヤパン賣が呼び續け乍ら過ぎて一寸振り返る「實に月日の立つのは早いものてすなあ、牛込に被入つたのもつい此の間のやうに思へ升が」向ふから三人連の女學生が來たのでギョッとして水溜の有つたのを幸に少し離れた、がジロリッと六つの瞳は私に注がれたらしい「もう彼是十年計に成り升からね……お孃さん僕は只昔が懷かしくてなりませんよ」マア空々しい、昔が懷しいもよく云へた、爺が亡くなつてから丁度四年に成るのに唯の一度も顏出しせぬやうな恩知らずが、今からうして銀行員に成つて居られるのも誰のお蔭だと思ふ？頭の上がらぬ家杯へ行つても面白く無い位に考へて音信絶つたのか、但しは薄情な母親に似てモウ世話にも成らないし、あんな落魄れた家に用は無いとても思つてか、私とて散々目隱しや鬼事のお相手を仕て貰つたのだもの、どんなにか懷かしいわ…打解けていろ〳〵昔語りが仕度いのは山々だが……吁なぜ善良な爺の氣質を受けて生れな

かつたのだらう、　夫は爺は優敷い男で、よく栗を取つて呉れたり、螢を押へて呉れたり、「孃樣のお慰みに」と苺を澤山植ゑて呉れたので毎朝起きると直ぐ裏へ出て、重さうに露を置いた青い葉を掻き分け乍ら眞赤な美しい實を取るのが本當に樂みだつたが……吁今若し爺が活て居て呉れたらどんなにか嬉しからうものを……ふと何か云はれたやうなので「エッ」と顔を上げると、微笑を含んだ眼で眤と覗つめて居た「どちらの學校へ行つて被在い升」「私？」と云つた限りフフンと冷やかな鼻先の笑ひに紛らして顔をそ向けて遣つた「お孃さん幼い時には隨分喧嘩も仕たり、御一緒に面白く遊んだりしましたが、餘り久敷お目に掛らなかつたせいか妙に隔てが出來たやうな氣が仕て何だか……」「あの頃の事を考へ升と全く夢のやうですなあ」……脊の高い體を殊に反らして、私から離した瞳に恍惚りとあらぬ方を眺めて居るその樣子……まるで新俳優の出來損くない見たやうな態度がグッと感にさわつてもう一足でも一緒に歩くのは厭になつたから突然「私寄り道が有るからこれで」と立ち止まつたら「エ、そちらから？」と意外と云ふ風、一寸お叩頭した儘行かうとしたので「アお孃さん……デハこゝで失禮致し升が、私は只今都合が有つてこゝに下宿して居り升から手早く番地を書き入れて名刺を差し出した「どうぞ皆樣に宜敷仰有つて下さい、種々なる事情の爲め意外の御無沙汰致しました罪は何れ近日伺ひまして重々お詫を致し升から不惡思召して下さい升やうに……デ私は決して昔の御恩は忘れては居りませんとどうぞあなたから宜敷仰有つて下さいまし」今迄の浮いた調子に引替へて如何にも眞面目に熱心に云つて居るので仕方なしに名刺を受けて別れた、何だか胸がむしやくしやして譯もなく悲敷成る、腹立た敷成るつくづく今の境遇が儚く想はれて幾度か涙を拭ひた、門の前で此の名刺を破いて棄やうと仕たが又思ひ返して握つた儘家へ這入つた。

例の如く動作や會話の活き〳〵して居るのが嬉れしい、處々皮肉な筆づかひが極めて能く利きながら下品でないのが又宜ろしい（評）

地

恐ろしい惡魔

福島　菅野はな子

私はけだもの丶樣な男の人が恐ろしくてたまらない。新屋のお爺さんは、七十になつても嫌らしいことをいふ。深山に咲いた百合の花は、たれにも手を觸られずに、清い生涯をおわることができるなら、田舍に生れた少女にも、永遠にけがれない、美しい生命を、なぜ神樣はさづけて下さらなかつたでせう。

私は何にも知らない田舍少女です。名もない野の花です。けれど、けれど、無慘々々、踏みにじられるのは死ぬよりも悲しい。口惜しい。

黄金の光や、甘い蜜のやうな言葉を以て、欺むかうとする敵は、どの樣にしても、屹度、屹度、防せげると信じますが、理も非もなく、暴力を以て襲ひ來る惡魔は、か弱い少女にどう防ぐ手段がありませうぞ。

思へば身ぶるひのする程恐ろしい。

あゝ「お前の名は女だよ」といふのは、同情の言葉でなくて、嘲りのことばです。侮みのことばです。

少女はか弱い小草の蕾です。その弱味につけ込んで、生命を斷たうとする殘忍な毒虫が、たえず我等をわらつてゐるのかと思へば、恐ろしさ、あさましさ、情なさに、泣いても足らない位です。決してわる推量ではありません。實際無智の惡魔らは、少女の生命を奪ふのを矜りとし、務めと信じてゐるのです。

恐ろしい惡魔。惡魔の目には、頭には、道德も法律もありはしない。祭りの夜、盂蘭盆の手踊り、野の道、杜の木蔭に、田舍少女の生命は、曉の星の如くに消えて行く。

あゝ田舍にも花は咲く。月は照る。けれど、けれど、それを眺める少女の生命は極めて短かいのです。

美しい希望も、け高い目的も、ことごとく奈落の底に葬られて、魂の亡きがらが結婚して、冷めたい人の世を、冷めたい人の世の風に弄ばれて、枯葉の樣に散つてしまふ。私はなぜその樣な女なぞに生れて來たかとつくづく悲しく思ひます。けれども、それは今更に愚痴でせう。愚痴と知りつゝ、なほ喞たれるのが女の心です。

をととしの秋、八重子さまがお產をして亡くなられた臨終のきわに、きつと私の手を握つて、

「花ちやん、あなたは、何時までも何時までも、清い花ちやんで生きて下さい……」と染々仰有られた

私はこの言葉を、死ぬまで忘れないつもりです。

山美しく、水清らかな、田舍の空氣は濁つてゐます。見ひらけば前途は暗く、何か一足づゝに、深い穴の底にでも陷りはすまいかと危ぶまれる。噫……。

忍び音のとぎれ〳〵に切なる訴をきく樣です、全く惻々として人を動かせます、巧みならずして寂やかな筆致は又よく之に副うて居る、あゝ草深い田舍は花の咲くところであつて、又蛇の多いところか（評）

人面知らぬ妹

明石落葉子

何といふ美しい平和な晩だらう。私は海に面した方の障子をあけて、かう思つた。月は美しう島を抱き、海を辷つて、砂地にすうとかげを布き私の居る椽側まで照らして居る。

私は只の一人、語る人もなく、こんな美しい景色眺めて知る人もない宿屋の二階から――。

呼ばむに磯に人影は絶え、招かむに海には白帆のかげはない、けれど何だか自分ては澤山のお友達と花見にいつた時より、もつともつと、賑やかな心地である。

南の方から寄せて來る波は、さらさらとおしげもなく渚を洗ひ、そして私の胸をも洗つてかへる。

冲の方へいつてから、折々ぎらつと光る物がある。これがまた海の魔王が刃を振るのではあるまいかと、恐しく凄くおもはれる。今はもう胸に何をも秘めず。四方水晶の室の樣この美しい胸を抱いて私は美しい景色に見とれて居た。

「ほんとにさ」例の内儀の大きな聲が下からきこえた。はてつと耳をすませた。氣の毒なものぢや、あゝ思ひ合つて居てあはれないなんて」、再度のこゑに私は小刻にぶるぶるとふるへた。

そして、そのつづきをきくのを、苦痛と思つたから、忍び足で二階から下りて、外へ出た。黒い自分の影が一つ砂の上に落ちて居る。たち止つて見たが矢張今の言葉がきこえて來る心地。内儀さんは私の身の上を知つて居るのではあるまいか」と疑つたと同時に、堅く堅く胸の底にかくしてある一事を思ひだした。

高く波打つ胸をさりげなく抱いて、私はだん／＼汀の方へ足を運んだ。ふと驚いて足を止めると、蒼白い月見草の中に居たのである。月の光を浴みて居る樣は物凄くも、哀れにも、思はれた。

私は、この不安心の胸にかざさうと手をかけやうとしたけれど摘み得なかつた。みなうれしさうに天を仰いで居るのだもの。今を善い折と御空の星と、安否をたづね合つて居るのだと思つたから急いでこゝをぬけて波打ち際に進むだ。私の胸はまた一層にさわぎを増して居る。

西と東を見たとき、いつもの薄い燈臺の光は互にむき合つて居た。これを見ると思はず

「ゑみちやんゑみちやん」と叫んて見た。

聲は靜かに響いたけれども答はたゞ波の聲ばかりてある山の國に居るゑみちやんには、きこえないことはきまつて居る。

ゑみちやんは、屹度美しい可愛い子だらう。ゑみちやんと自分は姉妹の間柄。姉妹てあるとは互に知つて居ながら面も聲も知らぬ。あゝ母樣さへ生きて居て下すつたら、二人ともに、樂しく暮すことが出來るだらうに母樣の御胸からはなれたとき、今から十餘年の昔。運命の手は情なくも姉なる私を海に、妹のゑみ子を山にと、引き分けたのです。海と山行けばゆかれるだらうと、人は思ふてせうけれど魔はたちまち、高くて厚いステールの壁を築いてしまつたのてすもの。か弱い女の腕にはこぼつことはかなはず姉妹のおもひはもえて〳〵しても、塀はやけませぬ。二人はこの壁にもたれてないて〳〵死に赴くのでせう。

私には父はある。隔ある間ながら姉ちやん〳〵と呼んてくれる可愛の弟も妹もある。けれども私は尙ゑみちやんがなつかしい。こひしい。あゝそれに父あるを知つて他人を父と呼び、姉あるを思へども姉といふ人がないといふゑみちやんはどんなに、思つていつも泣いて居るだらう。冬は雪が自然の塀をなすとかいふ山の奥て、ゑみちやんはどんなにか故郷を思つて居るだらう。

海をまだ知らぬ妹と、今宵の樣な月夜に手をとつて、この景色を見せてやりたい。この波の音がきかせてやりたい。峯の松風をのみきいて居る耳に、この磯の松風をきかせてやりたい。



松葉かき　麹町　前田榮子

姉妹てないとは、戸籍が無理にきめて居るのだ。父様が仰るのだ。私の霊が天にかへるとき面を知らぬ妹はあとをたづねて來てくれるだらう。それが今では私の唯一のたのしみ。

プーといふ張りのない汽船の笛の音に、おどろかされて、はじめて我にかへつて、こゝがエターニテイの濱であつたらばとなきました。

悠揚たる筆つき、哀むて迫らざる情緒、猶ほ稚氣あるを免れないけれど、その至醇をとる。（評）

秀逸

青梅

越後　喜志波津子

たそがるゝ場末の街を、私はひとりあてもなく歩いてゐる。失心したものゝ様に。……

終日の勞苦を養ふ灯が儚げに詫しげにまたゝいてゐた。

然し私の魂は何か頻に索して居るらしい。黒ずみかけた色を、元の眞紅に返へそうとして。……

「闇になるよ、何をぐづ／＼してるのだ。」

と時々さゝやくものがある。手ぐずね引いた暗い影がぐるりと私を取り巻く心地、魂はいよ／＼戰いだ、……呼吸が苦しい、誰か私の息を吸ふのかも知れない。

——人波を脱けた耳には未だどよめきが殘つてゐる。夢のやうに、……顔や手足がくわつ／＼とする。

腐つた軒や崩れた壁穴だらけの煤け障子……流石に私も幾度か立ち止つた。得ならぬ臭氣が鼻を衝く。見渡す限りの家々は奮闘の影を留めて、慘然たる現在を語つてゐる。想へば百滴の汗を以て一錢をも得るに難い、あはれ弱い人達であらふもの。そして其弱者に甘んじて、平凡に生活に追はれてゐる。……敗北者……

素裸に子供を脊負ふた廿歳ばかりの女が頻りに、お米を流して居る。梅の木の下で、……青い實が累り合つた……葉影が映つてか何となく凄氣がある。

横面が芝翫のお舟にソックリ、藤さんに髪の形が似てゐる……など思ひ乍ら、私は態と摺りついて通つた、何やら肩廣いやうな明い心地して、……誇と言はうか、……哀れなる心よ。……バタ／＼と小走りに四五間も行き過ぎた。

女は手を安めて脊の子をあやして居る。けろりとして……私はなぜか限りなく失望した。心惡くも思ひ乍ら、二度三度未練にもふり向いた。女は靜に髪を梳きなが

ら……細い底錆びする聲で何やら唄ふ。……
自然に活きた表情……彼女の……美事私はほこりを奪はれた。けれど此まゝ別れるのは如何にも惜しい。せま苦しい道の眞中に、私はボンヤリと佇んで居る。世の終りまでもたちつくす氣が……ひし〳〵と肌に泌む夜氣……大空はさながら夜海のやう……女は未だ白く動いてゐる。

青樓賣る頃の黄昏の心持は出て居るが、すべてが今一息の感を免がれない、ところ〳〵獨斷の嫌ひが無いでもない、しかしこの詩趣饒多の筆は獲難いものであります、自重を望みます（評）

小間物屋

信濃　太田喜志子

へゝエ御意にございます、近頃のお若い方にはさつぱり賣れが遠うござんしてな、へへゝエどうもいかんもんて、と云ひ〳〵肩のすッとこけた松葉形脚の牡丹や立田川の彫のある碼瑙擬ひだらう、紅いやうな白いやうな玉のかんざしを、五六本ザラ〳〵といふ音をさせ〳〵薄い吉野紙へ丁寧に包むでゐる。

要るかへ、とまだ執心があるかして母様ふり向く、

私はそれどこぢやない…………

いゝえこんな髪に、とちよつと手を上げて前櫛をぐつと深くさし込むでにや〳〵しながら商人の顔を見た、するとすべらして手を見た、がまだ仕舞ひ得ないでもぢもぢしてゐる。

だつてたまにや蝶まげ位結つて見たつていゝだらうにそんな追ひかぶつたやうな結方ばかりせずと――ねえ今の髪の風は根つから氣に入らない、ほんにまるで唐人のやうな。

へゝエ……どうも時勢々々のはやりものでな仕方ないものでございます、へゝエ………。

パチン〳〵と抽斗の鳴る音がして……。

あのう、今龞甲の打ち替へッて云へばどの位で出來ますね、實は私の嫁になつた時のものですが、もう時代遅れて今の人にや役に立ちさうもないから、今風のにしたいと思ひますがね、隨分とテッシラしたものです

さようさ、只今ではずゐ分おねうち物もたくさんありは有りますが、實のとこ眞實眞物はまア無いと申してもいゝ位のもので、へエ昔物のやうに正直な物は…………へゝエ……。

今度は何かしら厚紙へ包むだものの入つてあるひき出しをぬいた。

妙なものでこの人を見ると八犬傳を思ふ。とび離れて年上の姉さんを思ひ起す、八犬傳のさし畫（月耕の筆）あの小文吾の父の文吾兵衛を思ひ起す、額のどこまでもはげ上つたそして鼻の格好からたゞその人と思ふ。

まだお祖母様御存命中、あゝ姉様たしか十五六の時だ

つた、小座敷に籠りづめのおばあ様、夜になると乾度姉さんを呼び入れては、八犬傳を讀ませなさるのであつた、冬の恐ろしく大風の吹く晩の淋しい〳〵時になぞ私はよつく覺えてゐる、炬燵の暖か味におしりまでは入り込むでから——遠い〳〵未來の事？、わけは分らなかつたが何でも今身が水底深くゐてかりに目を開いて上を見るやうな……まアそんなやうな心持がしてゐた。

もう十二三年前になる!!姉さんは三月のお節句少し前に嫁入りしたつけ、緋絹裏のふんわりしたのが六疊の室いつぱいに散らかしてある中にねころんでゐて「嫁殿」といふものはどんな風になるものか……呼吸してゐるものであるか、など不思議でたまらなかつた。

其の頃この商人がよく見えた、矢張し今のやうな淺黄の大風呂敷で一すみは束熨斗を大きく染めぬいたこの風呂敷だつた。

銀のビラ〳〵のついたかんざしやあめ色の牡丹だつたかに紅いさんご珠のついたのや、まだいろ〳〵出したり入れたりしたつた。

十六疊の母屋のまん中この人をかこんで、母さまと、姉さんとは一番近く座つて、姉さんはたへず小聲で母さんに何か云つてゐた、其の時もやつぱり今のやうに此の商人はエ、へ、、、を多く云つては「御意にございます」はもうくせだらう。其ののち何か昔本などちゝ樣からよんで戴く時にはよくこの「御意にございます」があるので、何だかこの人は武士の前に出て物を言ふ人だらうかなど思つてゐた。

へ、エ、御意にございます、尤もこれらの光りは上等ですがやアどちらかと申すと平生おもちになるにはお丈夫向の方がお徳用でございますがなへ、エ、、。そらまた「御意にございます」もうおかしくなり出した。

紺股引を穿いて、もえぎ色の前垂れを隅の所ちよつと端折つて帶に狹んでゐる、帶は小倉の三寸巾位なのを締めて煙草入れを前の所にかいこんでゐる——、この仕度、十何年來、少しも變らない。

へ、エ、これは小娘樣にでもへ、エ、、ほんのしるしばかりで、と云ふては丈長の赤や金色ののやをよく呉れたつた。

脊負荷の箱の上には長方形のガラス穿めた箱があつて中には金の鎖紐や髷さしの美しいのを扇形の紙に五六本さしたのや鹿の子しぼりの手がらやらまだいろ〳〵ある、リボンといふものがなんでも九才位の頃はじめてこの人が持つて來て見せた。

私は幼ない思に父樣が赤十字社員の徽章についてゐる眞紅のリボン、木目形がから見えてチラ〳〵するのが

何となくえらいもの〻やうに思つたゐたので小さい桃割れにかけてまだ知らない誰れかれにほこつた事もあつた。

へ、エ、、、ほんのしるしばかりてへ、エ、、、とおづ〳〵したやうに差し出した。と見ると日本紙へ丁寧に包んで「おろく櫛」とかいてある。

おろく櫛、ああ木曾の名産、梳きぐしてある、そのかざりない紙づゝみ、昔のまゝの木版ずりの文字何か深い意味をかたつてゐるので、そつと〳〵そちらへかんがへが今向つてゆくところなのです。

所謂美文の域を脱して小説に握手しやうとして居る、老練な危つ氣の無い佳作(評)

ゆくみち

しらぎく

めづらしく氣持のよい朝、うつむき勝にゆくみちも今日は氣の晴々しさに、みるもの興深く覺える、

いつの間にか市ヶ谷見附に出る、急な苦しい佐内坂に掛つてもう六月の單衣の裾輕く、朝日をやはらかに洋傘に受けてせつせと登つてゆく、途中まで來るともう息が切れる、我ながら何故こう弱いからだになつたかと一里のみちを苦もなく通學した頃がなつかしい、後に車のきしりが聞へて「降りるよ」と人の聲、ちよつと見返ると廿ばかりの男が「鐵」と脊に印のある車夫にひかせて乘つて居る、誰かに似た樣な顔だと思つたけれども一寸思ひ出せない、またせつせと歩をはこぶ、と今の男は車から下りていつか私の先になつて歩いてゆく片手にはきれいな唐ちりめんの袋に入れた琵琶らしいのを持つて左には果物籠中は中だか橙色の樣な果物、もう二間ほどさきをゆくから何だかわからない、それと一所にバナ、の大きな青々したのを二房下げて居る、風采よりは少しかつた持物だと思つて見て居ると後に重い足音がする、車夫が新橋行何某と書いた行李をかついて坂を登つてくるのであつた、ふつと見返る、車は坂の麓に置いてある、

ふと何處の右側の方にまがつて入つた、丁度坂を上りきつたところで、道理で車の通らぬ佐内坂をあるいても上つたわけがわかつた、私が上つてしまつた時には其處の家に立つて居た、家は商家である、

「何でもね、急に御都合が御有んなさるとかで行つとしまいなすつたんですよ、何しろ番地が知れないもんですから始末にいけないんでね」とか何とか大きな聲で内儀が男に言つて居るのを聞いた、私は其時汗をぬぐつて居る車夫と男の後姿――果物と琵琶をさげてボンヤリ内儀の顔を見て居る――を見ただけて歩をはこ

んだ、が、あの同情ない聲の調子が激しく耳に響く、下りるよ」と云つた時の男の顔があり〳〵見える、とバナヽ果物、籠「鐵」の字の車夫、何處の人かは知らぬけれど、さぞ心細からう、あの車夫のいつ、何處に行李を持ち込むであらう、私は考へた、人の好さそうな、情深さうな若者の顔、誰に似て居るのかとう〳〵思ひ出されなかつた。

半丁ほどゆく、何處からか調子の合はない琴の音が聞える、つきあたつて右に馬場の方に行かうとしてふと左手の士官學校裏門の何とか所と札のかゝつた處を見ると門の前に凸凹した恐ろしく大きな顔の車夫がくど〳〵と何かいつて眞黒な手をのべて掌を出して居る、色のあせた紅い帶をしめたもしや〳〵のあたまの女が困つた樣な顔付をして懐から財布をとり出した。

一度ふり返つてそれを見たが又さらにゆく、馬場ではめづらしく馬に乘つた多勢を見た、人の顔も一寸けぶる位すなほこりがたつ、洋傘でよけて左のはしを通る少しむこふの方に大勢、十二三をかしらに五つ六つ位までの男の子、——みなりはいふまでもなくきたならしい——がうろ〳〵と遊んで居る、年かさと見える子は赤黒く光つた頭を炎天に晒した乳呑子をおぶつて居る、急にワアーッといふ泣聲たてゝ一人の子は腕を眼にあてこすり〳〵こつちに歩いてくる、と少し年上のが「何しやがるんだ」と乳呑子を背にしたのを詰つて居る、ヨロ〳〵つとよろける樣に急ぎ足でこつちに泣いてくる、夢中なのだらう、見當がつかないと見えてなゝめに突進するのであるだん〳〵そうして何處までもゆけば士官學校寄宿舍の石崖につきあたるだらう、石岸の下は水のピチャ〳〵した溝が通つて居る、お、もう眼近く來た、なゝめに〳〵、子は急いでくる、溝があると敎へてやらうか、と思つた時はもう遲かつた、先刻からの光景にたゞ胸が何だか押される樣に覺えたので何となく感深く沈んで居たので、ふと我にかへつてそう氣ついた時はもう片足溝に落すところだつた、急いでいつて身體を支へてやらうといふ分別のつくほど私の心は平靜でなかつた、ボチャンと音がして、半、足部は泥に埋もれた、石に手をついてまた悲しさうに聲をたてた、さつきから今の子のあとを追つてかけて來て漸追ひついた兄らしい子は「お前が泣かすから惡いんだ」と恨めしさうに乳兒を脊つた子をみ返つて云つた「此馬鹿が」ときものを汚したのを叱る母親の聲がもう腦中にきこえるのであらう、流石に少し愁を帶びた調子で、それでもそれを強いて強さうに「今度のは巳の知つた事ぢやあないや」笑顔を作つて言つた、さうだほんとに今度のは私が溝に落したやうなものではないか、溝があるよと一聲かけてやつたらこんなことにはならなかつたのに、其時一番近くに居たのは私

だつたてはないか、濟まない、と心で落ちた子にも兄にもあやまつて、情ない私を人が見て居るかと氣耻かしくいそいで歩いた、近くの「氷」と旗をたてた掛茶屋の前には女が二人、平氣な顔をしてさつきからの有樣を見物して居た。

其處から眞直に二三丁ゆけば私のゆく先、と思ふと今までのいろ〳〵のみきゝは全く消えて先生の弓のひきかた、指のこなし、いろ〳〵と心にゑがいて今日ならふ筈の「夢」といふ曲をたのしんだ。

眼の行くところ筆が伴つて居る、これも手に入つたもの、わけも無く出來たてせう、（評）

女

格子の間より

阿波　長曾我部菊子

藝者町にしばらく住まつて、隣づから四五人の舞妓とは、あらかた見しりごしの顔となつた頃である。ますゑ樣とつれだつて用達に出て、ふと檢番の前へ行きかかつた。土間のむかふの壁にずらりとかけた札を見るとよほど赤札になつてゐる。二人は軒下の鐵棚によりかかつて立つてゐた。ま正面に取締らしいのがゐて、あちらこちらになんても男ばかり十人もゐたらう。車は私どちの立ちとまつてゐる處に五六臺も並んでゐて、三味線箱を蹴込において毛布を腰に卷きつけた車夫もゐる。すると左の方から來た車が街燈の横て梶棒を下した。と、褄をとりひらりと長い袖を肩にかけて下りやうとする美しい舞妓が。蝶々結びとかいふ帶のくくりやうて脊中にいつぱい。また車がとまつて乘つてゐるのが同じ年輩の妓がある。お互にそれと知るとさきへ下りたのが下りやうとする方へ。

（おッ光奴はん――。）細い甘つたるい聲でよびかけられて、まじまじとむかうの紅い褄を見ながら、

（鈴松さん――、あんたはん――今晩はどこやつたん……。姉はんは？）と問ひかける、二人はもう手をひき合ふて、振り袖すれすれに、檢番へ。出てくると右と左とにわかれて、つないだ手をきつくうれしげにふりながら、

（光奴はん、お師匠はんところでまた、……、ごきげん好!!。あの――お駒はんによろしゆ……。）

（ゑいゑ！）深くうなづいて一人は東へ一人はちらと眼を私たちにそそいて、だまあて西へ……。

あくる日の灯ともし頃に私はまた火鉢を前にしてお媼さんとむきあつて外を見てゐた。華車な金網かけた火をともすものの表毎に、上の方に定紋をしるし、下の方には、「新丁字」「上五島」「美山」さては「本丁字」「松室」などとやかたやかたの名を書いてあつて、ちりん

ちりんと開かると鈴の音のする格子戸のむかうに、すぐ目に入るものは、おいなり樣をまつれる棚である。大小こそあれ、家のつくりは、よく似たものである。まだ緋ぢりめんのつつこみ帯て、花の模樣の振袖姿で西へ東へ通りたがへてゐる。よびにくれば、すぐに出の着物にかへるのであらう、おむかひの美山では、おみつちやんがのび上つて御神燈に火をともしてゐる。しなりと紫の矢がすりの大振袖がたれて、二寸のふきが、ふくらかに見える。藝者がもう五人は通つた。大きい洋風の湯屋を建てゝ、五月四日から開くといふ三勝といふ妓の旦那も行つた。

と、助六がくる。いつも見る時よりは盛裝してゐて、涼しげなるびんのほとり、美事に結べる帯のぐわい、またとなく美しい。手に小さい紅いものを持つてゐる。むかうからまた一人來る。

(あれは誰。)と問うと、お媼さんが、(おもちやはんて。)と敎へてくれた。二人とも店先でてつくはして、(え……え。)と助六が手て口を掩ふて笑ふと、おもちやは、華やかな納戸色の左の袖に、ひつたり右手に持てゐた白い造花の大きい簪を、をしつけて見て、ほやりとして、(夢助はんは、それからとうどおかへ……)

(何を話してゐるのだろ)

とお媼さんは耳をすましてゐる。一人は島田、左づま一人は庇髮に、長羽織、話して笑ふて身ぶりをしてゐる艶に美しい!!!。かたるのは何? 私はそれを聞かうとは思はない。彼等も「女」である。同情してやりたくて私は、すべての彼等の歴史を除いて、此姿の美だけをせめて眺めてやりたい。覺えてゐたいと思つた。「女」なるが故に。

女とは

一枚の桑畑がある(桑はもう刈りとつてしまつてあるので)そこに男と女と揃つて若いのが働いてゐる。男は白の手拭で麥藁帽を首に括りつけて、上半身はシャツで純白下半身はぱつちで黒い、せつせと働いてわき目もふらない。斜になると日に照つて鋭くピカリツと光る利鎌をうちこみ〳〵桑の刈り跡を見つくらうて行くのだ。

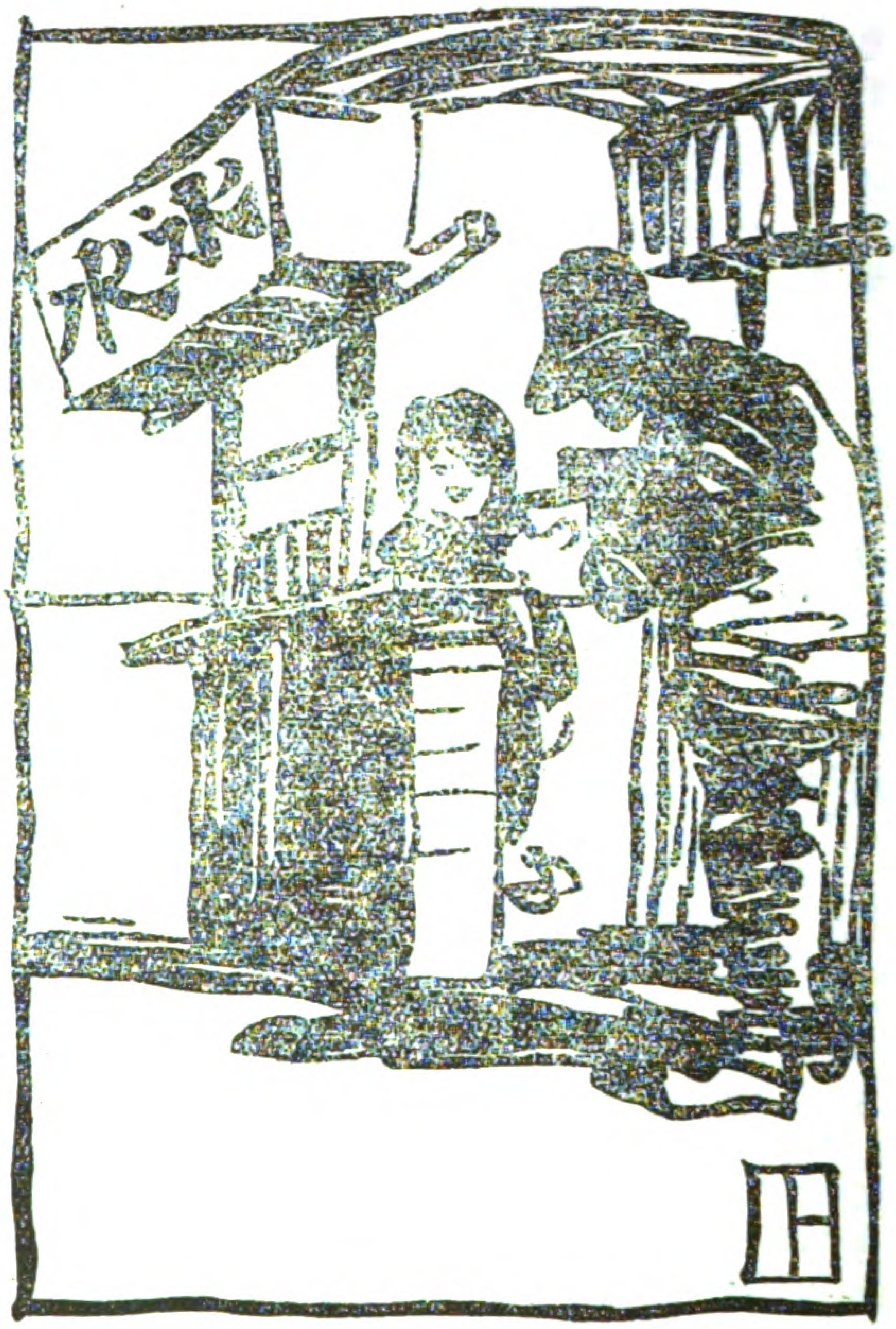
女は畑の南隅で、とんが(草をとる器具)を立てゝそれにまつたくすがるやうにして、つくねんとしてゐる。うねとうねとの間の草をとるらしい。姉さんかむりの淺黃色の手拭の下から白い頰がもれて、細い優しい手は黑の手甲て包んでゐる。思ひ出したやうにばたばたと働き出した。男は首を少し傾げて暑さうに、それでも益々南へ南へと働いてくる。白いしやつの胸が美しく日にてつてゐる。女は又とんがにすがつてすくまつた、東の方にむいてゐるのは村の境の櫟の林の上にう

く、白くて大きい雲の峰に見とれてゐるのらしい。

鳥はバッと飛びたつた。

男はしばらくしてぴたりと鎌をすてた。左て右の手をさへて立つて二三歩こちらの方にくる。何とか聲がかかつたにちがひない。女はいそいで走りよつて、男のからだと一列になつた。そうしてふところをさぐりて出したのは細長い紅い紐らしく見えた。二人は今日の方に向いて、よりそうやうに立つてゐる。

女の手がくる〳〵と動いて紅いのは男の指にまつはつて行く。(ははッ)(ほ、ほ、ほ、)といふ笑聲がはじめて聞えてきた、暫時して男も女も元の處にかへつてしまつた。然し女はやがて止めて襟をきりつとひきしめびんのそそけを一筋一筋のこさゞとやうにかきあげてゐる。男はずんずん南によつてくる、女と大凡一所になりかける。ばたんとどんがを落して、女は畑の畔の樗の木の下へはいつて、(やれやれ)といつたやうに休んでしまつた。男は是れに向つて何とも言はずに自分一人ではたらいてゐる。



氷屋　青森　立花とも子

私は是を心より見て思つた。女とは、かういふやうに生れついたのか――と。

これも描寫は巧みなものです、但末段に一々×を立てないで觀察を全體にわたらせた方がよかないかとも思はれる(評)

おさなき罪(日記の一節)

但馬　さくら子

第二時讀方の時間てあつた。兒童が皆席について、例の優しい禮をすまして、「サ皆さん今日は第十うめのみの處を下讀みしなさい。といつて居ると、校僕が『校長さんが鳥渡來て下さいつて』と言ひ放つて置いて、直ぐ走つて行つた。私はサッパリわけ

が解らなかつた、若しや父から電報でも來たのぢやあるまいか、お父樣はよくお酒を御上りになるから、急な事があつたのぢやないかしら？それにしても校長さんから來いとは可笑しい。などと私は俄かに溫まつて居た胸を苦めながら急いで本校舍の方へ行つた。（私は假校舍に居るのだ）走る樣にして行つたが、校僕はもう見えなかつた愈々不思議でならない。動悸が非常に高くなつた。玄關を入らうとすると、五六年の教室に居られた校長さんが走つて來られた。そして私が、御用は？と聞くか聞かないかに早や小さな聲で、

「あのネ貴孃！」聲は非常な秘密を宿して居た。

「實はネ、あなたの組に鳥田一也と云ふ子が厶いますネ！あの子が、先日の高野村の放火の犯人ださうです。今野村巡査が來ましてネ、一應調べて吳れと云ふのですな！そこで今、高山先生とも相談したのですが、兎にかく、根堀り葉堀りして白狀させればしませうが、若し白狀させれば、すぐ新聞ですから、生徒は兎に角學校の不名譽です。それで恁う云ふ風にして下さいませんか。「聞けば、此間の高野村の火事は、子供が蜂の巢を取るつて、竹の尖に火をつけて、巢を燒かうとしてあの澤山の家を燒いたのださうな。それが、此の學校の生徒だと云ふ話だが、お前はそんな事すりやしなかつたらうな！」と訊いて下さいますれば。子供ですから「イーエすりやしません」と答へるでせう。それを「お前がしたのだらう」と云へば、或は「ハイ」と白狀するかも知れないですネ！それに此の塲合學校から無理に白狀なんかさせずに、巡査の方へは知らんとのみ云ひますと云つて置けばよいでせう、ね!!」と心配さうな顏をして被居る。

だが一也の受持である私はより以上に驚いた。心配は前と一變して更に酷くなつた。すぐ「ハイ承知しました」といつて假校舍に歸つたものゝ、どうも心がおちつかない。再び教壇に立つて、一番左の列の一番前に居る小さな一也の顏を見ると、私の胸には一種云ふべからざる情がムラ／＼と湧いて、一也の顏が燃える樣に見えた。が後にはそれさへ見えなくなつた。

そこで、今日は一時中復習をなさい、と云ひたかつたが聲が出ないので、止むを得ず片假名計りて塗板にさう書いて置いて、私は後の椅子に掛けて默考した。

兒童は只一心に聲高々と本を讀んで居る。丁度森の中の蟬の樣。一也は一層平氣で、大きな口を開けて讀んで居る。私にはどうしてもあれが恐ろしい百二十戶の放火犯人とは思はれない。

一體子供と云ふものはあゝまで平氣なものだらうか？人の家を燒いて置いて、其の翌日からすぐ出校する。一日も休みはせなかつた。そして平氣などころか一層

腕白て、……一也は矢張り平氣である。讀書も飽いて來たのか、隣の子供と遊び事をはじめた。オヤ又例の壓つけ合ひか？と思つて居ると筆を取り出した。「コレ一也さん！」私は思ひもよらぬ聲が出た。一也は鳥渡後を見たが私の顏を見て、またサッサと本を讀みはじめた。

私の頭は非常に重くなつた喧しい兒童の讀書の聲も聞えない樣、家がグル〳〵と舞ひ出した。が懷中の時計の刻む音のみは小さくチクトク〳〵と異樣に聞える。私は遂に眼を閉ぢた。家が舞ふから。眼を閉ぢたが矢張り暗くならない。家が前に見える。百姓屋だ。一軒てない。百軒も二百軒も。と其處へ足長蜂一匹飛んで來た。軒下の巣にとまつた。一也が來た。小さな子供を二三人連れて。火のつひた竹を持つて居る。竹はズーッと高くなつた。遂に蜂の巣は燒けた。一也は巣を拾つて、竹の火を踏み消した。が屋根の火は消えない。子供等はこれを見て勢よく走つて逃げた。火は忽ち大きくなつた。どつと上る火焔は早二軒三軒となめて行く。風が吹く。澤山の人が騷ぐ。ポンプが走る。叫ぶ泣く、爆る。……先生小便に行かして下さい！兒童の一人が云つた。とまた一人、また一人、最後の一人は一也であつた。

一也は能く描かれてある、末段の冥想めきたところは無くもがな（評）

暗き夜

金澤　むらさき女

桐の花の香が、ひどくする夜——外は眞暗だ。恐ろしいけどわざとガラス窓は、明放してある。聲を出して本をよむ事も厭になつた。ランプの火を見つめてる。じゞとまたゝいた。……と其またゝきの中から、出てきたかと思はれる二つの蛾：ぱーつと厭な香のする粉を私に引かけて、二つともランプの口金に取ついた。——私は口や鼻を蔽ふて、どうするだろうと見てゐた——とその一つは、ばねて彈かれたやうに、ぱたり机の上に落ちたが、すぐ又とりついた。……二つの蛾は身動きもしない——私も一つ所を見つめて——このあたりの靜かさ穩かさは、いつまでも續くだろうか否否つまらない、じれつたい……何かおこればよいのにッ——ぱた〳〵と羽ばたきしてその一つは落ちた：——毒氣をもつた香がぷーんと鼻をつく——。私はうれしさに心は踴つた……勢きつてランプをもつて窓の所までいつて、ついてゐた强い方の蛾を、突おとした。そしてぴつたり障子をしめて火をふつと消した。眞暗の中から机の上を見たら……むづ〳〵した蛾の姿がはつきり畫き出された……。

弱者

小さな三疊敷の、勉强室の中を、窓をあけて何が當度なく、追つてる女。おやをかしな事をしてゐると思つて、立どまつて見ると‥あ、わかつた。その室には蠅が五六疋、疊から三尺ばかりの所を、煩さくまふてゐる。彼女は本を見てゐたが、それが癪に障つて仕方がないらしく、室の隅から窓をあけてその方に、追出してゐるのだ。ばたん〳〵音をさして、やう〳〵皆おひ出した。‥‥けど彼女は窓の外にある、李の木の下で、むら〳〵してる蠅が、又癪にさはつた。それで、もう少しあちらへ行けばよい、と、本をもつて窓の外の蠅を追ふた。蠅はなか〳〵散らぬ。遂に肝癪をおこして、本を蠅に向つて、抛つけた。‥‥蠅は一寸散つただけで又集つてきた‥‥彼女はじた〳〵ふんだ‥‥

白い幕

向の二階にかかつてゐる幕！風もないのに、ふはりふはりと動く。私は今度は横の方に、ゆれるだらうと思つてると、縦にゆつたり動く。違つたな‥‥と少し顔が赤くなつた樣に思ふ。今度こそは横へ‥‥と又ちがつた。じり〳〵といらだつた。と烈しく幕は動くと見ると、その陰から見出された人！それは女だ。筆をもつて机の上に、兩肱ついてるらしい。――じつと動いてる幕を睨んでゐる。あ、あの女も私と同じ心でゐはしまいか、と思ひながらも幕に氣がのこつて、横へよこへと‥‥あら‥‥横になつた‥‥と思はず笑ふと、あの女もにつこり口許に笑をたゞへた。

さくらの葉

「ほんとに飛んだ事だわ‥‥。」と私が云つて、二人は丈の低い楊貴妃ざくらの葉を、むしつては捨てちぎつては捨てしてゐる。「それてね！。」と久ちやんが語り出した時、私の心はもうこゝにはなかつた。――心の奥へ〳〵氣のりしてゐた魂は、引込んでしまつた。そして返事ばかりしてゐる。併し手は依然さくらの葉をむしつては捨てしてゐる‥‥。「ね、まそれより仕方がないわ。貴女もそれに贊成ね‥‥。」何かしら久ちやんはようおしまいに云つたから「さうね‥‥。」とぼかんと唯返事した‥‥。幾日もたゝず、久ちやんの樣子を見た私は、無責任の返事をした事を、眞から悔んでもう厭になつてしまつた。

四つともとり〳〵に面白いが落想が仝じものばかりで、合せて見ると思想上に倦怠が來ないでも無い、獨斷な個所もある改めるなら今です癖とならないうちに、さうしてノーマルな發達をしたら乾度佳いものが出來ます（評）

葬られざる自己

若杉とり子

覺めた！、覺めたと云ひながら深い深い限も知れぬ暗穴道を――枳殻のとげに肉を刺され蔦かつらにからめられたりしてもがきつゝ落ちて行くのぢやあるまいか噫すべてが疑問だ文學は私の爲に醉はさう〳〵とするのだ、戀も私を深い暗黒につき落さうとする爲に彼の甘たるい愛の言は皆欺く手段に過ぎないのだ、社會は私を苦しめやうとする大きな〳〵獄舍ぢやないか？惡魔は皆からくりの如に忙しく目先を變へて、何伯爵何令孃――警官罪人――と裝ふて唯々世の中を廣く思はしめてるのぢやないかしら――斯う云ふ愚な疑問を抱いて居たのは幼い頃であつた、それが今でも時々腦裡にひらめくあゝ馬鹿らしいと直ぐ打ち消して終ふけれど人は自分の思想を踏み潰して戀も友も奪ひ去り一の慰安さへ與へまいとする。其の上此の身は自己の爲に生れたのだとは決して云はせない、然も自分は葬られまい〳〵と反抗に反抗した結果遂に多くの敵を得て疲れ切つた此の心――重い〳〵悶えと裂かれる如な悲しみとを抱いて反對の方面へ〳〵と外れて行く――凡ての人は情けない人間だナアと云つた樣な一瞥を與へる犯した罪と胸の傷はあゝと長い溜息をついて意氣地なく窓に凭れた時夕陽は今沈まうとして紅く燃え爛る、樣な夏の夕雲は靜かな〳〵泣く事も出來ないやうな悲哀を感じさせる「黄金本位の思想の抵い彼等よ人生の深刻なる處に觸れて見よ靈の存在も藝術の業も解せずして冷たい權理と道義の許に我等の清き靈の交りを絕てよと云ふか」此の叫びが飽く迄反抗せよと迫るかと思ふと若い血は赫と上つて熱涙が頰を流れる――

信仰

其夜月は高く冴えて惱み多い私さへ夢の樣な天地に向つて、何等の苦悶をも忘れ果てゝ逍遙ひ歩いた、讃美歌のすゞしき聲に引き込れて、身は清き敎會の中に絕えぬ疑問を抱いて、狂氣の樣なクリスチャンを見た其中に砂ほこり白く汚れた袢天を着た勞働者は神のみ前に跪いて熱涙と共に過去の罪を悔いて居るのに―あゝ私は淺ましい人間だ此の黑い汚い胸の傷を神の前人の前に悔ひたらばどんな煩悶から救ひ得られるか―どうしても私は神を信じ得ない――清き女の人々は遂に涙の瞳を見こして汚れ多き私を取り圍み今宵限り悔い改めエス神の手に縋りまつりて安き尊き日を送り給へと、神の愛をとかれたけれど噫どうして此の凡ての

疑問が解かれるものか欺いて神のみ前に跪いたつて洗ひ去られるべき罪ではない――

其一夜疑問を生んで遂に彼の熱心なクリスチャンを迄疑つて果ては暗い〳〵思ひに沈んだ、此の踊るか沈む私の心は到底平和を得られない、其癖平和を破つた時の悲しみと寂しみは心の底をたゝき割つたかと思ふ程になる此の冷寂は自分から求めたものであるけれど人の妙齢十八は生の春だと云ふのに――

あゝ私は寂しい。

壓制の獄を破つて未だ遁るゝに處なき不安煩悶の型を砕いて新らしき根帯の成らざる哀痛この悩みを懐くもの君一人とは云はぬたゞ繊弱なる少女の身自ら捨てず、心を言はずして堪へるうちに、凡べてのことが生命の糧となるのである（評）

外出前

越後　佐藤浪子

鏡臺に向つた儘右手を伸べて窓の簾をかゝげると細い雨が降つて居る、お稽古通ひらしい蛇の目が二つ並んで靜かに揺れて行く、ぼんやり見て居ると「姉樣未だ――」と妹が甘い口振の催足「直きなの、一寸待つてゝ頂戴」と斯う云ふて、やけに潰した庇へ玉子色のリボンを掛けた、先づ是て宜いと立つて鏡を些し斜めにして、上布絣の單衣に胡蝶模樣の厚板織を思ひきつて下にメてお太皷も吸ひ付いたやうに、二圓なにがしの安ブローチも胸に光つた、そして今一度襟を合せて鏡臺の前へ座つた、「姉樣」と又呼んだ、催促かと思つて「いゝのよ」と云ふと「妾屋井樣お迎ひに行つて來てよ」妾はじつと鏡を見つめた儘「さう早く行つてお出でなさい」と言ひ乍ら先刻美枝樣から來た繪端書を思ひ出して抽出からそつと出した、何の御用かと見ると『妾お友達と先日から此地に來て居ますのよ、お友達は意地惡るて妾計りいじめて被在るの、實に淋しいわ、貴孃お暇ですか、何なら加勢に來て頂戴な。鯨波にて白百合』と斯う海水浴の美人繪端書に、何とか流の御自慢の筆のあと、彼人は何時も斯うだ、避暑や旅行先からは必ず便りをする、お天狗なすかない方、第一『何なら』が氣にいらぬ『妾計いじめて』男だ、男の方だ、誰かしら、政男樣？それとも淺井の金縁眼鏡かしら？、どちらにしても好い面の皮、お邪魔に上りはしませんよ妾はお嬲り者にはなりませんよ――ボンとほうり出したらヒラ〳〵舞ふて癖直しの湯の中へ落ちて見る間にズブ濡れに成つて終つた、妾は冷かに笑つてやつたが包みきれない寂しさを覺えた、誰樣は某家へ、何子樣も誰樣と數へて見れば、――見返る妾の拾八年は彩も香もない極めてさびしいものてした、

戀されもせず戀しもせず、妾の血はどんなに冷いものでせう、燃えるやうだときく戀の語りも只描いたに過ぎないのです、愛する人愛して下さる人は果してあるであらうか、二つ違ひの妹にも先を越される日も來るだらう、あゝ其日、妹のまばゆい裝ひに、危うく殘れる或る誇も全く冷え、幸あり光ある新しい生涯に敗殘の身は癒えざる胸の傷みに猶ほ惱むであらう、其時雪さんはどうするだらう、石のやうになつて居る姉を打つて／＼打ち据ゑて、幽かなうめき聲をきいて冷笑するだらうかいや勿體ない、みんな妾の邪推でした、雪さんの胸中は好う知つてゐるものを、免るして頂戴な雪さんにまで嫉妬なんて、我ながら思ふても恐ろしい、こんな悶えをする樣なら一層死んで終つたら好かろうに、――馬鹿な、死んで何日花が咲かう、實は一滴ても人樣から羨望の涙が頂き度い癖なのに――スーッと障子が開いた、はぢかれたやうに立つ、入口に妹がイんで居るのだつた、妾は堪らずバタ／＼と側へ寄つてしつかり其手を握つて「みんな姉樣が邪慳なのよ、雪さん堪忍して下さいよ、……そしていつ迄も／＼見捨ないでね――」「姉樣、何仰在るの？」妹は呆れた眼をみはつて片手を輕く脊に投げた、途端妾は思ひからさめた、只空想に過ぎなかつたのだと思ふと何となく極りが惡くなつて頰がほてる「何ね、讀みかけて居た小說に餘り熱中しすぎてね、ホヽおかしいわ、女主人公夏子を氣取たの」「姉樣てば、私びつくりしてよ」ホッ／＼と妹は笑ひくづれた、私も今更らしく笑つたが、絞り出した僞りの笑みあゝつらい、私は悲しみつゝも亦隔ての壁を築く、――「屋井さんは被在つて」「アラ、妾忘れて居ましたわ、妾の部屋で待つて居らつしやるの、姉樣お早くね、」と云ひ捨てゝ思ひ出したやうに小忙しく階段を降りて行つた、籬越しに往來を見下すと、つたやと三字大きく書いた番傘がせつ／＼と行く、傘の主は小僧でもあろうか、黑い脚がチョコ／＼見えて、時々傘の範圍をはづれてお重包らしい物が現はれる、妾はぬぎ捨てた日常着を衣桁に掛けしなに、小雨降る街の左側に紫の蛇の目傘三つ並べて靜かに行く樣を想ふた、そして友のかほ妹の顏朧ろげに分る自分の顏、交る交る思ひくらべて莞爾した。

戀をするのが幸福かどうかは千古の疑問ですが、若い者の前には乾度横はつて來るのです、此文その邊の消息をありのまゝに書いたのが面白い、尤もだとも思ひました、しかし度々こんなとも面白くない、あなたは油畫具のやうな彩筆を有して居るのですから、まだ／＼もつといゝ材をつかまへなさい（評）

溫泉宿にて

水戸重子

番頭がスースッと靜かに雨戸を開ける音がする、もう何時だろう、おや斯樣に音がして雨かしらと思てると、番頭さん雨ですかと、隣室の奥樣も聞いて居られる、いゝえお天氣で御座います、あらそう矢張水の音だつた、これには時々だまされる奥樣もそうだろう、まだ少し早いけれど起て楊枝を持て緣側へ出ると、女中や番頭が客の起ない內に火鉢や茶道具を掃除してゐる、まだお早う御座います、皆同じ事を云ふ、裏の磧へ出るとまだ戶の開かない家もある、何十丈かある山には草木が青々と繁茂しゴウゴウと箒川が流れてる、水は草木が映つて綠色に澄んで、大きな石に當つては碎けしてゐて恰度濱邊の樣、あたりはシンとして男の子が何か取てゐる、虫だか何だか可愛聲て鳴いてゐる、好い聲て鳴いてるのは何、つて聞いたら河鹿だつて云ふ河鹿てまだ見た事がない、二階を見上げると室の掃除も濟むだ樣だ、

浴室へ行くと隣室の奥樣が這入つて入らつしやる、お早う御座います、つて云ふと、おや何處へいつてらしつたの、少し歩いてきましたの、あらそう私何處へいらしつたかと思つてましたよ、御飯が濟むだら裸の湯へまいりましよう、えゝあすこの湯が一番きれいてよう御座んすわね、せつせと洗つていらつしやる、私は一人て足を出してゆつくりと、湯につかつてる、身體が眞白くすき通る、湯槽は皆石で湯でも水でも自然に湧いてるし斯樣な所で暮した方が好いと思ふ、奥樣は着物を着てる私も上がつて洗面所で氷のやうな水て顏を洗つて室へ行くと御飯の仕度がしてある、御飯が濟むて椅子に腰掛てると、奥樣が雨が降りそうですから鹽の湯へ行つて來ませう、今直ぐてすか、えゝ仕度なさい、手早く着替へて玄關へ來ると、お早くお歸り遊ばせ、と女中の聲を後に往來へ出ると、何處を見ても山計り、これだから水がなくなる筈がない、鹽の湯にも澤山這入つて居た、二三度這入つて歸て來た、御飯を終へて隣室へ遊びに行つたりしてる內に日の短い事女中が床を敷きに來る、今日は須卷の湯、明日は源三洞窟、木の葉石と每日每日同じ事して一週間計り過ぎた或日起て見ると山には霧がいつぱいだ夕べからの細い雨が降つてゐて、何處へも行かれないて新聞も端から端迄見てしまつたし、二三冊の雜誌も見飽きたし、家の中でも歩かうと浴室の方から二階と、ぐるぐる廻つて、廣い梯段を上がつて、三階から下を見下しながら來ると、後て手荒く障子を開ける音がするので何の氣もなく一寸振り返ると、肉付の好い鼻下にピンと八字の濃いヒゲのある方が人をチャームするやうな眼てヂット私を覗て居た、私は玄關に立つて外を覗て

居ると、バタバタ驅ける足音がして、實際好い僕のラバー、云ふ聲がして曲り角の所から今の方とも二人一人の方は矢張ヒゲのある瘠た方も一人は二十五六の細面のヒゲのない眼鏡をかけた方あとの方は入九位皆色白の血氣盛りの（後で女中に聞いたら）大學生だ、三人で種々な事云ひながら覗く、後へ引くにも引かれず、仕方なしに會釋して室へ來ると、胸の動悸が烈しい、あんな方が居やうとは思はなかつた午後浴室へ行くと濃き髭ある方が這入つて居て先きの事はケロりと忘れた樣に、東京から入らつしたんですか、いゝえ水戸長く御逗留ですか、三週間計り、そうですか僕は四十日計り居ります是非お遊びに入らつしやい、は、ありがたう、少とも知りませんてした、雜誌でも借りやうかと思ふが何故か行かれない、其から三人の方に遭ふ度に必ず横目でジロリと見る其眼付が物を云ふ樣に。

右隣室へ女將さんが藝者を二人連れて來た、商賣だけに馴れるのが早い、私に遊びに來いつて云ふ、退屈だから遊びに行く、三階の書生なども毎晩の樣に來ては一時迄も二時迄も唄ふやら大變な騷ぎ、人が睡るのにわからないのだらうか、斯ふなると藝者が憎くらしくなつて嫌な思がむら／＼と湧いて今迄白



おむかへ　本所　木幡きみ子

粉など手も付けた事もないのに、日に三四度も湯に這入る度お化粧をして、わざと三階から見える樣に、欄干に倚つて外を見てゐると、必と、一人が降りて來ると又一人降ては怪しい眼をして見る、私は莞爾として見せる、三階の書生さんは貴孃の事計り視て入らつしやるのよ、つて云ふ、私は化粧は日增しに濃くなつて行く。

こんなのも少々困まるが、温泉の景物がすべてよく出て居る點つきは無邪氣で巧みと云ふに至らない、奮勵を望む（評）

雁のゆきかひ

相模　萩香女

一

夜來の雨霽れて心地よき好天氣、まだ露深き白百合は臉重げにうなだれつ、強い日の光ををうけてつや〳〵と匂ふばかりの楓の茂みから風凉しく流れこむ朝、私は花輪さんへのお返事書かうと、部屋に入つて窓に腰かけて、また昨日のお手紙をくり返した。まつたく花輪さんの御筆はあまり穩に溫和し過ぎて、讀んだ後で餘情の殘らないやうに思はれる、やつぱりお齡上だけに泉さんの方が實があるわ。けれど泉さんは隨分な方ほんとに〳〵あんまりだわ。わざと私からも差上げもせぬが絕えて久しい三月餘り、端書一枚下さらぬ。アお別れした當座、お便りだつて月に二度をかゝされぬばかりかあれ程お優しかつたに、こんな方ぢやなかつたに、泉さん、袖ふり合ふも多少の緣とやら、まして短からぬ月日をかくまでの御厄介、いつの世にか忘らるべき、小生出立の際君と拜眉の榮を得ざりしは實に千古の遺憾に有之、併し今後度々面會の機會有之事と奉存候、再會の機をいのる、とは幾度かくり返されたお言葉で、私はその度每いつも泣き乍ら御返事書いたものである。それがお正月の頃から一度となり、二月目に減り、果ては此頃のなされ方、これがそも、君ゆゑに今年初めて秋の哀れをさとり申候、とまで有仰つた君と同じ人のしわざか。

もろ共に江の島詣でせしも昨日の如く覺ゆるを、今より思へば淡き春の夢の其れの如ぞかし……その夢からさめて現實の世界にはいられたのであらう。アヽ考へて見ると悲しくて胸が痛くなる、私はともあれ泉さんだつて花輪さんだつて直ぐにも家庭をお作りなさらねばならぬお年紀、いつまで私などゝ下らぬ手紙の贈答などして居られやうぞ、むしろ……むしろ泉さんのやうにうとくなる方が自然かも知れない。

机の前に座つてまつ白な洋紙をのべて、バイオレットインクの中へペン先を浸したまゝついあらぬ方へ思ひが外れると、我にもあらずホロ〳〵と涙がこぼれる。

あゝやつぱり御自分の故郷だもの、なつかしいのは初聲あげた地、たとひ石の下にても父母君ねむりますところ、女學校の四年生と聞く從妹の君も在す家、泉さんは故郷の人と成てお了ひなすつたのだ。世に會心の友の音信を聞くよりうれしきはなかるべし、歸郷後冷たき故郷の空氣に仕へる身の、さながら春の光に浴せしごとき心地して君がうるはしき水くきのあとを讀みまゐらせつ　と云はれた時代はすでに去つたのだ、泉さんを恨んてはすまぬ。たゞ時――タイムの力、泉さんはもう二十七だもの、けれど、とたん「郵便ッ」はつと夢中に立上つたが濡手をふき／＼持て來たお多喜の手かち引たくるやうに受け取つて見ると、白の封筒に男らしい字の御親披――は、まアまア泉さん、かけもどるより早く御文かゝえたまゝ伏し沈んて了つた。氣がゆるんだのか安心したのか、熱いしづくは止度もなく頰を傳ふ……

二

私は今日名も知らぬ人からの手紙を落手した。淺みどりインクの筆のあとすが／＼しう、達者な走り書て交際をもとめたものてあつたが、虫が知らすか何となく胸ををどらせ乍ら讀んて行くと、美しいリボンの栞が巻きこめてあつてこれが我が心をこめた贈り物願はくはハスバンドの君よりのプレセントスなるかの一葉全集のうもれ木の一節にはさみ給はれ――私は思はず眞赤になつて、机の上につゝ伏した。

あの一葉全集については姉樣からもあんな事云はれたし、ア、私と川島さんとの間は、他目には戀と見えるのだらうか。それや贈られた一葉全集、嬉しく／＼うけて常に机上をはなした事はない、が、もと／＼秋元さんの夫人の御紹介だし、いやしくも大學に籍を置かれるお方、その交際の淸さ美しさはむしろ傍ない曉の草葉に下りる露のやうなもの、天神地神も照覽あれ、あまりに思がけぬこの君ゆゑのぬれ衣、私は……私はかまはぬけれど母樣のお耳にてもはいつたら、それこそ何と有仰るか知れぬ。「社會の制裁は殊に女に對しては嚴に候ふよと萩花樣にも云はれた事があるものを、川島さんも御迷惑てすわ、いゝわ、私もう川島さんには御手紙出すまい、來ても決してお返事書かないわ。堪忍して頂戴川島さん、せめて女史が萬々分の一にてもあやかつて、いまに乾度あの御厚情にはむくいますつもり。此上の御緣があつたらその折にこそ……。御身御大切に、御成業遊ばしませ。

そしてこの栞と手紙は、流石捨てかねて巻きおさめて手箱の底。ア、私は熱い血しほの沸きかへる乙女の身てある、人生一代の花たる時代だもの。こんな事云つて冷かされるのも弄かはれるのもいまの中、いまにこれを追へどかへらぬ我が青春の形見として、懐かしい思出の一ッにかぞへらるゝこともあるだらうと思へば

誘惑もうれしい、立つ名なき名もなつかしい。父の亡い子はあの如くなどとそしらばそしれ、十七といふ妙齢がいつまで續く、いや何度ある。私は血の沸く乙女の身私は血沸く乙女の身。

三

青葉若葉に雨けぶる朝、野村さんからのお葉書を受取つた。青葉が茂る、雨がふる、雲が迷ふ、時鳥がなく、夏は私のすきな時、奥ゆかしい時、胸のをどる時山の温泉へまゐりました、里から十里も山奥、谷底を流るゝ溪流、谷々に埋もる霧、鈴ふる樣な駒鳥の聲、夏は胸のをどる時、

　山の温泉の早くつく灯や時鳥

とのみ、蒲人とは君が雅號である。消印をすかして見たが雨ににじんでようわからない、病める詩人、私はむら／＼とてひしさなつかしさに堪らなくなつて、ひしと兩袖を抱いたまゝ新緑のあぶら流るゝ若葉の窓によつて泣いた。あゝ青葉がしげる、雨がふる、夏は私のすきな時……

『ありのすさびも若きうち』て、青春の周圍は皆美くしい、しかし酔ふものは醒めればならぬ運命を有して居る、たゞこれをして詩たらしめふ、妄評多罪（評）

私の一日

土佐　桃の花

私の家は薊野の里の山に添ふた孤家、此頃は青葉若葉に鎖されてほとゝぎすのねより、ほとゝぎすの音に夜が明けます。家内は父母と、十六の私を頭に二人の妹と、一人の弟があります。一番下の美イちやんが尋常一年、此子の髪はいつでも私が結んでやります。東の空が樺色に染まつて希望の光に滿ちた太陽は今にも出さうになつて、向ふの畦道にお隣の嬢樣方の燃ゆる樣な紫紺の袴がひるがへる頃、私は紺の着物に鍬かついで毎日田の草取りに父母樣のお供、初めの中はあゝ折角花やかな此世に生れて何事もせずに此地の土になるのかと情なく思つたり老ひた父樣の後姿を仰いでは、何となくホロリとなつた事もありました。母樣までが私の白手拭被つた顏を御覧なすつて、お前も色が黒うなつたよ、なんて淋しくお笑ひなさる事もありましたが、今ではもういつまでも平和に此里に一生を送りたいと思つてますの。

お早う、とやさしく頭を下げる三寸ばかりの、青々とした稲をながめますと、もう何とも云へむ心地がしますの、一種の聖い誇つてな感じがして。父樣の眼も母樣の眼も活々してらつしやる。私もこれがやがて美しいお米になる秋を思ふと實際うれしい。私はお百姓になつて丁度一年、去年の草とりは思ふ樣にならなかつ

たが今年はもう墨人に成つたつて皆が笑ふ。父樣は可笑しい程若い聲で田植歌お歌ひなさるので母樣は若い娘さんが聞いたら?つて大笑ひ。私はまだ話をすれば手が止まるので、せつせ、と母樣に後れない樣になか〱急がしい。澤山の村の若い衆や娘さん達が、御精が出やすなあ、つて笑つて過ぎた。私は知らぬ振して稻のかげに顔をかくした。何だか彼の人等と親しくするのが嫌なので。

お晝御飯を、畦に腰かけて終ると、もう一働らき、工塲の笛が鳴つて、稻のかげが黑く斜に傾ひたと思ふともう日暮れてす。小さい雪駄の音がチャラ〱と、美イちやんの、母ちやんも姉ちやんもお茶が沸いてよ、と、可愛い聲、三人は一齊に腰をのばしてニッコリする。

柳の新芽細やかな門の小川の邊には美イちやんが氣を利かして三足の繩緒の下駄をちやんと揃へてある。鍬を洗つて、一日の疲れを淸い川下に流がすともうせい〱する。夜は六疊の茶の間に一家水入らずの六人妹の掃除のゆき届いたラムプはパッと花やかに、嬉しさうな六ツの顔を等分に照して、チャブ臺は眞赤になつた海老がかしこまつてゐる、御飯がすむと父樣はいつもの會津戰爭談をおかしな手振りて。弟は海老をふせるにや此樣しなくちやあ、と、おしやもじておかしな眞似をする、と、又しても去年の夏魚釣に行つて私が一尾もよう釣らなかつた話を持出す。「姉樣は駄目だちつと竿が動かうものならそれこそ大變大聲出して、竿をふりまわすもの」。

私は今日の新聞を讀んで皆にきかせる、讀み方が旨くなつたと母樣。あゝかくて樂しい日は暮れました之れが私の一日です、願ふは明日も明後日も、いつまでもかく平和にあれと。

ほんとに樂しい一日てす、文もよくそれがあらはされてある、よそながらにも平和を祈ります(評)

三等列車（三篇）

一

靜岡　仙花

御殿塲から乘つた一人のハイカラ紳士、カフスを焦茶リボンで止めて薄桃色のネクタイを附けて居る、新調らしい眞白な夏帽を大事相に棚へ乘せてさて持込んだ折詰と正宗の二合瓶を開いた。折柄下り道の勢い好い汽車は今し竹の下にかゝつた、とたんにどつとばかり大風が室へ舞込んで其れと一所に何やら白い物が飛び出した、はつと思つて見たら帽子だ、紳士の……大事の新調の……私は驚いた、となりの御媼さんも

向ふの御翁さんも氣の毒相に紳士の顏を見て居る、所が本人樣一向平氣知らぬが佛とやら、今酒宴の眞最中、いつしか汽車は小山を過ぎて山北に止つた、紳士は未だ氣が付ぬらしい、私は其所で下りたので後は知らぬが、帽子の一件を氣付いた時の紳士の樣子はさぞかし氣の毒な物であらう。

二

一つ隔いて向ふがはに腰をかけて居る二十四五の美人、白魚の樣な手が頭へ上つたと見たら早髮をこはし始めた、好くなじんだらしい小さな黃楊の鬢櫛は器用に黑髮の間をぬうて、私は目じろぎもせず見て居た、果然彼の小櫛はほきりと二つに折れた、美人は別に驚きもせず束髮の横櫛を代用させて、すつかりとき上げたら根元を左手につかんですうとゆるめて、つと下し上を小奇麗にまとめてもう出來上つた、元結らしい物は一つも用はずにまあよく出來たものだ、前髮やたぼのふつくりとハイカラには感心してあかず〳〵眺めて居た、やがて美人は長い〳〵小よりをつくり始めた、そうして今度は袋の中から小楊枝を二本出して、件の折れた櫛をつぎ合せて先の小よりでかゞつた、そして前髮のほつれ毛をなぜつけて居る、何んにつけても器用な人だ、長い一生には大へん德な事だらう、と感じて居る中に汽車は江尻につたいので下りてしまつた。

三

五十八か九かもう好いかげんな老人の方が、私の前に長くなつてねて居る、其向ふに二十四五の頗る付のハイカラ紳士……(とまあ云ふて置う)が肱を老人の方へ突出して之れもやすんで居る。暫くすると老人の方が目をさましたところが變な物が腰のところへ出つ張つて居るからおかしく思ふて、暫くの間なぜて居たが今度は強く引つ張つた紳士は驚いて手を引つ込ませた老人はびつくりして起きあがつた、そして二人は顏を見合せて、あはてゝ失禮、……私はたまらなくなつて窓の外へ顏を出してしまつた。

好寫生文(評)

泣き聲

大阪　今西春江

外には嵐が激しく吹いてゐる。よく物にすねて泣く妹が、今日もしく〳〵泣いてゐる。水に浮鳥の模樣ある襖にじつと耳をあてゝ聞くと、すゝり泣く聲は手に取るやうに聞えて、しみ〳〵胸にこたえる。何だか引き入れらるゝやうに感ずる。

嵐はだん〳〵激しくなる——。

思ふ人

頭からスッポリ蒲團をかむつて、冷めたい胸をかゝえた。外には雨が降つて居て、雨垂れの音が淋しく聞こえる。寢ながら冷えた胸の中へ、私はあれかこれかと色々の顏を手操つて見た。こくハッキリしたのから、だん／＼手操り寄せて煙のやうな朧ろの顏まで手操つてしまつても、まだ心は「これ」と言はなかつた。

「あゝ」私は深い溜め息をついて、涙も出ぬ顏をあほ向けて、眼を瞑つて夢に入つた。

涙

秀雄さんと向ひ合つて座つて、私はためらはず色々の物語をした。其中には大分嘘も交つてゐた。

秀雄さんがお歸りになつて後、私は靜かに私の姿をかへり見て、其淋しいのに涙のさしぐまるゝのをおぼえた。

僞盲目

ちやるめらの音が遠くにして、町は黄色くたそがれの色に包まれた時、私の家のかどへ一人の盲目乞食が立つた。盲目乞食は懐中から尺八を出して吹いた。哀れなる調は靜かなる四邊の大氣をふるはした。

店に居た小僧は「まアお斷り」と云つた。それでも盲目乞食は尺八を吹いた儘立ち去らなかつた。小僧はまた「まアお斷りちゆうてるのに!!……」と、少し語氣荒く云つた。すると乞食は何か口の中でブツ／＼云つてかどを退いた。そして二間程云つて南の入口の處でまた同じ調べを吹き始めた。

小僧がせゝら笑ひながら「同じ家だよ」と云ふと、乞食は吃驚したやうにパッと眼を開いた。そうして小僧の顏をキッと睨んで行つてしまつた。

「涙」の如き振つたものはあれど、平生程よいものなかりしは殘念（評）

嬉しき日

山口　酒向とし子

太藺の根にかきつをあしらつた大變お花が活きて來たひそかに秀逸とほこり乍らお勝手へ出たらもうおすもじのおいしい匂やらお口取の甘そうな匂ひやらでどうやら頂戴と手が重ねたいでも此年になつてそんな事も云へないもの、とにかくお勝手が賑かで何となういゝ心持がした。別に用もないので机に向つて何をするでもない、つい抽斗をぬいたりさしたりして居たら、いつやら神主のはらい給へきよめ給へののりとが嚴かに聞えた實に神々しさがみちてこれでどうして病の神がはいられ樣ぞと一人嬉く笑つた小三十分もたつて扨てれからが私は御酒のおかよひ役、神主は七十二才だと

いつて入つしやたがなか〳〵大酒家で、もういけませんつてお盃をおかくしにはなるが入れてあげればいくらでもきりがない、イヱまた其の笑聲など實に若い者もかなはない、私迄もついて笑ふやうな事であると何やら玄關へバタッと何か置いて行つた樣な音がしたハッ！文壇！といち早くも胸のあるものが聲立てずに叫んだ、もう座つた心地がしたらばこそかへなくてもいゝお銚子をかへにお勝手へいつたら兄樣が臨時が來たよと私に下さつた、さあ心が騒ぐの騒がないの、お客あしらひなどなつたらこそ、一人ヒー〳〵云ひ作らページをくつた、まあどうでしよう！小指の和歌は其まゝ出て居たてないか實に嬉しくつて〳〵胸はひつくりかへりそうだつた、そうだ憂事には度々出くはした私でも今日程胸の動悸を強めた事はあゝ此歌の通り君が小指の血を見た時だつて只泣いたばかりこれ程の心の地震は世に出て廿年今日が始めてゞある、どうして物事が手につこうぞ、あゝ私は今日始めて嬉しみのもだえといふものを悟つたのである、あゝくるしい嬉しくて胸が、あゝ幾度見ても限りなく胸はかきむしられる樣なふとおかよひ役だつた事に氣がついたので本を袂に押入れてお座敷に出たても始終氣がそは〳〵してお銚子の手もおのゝくやうな、とにかく神主が早くお歸りになればいゝがとホ、いかなお客樣ずきな私でも今日ばかりは箒が立てたい、でもまさかそんな事も勿躰無くて出來はしないもの、だつて私はもう氣がイヂ〳〵して座つてはちつとも居られない、でまた、一寸お銚子を取りに行く風をして座をはづした、そして文壇の入つて居るたもとをいだいてお部屋に走りどうきどく〳〵くり返し讀んだ、あゝ一心はひどいものとう〳〵出たのかなと實に私は本を抱きメて泣いたのであつた、おやさしい姉樣がほんとにお前は歌がお上手だネと賞めて下さる……敏子さん、オヤ祖母樣がよんで入つしやらあーまあどうしよう、私は此本を持つて行こうかしら、だつてはしやくする間は讀む暇はおろか表紙だつて見られはしない、……に只文壇をいだいて躊躇つたのである。

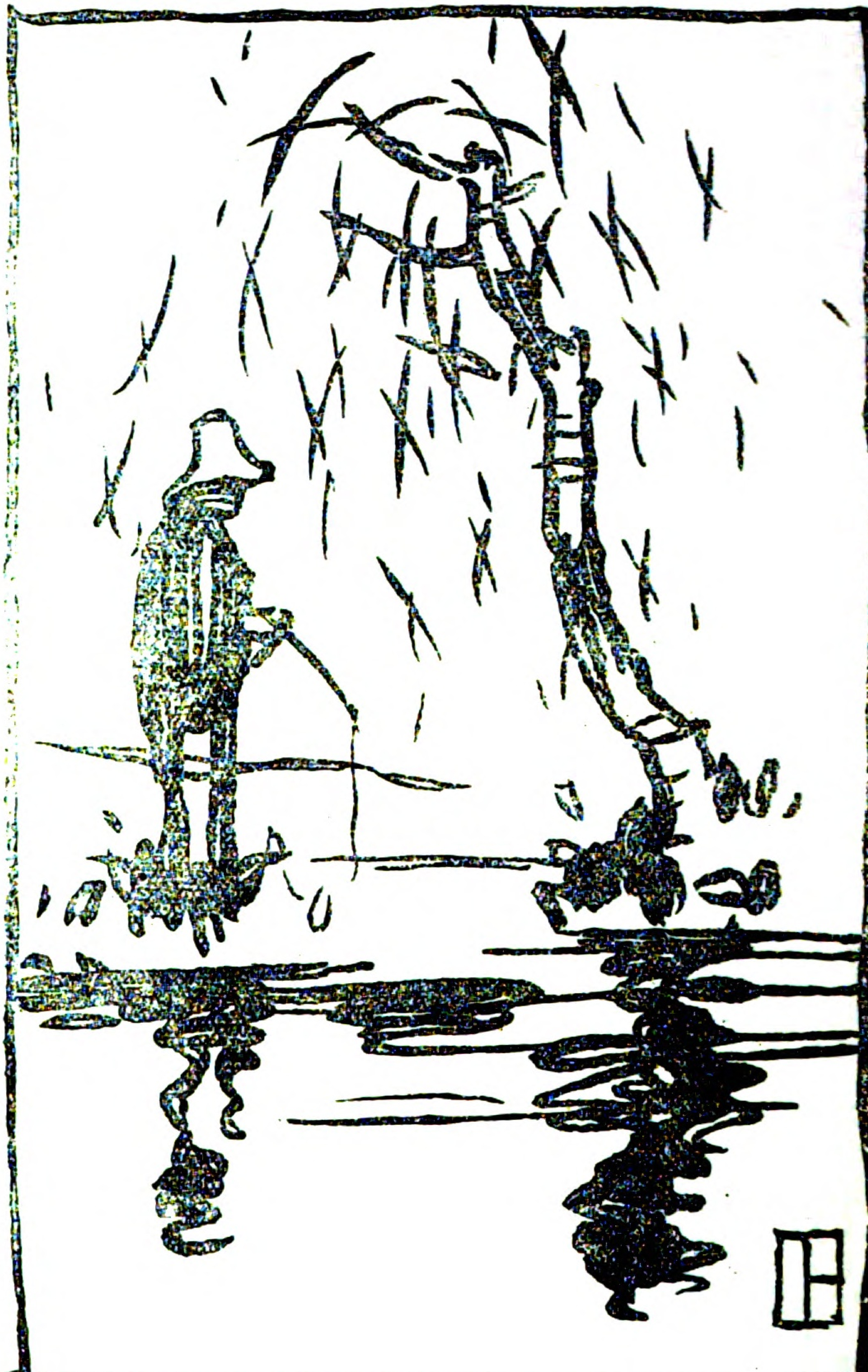
ほんとに嬉れしさうですね、此文もその樣子が映える樣によく書けてあります(評)

我が望

横須賀　君枝

いつまでも〳〵十七で、下げ髪に五吋のリボン掛けて飛びはねてゐたい。そうして兄樣が三人姉樣が二人弟一人妹一人ほしい、一人は外交官、一人は實業家、一人は機關學校に姉さんは美しい姉さんで、弟は中學の

一年位のと妹は五つ位の幼稚園に、赤のリボン脇に結んで、空氣草履はいて、通ふのほんとに振ひ附きたい程、なぜ母樣は妹を產んで下さらなかつたのでしよう、又武雄の樣な夫持つてお暇には造花送つたりお務に御出でになる時も家に御歸りの時も坂の下まで送迎して夏のお休みには從兄や夫の友達、親戚皆逗子の別莊に行つて、朝は花園散步したり遊動圓木したり、お庭の下が海で家から海水衣着て行つて、泳いで歸るとお湯がわいて居て、それに入つて、夕方は又思ひ／＼の遊びして、思ひ切つてあらひ浴衣着て浪切不動に行つたり、月の好い夜、家中で音樂や茶話會を開き雨の降つて、外に出られぬ時には好みの御馳走作つて食べ、ピンポンしたりして、面白く愉快に送りたい、マアこん



水凉送し　青森　立花とも子

な事、天本梅可さんがお聞きになつたら、噫お泣きになるてしよう、それでも、多くの人にはもと〳〵大きい望を持つて居らつしやるだらうと思ふ。私の夜の淋しく椽の柱に寄り掛つては何とも云へぬ、淋しさを感じ、人なつかしく亡き人の事ども思ひ出され、嗚呼寧その事神武寺の樣な神々しい處に藁屋の床を結んで蟬丸の樣に常に琵琶でも聞いて心をすまし自然を友に世を送りたいとも思ふ。

お易い希望ですが、そして浪子の樣に肺病で死ぬんですか（評）

夕

尾州　竹内ユウ

お夕飯をすましてから散歩に出掛けるにはもう遲いしさりとて燈火を點して勉强をする氣にもなれぬので暫く椽側の椅子によつて見るともなく思ふともなく暮れ行く春の夕の色に憧憬れた。朝起きると誰よりも一番に「お早う」と挨拶する佐久島夜眠る時には必ず「お眠み」と云つて與れるような、あの佐久島が、今この靜寂な夕にも矢張り「今晩」はと云ひそうに灰色の空と海との間からスッポリと拔け出して、優しうわが書齋を覗き込んで居る、朝の佐久島は端麗で夜の佐久島は森嚴であるが、夕の此時の佐久島は實に何とも云へぬ物柔かな優しい姿である。：例へば女德の備はつた美しい女性の立姿でも見るよう：：：：：：。漁り舟が今沖から戻つて來るのであらう、小さな白帆が三ツ四ツ二ツ鏡のやうな灰色の海上を辷つて行くやがてそれがだん〳〵薄れていつて果ては皆んな一ツ色に消えて了ふとずうつと右の方で青や紅の燈火が一ツづゝ殖えて來た毎晩東に出る明星とも見る例のアークライトも：：フト重たい濕つた鹽からい空氣を通して三味線の音が震ふやうに幽に響いて來た、耳を澄せば上手でもないが春雨を奏べて居るのである、三味線の御上手だつた石村樣の十八番の春雨を：：。石村樣と云へばホントウに今頃は何うして被居るだらうあれ程妾を可愛がつて下されて、妾もあんなに御慕ひ申して居つたのに、今ぢや互に消息も知れないやうな間になつて否妾がして了つたので：：、モウ五年にもなるけれどもお顏は宜く覺えて居る：：、眉毛は濃く、バッチリとした二皮眼の、氣味の好い程鼻筋の通つた、口元はもとより締つて居て、頭髮は薄い方ではあつたけれども素直に房々して居つて、總體に威嚴のあるキリッとしたお顏であつた：：村の人から「お才物」と讃められて居らしつた：：お歲は其時二十九妾が丁度十五の歲であつた、：：運命、運命、運命計りは幾何人間が何うしようたつて出來るものぢやありませんもの、石村樣も其後どんな運命にお導かれ遊ばしたやら、けれども妾は信じる、あんなに苦勞遊ばした方が今も不幸な筈がないと：：必度〳〵幸福なオ母さんになつていらつしやるに違ひない。日は全く暮れて了つて、黑ずんだ新綠の間から町の火が星のやうに見へて居る、先刻の三味線の音はやつぱり聞えて居るが此度は流行歌らしい、考へつかれて室内に這入ると丸髷姿の才女らしい石村樣が可愛い坊ちやんを抱いて被居るのが見えるやうに思はれて：：：。

中程より振はなかつたのが惜しい、前の方の書きぶりは隨分宜かつた（評）

天

書簡文

親しき奥様に

鹿兒島　みゆき

時節柄とは申ながら毎日〳〵根氣能く降ります事、皆様お障りも被居いませんか、其後は申譯もない御無沙汰致しまして、何卒お許し下さい、全く子供が一人御座いますと何にも出來ませんのですよ、奥様、お子様は可成晩くお持ち遊ばせ、思ひの外面倒な者で御座いますよ、家の環などお蔭様て大變丈夫て御座いますから幾分か世話も少ない様に人様は仰しやいますけれ共自分の身に取りましてはまあ能くも斯様に忙しい者だと思ひますよ、朝夫が出勤致しますと先づ何をおいてもおむつの洗濯、食後の後仕末、さうう致して居ります内環が具合能く眠つて居ればよいんですが、目醒めますと中々一人では寢て居りません。餘り泣せてるのも御近處へ御迷惑だと存じて、相手になつて居れば最う十二時てすもの、此頃でも一寸も日が永いなんて思はれませんの。何を致しますのも子供が眠つて居る間を見ては致しますから、丸て人様の物でも盗み取る様で自分乍ら可笑しく思ふとも度々ですよ。夕御飯をしまつて添乳でもしますと、晝の疲れで遂親迄眠つて起きます時が九時にも九時半にもなつて居りますから、一針二針子供の着物でも縫ひますと：：誰方様にも御無沙汰勝て御座いますから何卒惡しからず。

でもね奥様、子供と云ふ者は實に可愛いゝ者ですよ。私は時々、奥様にも私の様に男のお子がお產れになつて、子供を抱き乍ら二人て遊ぶ夢を見ますの。奥様ははじめ旦那様もあの通りお立派なお體格て被居いますから必然其内お出來になりますよ。能くあれがおまじないになるとか是がよいとか人様は仰やいますが、私も今迄隨分申されましたんですの、けれ共眞實とは思ひませんよ、殊に主人は御存知の通りの人てそんな迷信なんかつて一圖にけなしますから何も致した事も御座いませんてしたが、全く時節が參りましたんですよ、

此頃は大層肥えましてよう笑ひますの、最う二三日で百二十日になります。奥樣も何卒お心をゆるやかにお持ちなすつて折角時候お厭ひ遊ばしませ、お目出度いお便を待つて居りますよ、色々申上度いんですけれど今日は是てお暇いたしませう、旦那樣へも宜しくお傳へ下さいまし、さよなら。

子持の曉かるべきを勸めて實は早からん事を慫慂して居る、其矛盾に面白い人生そのものが現はれて居る、此文何の用意もなくすら〳〵と書き出して而も無駄な文句なく、趣味津々としてつきないところ、洵に推して以て實用文の範とするに足る（評）

地

母に代りて弟に

愛知　華影

道ざん大變暑くなりましたね、今日も亦海か山へ行きたい樣てすね、行きたい〳〵と皆て云つて居ます。あなたも無事て通學して居て何よりお結構てす、お母さんも皆無事てすから安心なさい、お手紙拜見しました、今居る所は暑いから〇〇さんが家へ被來いと言つて下さるし、何うしたらよいかつて、お尋ねてしたがね、そりや夏だから暑い事は暑い、けれど一概に左樣とは云へませんがね、少し位の事は我慢しなさいよ、御覧なさい町の中を荷車挽いて行く人なんか玉なす汗を流して居るてはありませんか、人力車夫だつてさうです、冬てさへ汗出して苦しさうに息して居るが、こんなにして勞働しなければ御米の代がないからて仕方なくするてしよう、私達は我儘云つて勿體ない事てすね。きのう家の前て荷馬車の馬が炎天に居ましたが、とふとふ倒れました、一時は大騒ぎになりましたけれど、水をかけたり、蔭を入れたりしてやうやくなをりましたが、馬など厭でせうと思ひますよ、折〳〵動かないて駄々を揑ねる樣なふりをするのも無理はありませんね、紡績などで働く人が百度以上の熱さの所で六時から六時まで、風を入れると絲がよわるからなんださうです。これも苦しいでせう、オヤ、何だか話が横道になりましたね、ま、少しの間辛抱しなさい、今に暑中休暇てすから、歸つて來るてせう、もう少しの間てす。人と云ふ者はね、初めの内は懷しくよいものてすが、飽きられると困りますよ、〇〇さんの方はちと見合せたら如何てす、勉強は涼しい内にしたらばいゝてせう。此着物は夜着るのてす、いつか送り返されたのはどうしたんてす、大變綻びてどこから縫つていゝか手がつけられませせなんだ、こんどは飛んでも跳ねても綻びない樣に縫つてありますが、何せよ着物のことてすから

お手やわらかに願ひますよ。此の洒らし布は夜腹の上へチャンと捲いて寢るのですよ、お腹が冷へますからいけません、此んな物めんどうなと思つて押込みの中へ投り込んで仕舞てはいけませんよ、暑いからつて氷や水をがぶ〱と飲んだり、ラムネのいかがはしきのを飲んではいけませんよ、お腹をこわしますから氣をおつけなさいな。お母さんのはこれでお仕舞。

道さん、近日に佳い物を送ります、あなたの好きな物

人

歸つて頂戴

兄様、昨日は御なつかしい御文手にして泣きましたよ、日頃の御心としてはそうでもありませうが、兄様其れては餘り御決心が固た過ぎはせぬかと思ひますわ、何も私がさし出がましう申すまでもございませんが、老い給ひし父様は一男兄上の御家出後三年の今日此頃ではめつきり力も衰ろへ給ひ今はたゞ兄様の事ばかり賴んで入被いますの、其れは兄様の御氣質としては、家の爲め父上の爲め大希望を抱き、單身都に出給ひて未だ一年に足りない今日、病のために理想の海を後に、今

樂しんで待つて被在い、半月ばかりたつとお母さんが色々と用があるから其地へ被行いますそうです、其時お話しをなさいますと、お體をお大切になさい、あまり炎天へ出ては腦をわるくしますよ、弱くては勉强したつて甲斐がありませんよ、では左様なら、

暑い〱と云つてる、道雄さんへ

姉より

發信者の母の慈愛、姉の温情、而して受信者のお坊つちやん風の性格、凡べて躍如として此文中にあらはれて居る、道雄さんとやらこれを受取つて定めて「だつて東京は暑いんだもの」とか何とか云つて苦笑遊ばせらるゝ事でせう、趣味多き書翰（評）

（奨作）杉山花枝

更古里に歸り給ふは本意ない事と思し召すでせうが、然し兄様どんな人でも病氣には勝てないと申すてはありませんか、まして御病氣は肺尖加答兒とか、それに只今戴いた上京中の芳子様の御文で承りますれば、醫師も空氣の清い地で暫く保養した方がよい、との言葉を兄様にはしりぞけ給ひ筆さへ置き給はぬとか、あまり〱てはございませんか御文にも「倒れる迄進む、今更何面目に父に顔が合され様」との御事、あゝもし

やもし今無理をなさいまして病進み不治の病にでも成り給はゞほんとにどうなさいます、家の爲め父上の爲め大成功して見せると仰つたのはまだ御忘れではありますまい、まして東京は塵深い地、烟突の烟で空も曇るとか、どうぞ父樣の事私の事を思つて歸つて頂戴、ね、破れし垣根の朝顏もよそのより早く咲き出し、毎朝可愛い顏して兄樣を待つてゐるではございませんか、美くしい門田の眺め、綠深い木蔭、山の白百合、と數へつくせぬ清い田舍の景色は、歸つて御覽なさいまし兄樣御藥は無くともきつと御全快ですよ、元の丈夫な御身と成り給ひあらためて上京し今迄の取り返しをなさいましたら日頃の兄樣決して他人におくれ給ふ樣な事はないでせう、どうぞ〱病重もり給はぬ中に御歸鄉のほど、私の此言葉無に成らぬ樣と祈つて居ますわ。

如何したらば此我慢の兄の心が動かせやうかと、懸命になつた筆致、幼稚なる態度、精一杯の忠誠、其稚氣、其至誠、飾らずして人をして泣かしめます。いくら兄さんが石の心でもこれを見てかへらないとは思へますまい（評）

秀逸

そのいちご

麴町　しらきく

よく毎日降ります、何となく思ひ出にふけらせる樣な日でございます、私はいま縫ひかけの帶をわきに押しやつて、何をするのもものうく、ぼんやりいろ〱な事を考へて居ります。

とう〱御別れしてから半年になりました、今年の夏は御歸省なさいますの？まだわからない〱てそんな事ばかり仰しやつて其間に夏は過ぎてしまふてはございませんか。

それはさうと私今日は悲しくつて悲しくつて仕方がないので御座います、ほんとにまあ如何したら宜しいのでせう、御別れする時今年はいちごは食べに來られないねつて仰しやいましたでせう、そのいちごが今年はまた、大變によく出來ました、毎日毎日それはおいしかつたのでございますよ、そしていつも等樣とあらそつてとつた時の事を思ひ出して、其頃をなつかしく思ひ、如何かしてことしも少しでも御口に入れ度いと存じまして、大きな籠に二杯ばかりひとりで摘んできれいに洗つて、そしてジャムをこしらへました、うそては御座いません、上手に出來たのでございますよ、嬉しくて、うれしくて早く御送りし度いと思ひましたが安全な入物を買つてきて貰ふ約束が、此頃の雨て果してもらへないんでございませう、若しか味がかはりはしまいかと、（悲しいとには實は不完全なジャムなので

ございますから）毎日火の上に幾度となくかけて、まあそれて安心して居りました、今朝も氣がついて火鉢にかけました、そして一寸まだ間があると思つて等樣の御嫌ひな、あの「葵の上」をさらつて居りましたら……うらめしい、ほんとに葵の上を今度は私がうらむ樣な事になつ事になつたのでございますもの、あのそれはまるで炭素の實驗。

甘く甘くしてさしあげ樣と思つた御砂糖はジャリ〱した炭になつてしまつて、濃い紅のさえた色はもうもうかげもかたちもなくなりました、きまりが惡いやら悲しいやら、そつとお鍋を洗つて置かうと思ひましたが、すつかり密着してとても。

仕方が御座いませんから、そつと流しに置きました、今頃は臺所で笑つて居るでございませう、等樣もこれを御讀みになつたら御笑ひになるでせう、私ひとりは悲しくつて、

御笑ひになるとしりつゝ、獨りて胸におさめかねてこの一件を申上げてしまひました、左樣なら、（熊本なる從兄に）

品位を以て優れる者（評）

此寫眞よく〱御覽下さい

鳥取　安木春子

此頃の御手紙にちよい〱ビールの味がどうだの酔ざめの水が何だのおつしやいましたけど、母樣も「義はどうしてそんなに滑稽なだらう」とのみ笑つてなさいますし、私も兄樣にそんな事のある筈がないと別に氣にも止めませんでしたら、昨日西田の謙樣御歸省遊ばしたとて御訪ね下さいまして、兄樣の此頃の御樣子承つてびつくりしてしまひました、それさへ最初はお人の惡い謙樣何をおからかひなさるかとほんとにしませんでしたら、級會の時の事やら、卒業生送別會の時の有樣等委しうお話し下さいまして、「義三君もあれては」と大變御案じ下さつてでした、兄樣、御父樣が卒中でお亡くなり遊ばした事も、小作の豐が亂酔ひて川に落ち込んで死んだのもよくお覺えていらっしゃいませう。「中毒しないにしても何程人格を落すか知れないからな」とは度々兄樣からきいた言葉ですのに、どうして御酒などあがるやうにおなりなされたでせう「酒でも飲まなければ」と云ふやうな苦しみがあるならば、母樣もあれば妹もあるではありませんか、どうぞ御酒だけは止めて下さい、兄樣に限つて其の爲めにどうのこうのと云ふやうな事が有らうとは夢更思ひませんが、不充分ながら月々おくる學資も病身な母と幼い妹と

が汗の滴りだと云ふ事もお忘れなさらないでね、……私は兄様のためならどんな苦しみもいとひませんから……どうか早く成功して老先短い母様に安心させて上げて下さいまし。別封母様の御寫眞は此春兄様へおくるとてお撮りなされたものですが「餘りよくいたむでるから、義が心配してはいけない」とどうしても御送りなさいませんでしたのですが、今日突然「送つて呉れよ義も馬鹿ではないから考へ直そうよ」つて、ね、兄様昨夜の御苦悶は御顔に餘つてさらでも青い顔が一層青く御險にはれさへ見えて私は……兄様二度と仰ぎ見得ませんでした。失禮な事申し上げてすみませんでした、これも骨肉の親しき間故とどうぞ〳〵御許し下さいませ、くれ〳〵も申上げておきます、母様は去年の冬の御病氣以來どうもはか〴〵しくなさいませんですよ、頬骨の出たお皺の殖へた此寫眞をよく〳〵御覧下さいまし、今日は此れから母様と麥刈りをしますのよ、兄様、梅雨にいりましたから御大切になさいませ。

辞婉にして意太だ切、末段が殊に振つて居る（評）

初めて教壇に立つ人へ

伊豆　加藤爲子

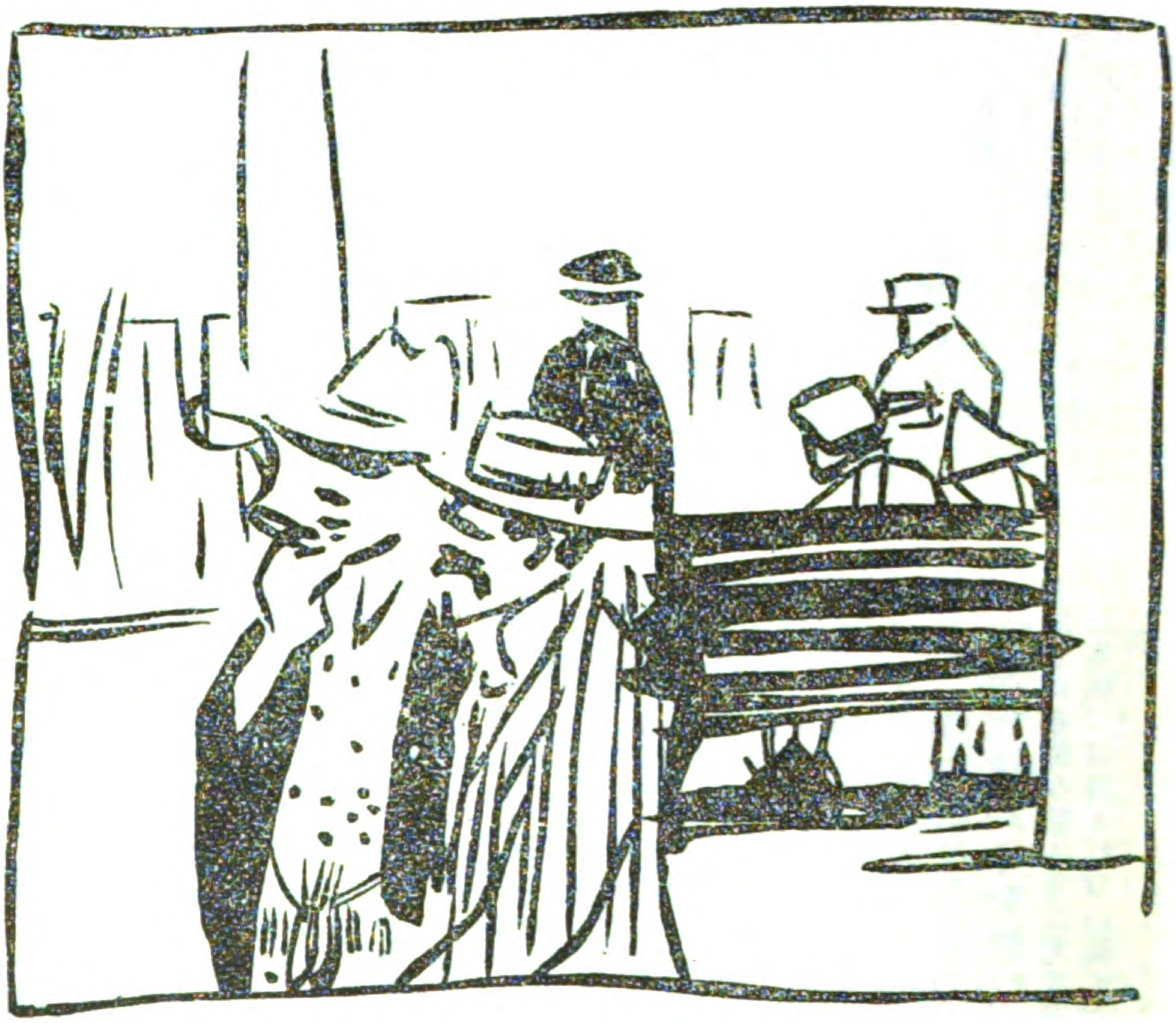
愈々小學校へ御勤め遊ばすことに御決定の由、私もいろ〳〵と考へて見ましたけれども、その方が貴女としては適當だと存じます。て何か經驗談をせよとの仰せでございますが、私とてまだ一年たつかたゝぬでございますし、元からの無頓着ですから到底まとまつた事は申しあげられませんのです、併し折角のことでムいますから、人から聞きましたことや、自分の失敗談を一つ二つ申し上げて御参考迄にいたしませう。

第一に子供を大きくみるといふことです。年若な教師は子供の心と合ふだらう、とは誰しも一寸思ひますが、此の心が對手を大人扱ひに致すので、私なども時々何々的だとか規律正しくだとか言つては、子供に何の事だと訊かれて、始めて氣が附くといふ始末で、ほんとに赤面するとが度々でございます。家で箒を持つたとのない子でも學校へ來れば掃除も致します樣に萬事がかうですから調子が取りにくうございます。次には飽迄も先生ぶらなければいけません。一寸した例へば私といはずに子供の前では先生がといつた方が宜しうございます、すべて謙遜といふとは小さい子供には無用で、何處迄も先生は偉いと思はせるが宜ろしいと思ひます。次にこれは申しあげる必要もございませんが、それは略畫を練習して置いた方が宜しうございます。一寸何でもないやうですが、さてボールドに向ひますと

なか〳〵思ふ樣には書けません。何の爲かと申しますと、下級に於いて數の取扱ひは、計數機や其の他の器械て致しますが、時には板上に一寸した畫を書きますので、其の際略畫の心得があつたら大層都合が宜しうムいます。一體に好奇心に富んでゐる子供を相手てすから、色々の場合に應用されます。まづ私の只今感じて居るのはこんな樣な事てございます、まだいろ〳〵敎授上の心得とか何とかございませうが、私もまだ十分存じない者でございますから、いづれまた御相談いたしませう。

とにかく一方には重大なる責任があつて氣苦勞のやうてすが、また一方には此れに伴ふ興味や希望がございますので、まあお互に出來うる限り力をそゝいで、斯道のため盡しませう、幸に御自重あそばしませ。

懇篤敦厚の情緒表にあふる、殊に具體的の心得を示したるが尤も有益であゝ（評）



停車場にて　陸奥　釜澤ひて子

悲しい事を

伯耆　蔦枝

冬樣、今日は悲しい事を御耳に入れなければなりませぬ、御情け深い姉樣は乾度私の爲めに泣いて下さるでせうと思ひますと、一層の事止さうかとも思ひましたが、どうせ御わかりになる事、幾度も考へた末到頭御知らせする事にきめました、私ね只今實家に來て居るの、イエ永久に歸つたのかも知れませぬ。

忘れもせぬ丁度十日前の雨風の烈しい朝で御座いました、四十日許り前生れたあの良一は、御父さんとならんで何も知らずに時々笑顏をしてはすやすや

と寢て居るのです私は此笑顏の爲幾度起ちかけては躊躇したでせう、やがて五時も打ちましたから六時十分發の汽車にのりおくれてはと、人知れず夫の君や兩親様良一にお別れして立ちあがりました、そして前夜用意しておいた御高祖頭巾にコートといふいでたちで、一里もある停車場に雨の降るのに傘も持たずに走りました。御察し下さい、何處をどう歩いて來たのか全く夢中でした、唯子供の泣き聲が耳について幾度も振り返つた事をよく覺えて居ります、冬様は私の心を鬼だと御思ひ遊ばすでせう、本當にやさしくして下さる夫や可愛い子供迄振り捨てて歸つた私は、何といふ淺墓で御座いませう母様に對しても今ではすまぬと思つておりますの、こんな勝手な事許り申上げて……御わかりにならぬでせうね、かうなので御座いますの、北村の御母様はそれは私をほめて、容貌も勝れては居らぬし衣裳もないけれど、よく働いて呉れてほんに思ひ通りの嫁ぢやといふて、可愛いがつて下さるつていふ事は是迄も度々申上げたでせう、ですから身重になりましてからは、此の様ならばやがて身が二つになつたら御母様の御喜びはどの様だろうと、それ許り樂しみにして居ましたのに、まあ驚くではありませんか、産後私に乳がないものですから、其の後の母様の不機嫌は御話にならぬ位、これが今迄やさしかつた母様だらうかとつくづく思ひました、乳があるとないとは小さな家計には大影響を及ぼすので御座いますけれども、それは今更、私の力で如何とも致しかたのない事、それを思つては未だ十八の春を髮結ぶひまもない位心して働いても其のかひなく、皆の者の飯料より良一の牛乳代が高くなると、あてゝ仰有いますの、利慾の爲には實の親子も相喰むといふ世ですもの、無理もない事と思ひますと、何とも名づけられない涙が流れて……、御察し下さいな私にはそれに堪へる丈の力がなかつたのですもの、私は矢張りよわいものね、添乳をしてやることも出來ない癖に今頃良一はどうして居るだろうと思ひますと、たまらなくなつて背のびして十幾里彼方の空を仰ぎます、あゝ私は是から先の一生を、どうして暮して行くのでございませうか、何だか果てしもない底に沈みこむ様な氣が致しますの。

思はず長話いたしました、定めし御聞き苦しかつたでせう、確に私は冬様の御目を汚しました、赦して下さい幸なき妹が身を想ひ給ひて。

（評）悲しい事實を訴へるに尤も適したしんみりした筆つきであります。但だ事柄に首肯されない點もあるが、そんな事はどうでもいゝ事でせう

病院に居る伯母様へ

日本橋　佐藤萬壽子

伯母樣、其後は御氣ぶんは如何ですか、昨日高田の叔母樣が居被つて、今日は大變快さそうだと仰被て居らしやいましたが、あの伯母樣は淸ちやんの事を大そう心配して居被るんですつてね、けれど伯母樣そんな事なんてちつとも心配なさる事はなくつてよ、始め二三日は、母ちやん〳〵つて云ふので、少し困りましたけれども四日目位からはもうそんなに言出さなく成て、今ではひとが、母ちやんは、と聞くといつても、きいき、惡いの、と云ひます、其れて妾に一番よく懷いて學校へ行て居る間は大騷ぎなんですつて、妾は何だか自分の弟が出來た樣に思はれて、うれしくつて〳〵仕樣がないの、家内には小さい子供が無いので皆が大變よ、夜などは每晩、あつちでも、こつちでも、淸ちやんを取りつこするので大騷ぎ、それでもお終には何時でも妾の處へ來て仕舞ひます、一昨日の晩もね、妾と一所に寢て居て忽にお乳が戀しくなつたのでしよう、妾の胸をあけてじつと中をのぞいて、不思議そうにそつと妾の顏を見た時の淸ちやんの顏！目！まあ何て可愛らしかつたでしやう、誰にも書けないでしよう、像にもきざめないでしよう、妾はもう堪らなく成て頰ずりしたのよ、淸ちやんは妾の胸に紅葉の樣な手（妾はどういふ事だか知りませんけれど、他人が可愛らしい手の事をかう云ひますから）を入れて、そろ〳〵さぐり始めましたの、やわらかい羽二重の樣な手がさわる度にもう、くすぐつたくて〳〵、けれどじつとがまんして居ると、とう〳〵淸ちやんは、姉ちやんをつばい、と云ひました、妾が胸をひろげて、あい、と出しますとあんまり小さいので氣味が惡いのか、妾と乳とを見くらべて、ぽちんとした乳くびをつまんだまゝすや〳〵とねむつて仕舞たのよ。

妾と淸ちやんはかうして每日〳〵樂しく暮して居ります、只もう伯母樣さへ御病氣が一日も早く直つて下されば、家内一同、萬歲伯母樣の家も高田の家も皆萬歲ですわ、どうぞ伯母樣早く直つて下さいな、詰らない事考へたり何かして惡くなつたら猶更詰らないわ、それよか早く直つて又海水浴にでも行ましようよ。淸ちやんもそうして下さいつて云ひそうな顏をして私の傍に座て居ますわ、左樣なら

無邪氣〳〵、而して無邪氣な筆。（評）

虫除けの藥も確かに

本鄉　崎山常夏子

み心にかけてお送り下すつた小包今朝早く屆きまし

た、『何だろう』、『何てしやう』、開ければ美事な寝冷知らず、子に優さしかつた母様は孫にも優しくして下さるものを、いかに忙しい身だからとて餘りと云へば餘りの御無沙汰、其お叱りもなくみ情の數々私何より先へうれし涙がこぼれました、虫除の藥も確に受取ましたから御安心下さいませ。今夜からは文子が寝冷の心配もなければ虫にさゝれる憂ひもなくどんなに安心だか知れません、又夏期の心得等何から何までの御配慮ありがたく堅く守ります、私母様の御手紙に接します度何だか昔の子供心が出て御懷しくて堪りません、ほんに子供と申せば文子が此頃メッキリ大きくなりましてネ片言ながらあーちやま位申ますの、輝雄は一日會社で頭を使つて居りましても、歸つて其無邪氣な笑ひ顔を見ますと疲れも何もすつかり忘れてしまいますつて、母様も是非御京上遊ばして可愛い孫を見て下さいまし、田舎の方が空氣は清いか知れませんが、矢張り都育ちは都に限ります、私は末つ子で一番母様に可愛がられたのですから、御恩返しに暫らく朝夕の御面倒が見度いのです、輝雄は幼い時兩親に死別れた身ですから、どんなに母様を懷しがつて居るか分りませんもの、決して御不自由はかけませんから、家の始末は兄様御夫婦にお頼みして夏の過ぎない内に御上京下さいまし、此處はほんに暑さ知らずでございます上野の森を左に見て右は清らかな不忍の池、居ながらに蓮の咲くのも見られゝば、闇の觀月橋にとび交ふ螢繪のやうな景色も眺められます、母様何うぞ避暑のおつもりで、片時も早くお出かけ下さいまし．涼しい風の吹きめぐる二階で松間の月をお肴に澤の鶴のお酌でも致しませう、これは私ばかりでなく輝雄からくれ〴〵申されたのですから、乾度御出下さるやう何日の何時に發つといふ事を早速御知らせ願ひます、兄様へも一言申上ないと惡いと思ひまして書きましたから別封お渡し遊ばして下さい先は御禮かた〴〵御招きまで。

うるさい人生にもこんな平和な生活もあるのだと思ふと御同慶に堪へません、好家庭、好書簡（評）

小學校より女學校へ

但馬　西垣琴悳

愈々暑くなりました、毎年申上げる事ですが、また今年も體が熔け相で困りますわ。今年の寄宿舍は何う？ちつと御暑くなくつて？あゝさう〳〵去年の今頃は、丁度あなたの御病氣最中でしたが、今年はもうあんなものは御斷りなさつたでせうね。文さんも春子さんも御丈夫ですか。お二人共ちつともお手紙を下さらないの。それから聞けば寄宿舍内では私が嫁りをしたといふ噂が高いさうですが、

そんな事を云はれると私胸が痛いので、どうか、その段は、あなたから御辯解を頼みますよ。

ほんとにねえ秀子さん、わたしやほんとは嬉しいのよ。無邪氣な可憐らしい子供を相手にして毎日〳〵樂しく暮してるのてすもの。子供は皆汚ない田舍者計りだが、それでも、タブルカラにコスメチックでいやな眼つきをされる公園の散歩とはずつと勝つてゐますよ。昨日もチおかしいと云つたら、私が臨時變更で尋常の三年の處へ行つて、該方の時てした。私が今は春か夏か秋か冬かと問ひましたら、一人の子供は眞面目に秋てす、と云ふてしやう。私をかしくて堪まらなかつたが、なほ強いて眞面目になつても一人問いて見ると、大きな聲て春てす！と云ふぢやありませんか。私もう思はず噴き出して、冬ぢやないの？と問いて見ると、誰一人違ひますと云ふものはなくつて、皆ぼんやりしてるのてすよ。ほんとにをかしいといつたら、私しや何處に行つたつて此んな面白い公園はないだらうと思ひます。何を言つても無邪氣てすからチ、もう行くから歸るまで先生〳〵つて纏れて來るし、云ふ事はよく聞くし、まるて自分の子の樣なものてすわ。此んなに毎日樂しく暮して居ると、妾もう、夫も子供も要らない樣な氣がするのよ。理想のハズバンドだとか理想の家庭とかいつた時代はもうとうにすんだ婆時代の樣な心地がします。

けれども、實は知れませんわ。まだ先生になつてからは僅かに二月だし、その上年が十九と云ふ危險千萬な時てすからね。だがさうならないうちが花てすわチオヤつまらぬ事を、今日はこれで、てはさよなら。

讀んで果敢ない樣な感じがします、それが宜いてしやう。（評）

妹の片見に添へて

茨城　菊の香

星がきら〳〵光つて居る晩でした。一匹の螢がふらつと美惠子の枕許にとんで來たんてすよ。その時美惠子の樣子は、もう危かつたのです。それてね美惠は細い聲て姉さん螢取つてと申しますので、捕かまへて手に持たせましたら、よろこんて文さんに上げたいつて、そうしては、文さんともう學校にも行かれなけりや、遊ばれもしないつて、大變泣きましてね……文さん文さんつて死ぬまで言ひ續けましたのです、ほんとに美惠は不幸でしたね……神樣もあんまり早いお迎へてしたわ。

此程、美惠が大切にして居た箱を開けて見ましたら中に、呈文さんにつて、持たせて上げた物が這入つて居ましたの、その中て紅いリボンが一番、美惠子の愛し

て居たんです、美恵はもうとうから、天國へ上ること
を知つてたんですね——文さんにいただいたものは殘らずお土産に持たせました、どんなによろこんで居るでせう、日曜日にでもいらしつて、美恵子の前で遊んでやつて下さいな、一人で何處を淋しく歩いてゐます事やら…私は文さんを美恵だと思つて居ますからね どうか、おからだを丈夫にして病氣をしないやうにして下さい。それではかたみですから受け取つて下さい ほんとに美恵子は不幸でしたこと。
淋しいから遊びに來て頂戴な。呉れ〴〵も……さよなら

卒讀に堪へません、ちと圏點が多過ぎましたが此儘に……あゝ悲しい事(評)

出産を促す文

府下　香野子

姉樣まだ赤ちやんは生れませんの。一躰いつですか私ほんとに、待遠しくて仕方がありませんわ、姉樣早く〳〵おうみ遊ばして頂戴よ。ホヽ、誠に無理な注文ですわね、だつても私實際待ちどしいのですもの、兄樣どんなお顔してゐらつしやいますか。やつぱり待ちどしそうなお顔してゐらつしやるでせう、兄樣だつて、私だつて、誰だつてそうですわ。姉樣私もう赤ちやんのおよださんも、お召も、皆出來上りましたのよ、學校の事のひまに一生懸命になつてこしらえましたの、それだのにまだ生れても居ないのですもの、私もう待ちどしくて、待ちどしくて、門ががらりと、あく音が致す度に姉さまからか、と思つて急いで飛び出す事日に幾度か知れませんのですよ。そんな時は意地惡く、大嫌な人や、こないでいゝ人ばかり來るのですもの。父樣も母樣も皆つるの首それよりも尚々長くして、今か今かとお知らせの來るのを待つて居りますのよ。それから姉樣成るべくは、女のお子をお産み遊はして下さいね、男のお子でもいゝけれど、出來る事なら女のお子の方がよろしうございますわ。何故つても、私女のお子だと、おつむもいつて上げる事も出來るし、又、私といつしよに、お湯にも入つて、お化粧もして上げる事も出來ますし、少し大きく成られたらお琴のおけいこにもいつしよに行つて、二人でおさらへする事か出來るのですもの、姉樣私最早近いうちに「お叔母ちやん」と呼ばれるやうに成りますのね。嬉しい事よ、然し「叔母ちやん」と申される資格がございませうか。ホヽ、姉樣如何。なにしろ姉樣御身を幾重にも、お大切に遊ばして、一日も早く玉のやうな、赤ちやんをおうみ下さ

いませ。私一日千秋の想ひして待つて居りますわ、あゝ早く赤ちやんがうまれゝばいゝ事ね。では姉さま今日はこれで筆を止ます。どうぞ御身躰お大事に遊ばして下さいませ。さようなら。

そりやア無理ですよ、しかし姉さんそれでおなかが痛む程笑つて、早く出來るかもしれませんわね（評）

氣六ヶ敷夫に仕へる姉へ

天鹽　山田一穗子

お姉樣！お義兄樣の御機嫌は矢張りお惡いですか、困りましたのねえ。お優かつたお義兄樣ほんとうにどうしてさうなつたのでせう。お姉樣の御心配を思ふと胸が一ぱいになります、お母樣もお姉樣の事を心配成すつて『あゝ園さんは今頃どうして居るだらう？』ともう涙ぐんで居らしやるのですよ、お姉樣お辛いでせうけれど、老い先き短かい御母樣の御心の安まるように一寸お便り下さい、お姉樣の御辛いお心の內は二人の妹がきつとお察し申し共に泣きます。妹の身でかう申ては失禮ですが、御同樣にお母樣のお膝許で、承はつた……今も承る御戒めの試驗だと思つて辛抱してお仕へ下さい、家へお歸り成つても、……矢釜敷いお義兄樣が家にもあるし……

やがてお義兄樣の御氣の柔らぐ時が來るでせうから――。あゝどうぞ早く以前のお義兄樣に成つて頂きたい、私は其斗り祈つて居ります。

そうでなくても平常御用の多いお家ですのに、お義兄樣が御氣難つかしいと來たら、なほの事御用が多くて落着いてお裁縫もして居られないでせう。私も未だ充分な事は出來ませんて、御氣に召すまいけれど、御常用の洗だく物て、縫ふ物が御座いましたら、お積りをしてをいて遠慮なくお知らせ下さい、吉やを取りにやりますから。

どうぞ何事も因緣だと諦めて御身を大切にして下さい、內は皆息災て、憲さんは毎日學校へ、貞さんは私がお守りですよ、あゝこの何方か一人姉樣の處へ產れて居たならばと、私は何時も思ひます、では皆樣へよろしうお傳へ下さい、さようなら

これも實のある手紙、本號に佳作の多かつた事は選者の欣びに堪へないところです。（評）

小姑となつた妹より姉へ（再び）

大阪　西戸政江子

姉さん、妾姉さんのお所へ行きたいわ、此の頃の家の淋しさ、姉さんお察し下さい、嫂さんが居らしつてからもう三月にもなるんですが、まだ嫂さんとはしんみりとお話しさへした事がないの、嫂さんはかう姉に濟しなすつてね、眞實に下宿して居らつしやる樣だはね、お母樣が田舍の人でもよいから極內氣な音無しい娘が

欲しいと云ふて居らつしやつたのを、姉さんや妾や二人がそんな田舍の方なんか不可ないわ」、と無理に反對して今度の嫂さんの居らつしやるのをどんなに待ちましたか、某女學校を卒業遊ばして、お父樣は某銀行の支配人そのお孃さんと聞いて居りますから、まあどんなにおやさしい、おしとやかな方だらう、居らしつたら色々な事も敎えて貰ふし、散歩にも一緒に行かうと、それはもう居らつしやらない前から、何だかお友達の前でも肩身が廣いやうに思はれてばかり樂しみに待つて居ましたのに、今日此頃の家の淋しさ、姉さんは御婚禮後間もなくそちらへ居らしつたので、何事も御存じないでせうけれど、眞實に此の頃程不愉快な日はありませんの、お氣の弱いお母樣は御飯の時だけ臺所へ居らつしやいますけれども、御飯がすむとすぐ離室へお出て遊ばす、そして何かにつけてそれはまあ御氣の毒な程御遠慮遊ばして、妾やもうおいとしいやらお氣の毒なやらでひとり涙がこぼれます、そのせいてか此頃はかう急にお年を召したやう、お額の皺の數も知らぬ間にふへて居ります、昨日の夕方もてす、兄さんと嫂さんと散歩にお出ましになつた後、姉さんのもとのお書齋に妾獨り居ますと、何んと云ふ事なしに淋しく悲しくなつて來て、果ては机の上に俯伏して思ひのまま泣いて居りましたの、するとお母樣が居らしつて「文なぜ泣くの」と仰しやるので、「妾何だか悲しくつて」と云ふとお母樣は「なにもそんなに悲しい事はないぢやないかね、文、父さんの死んだ後はやはりたよりにするのは兄さんですからね、兄さんや嫂さんの言ひ付けはよう守つて下さいよ」と、でもお母樣だつてやつぱり涙をためて居らつしやるんですもの、あゝお父さまさへお居でになつたら母樣だつてかうまで御遠慮遊ばさないだらうに、何事も仰しやりはしないけれど、「早くよい嫁を」と嬉んで居らしつたお母樣の御失望、妾やどんなに辛くとも辛抱致しますけれど、お母樣がお可憐さうですわ、ねえ姉さんなどゝ一緒に海水浴へ行きましたつけ、あの折の事思ひ出すともうたまらなく戀しいの、あのそれから母樣はいつも姉さんのたよりを待つて居らつしやいますからお母樣の御安心遊ばす樣度々御手紙下さいよ、左樣なら。

無理が無く自然に書けてある、六つかしいは人生なる哉と思はしめるのに十分であります(評)

君昨夜の月はよかつたね僕は溫泉宿を出て町はづれの大樹の木陰で夜が更けるまで夢のやうな附近の眺めに見とれてゐた月かげは君も眺たであらうが僕の脚もとで頻りと鳴いてゐた鈴虫の音はかりは聞かれなかつたらうあれが封じて送られるものならば髮は夜露に濡れやうとも草むらを搔きわけて音を偸みにかゝつたものを些と手紙を呉れ給へ。(薄田氏の『新書翰』より)

新體詩

天

暮れがた

あはれ水無月二十四日。
いくめぐり　いくめぐり
また――　　いくめぐり
今日の日も
光にそむき　しづ〳〵と
いともしづかに　今
はてしなき　やみを殘して――

大いなるほてりに
みそら――、底のそこまで吸ひつくせし海原、
破壞　ほしいまゝなる海原
かゞやかの　瞳衰ふ。
さあれ　心殘りの
仄白う　弱き光。

信濃　太田喜志子

ああ　水無月二十四日
死してゆく――
光――死してゆく。
　わが耳　鞴張り
　わが胸裡　白蠟　湛み
　わが眼　烙印　そなへあれば――
あゝ鳴る　鳴る　鳴る
青葉のくらきひゞき。
白日　白刃振り翳され
なやみつかれし　すべての精靈――。
すりゝ泣。
いまはの　といき。
心臟の鼓動。
山――。

まろく長く　巨人の安眠
遠ひゞく‥‥何の音
ああ　やすらひの　いびき

いと肉ぶかに
地底のすべても　ふるひわなゝく
鋭き　ひかり
一日　一日と荒みわたる人の心靈——。
すさましきかな
あをばのしげみ　奥の奥に
白刄　鞘に　をさむる　ひゞき
やみより　やみに消えて　ゆけど
あゝ　この暫時　萬象
こゝろかぎりの　叫哭　わめき。

ひくきにはらばひ
裂けなんとする　胸
刺しきざまれんとする身
わづか　闇黒なる　空虚に倚りて
もろごゑに　さけび　わめくと
鋼——
白蠟——
烙印——
一齊に
よろづのつばさ　うちそえて
くらき　かなたに
かけりゆく——

おもく〱しい響のあるのが何より嬉しい、誠實の氣の充實して居るのが何より嬉しい、詩に一種の權威があつて冒すことが出來ないやうです、女性の歌としては情緒に乏しいやうですけれど、拔群の作家は男性女性の境界を超絕して、たゞ人間の聲を表はさればなりません。闇の壓迫を斯くまで痛切に表はし得たのは少いので、獨創の意味、情緒を深く表はさうとした努力の程は一句一句にひゞいて居るやうです(評)

地黒影

四谷　まきばしら

酔ひくづれて黄に濁つた午後の日の
倦み照らすかげに悩まされ
なやみ疲れた我心、やつといま
かすかにも息を洩らす。

――西の空暮れてゆく光の中に
仄にきくいやはての楽のしらべ――
あゝ其のひとゝきを
蒼ざめた涙の笑を頬に
浮べて
黒き二階の窓に倚る淋
しい姿よ
もしや冷い目にふれた
らば……
目の下につゞく家根、
黒く低く
引窓の口が開たのやら
閉ぢたのやら
ほそ〳〵と煙がなびい
て――
こゝにも人は生きてる
のかしら……
いゝえ横にも後にも
地の幽霊のような黒い影は
嘲笑ひ目をひからして
自分を圍んでゐる



緑蔭の詩集　紀伊みつ子

おゝ落つる日よ――
墮るのは我胸ばかりてあらうか
葉もうごかぬ
鳥もうたはぬ
骸のやうにたゞくろく
家根はつゞく
あはれ今絶えやうとし
て消ゆかに咽ぶ
光は、しらべは
立ち並ぶ戸毎に
名殘りのキッスをして
ゐるのに
地上のものはなぜこん
なにつれないのだらう
戸は空しくとぢたまゝ
闇の滓の淀む底に――
あゝ私もこのいとはしい人と共に家と共にこのまゝ沈
んて行くのてせう

清らかにも澄みゆく空よ
奇しき睨み、うるめるまなざし
生れて行く星の一つ一つに
不安のきざし——
みる／＼胸にひろがつてゆく黒いまぼろし
「見るんぢやありませんよ
　かくれるんですよ
佛さまの御名をよんで
　さ早く袖のかげに—
この窓のしきゐの上に
突伏してふるへて
私の袂をしつかりおさへて
あゝ母さまのやつれた蒼いその片頰。
「神もない佛もない
　もうこの家に日は圓に照らないのだ—
おもむろに
現れる不思議のもの凄い天を
おぢつてみつめて
絶望のためいきの
深い／＼其の底にも
ひとり兄樣の瞳は燃えて
さながら火と
輝くけれど焦げるけれど
消えない、溶けない、鑄られたやうに
眞黒なものゝ象が——！
あゝ蝕みつくした太陽の恐怖の面、常闇の天の色、)
どうして胸から消さう
あせるほど／＼劃然と
暮れゆく空に
幻燈のやうに浮び出て……
おゝ早く戸をしめませう
暗にこもる
終日を倦みてらした
太陽の息、濁つた空氣を
吸つて／＼胸いつぱいに。

此詩も好い、口語體であるだけ、內容は更にはつきりした印象を殘します、言ひたいことのありだけは精一ぱい、胸一ぱい言ふと云ふ樣子があつて、全力は注がれてゐます、口語ではあるが所謂口語詩的の模倣のないのは何より貴ぶべきことです、詩題は「暮れがた」と此れとて全體を代表して居るやうに見えます(評)

秀逸

小曲四篇

下總　月沖さゆり

○

花さきぬ、朝露しげく、
鴨頭草とはたしら百合と、
わが袖のしめりがちにぞ。

あなかなし三とせとなりぬ、
母逝いて、泣きにし朝を、
夢のごと幻にみぬ。

○

わすれず、いとほのかに
さき匂ふ月見草、
はかなき、小草なれど、
わすれめや君が肩に
かひなに、泣きくづ折れ
いとあつき、接吻かはせし
過ぎにし戀を思ひ、
わすれ得ぬ、小草の花よ。

○

なつかしき露にうるほひ
白きさゆりは
やはらかき吐息はき蕾開きぬ、
またひとつ——花ひらく文月の朝よ

○

星月夜、しづかなる夜霧は白う、
水と空海のはて潮ざひどよむ、
笛とりぬ胸みだれ笛吹きぬ

四篇とも幽趣あり(評)

女

信濃　秀枝子

寂びしい夜の町を、私は一人で歩いて行く、

來る男も往く男も、私を振り向いて見る、

其時『われは(女)である』と、胸の中に叫びながら、或る強い〱誇りを感じて、見向きもせずに行き過ぎた。

ふとある家の灯が、格子戸から暖簾を洩れて、白ちやけた路に映つて居る、

其處に立つた私の顔がパッと明るくなつて、自分の誇がハッキリと見られるやうな氣がした。

店の中には私と同じ位な女が、長火鉢の向ふに、俯向きがちに座つて居る、

髪はきれいに結つてあるが、蒼白い面には何處となく、暗い影が宿つて居る、奥の方で手が鳴つたので、銚子を持つたまゝ立つてしまつた。

＊　＊　＊

『あゝ、彼れも私と同じ(女)だ、』けれど、私のやうな誇は夢にも知り得る時はあるまい。——

『あゝ、私も彼れと同じ(女)だ、』と、思ふとすべての男が、强者のやうに見えて、

何とは知らず私は、堪へられない程悲しくなつて來た。

悲みが悲みらしくないので一向に氣が乘りません、すら〱と苦なしに書けてはありますが、何うも物足りないやうです(評)

詩二篇

京都府　隅田れい子

初夏

初夏の十勝野　何といふ寂しい夕であらう、
私は「ふと」沼の邊に迷ひ出た。
見ると水はまつくろである、岸に沿ふて落葉松が並んでゐる。
風が吹く、なま暖い風が……
恰ど熱病の人の呼氣のやうに、スウー、スウーと、
松の若葉をゆるがして、
水の面にゆら／＼見える
何か／＼、私は「ぞつ」とした、

風の吹く日

風が吹く、冷つこい風が、ぞく／＼と身に泌む、
空を見上げると灰色の雲が南へ南へと飛んでゆく、
私は今、二階建や　三階建のズラリツと並んでゐる中を歩いてゐる
廣い往來には電車が通る、車が通る、
人が行く、赤い眼、青い顔、黒い着物……それが皆私の顔を覗き込んでは、
スタ／＼といつてしまう、向ふに赤い旗が
ヒラ／＼とする、私はふと我にかへつた、と
孤獨といふ寂しい感が犇々と胸にせまる。

「初夏」の方が優れて居ます、「風の吹く日」はそれほどでもない、

蠟の火

尾張　服部登久枝

暗紅にふるう、
いと弱々とうちふるう、
光の吐息、
蠟の火よ。
疲れたる――、
ヂオロンの、
悲しげに――、
あゝいたづらに咽ぶかな。
熱き血汐のホロ／＼と、
狂ひたどるゝ、
そがむせび。
あゝ――紅の夢、
――青き瞳――。
たゞ狂ひつる、
夢の歌――。
あゝ暗紅に戰きつ、
不安の瞳光、
蠟の火よ。

濁れる薄暮

熊本市　峽よし子

腐爛ゆく夕日の喘ぎ――、
遠に見る沈默の杜の、
白楊の絃の神經に、
絡みつゝ吸はれゆく、
――寂滅の薄暮――。
萬象は音をひそめて、
終の日の嘆きのさまに、
不安に慄く、其時ゆ、
我魂は惱に默す、
噎濁れる薄暮――。
かゝる夕べを、
灰色の窓にもたれて、

青ざめし君が彈くなる、
ヸオロンの悲しき曲節、
萎へはてし官能に反應へて、——
さ青なる涙ぞ流る。

さまよひ

門司　箕田　文子

朝の月水にうつりて
しづかなる天地の
なかに吸はれて
われは行く
白楊のならべる川岸
なよ〳〵と風吹く
葉より葉に
すべりしたゝる露のしづく
青葉の香ひ
萬象は
いと安らかに眠りに入れり
かゝるとき
はてしらぬ悲しみを抱き
地のなかに埋れ行く
心の
なげきのひゞき

闇

阿波　大久保桂子

寂寥の洞に、現の、
木靈精靈はわが領の如く、
どよめきわたり鳥みなは、
ほそき吐息に羽を收む。

夕なれや、草の花は萎れて、
露白う葉には光れど、
闇にゆるゝ夜の幕は、
冷扉にかゝりて、より來る沈默

美し若葉に、朝の光の
靈妙に、ゆらぐとき、
甦れりと、歡喜の
低唱の歌、聖きみ空に響く哉。

夏の風

高知縣　坂本とよゑ

白光る若葉の風は
初夏の山行き野行き
君が住む家のほとりを
かすかなる音を立てつゝ
爽やかに大空ながる
雲のごとしづかに過ぎぬ。

わが心

初夏や、行く雲のかげ
地を這ひて、また河わたり
美しき君が家たてる
丘の上の石にのぼりぬ
この雲は、——このいさぎよき
この雲はわれにあらずや。

わが家

夏の日の風はすゞしく
五千町青田の中の
稻の香をばふくみて
わが家におくり來るかな
おりおりは潮の音もして
うらゝかのわが家なれや。

黑い影

神戶市　田中ますゑ

黑い板塀の影から人影が現れた
一つは高く一つは低い
上をむいて居るのが男
うつむいて居るのが女
薄絹の樣な月の光は
ゆるやかに二人を抱いた
靑葉にこされた清い風は
二人の面をおり〳〵撫て去る
靜かな夜あゝ平和な夜
然し二人の胸にはけすことの出來ぬ
猛火が燃え上つて居る

平和な〳〵夢から今さめたらしい邪
氣のない二人の姿
二人とも默して居る、口をかたくつ
ぐんて……けれど
男の胸に大波が起ると
女の胸の海もこれに應じる
女の胸から出た清い水が
注ぐと男の胸はさわぎ出す
この靜かな月の夜
無言の中に二人は
怨を語り合つて居るのだ
二人の影はまだ元のまゝ
ぢつとたつて居る

田植

愛知　秋月

雨は絶間なく降る。
何處を見ても人ばつかり。丁度わら
人形が動いてる樣。
こちらで一人立つた。
あら、あちらでも二人。
見る目が忙しい位。
歌にあわしては動いて行く姿。
あの中には、まだ蕾の樣な美しい少
女もゐるであらう。
六十路に近い白髪の祖父さんもゐる
だろう。
若いのも老ひたるも皆おなじ心で何
の憂もなく、
あれて晩まで石油のないのも醬油の
なくなつてることも
忘れて働いてゐるのか。
樂しいうたに心をうばはれて、
嬉しいたのしいたゞ夢の樣な氣て
おう。丁度子供のように——無邪氣
なこゝろ
この心は晝の光がだん〳〵とうすれ
て、
行くのとおなじてある。
やがて世の中がくらくなると、
心もおなじくむら〳〵といろ〳〵な
惱に逢ふのだ
私は其の時の來るのをおそかれと祈
つてゐる。

逝く春の雨

相州　善浪　靜子

懐かしい若人の淋しみごころを、
薄く溶かしたはる雨が、
よわ〳〵しげな、花にそゝぐ……。
あかるいくれなゐの
頬肉にぬるんだ膩のやう……
また、きく、
むかし七彩の血の薫りのさゝやき…
…。
あはれ、
美しい追懷の……印象のうすれ……
盞皿に漂ふ幻のかをりは……うすれ
て、
遂々たゞの水となつて了ふのだらう
黄白のなやみに散つた花のかなしみ
……漂ふ、ほのかに。
夢にながるゝ涙、
若人の白いさびしみ…
黒髪によゝと歎く夕を、
脖液のやうな春雨が、あゝ降つて居
る。

ともすれば
君口なしになりたまふ
海な眺めそ
海にとられむ
若山牧水

天

日記文

上京の第一ページ

本所　木幡きみ

清子樣に案内されて、朝九時頃家を出ました、まあ！電車が走る、自轉車が駈ける、車が通る、大概の樣子は田舍で聞いてましたが、斯んなだとは思ひませんでした、轟々と軌しる電車の恐ろしい音、妾はもう眼が昏みさうで、キョロ〳〵しながら兩國の方に行きました、丁度、常設館が建築中で、あの大きな、お椀を伏せた樣な、建物を見上げて居りますと、イキなり妾の後ろを、黑い物がスーッと走て行きましたから、ハッと思ふて、ヒョッと後しろを向くと、黑い物は既に、通り過ぎてました、清子樣に聞いたら、ゴム輪の俥だそうて、妾は全くヒヤリとしました、兩國橋の手前に來ると、淺黃の風呂敷包を背負ふた、小僧さんが風を切て走て行く、電車を目懸けて飛び付きました、妾は刎ね飛ばされやしないかと、ハラ〳〵してますと、例の小僧さん得意然として、悠々車掌臺に上りました、妾は心臟の皷動が、停まらしないかと思ふた程ギョッとしました、漸く橋を渡て、停留塲へ行かうとして、清子樣は妾の手を引張て、平氣で交叉線を橫ぎろうとしますが、妾には如何しても惶くて、恐ろしくて、何んだか轢き殺ろされる樣な氣持がして出來ず、ヤットの事で、清子樣にせかれて、眼をつぶつて、橫斷りました、そんなに、恐ろしく思ふて居ても、惶いもの見たさて、電車には早く乘てみたくて耐らず、淺草行が來たのを幸、早速乘て見ましたが、乘て見れば、左程でもありませんでした、乘客は五六人しか居ませんでしたから、ユル〳〵窓から通りを見ました、厩橋の停留塲を過ぎると、間もなく雷門てすよと云はれて、降りて見ますと、其の賑さ加減たら、まるで田舍の山王樣のお祭りの樣、曾て錦繪で見た、淺草の方が寂しい樣に思はれました、洋品店だの紅梅燒屋だの、玩具

屋だの、繪草紙屋だのが、おし付けた樣に並んだ、軒の低い店の前を通り過ぎると、ニユツと出た大きな雷門、ブランコして居る大きな提灯、朱塗の大伽藍、何れも皆妾の小さい眼には、新規なもの計りて、觀音樣にお詣りして、其れから池の周りを廻て活動寫眞に入りました、然し人が一杯なので苦しくて耐りませんから、少し見て、出てしまひました、まだ他の見世物を見たかつたのでしたけれど、昨夜汽車に搖られた疲れて躰がだるいので、明日又來る事にして、淸子樣を促して宅に歸りました、妾は此の日、電車を見た時、自轉車を見た時、つくぐ考へました、成程東京は活動の地で、電車の走るが如く、車の驅るが如く、生存の激しいのだと感じ、そして電車や、車と競爭して、生存に、打ち勝たうと、妾は上京の第一ページにおいて、深く思ひました。

大都に出た第一印象記、少女の初々しき驚嘆や眞面目な觀察を備へて遺憾ありませぬ（評）

地

養蠶日記

常陸　木村なか

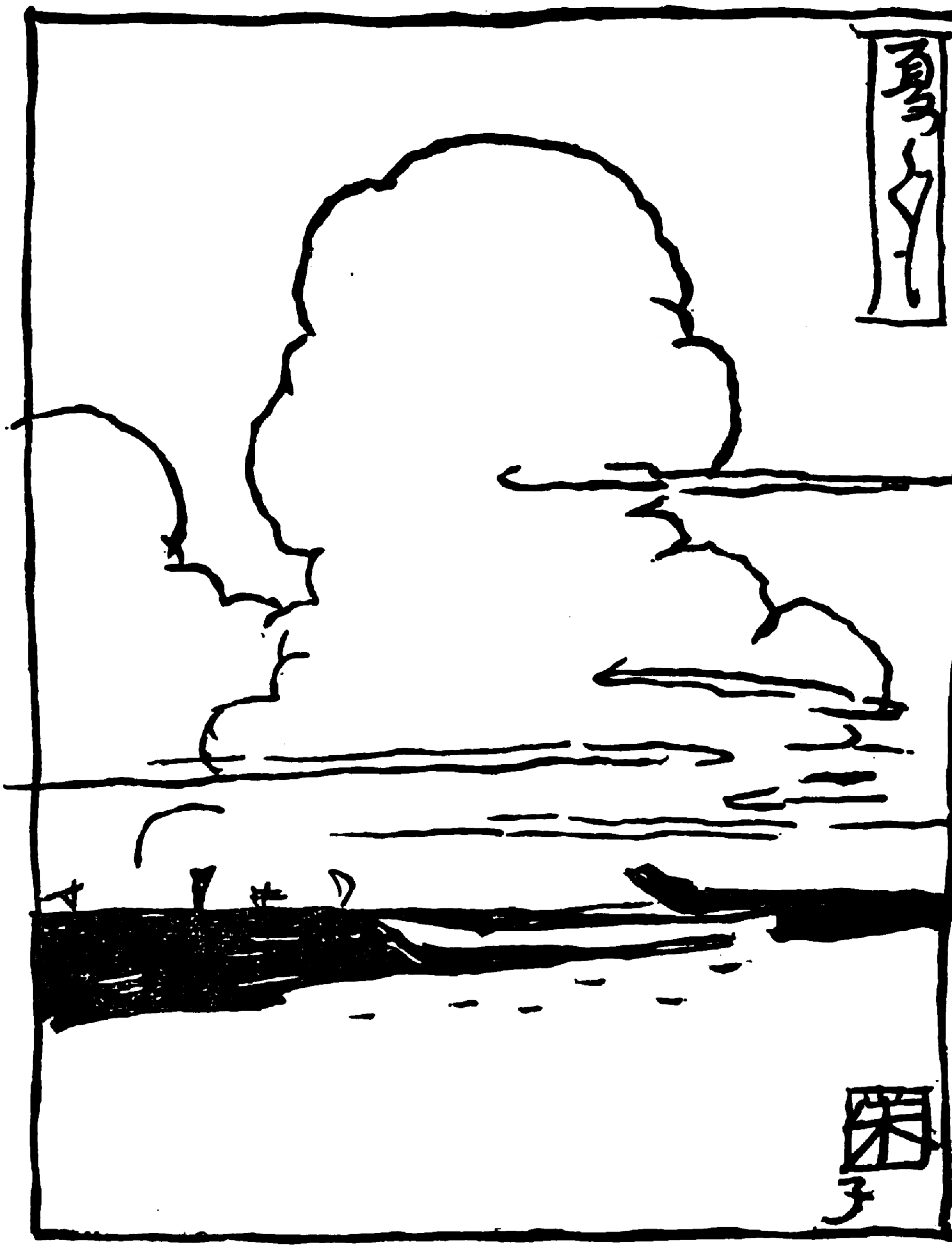
三月十日、晴、姉と飼養する半枚の種紙が生へた、桑を極く細かに刻むでかけやわらかな羽箒で西の内紙へ掃きおろす、只うぢやくとして居る樣はまるで水の中のうぢ虫のやう、お母樣から「大切な虫ですから氣をつけてお飼ひなさい、好く出來るも惡く出來るも、お前方二人の丹精にあるのですから」と云はれ、何だか重病患者の看護でも受持つた時の樣な今更の如くに不安を覺えた。

三月十八日、雨、東風少し吹く、寒暖計下る、溫暖飼ひなので、火鉢へ炭をおこして室内を暖め、五十八度の溫度にする、明日あたりは初眠につく頃、籠は二枚、莚の上へ淡樣をすき、其上にお蠶樣が桑を食べて居る、桑は矢張り細かに刻み、莖の入らぬやうに箕でよく吹いてかけてやる、朝の六時から午後十時迄に七回かける。

三月二十四日、晴、午前八時頃お母樣が室へお出てになり障子のたてきつてあるのを見て「まあ還麼にしめきつて、さあく空氣を入れてく」と朝から大失敗、二眠起きたので虫は一寸位ひの大きさになつた、て、籠は二十四枚にふえ室へ竹て棚をゆひ、段々にの

せて置く、一枚毎に下をぬいては桑をかける、其時は淡様をお蠶様と一所にして羽帚て掃きおろす、そしてから桑をかけるのでなかなか忙がしい、ぬいた蟻淡様は日光に當てゝよく乾燥する。

三月卅日、晴、今朝は暗いうちに姉と二人で桑摘みに行く、宅から二十町餘りもあるので歸宅する時はもう大陽は東天に輝いた、食事前に姉が桑をハキ初まつた、と「アレッ」と大きな聲て叫ぶので驚いて「何っ」て訊くと「これ」と見せたのは青い色した氣味の惡い尺とり虫、いくらお蠶好きな二人でも此虫には大閉口。



夏ぐも　麹町　前田榮子

午後からはお蠶様の食がグッと進まなくなつた、て明日は三眠につくと思ふと堪らなく樂しい。

四月六日、晴、四眠起きたので忙しい事一通りてない、桑は枝つきのまゝやるのだけれど、籠が五十三枚になつたので下ぬきが間に合はず、飼ひ初めは「大丈夫二人でやり通して見せますよ」と意氣込んだ二人も、こゝに至つて終に降參して、お母様にお手傳ひをお願ひした、這麼事てはツが出る様になつたら何うしようと思ふ。

四月十九日、晴、お蠶様がマボシへ這入つてから恰ど一週間目、今日はよくつて、明日はもうどゝてせうと、待ちにまつた繭むしりをする、十疊の座敷が眞白く成る程の繭、其愉快な事と云てもお蠶様飼つた事のない方の知る所でない、上等が四斗八升、屑が五升餘、其れでもお父様は上々出來だつて、眞當に嬉しい、夜の御飯は鯛のおさし身、樂しく、おいしく頂いた、食事が終はるといろ／＼の話が初まつて、繭を賣つたお金て姉と私の衣服を買つて下さるつて、お母様が云ふと、姉が「私の方が澤山骨を折つたから那賀のより高いのを」と云ふので口惜しいから「いゝえ私の方だよ」と口論して、お父様に「まだ賣りもしないうちから騷いで」と云はれて家中大笑ひに終る、

十一時、愉快に一同寢につく、私と姉だけは、何となくガッカリした。

際立つた美辭を用ひずして、興味津々能く日記の躰を得て居ります。（評）

人

ありのまゝ

福岡縣　澄枝

三日、痛む胸を押へて八時起床、進まぬ乍食卓につくと、急にむつとして嘔吐が來た、母が醫者よ寐床よと騷ぐのを。最うすつかりしました關はないて下さい。と居室へ引籠つた、三分越位に左胸が痛むて息がし惡い愈々起つたのだ、が此度計りは寐就かれぬ寐就いたら最後生命は惡魔に囚るのだ死ぬまてかうして居やうと、机の前にぢつと座つて居た。

五時頃父様がお歸り、一寸來い、と嫌々ながら行くと承知か、考を判然云へ、默つてちや分らんゆくのが嫌なら向うは二男如何てもなる、さあ、私は恐さに一言も出ぬ、何度云つても同じ事だ考へ直せ、荒々しくお立ちなすつた、母様が、お前未だ分らんかい、萬一其病身て醫師にゆくなんて、此上もないのだに何一つ缺點はなし、去年の病氣や考へて御覧、斷はらるゝ義理ぢやあるまい不見不知の家ぢやなし。去年何故死なゝかつた、彼時は何も知らなかつたに、愁つか助けられて忌々しい、知らん振りして居りや蛇かなんぞの樣につけまはして。この事計りは死んでも嫌、六時過ぎ床に就いたが一時頃まで泣きつゞけ。

四日、終夜惡夢に襲はれて覺めたが六時十分、喉が非常に渴く、關はぬと云つても氣にかゝる、そつと起

きて檢溫器出して計ると、九度もある、あゝ如何せう、うつうつしてると誰かが呼ぶ、眼開けると兄樣だ、まあ如何してときくと社用て門司に行くので一寸寄つたのだつて、余程惡いね、否、否ちやあるまい其の檢溫器は、私直ぐ振り下した、用心せんと去年の厄日が來るぞ、

でも醫學士がついてるかね、ハヽヽヽ——兄樣、何だ、私死んでも嫁ぬと云ふて下さい、父樣が最う恐くて、困つたなあと腕拱なさる、恰好母樣が手水持て下さるはつと起きた、寐て御出て、否如何もないのに寐られませんと庭へとび下り素足で井戸側へまはつた、如何して彼樣な事したか今もわからぬ、机に突伏して居ると突然父樣が、澄枝何故云はん、九度もある熱を如何する直に寐よつ、あゝ私は遂々病床の人となつた。兄樣は十時頃御立ち、村田の老先生が來て大した事はない直愈る、私の子ぢや、よく藥を呑まにやならんて、最う私は死ぬ方がよい、終日泣いた。

ありのまゝながら、可なり複雑な事情や周圍を、描寫した手腕が多とします（評）

秀逸

留守居日記

松山市　濱　子

五月七日　毎日赤ん坊の名て持ちきりアグリ、百合江　蘭子など飛んてもない方から引つぱり出して勝手な事許り云ふ、午過ぎ、母から手紙がくる、英子、誰のもあたらなかつた、學者振つた名だこと。

仝八日　今日は意外にお魚が安かつたので、英子の祝がてら松山すしを御馳走した。

十一日　追々肥立もよし、子供はなか〳〵元氣など、、産婦自筆の葉書が來た、父上の（まだ筆持つのは早い）代書して返事す。

廿日　母上西ノ宮の加藤の伯父上と奈良地方を見物のよし、留守居の人誰一人羨ましがらぬものはない。

廿二日　同行三人とのみ記した奈良の繪葉書一枚。

廿四日　弟また風邪て休校。

廿五日　母上來月の二日頃に歸松する筈、母上の御留守居は今日て五十日餘、たゞ苦しむのは毎日のお獻立。

廿八日　母上奈良見物から神戸へ歸つてから勞れが出たのか、一日に四五回も嘔吐したとの手紙、動悸も少しするとか、どうぞ例の持病てなければよいが。

廿九日　出立は一週間見合せ、熱が高いとの姉上の御葉書て父上は大心配遊ばす、例の片つぽの眼が小さくなる（父上のくせ）これはと妹と二人して馬鹿して笑つてはさはぐ。

卅日　馬鹿話も一時間や二時間なら兎も角一日も二日も立つては最う駄目、妹は試驗だと云つて默り込んで了ふ、弟は數學を習ひに行き私は冬物の縫ひ直しをして居る、父上は深く考へ込んで居らつしやる「濱や困つたね」「何大いした事ぢやありますまいよ電車や汽車が御嫌だからでせうよ」など打ち消し／＼て今宵も戸をしめ皆寢靜まつたあとて手紙を書く可成父上に秘密にして私迄委しく御様子をと書いた。

卅一日　醫者は蛔虫だと云つたと、それなら案ずる事はない何分動悸がひどいらしい。

六月一日　昨夜一二匹蚊の居たのでそろ／＼蚊帳の時候になつたよと、今日は蚊帳のある長持を出す、三つはあつたが、外の一つが出て來ない家中探してまてない。

夕方一寸思ひ出した、彼の蚊帳は上垣の從兄にかしたつけ、まあ明日でも聞いて見やう。

二日　昨日は神戸から便もなし、一日蚊帳騒て考へ沈む間なく暮したが今日また朝から雨淋しいやうな日だと夕飯をすまして佛壇にお燈明をあげて居ると電報！危篤の報せ、そんな筈はない間違てはないかと、再三讀みかへしても、正しくミノルの差出人、左や右うするうち卅分經つか經たんときおり返してまた電信、あゝ最う開かずとも知れて居る、母死去あゝ父上の顔色、妹弟の泣き聲私は胸が裂けた様に苦しめられる。親類へかけまわる。

三日、留守は渡部のおぢ様と三津の姉上とに頼み、父上今朝上神、あゝ忘れもせぬ去年八月廿一日、新居濱に居た姉上產前の脚氣て十一を頭に四人の男子を殘して、遂に亡き數に入つた、父上も母上も間にはあつたが、私共留守居して合ふ事が出來なんだ、何の緣だらう去年は長女の產に行つて長女を失ひ、今年四女の產の爲自分が逝つて終つたあゝ夢だ／＼、早うさめて與れ／＼。

六日　夢夢早くさめなければものさへ言へぬ、あゝ早くさめたならば、母上は二日に歸られる豫定、夢てなければ、最う今日に「濱や」つて歸られるあゝお母様／＼。

夕方姉上が「お前氣が狂つちやいけないよ」我にかへると夕暗の星が妙に淋しく悲しくうつる。

續いて書く日記としては殊に上乘、喜悲交々人生の測り知れないとが讀むに隨って胸に印せられる（評）

私の一日

京都市　井上すみ子

六月二十日、晴、六時起床、父は未だ寢てゐたので、弟と一しよに御飯を食べて、仕事を集めるべく、弟は東町私は西へと手わけして出た。二三間歩いたと思ふと、弟はいつものような大きい聲で、「なーあーあー杢兵衛なアー。」と呼はり始めた。私もまけじ劣らじと「なほーし杢兵衛!!」といふて兩側の家を見た。まだ起きたばかりの家もあれば、下女が水をまいてゐる所もあつた。御前通りへ曲る時、ふりかへると弟は、「なーあー……。」を後に殘しておいて東に折れてしまつた。と突然、左側の格子造りの戸口が開いて、それと同時に、「なほしや、」と可愛らしい聲が洩れてきた。「へー毎度ありがたう、」と言ふて行くと、「これなあお晝から一寸出たいのやさかい早うしておくれやすんか…。」と、お孃さんが駒下駄を一足お出しになつた。今朝は好いお家がお初てあつたから、澤山仕事があるだらうと思ひつゝ歩いたけれども、あまり集らなかつたので、空いたお腹を抱へてお日樣にテカ〳〵照されながら、手拭をもたなかつたので袂で汗を拭ひつゝ、せめても少と思ふて廻つたが思はしくなくて、七時頃に歸つて集めたのを調べてみたら十一足半弟は既に歸つて居て父と二人で、コン〳〵音さして齒を入れてゐた。弟は七足集めてゐた、私のを合せて十八足半、高下駄や利久を平均して一足五錢としても九十錢あまりは這入る。かう思ひつゝ御飯を食べて、鼻緒をなほし始めた。そして特に賴まれた、「お孃さんのが出來たので急いでもつて行つたら、「今日はあまりきれいに早ふ入れておくれやしたてこれだけあげる、」つて十錢下さつたのでほんとに嬉しかつた。角の八百屋で橙を三つ買つて歸つてそれを食べつゝ、三時頃まで働いて仕上げてしまつた。父は明日の用意にと板を買ひに行つた。私と弟とは下駄を配るべく西と東に別れて出た。私への收入は五十八錢五厘あつたので、三十七錢でお米二升、五錢のお葱、三錢のお味噌を買つて歸つたら、弟は父が好むお酒を三合買つてまつてゐた。御飯炊きは弟にまかしておいて、私は葱のお汁を拵へた、そして父が歸つてから、五分心のランプの影で父のお甘しさうな舌鼓をうたれるのをききつゝ御飯を食べた。今日の收支差引して三十九錢殘つた。

摯實朴茂、異彩を放つて居る日記（評）

プリンスの日記

近江愛子

十三日、秀樣の處から小犬を送つて來て下すつた、

母様はまあ犬と顔をしかめていらつしやる、母様は生物を飼ふのはお嫌ひだから、云つたら叱られるだらうと思つて、母様に聞かずに内證で秀様に頼んでおいたのだ、親にも聞かずに勝手にすゞ人がありますかと、叱られたけれど、一生懸命に頼んだら、折角送つて來て下すつたのだからと云ふので家におく事になる、こんな可愛らしい犬だもの母様だつてきつとお好きになるに違ひない、午後美さんが遊びにいらつしたけど少し氣分が惡いのてと斷はつて貰つた、だつて美さんがいらつしたらあの方とお話をせなきやならないし、そうすると犬の方を捨てゝおかねばならないから、あまり犬の側に許り居るから、お祖母様にそんなに犬の側に居ると犬がつきますよつて云はれた、つきますつて何の事だかわからない、夕御飯の時は犬の話で持ち切り、母様は父様に愛は親に内證で他家の犬をもらつたりするのですよと、告げていらつしたけど、父様だつて犬がお好きだもの、まあまあ愛の思ふ通りにさしたらよからうと云はれた。

十四日、今日は學校へ行かねばならない厭やて厭やて堪らないても私が學校へ行つてる間に、母様が犬を捨てゝお仕舞なさるかも知れないから、行き掛けに爺やにもし母様が犬を捨てゝ來いと仰しやつても捨てないで内證で爺やの處へおいといてお呉れと頼んでおいた、今日はテニス番だから放課後に殘らねばならんのだけど、先生に少し用事が御座いますので早く歸へらして頂きますと又噓を云つた、犬の爲に澤山噓を云はねばならん、歸り道て爺やに逢つた犬はつて聞くと、先程奥様が捨てゝ來いとおつしやいましたから、捨てゝ來ましたと云ふ、吃驚して、まああんなに頼んでおいたのに何故お前の處に置いといて呉れないのと、早半泣きになると、爺やは急に笑ひ出して噓て御座いますよ犬はちやあんとお内に居りますと、聞いて走つて歸ると、春が牛乳を飲まして居る處だつた、そこへ秀様がいらつして犬の名はつきましたかつて、あつそう〳〵名をつけるのを忘れて居た、どんな名にしませうと秀様に相談すると、プリンスはどうでせうと、プリンス、プリンスいゝ名だ事早速それにきめる、もう名までついたもの誰がなんと云つてもプリンスを他家へやるものか。

天眞爛熳、可愛らしい日記です（評）

落男さん

鳥取　安木春子

二十日、日曜日、晴、聯隊の兄様が久し振りていら

したので、母様は御馳走を見て來るとお出ましになつた、後兄樣は書齋に入つた限り出ていらつしやらないから、そつとのぞいて見ると、机に向つて何やら御調べの樣子、お邪魔しては、と茶の間へ來ると、まあ嬉しい秋さんが嘉男さん連れて遊びにいらした、嘉男さんは十月生れの三つ、ボチ〳〵肥つたそれは可愛い〳〵子、私の事をアバ（伯母）チャンとおつしやる、秋さんは持つてらした少女世界を一生懸命よんでなさるので、私は嘉男さんの對手になつて、失敬、萬歳、頂戴のおさらへをして一人御腹の皮をよつてると兄樣が出てらした、浴衣に着かへてどつかり座りながら「おゝ大きくなつたな」がはじまりて「高い〳〵して御覧、おゝ上手〳〵、御重ねは？ 萬歳？ よく知つてるな、さ今度はオッチャン（伯父さん）がいゝ事敎へてやるぞ、ソラヨ、桃から生れた桃太郎…氣はやさしくて」どら聲で歌ひながら手をもちそえて敎へてなさると、嘉男さん目を圓くして帽子の痕だけ白い御顔を呆れたやうに見てゐなさる。それが可笑しいので、秋さんと私とはくす〳〵笑ふ。何時のまにか歸つてらした母樣が次の室で着がへしながら「孝さんそんなに可愛いの」とおつしやつたので兄樣面喰つたかたちで「あつお母さん御踊りなさいナニ可愛かありませんよ僕の子ならそれは可愛いゝけれど」余り眞面目だつたので皆が大笑ひ。午後も「お前行つて嘉男連れ



スケッチ　名古屋　三浦ろく子

て來いよ」とおつしやつたけれど、私が忙しかつたのでつい行かずにゐると自分が行つて「寐てたよ」とがつかりしたやう歸つてらしたが、ぢき友達の家によりますから」と歸つておしまひなすつた。

母樣と只二人さしむかひの淋しい夕飯の膳にむかつた時「孝にもあんな子があつたら」としみ〴〵云つて溜息なさる母樣のお目に光るものを認めた。

あゝ父樣が逝かれてから五年になる!!!

巧妙の筆。（評）

孤獨日記

神戸　森口不二子

五月二日。此頃は當もなく寂しくて仕樣がない。朝飯を喰べてゐるとお母さんが『どうかおしかえ、顏の色が惡いよ』と言はれるのでハッとしながら『いいえ……』とすまし込んで書齋に歸つて來た。

昨日一輪挿に活けて置いた薔薇の花が二片程本の上へ散つてゐた。いつものように本を出して讀んでゐると、和かい溶け入りそうな薔薇の匂が泌入つてくる。いつの間にか私はぼんやりと當のない所を見つめてゐた『何てこんなに寂しいのだろう——』と胸に手を置いて見たが分らない、都の眞中——お母さんも姉さんもあるのになぜ寂しいのだろう——終にホロリと涙が花に碎けて花は又机の上へ亂れた。

何もかも少しも分らなくなつて來た、頭がごつちやになつて學生時代の事やお友達の事等がいら〳〵しふ幻となつてくる。と此數多の群集——樣々の幻の中から絶えずニコ〳〵して、出たり入つたりしてゐる顏が一つある、誰だらう——少しも分らない、もうむしやくしやして來たので『え——』と頭を振ると、いつの間に乘つてゐたのか桃割の中から又ホロリと花が落ちて來た、目には涙が一つぱい出てゐた。

と靜に後の襖が開いて姉さんが入つて來られた。『何處か野の方へでも散歩に行かないこと?』と言はれるから机に顏を當てた儘『今日は頭が痛むから嫌よ』と斷つた、も一度位勸めてくれるかと思ふと知らない顏をして出て行かれた、と奧の方で『眞實に此頃は變てすよ、うつらやつし居るより仕方がない』と一人て話してゐる、何だか心を見抜かれたような心地がして泣いてゐると、二人は何か笑ひながら出て行つた、其足音が遠くなると急に悲しくなつて來て、自分一人が取殘されたように譯もなく泣出した『あんまりだ、私一人をのけものにするんだもの』と思つて打伏してゐた。

頭の中で『左樣なら』と云ふ誰やらの別の言葉が思出された。又涙が溢れる。

柔しく脆ろき女性の情緒が素直に出て居る、美文として又佳（評）

八重ちやんの喰べ初め

大阪 花子

六月十三日。降りみ降らずみ鬱陶しいお天氣。折角かぶせた桃の紙袋がびちや／＼になつて、中には破れ目から小さい青い實が覗いてるのもある。下女が拵へて木に括りつけた、てれ／＼坊主も、地に塗れてしまつた。肌襦袢が濕々して洗濯が出來ないのに、後からも／＼汚れたのが溜つて氣が苛々する。姉樣も子供のお襁褓には閉口すると、こぼして居られる。晝から八重ちやんの着物を縫ふ。赤と白の入り亂れた大柄のフランネル、片袖をつけ了ると、安樂椅子の上に寢そべつて居在つた阿兄樣が、急に雜誌を伏せて「僕もさうゆふ着物が欲しいなあ」と莞爾なされた、まあと目を視凝ると「驚く事はないさ、こんなサラ／＼したセル地は一向に有難くないよ、しみ／＼と暖味が肌に沁込む樣な着物が欲しいなあハヽヽヽ」と愉快さうに笑はれれた。「兄樣どうかして居在るわ。」と縫目を扱いた時呟やいたら「雨に降られちや氣も狂はふよ。」と又雜誌に眼を注がれた。そこへ姉樣が八重ちやんを抱いて上つて居在つた。お父ちやんと呼んで兄樣の傍へ近づくのを、私はそつと横目で見た、ハヽヽと兄樣は八重ちやんを抱いた。

同十四日。今日は八重ちやんが生れてから百日目で、喰初式をした。阿兄樣は大袈裟だと笑はれたが、いざ八重ちやんが風呂から上つて、羊毛を染めたやうな髮に細い櫛の目を入れ、林檎の頰にも白い物を刷き、乳嗅い唇にも紅をさして、拵上たフランネルの着物に、鹿の子の扱を垂し、友禪の布團に姉樣が抱て座つた時は、流石に兄樣も生た雛だと眼を絲の樣にした。そして姉樣が買求めた可愛らしい朱塗の膳に、映りの良い若竹の模樣ある茶椀や、小皿を並べて前に据えた時は、ほんとに美くしいと思つた、兄樣はもう莞爾と夢中で、小豆の御飯を一粒、箸の先に乘せて口に入れると、柔かい舌で唾と一緒に押出して、恠かしさうに可愛い瞳を姉樣にむけた。まだ百日位では親と云ふ意識があつて見た譯ではなからうが「まあ什うしましよう私を見たりして、あんな」と溢れる樣な笑を睫毛に湛へて阿兄樣を見た。

晝から阿兄樣は姉樣と八重ちやんを連て、若林に寫眞を撮りに行かれた。俥が見えなくなつた時、四五日

前來た下女が「あんな赤ん坊は始めだ」と、ひどく感心した容顏で云つた。私は今日の日記の初めに、赤く◎印を書いた。晩方青簾をかけたら急に座敷が明るくなつた。やつと雨が止んで夕日がまたなく嬉しかつた。

ほんとうに可愛ゆい赤さんですこと、明るい家庭樂しい家庭讀むからに心地よき感じがする（評）

店の日記

美濃　前島優梨子

六月廿日、父樣が商用で今朝上京されたので、私が、帳場をあづかる。

朝飯が濟と何時もの樣に、清吉は御得意廻りに出る。ハイカラな奥樣が、フライパンとカレー粉を買つて行かれる。電話で〇〇亭からサイダーと平野水一ダースづゝ注文、信次がすぐ持つて行く。間も無く清吉が歸つて來て、注文の品を揃へる。私はそれを當座帳へ書き上げる。店の小賣は大帳へ上げて行く。

午後清吉は注文の品を配達に出掛けた。〇〇樓からジンジャー一箱、と電話かゝる信治が持つて行く。暫くして又チリ〳〵ンと鳴る、私が出ると「〇〇館ですがビール二ダースすぐ持つて來て下さい」「ハイかしこまりました有難う！」とは云つたが誰も居なくて困る早く清吉が歸つて來て呉れるといゝが、もう歸りさうなものだと、ハラ〳〵して待つて居ると、又チリ〳〵ンとけたゝましく鳴る「ハイ」と優しく出ると「今のビールすぐ持つて來て下さい」「あの誠に申譯ありませんが、生憎今誰も居りませんて、若し大變お急ぎなら、濟みませんけれども何誰か、半ダースだけでも取りにいらして戴けませんでせうか？あとはすぐ持たして差上げますから」ほんとに惡いと思つたから丁寧に云ふと「誰も居ない？じやなぜ先刻さう云はないんです、いくらも遣るけれども、ハイと云ふから待つて居るんです「ほんとに濟みま……」私があやまらうとするのにガタンと受話器を下して、チリ〳〵ンと廻して終ふ。私は何か大變惡い事でもした樣な氣がして、泣き度なつて來た。ビールを半ダース出して置く、とすぐ小僧が取りに來る「どうも濟みません」と云つても、返事もしないで出て行つた、其後姿を昵と見送ると、もう今迄の悲しさ口惜しさが、一時に込み上げて來た、こんな事は父樣にお話したら、店馴れない私をお笑ひなさるだらうけれども……。

清吉が歸つて來た、拂濟みになつたのは、當座を消して大帳へ上げる、今のビール一打半を持たして遣る。そこへ信治が暑さうな顏して歸つて來た「御苦勞！重かつただろう？遠いんだからネ」優さしく云ふと「い

ゝえ一なんて汗ふきふき機嫌のいゝ顔をして居る。晩は店が閉だつた、十時打つ頃今日の出入をして帳場を終つた。

お大抵ちやありませんね、と感服せしむるに十分な文字（評）

さつきあげ

福井縣　やまさと

五月二十三日、晴、昨日でもう田を植ゑてしまつたので、朝までの落ちたのがないか見てまはりて、まさしをさした、午后は苗籠やら縄を洗つて、沖田へ豌豆を取りに行き、夜、鹽ゆでをして食べた。

二十四日、晴、さつき休みに、おきくさんと、おゆうさんと、たみ子さんと四人が、かや山へいちごを取りに行つたり、おきくさん許へ遊びに行つたりして日を暮らしてしまつた。

二十五日、晴、朝四時頃に起きて、おいささんとおゆうさんとおきくさんと、たみ子さんと五人が、おさをさん許の小母さんに連れられて、入田の高地へ蓬を摘みに行く、もう桑の木畑は皆打つてあつたけれども肥へたのがたくさんあつた、午后の四時頃までに七貫目程づゝ摘めたので負ふて戻つた、遠萬のトンチルのとこにたくさんいたどりがあつたて弟と妹とにとつて六時頃家へ着いた。今日はえらかつた。

二十六日、小雨、朝から母様と二人が、昨日摘んで來た蓬を撰つて、ゆでゝひやした。

二十七日、曇、豆と小豆との追付植をして廻つた、辻田と神保はたくさん鼠が切つて置いたので、縄で蛇をこしらへてもつて行つた、今年は豆も小豆も、勢が好い。

二十八日、朝晴、晩大雨、明日はやすみやう（田植祭）なので庭やら家やらの掃除をした、今日はかれもはまちも何も無いが、大きい鯖が一つ四錢出せばあるので二十餘り買つた、午后の四時頃から大雨が降つて來た。

二十九日、晴、朝起て見ると上天氣であつたので嬉しかつた、弟も妹も踊りあがつて喜んだ、九時頃魚屋が來たが、昨日の鯖が十錢、一貫目鯛が三圓、昨日買つてをいてよかつた、鯖はお客もないからこの次安い時に買ふ事にして止めた、午後弟と妹とを連れて神樂を見に行つた、毎年同じ事をするのだけれども、面白かつた。

日記としての熱練を採る（評）

子守の記

伯耆　蔦　枝

其一日、田舍に嫁入つて居る姉さんが、生れて五十

日許りの酉ちやんをつれて來て、寫眞をとりに行くとおいひなさる、それをきいた妹の嘉ちやん(四才)、私に是非行かうといふ、し方がないから車で走せつけたが相にく寫眞屋が不在、姉樣はすぐ寺へまいると仰有る、また嘉子もまいりたいといふ、あまり我がまゝだから車夫に宅へと小さい聲でいつた。それとも知らぬ嘉子は、車の上で上機嫌しきりと土産の催促をして居たが、車が止まつたらワアッと泣き出した。

其二日、嘉子は西村の康ちやんと大中好してある、お向ふに相年の千代ちやんがあるのに、三四軒はなれた西村に許り遊びに行く、内では小さい夫婦といつて居る。あれ程いふのにまた今日も西村で御飯を頂いて歸つた。母がないからとて、さう〱あまくも出來ないから、少しお行儀してやりませうと思つて、電話室に入れて戸をしめておいた、しばらくすると、鈴がなるから、急いで戸をあけると、嘉子はぼんやり立つて居る「どなたで御座いますか」、といへば聞きなれた交換手の聲で「何番へ」といふ、おや〱嘉ちやん、あなたが鈴をならしたのですね、ふと見ればいつの間にもつて來たのか足つぎがおいてある。

其三日、油木の伯母さんから、電話で、船をもつて嘉子を仰へに來るから、裏門をあけておいてくれとの事嘉子喜色滿面「いゝべゝ出して」と、早や簞笥の前迄引張つて行く、唐ちりめんの着物きせてやつたはよかつたが、一寸あとをかたつけてゐる間に、どこへいつたか影が見えない、裏に出たてはないか、油木に行つたてはないかと、方々さがしたが見あたらぬ、川に落こちたてはないかと、大心配して見まわす時、「姉樣、西村の康ちやん呼んで來てよ。」

其四日、子守は遊んでる樣で、ほんとに重役だ、今日は日曜で兄樣が内に入らつしやるから、嘉子をおあづけしてお仕事にかゝつた、兄樣の羽織だ、身頃のヘラをして、胴つぎをして、火鉢に火がなくなつたから臺所から火をおこして入れて來た、見れば兄樣と嘉子が何かクスクス笑つて遊んでゐる、何してゐるだろうと思つたら、おや大變、黑羽二重の羽織を、せなか一面ヘラだらけにして尚もヘラをもつてキュッ〱と筋をつけてゐる「まあ兄樣、なんてすね、そばについて居て」といへば「拂へばすぐ、消えるてはないか」と平氣な顏、嘉子は目をまんまるくして立つて居る「嘉ちやんは惡い子ね」といつたら「おねえさんかんにん」と泣きさうな顏、かう可愛くいへば、おこられもしない、私の怒は最うとけた、矢張りお守は私でなくちや、いけないのかしら。

もつと家庭の全體を出してほしかつた、此奥さまの筆としては少し不足の樣にも思はれますから(評)

日曜會日記

本郷　千とせ

六月第一日曜日、今日は西洋料理の實習日なので五人のお友達が定刻迄に被入つた、で、彼か是かと散々ノートを繰つた末先づ手輕の物をと云ふので、チキンアラカプリンにメンチオムレツと品を定めて、豐と松岡さんが連れて來て下さつた女中とを夫々買ひ物に走らせて、私達は火を起したり器具を洗つたりして居る内に原料が揃つたから、手分をして取掛つた、が、何しろ馴れぬ事とて、鳥の生燒が出來て又天火に懸けるやら、オムレツを燒く時抔裏返すのに手がくるつて玉子がバラバラに成る、葱や肉が飛び出すので仲々骨が折れたが扨出來上つたら三角のや四角の計りで格好のいゝのはたつた二つぎり、早速お風味した處が鳥に胡椒がきゝ過ぎたのとオムレツの形が惡い位が缺點で、先づ初日としては上出來と誇つて差支へなからう、

原料はオムレツ（玉子廿四個、挽肉半斤）（玉葱五個、）十二人前

アラカプリン（鳥二羽、ベキン半斤、玉葱二ケ）（添付マーシポテト（ジャガ芋五合））

第二日曜日、朝一番早く來た花屋で夏菊を求めて田村さんへ行つたらもう松岡さんと栗田さんが來て被入つたので、先日のお料理談が始まつた、處へ伯母さんが這入つて入らして、本職も跣足です、とのお褒めは少々恐れ入つた、間も無く藤森さんがお出に成つて、今日は吉見さんは御不快でお休みとのお言づけ、軈て四君子に作つた綺麗なお庭の正面の座敷で、各持參の花を活け始めたが、二時間計で何れも出來上つたので五配並べて見ると、栗田さんのいぶきは木が太いので余程お骨が折れるらしかつたが、流石に熟練丈有つて實にお立派の御作だ、殊に留の流し工合抔は繪にも書けぬやう、田村さんの柳はすんなりとして厭味の無い處は如何にも御氣性通り、先づ申分のないお出來だ、藤森さんの花菖蒲は誠にをとなしやかだが、こゝぞと云ふ面白味が無い、松岡さんの藤はあつさりして勢よく、思ひ切つた枝を使つた工合はどう見ても男の手に成つたやう、で、最後に私の菊はかたにする枝が思はしく無かつたのでどうも見ばえが無いやうだが、先づ無難と褒めて置かう、此の次までには大いに練習して置いて是非栗田さんを凌いでやり度いものだ。

これも淑やか、但無難な丈けなるが惜みてす。（評）

八月二日　火

明方より頭やくが如くあつし。終日蚊帳を吊りて枕に親しむ。

風清き森の彼方より笛の音幽かに響くと聞きしも夢なり、山蜻蛉二つ谿に迷ひてわが室に入ると見しも夢なり。覺むれば床上に半開いて半つぼめる朝顔ありき。

あつき日なり

（夜雨「花守日記」より）

和歌

天

青葉

山形　きみ子

○青葉よし月光さけてその陰に君と語れることさらによし。

○五人の男の子のなかのいと弱き男の子に吾はとられけるかな。

○何となう唯ひとり居て去にし日を思ふにまさるおもひやりなし。

○胸にさす君が賜ひし紅つゝじ萎れぬさきに生命消えなむ。

○千里とぶ翼しあらばそらねして母のぬるまにあひて來むかも。

○あゝ二人木影に星をながめにし榮華を思ひ涙ながしぬ

○牛の子は唯何となく親牛のつながれ行くにしたがひて行く。

「牛の子」と「五人の」とが最も好い、情熱派ではないが、冷靜な態度の裡に、懐しみもある、今回の集中では正しく一等に位する（評）

地

三つ盃

名古屋　原田琴子

○目をさやることの山崩せあはぬ日も君があたりをたゞに見むため

○かの時の三つ盃の下なるに似て咲きにけり夕顔の花

我が心眞白き故に君が來て赤くぬりけり火のごと燃ゆる

○

先の日に死にたる人のよみがへり話に來ぬと君を思ひぬ

○

我が胸の腫物はうづくそれを見て君は毒をばぬりに來しかな

○

鬚なきと指輪のなきと男女足らぬ思ひに向ひてありぬ

新派中でも、更に新しい作りぶりに心を注いで居るやうに見へる、少し氣が利きすぎて輕はずみと思はれないでもないが、先づ女性としては見込のある方だ（評）

人

夕ぐれ

伊賀　山村龍子

待つ身にも待たるゝ身にもあらぬゆゑ夕ぐれの來て眠たくなりぬ

○

○

あな嬉し座敷とゝのへ身つくろひ終りし時に君は來ましぬ

○

十の中七つを君にその後を他の幾人にわかちあたへむ

○

淋しみを歌ふは誰ぞや悔ひなくて日は美くしく沈まむとする

○

或人に尊しとききし或人にいやしと聞きし戀をわれする

○

いざや君此處に別れむ川ぞひは小石ぞ多し靜に行きませ

○

小唄などうたふ傍胸に泌む言のたまふよいと憎きかな

例の如く詩才はたしかなものだ、此君の得意の作には理性の力が籠つてゐる、人情以外に何ものかを歌はうとする、底の温みを失はずに此方面を拓いてゆけば、幾歳になつても好い歌は作れる（評）

秀逸

渦捲く潮の巻

伊達まつ子

○

遠空に雲わくごとくわが胸の底にも小さきかなしみはわく

暮れてゆく海にい向ひ戸によりて指吸うて居ぬものおもふ子は

むかひゐてゑみてはあれどみ心と心とあはぬかなしからずや

心またえもわからざあるものを追ひつゝ今日もひたはしりゆく

春の日の小鳥が群に交らひて日ねもすうたをうたひてあらばや

○　福井縣　やまざと

ふところに手をさし入れてうつむきて暮るゝ街行く淋みしき男

七人の男の中にざれ言を云ひかへす程變りぬ吾は

君の幸うすしと聞きし其日より胸に殘りしもの皆ゆきぬ

男てふは獸の如き熱つき息するものなりと吾は恐れぬ

○　きく

いさゝかのその喜びも天地を得たらんばかり驚く少女

ひねもすを君を思ひて過しぬとかき送らばやさみだれ降る日

ひやゝかに笑みてわかたむ御手と手よすぎし日おもひかすかにふるふ

○　佐渡　長島みどり

刺す如き強き匂ひす毒瓶をあたえて去りしひとを思ひぬ

白象に球玉かざりて蒼空の下に寢ねたる安らかに似る

いつしかにいつかは知らず双の瞳は黒き影もて掩はれてあり

○　北品川　柳澤ゆかり

夜の海死と定まりし沈靜の心とやうに今凪ぎてあり

君故にかくもやつれし我が影とよばんとすれば夢の破れぬ

夢なりきたゞつかのまの夢なりきさらば君よ幸多かれよ

○　芝區　鈴木琴子

清十郎御夏を連れて死にゝ行く青葉堤に時鳥なく

まぼろしの中にわれ生きまぼろしに赤き日見ゆれ塵の中に

はれやかに笑ひこけたるその後の心はさびしおのづからにも

わが心疲れはてたる車力らのむれにまおりてまろねす

るかな
この心何にたとへん初めての君と見るべく夜の街をゆく

○　本郷　富　美　子

わが答中ばもきかて華やかに笑ふ君故うとんじにける
大夏の日を仰ぐよりまぶしかり我が瞳まもりて君たゝすとき
砂走る四尺の水につゝましう足袋などぬぎてかちわたりしぬ
ふる郷に歸れど哀れ幼名にわれ呼ぶ人のなきが悲しき

○　河内　し　ま　子

病神はわが世をうばひ百年を暗にすぐせとあらゝかにいふ
雨のひま破れたる垣をかいくゞり梅とる人の羨しきよ
ほとゝぎす初聲きゝぬこの聲をわが死なむ日のまくらにて鳴け
今日もまたはやての如く去ぬ君のうしろ姿に涙こぼるゝ

○　下總　月沖さゆり

はてしなきやみのまなかに白きかほあまたならべり夢にみし國
何となう近づきがたきものとしも若き男の子の心うたがふ
渚べによれる紅貝白き貝美き名つけてはまた流しやる
月波峰のやさし肩よりいまもなほ月いづるかやあまた見ぬ君

白帆の巻

○　横濱　き　く　子

うすもの々袖ひるがへし舞姫が雲ゆく様に夏の雲見る
露草の濃き紫を竹椽に散らしてゆきぬ可愛なさな子

○　佐賀　萬田喜久子

紅き露おつるといへば妹は白紙をのべぬひなげしの花
美しき言の葉のみを聞けかしと神のたまいし耳なりされど

○　堺市　岡野千枝子

ひた戀ひて心狂へる際もなほ黒髮のみは亂さじと思ふ

○　日暮里　細谷鏡子

からたちの垣根を越してわが庭に蔓のばしたる隣のいちご
たそがれのたゞ一時を夕榮えて日は沈みけり西なる山に

○　大阪　今西春江

捨てられてある悲しさと思はれてある嬉しさと交々來たる
人づての誠ならぬを知りつゝもあいなたのみす心の弱さ

○　大阪　木村花子

採赤手われにひれ伏す此男他所にてもまた赤手するらむ
たは〳〵と實のれる青き葡萄の實ふと地に落ちて寂しうなりぬ

○　熊本　金子片枝

僞りと知らでこと〳〵美しき心さゝげてうつろなる胸
心たゞ一つとなりて戀ひたりし日のたのしさとくらべておもふ
行かば又なみだぐましき物語り聞かむと門にためらひてゐぬ

おん君もつれなる人にはゞかりてかたりてあれば面白くなし

○

ましろなる胸くつろげてゆたかなる乳房ふくます諸の唇に　紀伊　白萍子

やすらけく眠むれる稚兒の枕もと萎わら佩のべに苺かな

苦しさは何心なくおもはろる人にもらせしいつはり言よ

○

呪はれしあまたの人のかずを呼ぶ聲とぞきゝぬ嵐の夕　岐阜　中村渓子

我胸の泉にあまた鳥のゐて羽ばたきすなり君見る度に

○

小雨する秋の夕を戸に立ちて君ゐます空仰ぎ見しかな　鳥取　安木春子

たまひたる白百合の花面やせて小雨する日の早暮れてけり

○

あな淋し君去りましぬ暗き室に鎖せしまゝ我を殘して　岡山　高木湍子

いづくへかわれはゆくらん日毎〳〵白き衣きし人に引かれて

○

如何ばかりながき髮ぞも立ちて見よそちら向き見よ戸に倚りて見よ　近江　辻芳子

あな可愛ゆわれより早く醉ひ果てゝ手枕のまゝ君睡るなり

はら〳〵と靈し澤しわかき樹も秋の愁ひに泣く夕かな

○

夜となれば森の朽葉に埋れける冷き石の悲しげに泣く　神戸　森口不二子

あゝ明燈今消さむとす一息や少女の消き顏はかくれむ

○

大海の底ひに泣けるさゞれ石の姿に似たるわれを見しかな　門司　彌吉はるみ

こしかたのわがはたとせの戀がたりかたらは遂にお伽めくかな

男見てはづたゝましくも逃れ來て母につげけるわれにありしを

○

わがおもひ君とあひゆくうれしさを覺ゆしづかに夕ゆらく道　弘前　川村露子

空はろにわがなげかひの恍惚とさまよひ入りし夕暮の時

あゝ倦みぬ笑をのみしる人とわれひとつ煩づりにあき〳〵しける

貝の葉の巻

大阪　順

○

我胸に銀の針さし紅の血を絞らるゝ胸いたきゆめ

○

つれなし人数多住みぬるつらき世を空潛暗く五月雨るゝ日よ　陸前　小岩柳子

○

妹は若き髮をしらぬげに衣縫いてあり春雨の宵　呉市　山本瀬子

○

なやむ君見しその刹那フト昔おは云ひ得ぬ女の誇覺えぬ　大阪　西戸政江子

この晴衣身につくる日はわがわかさかへらぬ日ぞとうらまれもしつ

○

八月の葉擦れゆかしき陰地にて衣すれ〳〵に語りぬ君と　高知　梶原しげゐ

○

眉若く化粧し終えて白百合の露をこぼせし若き日思ふ　下關市　山本實子

○

わが戀は無期にや絶なむ君を見ず闇黒の中におどろきて居ぬ　山梨縣　松野宮子

○

花は根に胡蝶は上に歌反古と共にうづめぬ葉櫻のかげ　岩代　笠岡松江

○

風添ひて月きよらなる眞夏の夜君と舟しぬ上總の海に　牛込　塚原けん子

○

さびしみは紅の花ちりてより綠色せる野に廣ごりぬ　京都　小蔦

○

み怒の炎うつ捲く神の火に罪の二人は燒かれて死なむ　大分縣　渡部つや子

○

七ッにて眉目よき子なり一心にふみ讀む見れば少し憎かり　四ッ谷　夢の子

○

心さびし君去りし座は灯のたゞ盃盤を白う照らして　千葉　高濱春枝

○

荒れ果てし庭をあさりて蝶々の物狂ほしう花の香を吸ふ　麻布　夕ほし

○

戀わびて事もやあると君が門を訪ひゆけば百合の香いする　愛知　竹内ゆう子

○

美喜子

玉蜀黍に腐葉かさなりて月もらぬ邊なりにける哉

○　相州　善浪しづ子

日の矢を輕くうなづき白雲ははや葉にたゞよひ行きぬ

○　白桜

雲よ風よいさ吹け出てよ我今宵文殻焼きて琴弾ききらん

○　但馬　矢緒子

姫君の御帯に榮ゆる緋牡丹にぬいせし如き胡蝶息ひぬ

○　信濃　藤原たづ子

かいだるき心やうやくとりなほし纏ふたる君をなぐさめにゆく

月明き海よ光の水脈引にただよひ往なむ天つふるさと

○　松山市　稲井せい子

大和路や耳なし山の歌語り夢のやうにも聞きながらゆく

○　千葉　小澤まゆみ

水無月や草葵咲く野の家に蕗露こめて夕べとなりぬ

月見草笛吹き居れば夕月はほのに昇りぬ大海の上

○　麻布　花子

夢と見し三とせの戀は果敢なくて我が紅涙もあせにけるかな

○　門司市　幸子

水きよく山むらさきのふるさとに衣ほす人を羨しと思ふ

嬉しかるその夜のことはみな忘る心となれり人に嫁きて

○　秋田　佐藤梅野

うつくしき花に口つけ蜜吸ふは恰も蜂に似る身なるかな

うつろなる我の心に何ものか來て住むらしき夜のけはいかな

○　兵庫　田淵祥子

くれなゐの撫子の花咲きにけり青波よする涼しき渚

○　奈良　安川正子

天津女の胸あたゝかにいだかれて月の宮居に近づきし夢

○　天鹽　山田一穂子

戀と云ふ毒ある木の實食みしよりおゝ悶ゆるよ胸の小鳥は

○　新潟　三留浪子

華やかに戀の終焉の焰あげよと冷たき君の玉章焼きぬ

○　若狭　道本なみ

あゝ世界亡びゆく日の淋しみに泣かば足りなん失ひし戀

ほがらかに語りたまへど何ごとか低き言葉の少しよどみぬ

○　兵庫　杉山春翠

ゆくりなく睡りに君を得し日よりまたわが魂のよみがへりぬる

○　陸前　阿部よし枝

今日もわれ君にし逢へり明日もまた君に逢はむと思ひつゝ寝る

○　徳島縣　野薫

夏の風君が面吹き吾頬吹き窓をよぎりて行衛しらなく

○　大阪　田中れん子

ひとしきり冷たき風に紫の霞となりぬ二人が戀は

○　兵庫　田中ますえ

紅梅や乞はれて一枝まゐらせてむれまるわかせぬ少女子なれば

○　茨城縣　日野秀子

我といふ小さき者を呑まむとてあゝ夕雲は峯をはなれぬ

我が胸の小さき室に日毎〳〵鍵持て來たる君開かんと

○　若狭　前川蝶夢子

草刈りのかひ〳〵しげに草を刈る堤のかげにいちごの實あり

○　藤澤　常盤幸子

夏姫の化粧の紅の土に泌み咲きもいでしか雛芥子の花

○　本所　木幡きみ子

後の日の愁を思ひ若き日のまどひを思ひ今日も日暮るゝ

玉盃を口に付けんと双の手の高き鼓動にゆれてこぼれぬ

○　信濃　川上かつ子

ほとゝぎす月明け殘る大灘の帆鳴に似たり山の夜なれど

○　兵庫　阪士翠

すゞしげにわが父母も戀人もいますと思ふ夏の夜の星

○　信濃　吉川多美子

火なりせば焼きつくしけむさいはひに君は涙に負けたまはざる

○　若狭　津田汐汀

君が前孔雀の垂尾ひろげたるこゝちにありぬうすものの袖

○

灯の花は潤める春の夜の霧ふる街の河岸に咲く
○　松江　鈴木さなへ
吾が青き魂のなげきが其紅き君が心に紋を織る
○　京都　田中久子
夕日さす京街道をたど〳〵と旅する人の影ぞさびしき
○　奈良　瀧西たづ子
胸の奥に秘めし胡蝶は躍出てて他なる花に移れる悲し
○　兵庫縣　田村竹翠女
君といふ我が世の花を得てしよりうれしさみちて涙もあらず
○　岐阜　篠田とみ子
掌の達磨手を出せ足を出せ雨には飽きし六月の末
○　牛込　平塚白百合
白粉花や夕べとなれば君が手に水そゝぐ時紅にさく
○　横濱市　さゝ川
灯きゆるちまたを暗き路にそれてきみすむかたを振り返り見る
○　京都市　井上すみ子
何となく我に罪ある心地しぬ「愛す」と君ののたまひしより
○　府下　安達蘭渓女
高き家の窓にかゞやくあまたの灯われを迎えぬ君とあゆめば
○　高岡　篠原みゆき
鳥なきぬあくろみ空の下に立つ木々の若葉に露ある朝
○　火　葉
あゝ神は君にすがると見をだくと二つにわけて手をば玉ひぬ
○　大阪市　草村君子
ふとさめばとなりにありし母あらずたゞ月白き淋しさに似る
すべなくて小筆はとれどこのおもひ一緒一緒にわりなきおもひ
○　大阪　泉　靜枝
疲れたる街行く人を疲れたる燈の光に見てありぬ時
○　丹波　鹽見鏨代子
何知らず悶えてうみてわがこゝろこのまゝ灰となれよとぞ思ふ
○　山城　木の花
二人ゐて言はずにあれば戀あらむいへばへだてのある心地する
○　埼玉縣　青葉女
雨の日やそゞろ歩きのうら庭に青き梅の實ほろりと落ちぬ
○　森中かず子
戀といふほどの思ひにあらずしてたゞあひ見ればやすからんわれ
○　大阪　田中たれ子
紅き花を君が我衣の裏に秘めし女心よあはれとおぼせ
○　羽前　照子
ありとある悔み悲みどよめきて潮とよすれ死ぬばかりなく
○　大和　阪本はう子
心强く思へと叔母はのたまへど母なき我は心細かり
○　岩代　わすれな草
待てど待てど歸り來まさぬおん君を思ひきれとや燈火消えぬ
○　露月女
水禽の白き照らして月は今大白蓮の如く浮びぬ
○　下野　栗原榮子
一人のみ戀ふべく强ゆる天地にふたゝびわれは女と生れじ
○　名古屋　三浦らく子
天と地を裂かん許に雷鳴りて母家の鷄のけたゝましなく
○　美作　花枝子
華の世の榮えも譽れも打ち忘れ病いえよと祈る今日かな
○　磐城　春山はつ
君とわれと物言はず立つ夏雲の底にうつれる池を見つめて
○　美濃　加藤芳子
夏の月村のはづれの橋だもとわかき男女のたわむれてゐぬ
○　美濃　ときは子
やう〳〵に堤上れば深淵の崖に咲きたる白百合の花
○　本郷　田村ゆかり子
涙知れと一人のわれに歌たまふ君は歌の子あはれを知りぬ
○　沼津　入代みよ子
うれしさは二日を汽車にのりつゞけ一夜を船に寢て歸る時

○　よし子
ふたとせの昔し戀せし彼の君のみ胸に今も吾が名ありやと
○　高知　坂本とよふ
山に居て彼方の里の空の上に火の色を見る安き心よ
○　京都　佐々木繁子
我耳にことはり説くは愚かなり戀は甘き春としらずや
○　楓葉子
我いのち失せん折にと思ひしを心弱くももらしつるかな
ほゝ笑みて今別れずばとこしへの呪うくべき身とおもへども
○　府下　杉山常子
御夢にも外の少女は入れまじとほこりし程のおろかなる我
○　長野　東條朋子
野にねむるしばしの暇を美しき神のみくにによばれぬる哉
○　府下　岡本眞久子
我がおもひ大日輪のめぐる如たゞ一時のたゆみだらなし
○　豐後　狩生槇子
あけぬれば遠くの峰は霧こめて知らぬ菜山にほとゝぎすなく
○　常陸　今泉磯千鳥
セコンドを刻む小さき響にもこゝろ慄くこの夜ころかな
○　門司　箕田文子
わが心千尋の谷のくらがりの古沼にしづむ落葉にも似て
○　京橋　もと子
ほこりてふつるぎも折れぬおん前に伏して泣くべき日のちかづきし
夏草や山寺路の焼石に蜥蜴ねむれる晝下りかな
○　無名子
たにそこに山のつゝじの咲きにけり危うき戀の美しきごと
○　奈良　中畠よしみ
我が幸の食みつくさるゝ心地してつれなきことを聞く雨の夜や
○　備後　加藤眞佐子
仰ぎ見て涙さしぐむ冬空のたゞ白き日の冷たき光
きぬ〳〵や門の紫苑にいさゝかの小雨そゝぎてきり〳〵す啼く

○　宮城　今井とく子
物見ればものに寂しき我が心君を待つより外なかるべき
○　大阪　澤田八重
あたゝかき頬とつめたき頬と觸れしその束の間に思ひえしこと
○　上總　尾可波靜枝
草野ゆけば水のほとりに眼のかぎり江の波よする晝顔の花
○　西多摩　三ケ島よし子
名もいらず命もいらずされどなほ胸はもだえを實と秘めぬ
○　靜岡　鈴木いわ子
寐がえりの枕あやふくなりにけり藥とらんと吾れ立ちし時
○　大坂市　中野喜代子
緑ふかきお園橋行く京少女東山邊り唯繪の眺め
○　定子
うれしかりき南の窓におん君の涼しき歌の響きゝし夢
○　紀伊　木下たれ
かの船はいつか己れとある人をのせて行くべし舞子ケ濱に
○　はるえ
君我を戀ふるが如く我君を戀しと泣きぬ雨の日のくれ
○　陸前　大場ちよせ
のどかなる宇治野の春や茶摘女の赤きたすきにそよ風わたる
○　山口　高世昌子
戀てふを初て知りし日のごとき若々しさにかへりて見たき
恐しき思に心わな〳〵とふるひぬ君にいだかれしとき
○　淡路　加藤菊子
思ひあひて三年すぎこし歡樂の今はた盡きて寂しみにゐぬ
○　信濃　秀枝子
白き襟あまた重ねし其上に絣の衣きんと嫁ぎます君
○　山口　酒向とし子
おそろしき雷鳴の中におん文を抱きてねむるいと安らかに
○
紅の姫百合の香を新らしき筆にふくませ御名書きて見ぬ
何となく美しけれど何となくうれひの人よあじさい手折る

遠江　波多野いち

○

夢にみて幻にみてはたさめて小さく呼びぬ戀ふ君のみ名　鹿兒島　山下男子

○

湧きかへる潮の香高き朝海に星のよはひなすかし見るかな　千葉　金井うてな

○

病院の窓に淋しき人思ふ冬の夕日の海にうすれて　島根　白百合

○

何となくなかしき夜よと蓮の葉をかむりて月に興じぬるかな　大分縣　黑谷ゆき子

○

花瓦斯の店足遠に南せし白き面わの人を忘れず　新潟縣　村山ぎん子

○

あけぼのの狹霧の中に百合ゆれぬこぼれやしけむ君がよき夢　難波月の女

○

暗の夜の彼方に見ゆる燈は我が戀人のつけし火ならん　尾張　鈴木詠子

○

我立つ日草木も花も降る雨に濡れてそよぎし其ふる鄕よ　京都　栄花

○

夏姫のいと嚴かになりましし小暗き杜の白百合の花　南豐　紫薰女

○

三千の羊草はむ音も無く明けし牧場の朝しづかなる　神田　花岑淑子

○

綠蔭に何をさゝやく女男童顔涼しく小さき秘密　松尾芳子

○

こほろぎはもの編む君がきぬ糸のゝつるゝ中に啼きいでにけり　越後　井上貞子

○

さなきだに悲しきものを五月闇くらまの山に時鳥なく　伊豫　篠原由美子

○

父母の世に居ましなば愚なる身をつくしても仕へむものを　北海道　伊藤小百合

○

降りつゞく今日此頃のさみだれに悲しき事をひれもす思ふ　愛媛　松村さみえ

○

加茂川の水量増さん我涙君が嫁ぎのさまたげぞする　府下　中嶋きよ子

○

夕暮や螢とびかふ夕川のほとりに聞ゆなつかしき聲　茨城　日野歌子

○

美はしき女水打つ掛茶屋のまがきのあたりばらの花さく　大分　江口た喜子

○

旅の野に石を抱きて泣かむにもあまりつたなきわが命哉　上毛　靜江子

○

妹と仕立おろしの浴衣きて風を待つ夜のいかに樂しき　秋田　上原あき子

○

花散りて青葉に鳴かんほとゝぎす三年見えざる人を戀する　すみれ

○

おん君と二人さまやう海の邊に夕風吹きて波白ふたつ　神田　花子

○

茫とした野の果を見よ町を見よ赤き日照れる海原を見よ　東京　さつき

○

山青し海青しこの夕暮にわれのみ一人ものくるほしき　靜岡　ゆめ子

○

悲しげに野の果に立つ二木立わが倚るによき痩せたる幹よ　神戸　とよ子

○

心今悲しくなりぬこの弱き心を君に今日ぞなぐさむ　陸北　稗貫みつ子

○

只ひとり何を思ひておはします語る友無き君ならなくに　滋賀　草野しげ子

○

戀すてふ身にあはれなり故鄕の雲井に白く夏の月てる　若狹　澤田あい子

○

永き夜と云ふは戀せぬ人の事秋も逢ふ夜は明やすき哉　越中　諏訪芳子

○

夕立の晴れゆく庭の木の間より大きく見ゆる夏の夜の月　神戸　濱田照子

○

わが庭の垣根につるを卷きつけて夕立やむを待てる朝顔

○願はしきまどゐよりよし最もよし冥想しつゝ我自由なる時　芝　陶山すえ

○天地に生きなむとして人は皆薄命道を走り行くなり　上總　藤みす子

○いと廣き花園に立ちぬわれは今何をか求めむ心惑ひぬ　岩見　小松原德子

○このまゝに老いん春日の春の夕小鹿よく來てわか膝による　長崎　南錦女

○何と無く嬉しさ胸に充滿ちて誇らまほしき我心かな　伊賀　石原男子

○初夏の光は强く青葉越し追想てに立つ弱きわれさす　尾張　服部登久枝

○往きし日のささやきごとを操返す思出多き春の夕暮　大阪　松本綾子

○さらば君別れて後を如何にせんきくも語るも一人なる身を　近江　奥居梅野

○何となく人に異る運命ある如くに常にさびしさに居る　子

○五月雨にしたしき友もうとくなりぬ人も通らぬ山添の道　丹波　久米子

○更け行けば心も澄みて波もなく眞野の入江におちかゝる月　新潟　淺野喜美子

○眞淸水の湧出るあたり日は落ちて三日月てりぬ蝙蝠の飛ぶ　小倉市　石井つれ子

○雄々しくも花の少女等ふる雨を蓑着笠着て早苗取る見ゆ　伊豫　福井さゆり

○五月雨今日又暮れぬ灯ともして出て行く渦女の後姿よ　愛媛　花園梅子

○後悔のせん術知らに今は唯破鏡を歎つ身となり果てし　大阪　鹿島綾子

○まくさ刈る童は去りし夕暮の星川橋畔とよなり　新潟　南波つい

○白き雲軽ふ浮びて繪日傘の一つ行くなる遠青田かな　近江　草の家しのよ

○春立ちしるしばかりを山眉にみせてたなびく薄かすみかよ　茨城　松本くに子

○もえいてし岡のわか草はるかぜに末うごくまで早成にけり　[illegible]　子

○靜かなる村にひゞくよ山寺の小坊の撞きし入相の鐘　愛知　秋月

○凋落の暗示の意にや春の町少女ひき連れ老婆小走る　德島　吉田紫花

○白き花あらはに咲けるさゝ沼の水は曜れぬ青葉の杜に　阿波　大久保桂子

○つれなさを朝に夕思ひ寐のせつなき戀に悶えてやまず　大阪　泉　靜枝

○幸なうて南の島に玉ひらふ君をしぞ思ふ月あかき夜は　備後　强　子

○兄君と犬吠岬に立ちし夕女ながらも望みたちにき　千葉　四やす子

○春の野の長閑けきまゝにうかれ來ぬやどを霞の末にみるまで　岩手　入重櫻とく

○夏の夜は村雨はれて名殘なく靜かに照らす凉し大空　栃木　蓮歩女

○のどかなる朝日の光あびながら露にきらめく緋牡丹の花　大阪　谷下しげの

○故なくて尼となりたる今もなほ黑髮きりしその日を思ふ　苦狭　津田たき子

○濱千鳥いづれにゆくやたゞ一人夕の海に聲をのこして　樺太　朝露

○五月雨のたへまにもるゝ樂の音の淋しき中に靜愛を聞く　滋賀　秋月花枝

論文

地

迷信についての觀察

相州　善浪靜子

私には何う云ふ物か、迷信に就いて確固とした信念を立てることが出來ませぬ。其癖、人が些と古めかしい妖怪談など有仰ると、心中非常に畏怖して居乍らも、學校の先生から聞いた迷信のお話や、雜誌や其外、種々のお本で敎はつた事等は、決して心に容れませぬ。しかし、是れは全くお朋友や、お祖父樣やお母樣否私自身をさへ欺いて居るのです。實のところ、心の中では、取り止め無い附説は兎も角、一寸した佛樣や神樣の事になりますと、何んな荒誕無稽な傳説でも口碑でも、根から葉迄其が皆空事だと自ら信ずる力がムいませぬ。若い知己のお方がお死くなりになる時等、可笑しい程神經亂れて、有られもない地獄を思ひ泛べたり古い經本で見た火の車だの赤鬼等を想像して、鬱ぎ込む事も間々有ります。方角が惡くて病んだとか、金神樣のお祟りて、一家が絶えたとか云ふお話を聞く度に、何か知ら迷信と雖も深い眞理が有るやうに考へられます。

又迷信は境遇や、何かに依つて養はれ、一種の習慣性遺傳をする者ではありますまいか私が幼かつたからかは存じませんが、私が未だ、叔父樣のお宅に居りました頃は、萬事大雜駁な感化に依つて、憂事など覺えた事はムいませんてしたのに、祖母樣の處へ引取られてからと申します者、總て陰氣な暮し方で、私も何時しか此にかぶれ、内氣な沈んだ氣象になつて了いました。不動樣のお札て病氣が平癒ると、曾て花子樣の有仰つた時、嘲つた私も胸の中から全く迷ひの根を取り去れませぬ。一寸したことてすけれど、地震の時など、つい〳〵佛間に香を焚いて、神佛を祈らては居られませぬ。

思ふに迷信は中々一朝一夕で、人の胸裡から忘れさせ得ない者です。長い間の習慣性が、深く深く頭に染み

込んで、性格となり幾世紀を踏襲したのを、根から矯めるには、矢張り道理以外の年月を要するのでしよう。濃き薬に水を調合して漸次薄くするやうに、迷信に就いての觀念は發達して行くんでしやう。

然し、私は將來何時か、萬人の頭腦で明瞭に之が解決せらるべきを疑はない者であります。

是れが偽らざる告白でありましやう、我々は迷信と毫も係るなく之を排斥して眞の信仰に入らればなりません（評）

人

懸賞と僥倖

横須賀　持田しげ子

近來何に限らず、或る手段方法として大層懸賞が盛んに成つたやうであります。それに就いて妾は皆様と共に心をいましめなければ成らない事があらうと思ひます、それは外でも有りません僥倖心を抑制していたときたい、と云ふ一事に外ならないのであります。

現今行はれて居る懸賞も種類が幾通りもある様であります、近い例が政府で行つて居る捕鼠懸賞、貯蓄奬勵の勸業債劵など其重なるものでしやう、又降つては商業に關するものは大抵懸賞を伴つて居ると云つても過言ではなからうと思ひます。

で是等諸種の懸賞を先づ三種に大別する事が出來るだらうと思ひます。三種とは何であるか其一は實力に伴ふもの、一は奬勵法、又一に僥倖を餌に顧客を釣る營利法等であります。實力を伴ふもの、とは手近い例が本誌に於ける作品募集の如き懸賞法で、妾は此等の方法を喜ぶ者の一人であります。何故ならば斯の如き懸賞法は隱くれたる天才を世に廣く紹介するの便にもなり、又現今の如き寂れたる文運を隆盛ならしむる便宜にもなる、と思ふからであります。

又單に奬勵法と申すのは目下政府で行つて居る如き方法で、是等の事は彼是れ容喙の資格は有しませんが無論結構な事だらうと思ひます。それから營利的の懸賞法、と申しましたのは現今の多くの商家などで行つて居る方法で、是等の懸賞法は餘り喜ばしく思はれません、何故ならば、是等の方法は巧みに人の弱點に附け入つて利を占め様とするのですから極く卑劣なやり方と云はねばなりません（尤も中には小數の例外もあ

りますが、）そして僥倖心を助長させるをそれが有ますから妾は非常に斯かる懸賞法を排するのであります。尤も是れも生存競走の餘波、文明に伴ふ悪弊かも知れませんが、兎に角不良の傾向かと思ひます、で、是等の悪傾向を打破し様とするには如何しても各自の僥倖心を抑制して、そして是等の方法によるものを顧みない様にしなければ、か丶る悪風潮は止まないだらうと思ひます、全く僥倖にのみ生くる人は世に在つて價値なき人ではあるまいか。

論理がよく通つて居ます、懸賞の分類もまづ無難、論文らしい論文です。（評）

秀逸

運動としての追羽子

北海道　星　精子

運動が人體に、什麼して必要なるかと云ふ事は、私が今此處に行々しく云ふまでもなく、皆様がすてに御承知の事て御座いますから、其れは何も申上げませんが、つら／＼世人を見まするに、男子は別と致しまして、女子は學生こそは、やれ、ぶらんこ、やれ、テニス、と隨分盛んな運動も行ひますから誠に能う御座いますが、さて學校も卒業して髪も、島田などに結ふたり致しますと、まさかにラケットも握られないとか、何とか、云つて運動が誠に不足になります、それでも勝手元てもなされば未だしもてすが、召使も澤山あつたりして、何もなされない方は、御自分ては運動をしなければ身が、弱くなる事を、知つて居ても遂ぶら／＼と遊びがちになるものです、そこで私がお勸め致したい運動は、追ひ羽子で御座います、追羽子は日本在來の遊びて、而も高尚て優美て丸髷の奥様ても島田のお孃様ても、誠に寫り好いものです、風もなくうらゝかな日、あんな小さな桐の板て小さな羽をコン／＼と音をさせてつく表からは立派な錦繪がちら／＼あらはれ、誠に何とも云へぬ美しいては御座いませぬか、そして手も十分に働きますし顔は上を向きますから、胸は開きますし、背は延びますし誠によい運動だと思ひます、皆様よあまりに西洋のもの計りにかぶれずに、日本固有のもので此んな立派なものがありますもの、これから一つ大にやらうては御座いませんか、改良する處があるならば改良も致しませう、兎に角追羽子は誠によい運動だと思ひますから、皆様にお勸め致します、私もこれから大いについて、遊ぶ積りて御座います。

追羽子は日本のテニスであると云つた様な事は他に云つた方もあるの

て、此作者ひとりが功を專らにするわけにも參りませんが、論旨は大贊成であります。（評）

結婚に就て

信濃　秀枝子

結婚は果して幸福でありませうか、能く社會を觀察しまするとそれが悉く幸福と云ふ譯には參いらない樣です、却て苦痛を增す源となることも、折々見受けるのであります。思慮も淺く社會も知らない若い者が、夢のやうな空想にあこがれて、結婚してから意の如くならないので、遂に悲しむべき現象を來すことも、世の中は數々あります。

由來親は子を早く嫁がせやうと、望んで居るものであります、それは子の愛を思ふからにも依りませうが、又自分等の責を早く濟ませやうとの念も伴ふのだらうと思ひます、是等の親には能く考へて貰いたいもので學藝を半途で止めてまで結婚を急ぐと云ふやうなことは、何と愚な話ではありませんか、それを女子通有の虛榮心から、お友達の婚禮話しても聞くと、自分は詰らないあの人に後れてしまつたなどゝ、對手もかまはずに結婚を急ぐものもありますけれど、こんなのが何うして立派な家庭を作るといふことが出來ませう。

能く己れを知ると云ふことが必要であると共に、又他を知ることが甚だ必要であります、自分も今は妻として社會に立つことが出來ると云ふ自信と、己れの生涯を任ずべき對手を十分に信賴し得て、初めて結婚すべきであります、かゝる時は自然と家庭も圓滿に、愉快なる生活が得られるのであります。

早婚を見得とするものもあれば、又それを羨むものもある今日、一寸私の思つたまゝを記して見ました。



わかき母　本郷　鈴木とみ子

難き問題にして常に新らしく解決せんとするもの（評）

指輪の流行について

府下　細谷京子

近頃女學生のノートを開く指、鉛筆を走らせる指には十中七迄は必らず誇りの光が燦く樣です、其中には黄金の光りもありませう、ダイヤの光もありませう、ルビー眞珠もありませう、又價のないガラス玉のあやしい光もありませう、是等の光を一概に惡いとは申しませんが、身を學問に投じて居る者が常に擧つて指輪の光を誇る必要もなかろうと思ひます。

申す迄もなく學校は種々の境遇の人の寄り合つて出來た一ツのホームですから何不自由のない大家の御令孃もお出でゞしやう、やつと、學資をつゞけて居る貧家の娘も居るでしよう、又自から苦學をして居る哀れな者も居りませうと思ひます。

然るに玆に世の流行につれて、女學生間にもちらちら貴い光が燦きだしたので、物にあこがれやすい女性のこと　我も我もと不自由のない方は爭つて高價の指輪をはめる、かうなるど何だか指輪がないと肩身がせまい樣な具合になつて出來ぬ者は金メッキにガラス玉の入つたあやしい光で人の目を僞つて迄も虛榮心を滿足させようとするのです、考がへて見れば馬鹿〱しい事ですけれど矢張時の流行では仕方がないのです、誰とて流行につれたよそほいのしたいのは人情でしよう。

指輪と云へば小さいわずかな光ですけれど、此ために多大の虛榮心が燃えるだろうと思ひますそれで私はこう思ふのです學校で指輪をはめずともいくらもはめる時はあるのですから、どんな御身分の方であろうと學校に迄居破て指を光らせ他の生徒から羨望の瞳を見はらせない樣にして頂きたいものと…、しかし皆樣の中には指輪をはめるについて立派な御意見が御座いませうけれど、こゝにたゞ私の心をのべました。

今の時に於ける頂門の一針（評）

眞の美

大阪市　花子

世間の多くの女、別けて青春の――齡に在て羨望するものは、美貌を有する同性でしやう。男が名望地位に憧憬れると同樣に、女は十中の八九、總ての物を擲つても美貌を贏ち得樣と心懸けます。何故でせうか、私

は異性を魅し、異性の愛を尋ねる樣とする心に他ならないと思ひます、若しさうでなかつたら美貌は不必要です。美くしく見せんが爲に朝夕用ひた香水や香油や白粉も、妻となれば漸く等閑になつて三度が二度、二度が一度となり、母と云ふ名を冠つた曉には、大方其執着は離れます、是は夫の愛に幾分の信用が加はつたからだと思ひます。是に依て美貌を望む女の心を解剖したら、恐らくは虛飾の二字に盡る事と思ひます、決して花や星の美くしさを希ふ心と同一ではありません、恰度女の我欲が――虛榮――男子の理想的分子を含むに反して、全く物質的、現實的にあると同樣に、飽く迄も淺薄です。

女の缺點に數へられる嫉妬、猜忌の心も多くは容貌の美醜からくる樣です。一概には申されませんが、世に貞婦と呼るゝ女は、大抵醜貌で、美くしさを鼻にかけて心の美を思はない者は美貌の人に多い樣です。成程美を好むは貴賤の別なく誰でも同一で、また高尚な趣味の一つですが、然し動搖せる外面の美を好む心を以て一も二もなく高尚の趣味とは申されません、心の美即ち眞の美を認める眼があつてこそ始めて高尚な尊い趣味を持つと云はれるのではありますまいか、文明の曙光を浴びる現代の婦女子は、啻に異性の眼を惹き、愛を受け得らるゝ外面の美のみで滿足が出來ましやうか、

外面の美は一時的です、生命が短かいです、花の如き容顏も頭に白髮を戴き、杖つく時が來たら、昔の美は痕跡もありません。美人薄命の語は、外觀の美に滿足して眞の美、心の美を思はず啻單に、儚ない虛飾に憧憬れる爲だと思ひます。眞の美は隱れたる心です、心の美は永久に生命が有ます。而して勞力の割合に効果の少くして淺薄な外面美を衒はずとも、勞力の少くして効多き眞の尊き美に心を集める方が、どの位超然として高尚でしやう、私は徒らに美貌をのみ是生命とする婦人を、悲しまずには居られません。畢竟外觀の美は天性です、醜を美にする事は不可能です、內外の美全きは、百人が百人欲する所でも叶ひはしません、要と云つて決して美貌を排斥するのではありません、要するに、容貌の美は天性だと自覺して其形式美皮相美以上に眞の美を致されんことを希ふのです。

今一步進んだ議論に接したく思ひます　（評）

虛言吐

神田　三好富久子

私は所謂、此の虛言吐程、恐ろしいものは無からう

と思ふ、何となれば、まるで跡形も無い事を、誠しやかに、いや、あの人は品行が惡いとか、さもなくば、貴女の事を、是れ〳〵惡口して居たとかつて、いゝ加減な、口から出まかせの虛言を言つて、自分と仲の惡い人の事とか、又は自分より、學問でも何でも、良く出來る人の事を妬むで中傷するからだ、それに世の中には、動もすれば、人の弱點を見出さう〳〵と、して居る人が多いからたまらない、其麼事を聞いたが最後、何か由々しい事件でも、聞いた樣な氣になつて、輪に輪をかけて、それからそれへと言傳へる、其れが忽ち、世の評判となつて、どんな清淨潔白な人でも、世間の人から見た、不品行な人となつてしまふ、なんと歎かはしい次第ではないか、第一其の、中傷された人の迷惑は、如何程だらう、到底經驗の無い人の想像し得るものでは無かろうと思ふ、其れは虛言と言つても、一概に言つては惡いと言ふのではない、同じ虛言を言ふのでも、座興の洒落とか、人に害にならない虛言なら、場合に依ては愛嬌にもなりませう、又方便として、譬へば親が其子供に、藥など飮ませる場合に、藥だと言つては飮まないから、砂糖水だと言へば、其れを飮む、斯ういふ虛言なら、害どころか却つて益になるけれども前にも言ふ通り、人に害になる虛言は、斷じて言ふべきでは無いと思ふ、よし言つたところが、知れずには居ない、那麼人は日ならずして、多くの人からの信用を失つて、虛言吐の評名を取り、社會からの、制裁を受けるのであらう。

愛嬌嘘でも一歩間違ふと、信用を失なはないとも限りません（評）

女子と快活

神戸　田中落葉子

「笑つて肥えよ」何たる金言でせう。私はこれを讀み又思ひ出す度に、頰の邊に浮んで來る笑みを、禁ずる事が出來ません。この際、の私は、よくこの金言の旨意にかなつて居るのです。即ち眞の眞の快活といふのでせう。

この快活といふことの中には、大なる無限の力を有して居ます。皆樣も既に御存知でせうが、あの紐育市に笑醫者といふ名を取つて居る醫師がありました。この人は、病人に接しますのに、いつも嬉しさうに、如何にも幸福な顏付をして、笑ひ傾けますので、自然その機嫌が病人にも移つて、藥よりもこの方がよくきいたと申すことです、が以て、その如何に大なる力を有して居るかといふことがわかります。快活な顏付をして、向ふの人まで快活化すといふのは、大なる慈善でございます。

この誰にでも必要な快活は、吾々女子にとつては特に

必要でございます。例をあげて申しますれば、先生がすつと教室のドーアを明けて這入つて來られた時、生徒が皆包みきれない樣な面に、嬉しさうな色を見せて居ると、先生はいくら蟠かまりがあつても、自づと笑つて來ねばならなくなると仰しやいます。

一家の主婦といたしましては、家の中でいつもうれしさうに、如何にも滿足を得た、といふ風をして居ますと、夫なる人はたのしんで職をとり、かへるときははやく我が家へと、急ぎ我家を無二のパラダイスとするでせう。舅姑は、いつも嫁はいやな顏一つ見せず。莞爾として無理をいつても聞いてくれる樣ですと、物に感じ易い老人の事とて、一入嫁を愛するでせう。下女下男に於ても、さうでせうし、近所に對しても圓滿に交際が出來ます。こんな愉快な家に起居する子は、學校へいつては、生徒は尙更ら先生までも快活にする樣になります。女子はこの快活といふもので、どうでも人を動かすとが出來ます。さうして最も容易な方法でございます。

天性快活を授かつた者はこの上ない幸福です。大に感謝してよく活用すべきです。又生れつき沈み勝ちの人は、これとてもあらゆる事に、感謝する心掛を養ふならば、乾度快活といふ重寶な結構なものを誰となく與へて下さります。

皆樣天に對し、地に對し、山に海に人に對し、何にも感謝しやうじやございませんか。

快活は眞底から出たのでなければなりません、此論その原因を感謝に起るものとしたのは先づわが意を得たものであります（評）

オスカー、ワイルドの婦人觀中より

▲婦人を理解せんと決して試むる勿れ。婦人は繪畫なり。故に其の眞意を知らんと欲せば、其の姿を眺めよ、決して其の言に聽くこと勿れ。

▲婦人に天才なし。彼等は裝飾を好む動物なるのみ。故に綺麗に物言ふの外、何物をも有せざるなり。

▲婦人は愛せられんが爲めに造られし者にして、理解せられんが爲めに造られし者に非ず。

▲婦人は其の娘より十歲若く見ゆる間は心より滿足す。

▲婦人の一生は其の情緖に依りて左右せらる。是れ以外別に人生哲學を有せざるなり。

▲婦人は其の感情を婚姻の時まで隱匿す。結婚の後初めて其の眞情を現はす。

▲婦人と男子との間に友情は存し難し。崇拜か愛戀、然らざれば肉慾か怨恨のみ。

▲婦人は男子をして大事業を成さんと鼓吹することあるも、常に之れが成功の大障碍となる。

▲婚嫁せし婦人の執着程世にすさまじき者はなかるべし。こは到底未婚者の夢想だも及ばざる所なり。

▲婦人は好奇の心に驅られて結婚し、男子は倦怠せしが爲めに結婚す。其の失望すべきは兩者一なり。

▲一婦人嘆じて曰く、吾が所天は約束手形の一種なり。今や相見るの煩に堪へずと。

▲婚姻の正當なる基礎は相互の誤解にあり。

俳句

天

夕晴るゝ山の尖りや渡り鳥　羽後　三浦文江

秋晴萬里、一塵をとゞめず。此の人の句すべて俳諧の體と心とを得たり。この句殊に凡手の摸する能はざるものあり(評)

地

一山の僧のうまいや蟬時雨　神田　花岑淑子

坐禪の疲れ、松籟これ淨土の樂(評)

人

青すだれ海を眞向に机かな　茨城　岡田うめ子

無造作にして而も巧みなり(評)

秀逸

木にかくる網の雫や夏の月　羽後　三浦文江
秋雨や芦にかくるゝ鳰の聲　同　同
柴垣に鍬入るゝや五月晴　羽後　薔薇女
紫陽花に飛ぶ山蝶や園の晝　磐城　武者漁火

思ひ寢の枕を叩く水鷄かな　岩代　わすれな草
ほとゝぎす渡頭に女老ひけり　大阪　草村君子
人稀に通ふ岨路の通草かな　愛知　華影
笠とれば風がある也夏木立　若狭　津田たき子
五月雨や晝灯をとぼす倉住居　同　同
牛部屋の牛に西日や合歡の花　常陸　中内白水子
風誘ふ音や棚田の落し水　新潟　村山ざん子
病める子に乳餘る夜半や時鳥　秋田　佐藤梅野
甘酒に女ばかりや月まろし　同　同
夕虹を見て植ゑ終る田面かな　茨城　寺門くに子
五月雨や鵜匠が家の朝灯　奈良　安川正子
膓へ雨がしみ込む山案子哉　茨城　日野愛子
夢を見て泣く子にうたし枕蚊帳　若狭　澤田あい子
歌かるたはした女うたをしらぬなり　島根　白百合
草葵灯火遲き庵かな　下總　小澤檀子
雷や長生殿の鬼瓦　武藏　藤森安子
米をとぐ舟の女房や行々子　陸中　黒澤美江子
湯女出で物洗ふ谷の若葉哉　信濃　川上かつ子

露涼し薬草の花雲に　秋田　露月女
氏汁橋に柚の花ちる五月雨　同　同
春の風女歌舞伎の畫姿哉　常陸　中内泉子
三階に緋布團並ぶ春日哉　同　同
瓜好きの子でもありしが忌日哉　秋田　佐藤梅野
嫂子と妹は下手にぬる袷かな　同　同
米をつく裸男や夏の月　兵庫　杉山春翠
主税つれて一力を出る日傘哉　同　同
草花や河原渦香ふ宵月夜　羽後　月秋女
螢飛ぶ寂光院の小雨かな　同　同
木槿垣骨相を見る人住めり　羽後　菊地おまき
天の河水の潮來の十二橋　同　同
夕露の草に螢の灯にじみけり　鹿児島　山下男子
帆張の船の行衛や秋の暮　同　同
雷や蓮の花ゆるゝ印旛沼　高岡　篠原みゆき
残月の竹にかゝりて露涼し　同　同
永き日の京見て泊る伏見かな　島根　白百合
雉の声折りたく舟に霞かな　同　同
温泉烟の立つ谷間や初さくら　若狭　澤田あい子
蚊帳の穴蚊に目醒めたる夜半哉　同　同
夕陽の草に虫飛ぶ五月哉　大分　佐藤きよ子
鐵山へ新道開く夏野かな　同　同
葉櫻の中に御茶所の煙哉　山口　河村靜子
居酒屋や樽に挿したる藤の花　同　同
波踏んで渚傳ひぬ夏の月　金澤　野崎浜江
宵々に見ては数よむ螢かな　同　同
橘落ちて渡しを呼ぶや行々子　茨城　大門信子
旅人のわらじ捨てゆく藤の花　同　同
提燈に竹の雫や不如歸　奈良　安川正子
舟洗ふ漁夫の裸や夏の月　同　同
雜木山小雨となりぬ鹿の聲　茨城　日野愛子

朝寒の落葉に眠る小猫哉　同　同
七夕の露とる蓮の夜明け哉　松山　曉子
貰ひ風呂待つ間を花火たきにけり　同　同
水打つて土の匂ひの暑さかな　大阪　谷下しげの
日傘さす女ものうき草履哉　同　同
落佛や髪を剃りたる寺男　福井　明星
倒れ木を踏みゆく山や閑古鳥　同　同
故里に旅寝のあはれ水鷄なく　下總　小澤種子
神苑の梅若葉して雨久し　茨城　寺門くに子
友摺れの蚊帷闇き夜なりけり　信濃　川上かつ子
老鶯や汗乾きたる峠茶屋　若狭　瀧本なみ子
老いにきと夜水の番や時鳥　大阪　奥野妙子
南天の花眞白や五月雨　奈良　白ぎく
南樓に夢まどかなり竹婦人　上總　翠溪女史
冬の灯を吸ふ大寺の柱かな　若狭　宮川こま子
御野立や錦の旗に風薫る　備後　加藤眞佐子
江樓に見る山々や青嵐　府下　安達つゆ子
棒鼻の宿の障子や明け易き　愛知　華影
罪深き身を救はれて夏書哉　常陸　春野おさ子
上京や豆の花ちる春の果て　京都　白百合
井を洒す裸男や雲の峰　日本橋　吉野幾代
おばしまや谷を隔てゝ百合白し　岩代　笠岡松江
星落ちて石ともならず飛ぶ螢　兵庫　坂上かめ
馬洗ふ水より立ちぬ初霞　丹波　鹽見喜代子
二階から塵はき捨てる葵かな　靜岡　波多野いち子
夜桑摘む丘の人聲ほとゝぎす　大阪　木村花子
鮎川や木屑を流す橋普請　備後　强子
蓮の花や湖を隔てゝ雲の峰　尾張　服部登久枝
舟べりの女美し夏の月　近江　松吉喜久榮
酔ひしれて蚊に刺れたるまろねかな　播磨　令子
葉隠れに花もありけり夏木立　雛子

春ゆかば行けよと鐘のひゞきかな　京都　隅田れい子
茨の花雉子の古巣の殘りけり　尾張　鈴木詠子
梅を干す縁に日の照ろ照らぬ哉　越後　藤原泣黒子
紫陽花や病にこもる九十日　志摩　火葉
戸をくらぬ山の温泉宿や時鳥　大分　渡邊艶子
銀屏に灘の燭の映りけり　佐渡　古藤伊英子
秋風に汐先しろし北の海　若狹　蝶夢子
明け放つ離れ座敷や風薫る　近江　奥居梅野
梅干の蓋や屋根の日斜に　陸中　黒澤美江子
百合の花石碑の苔を洗ひけり　奈良　中富よしみ
山梔子は倚廬の辺に咲きにけり　兵庫　田中ますゑ
伽羅の香に人なまめきて青簾　信濃　松屋芳子
水上は螢の里となりにけり　陸奥　月館いつ子
吾妹子のもてあましゐる西瓜哉　美濃　ときわ子
人戀ふる耳にわりなし遠きぬた　滋賀　草野しげる
梅の實の大方落ちて皐月晴　伊賀　石原勇子
門風呂に隣を呼ぶや夏の月　大分　本田一枝子
羅の振の袂や風薫る　韓國　富永消子
日盛りや醫師一人に渡舟　函館　美喜子
乳母と寝る雛の室の灯かな　岩手　入貢櫻とく子
ハンケチににぢみて赤き苺かな　愛知　華影
牛あまたならぶ堤やさつき晴　千葉　ひばり草
灯ともして打水光る葉末かな　京都　藤尾よし枝
美しきたすき掛たる田植かな　水戸　重子
陽炎や風呂桶を干す垣根越し　芝區　五味春江
卯の花の垣根續きや乳母が家　日暮里　細谷鋭子
病室に射す夕陽や蟬の聲　千葉　金井うてな
古寺の柱を出づる羽蟻かな　府下　藤森安子
苗代や雨を斜に飛ぶ燕　兵庫　祥子
猿澤の池に夜更けて夏の月　秋田　つな子
夕立や郡道をいそぐ裸馬　長崎　南錦女

早少女の戻り路暗の薄月夜　尾張　椒谷光子
砲塔に激する浪や夏の月　紀伊　白蕣子
暮せまる御苑の露の芝生かな　藤澤　常盤幸子
夏草や田圃の路のいとせまし　京都　井上すみ子
想はむとして殿入りけり春の雨　福井　やまさと
青梅の殘りて熟みぬ半夏生　相模　善浪しづ子
雪車唄は遠まさりけり榾火焚く　近江　辻芳子
爐塞いで縁の日南に媚かな　丸龜　太田ときゑ子
狐鳴く霜夜の月や寒山寺　定子
旅人の笠脱いてゆく夏木立　近江　草の家しのぶ
朝月や小牛のほゆる草の家　京都　紫花
飛立ちて大きう光る螢哉　茨城　松本くに子
竪木の杉に落ちたるはたゝ神　本郷　田村ゆかり
花蕾落し込みけり金魚鉢　淡路　上野實子
麥秋を眺め過ぎけり汽車の窓　京都　小蓄
白蓮のもろく散るトや蒸し暑き　靜岡　鈴木いは子
山住の粽大なる端午かな　山形　高世昌子
川端の柳につなぐ涼み舟　府下　岡本瓦久子
鼻先に汗して笑ふ妹かな　美濃　加藤芳子
人通り絶えて月見る床几哉　大阪　中野喜代子
梅干の紫蘇の香高き早かな　呉市　山本浪子
賣藥の廣告高き幟かな　新潟　淺野喜美子
卯の花の影浮く下の小徑かな　豐後　狩手樹子
日盛や斑猫光る埃道　名古屋　三浦ろく子
昔餅の南向きたる暑さかな（祇園會）　京都　佐々木繁子
走馬燈くらし蚊遣の煙り先　大阪　鹿島綾子
蚊遣火の影に消えたる浴衣かな　備中　小見山春子
黒揚を歴する青葉若葉かな　小倉　石井つれ子
目にあまる緑の果てや青嵐　麻布　花子
出て迷ふ綠の中の風の群　京橋　夏くも
きり〲す戀しき聲も交ぢりけり　本所　夏ノ

本號掲載小說の批評

○破疊（大阪、秋葉清子）　先づ何より神妙に書いてあるから、作中の人物それ〳〵に情がうつる、短い話の中に出て來るお房の父母、兄、叔父、從兄、庄助、清次、作太郎、伯母、瀧田など云ふ人々が、それ〳〵濃い薄いに随つて人物が表れてゐる、殊に作中に活動してゐるお房とお勝の二人姉妹の、しがない生活をしながらお房の養子話に就いて、別に喜ぶでもなければ、悶えるでもなく、或る大きな運命とでも稱ふべきものに服從してゆく様子が、一寸した話の間にまで表れてゐて、世には斯んな境遇の女もあらうと云ふことをしみ〴〵と思はせる、取材の扱ひ方が他のお嬢様達とはまるきり變つてゐる。只一つ、東京の作太郎と云ふ人に對してお房は何う思つてゐるか、「あんな人に歸られて何うなりますし」と兄に書いてやる手紙の眞意は何うか、迷ふな、迷はじと誓つてもなほ未練に迷ふのではなからうか、それなら熱い涙の滾れるのも分つてゐる、其邊の心持が僅ばかり書き足らぬやうに思ふ、併しひつくるめて二十六になつたと云ふ女の苦勞した性格が實に好く表はれて居る。

○女客（麻布、加藤貞子）　何うも此に似た作があつたやうに思はれて、初對面の氣はしないが、兎に角書き放してなく、大家の作と伍して遜色を見ない。德田秋聲プラス眞山青果と云つた形で、ねらひをつけた處が少々嫌に思はれぬでもないが、作者が純正なる藝術的態度に愛てゝ、之を推擧するに憚からぬ。描寫も申分なく手が行きとゞいてゐる、荒い處は荒く、細い處は細く、省く處は省き、抒すべき處は抒してある、異議を唱へる處は殆んど無い。

○町の出水（麻布、赤崎あい子）　東京市中の低地は能く水が出る、崖が壊れる、家が埋まる、人が死ぬ　それを材料にして書いたものだが、描寫が生々してゐる、態度に餘裕がある、事件に首を突込んで書いて居る態度でなく、二歩も三歩も後へ退いて書いてゐる、小說には何うも此態度が好いらしい。人間二人の生命に關する大事件も、世間は冷かに看過して了うことがあると云ふやうな心持が、本篇の意味のある處だらう　強ち心理的に書いてないからとて此作の描寫の巧みを沒することは出來ぬ。

○桃代（日本橋、佐藤萬壽子）　女の心持は女でなけりや分らないと云ふことが眞實なら、斯う云ふ作が

眞實に女の心持で書いた作だらう。感情がいき〳〵してゐる、堂々たる六尺の男作家でも迚も眞似の出來ないやうな描寫がチラ〳〵と閃いて見える、つまり女の眼に映つた女を描いてゐるからだらう、文章もをさない、まだ〳〵廣い道を行くのは後の話だが、先づ作家たる第一の素質は具へて居るやうだ、幼い天才の面影は浮ぶ、最も此作の如き、小說らしい筋道を立てやうとして苦心した痕はあるが如何にも不手際だ、終りの時計屋の店員でも然うだ、何の爲に出したのか一向分らない、まだ小說の形を整へることに熟れないからだ、だから局所、局所のうまい點を見て貰うより仕方がない、松葉屋から歸らうとする處や、君子が怒つて居る處の樣子など、眞實を捉へて居る、折々機智を働かせて、魚屋が「イよう、別嬪」と云つて駈出したり水調子の三社祭が聞えたり、怒つて御飯を食べなかつたからひよろ〳〵するのだらうと云つたり、なか〳〵隅へは置けないと思ふ。

○朝顏（德島、吉田古磨）　朝顏のやうな果敢ない姉の生命が能く書いてある、全躰の調子はあどけない子供上りの筆つきだけれど、言ふことが新しいから動かされる、弱々しい女性を描寫した作も澤山あるが、此れほど弱々しさが能く表はれてゐるのは少い。一種特別の味ひある小說だから、讀者諸孃も之を見免してはならぬ。

○貸間（本鄕、捨菊）　これが四五年前だつたら小說か何うか疑問になつたらう、大勢の移るのは早いもので、これでも立派な小說だと云ふ理由が、又立派につくやうになつた。其處をあてこんで書いたかとも思はれるけれど筆がしぶらないのと、垢拔がしてゐるので讀むのに氣持が好い、然う高く持上る作でもなからうが、短篇小說の手加減は此邊だと云ふ的には說へむきの作だ。

○生垣（牛込、はな）　戀の葛藤も此處まで來るとなか〳〵現代的だ、嘉子のやうな女は東京でなけりや居ない、男子を知り拔いて居ると云ふやうな動作、才はぢけて居て、覺めて居るやうで、底に女らしい弱點を持つてゐる性格、能く表はれてゐる。對話中に人物を活かすと云ふことは、小說の最上手段でもあり又進んだ形式でもある、それがなか〳〵むつかしい、下手にやると本鄕座式に陷る、此點も多少其氣味はあるがおほ目に見て許すことゝする。描寫の樣式も獨創ではない、誰てあらう、花袋にあらず、葉舟にあらず、無論獨歩でもない、白鳥でもない、誰の型に似て居るかと言へば、先づ風葉或は青果位の處であらう、何うしても旬は戸塚に近い。

○暴風雨の朝（愛知、朝倉さよ子）　地方から來た作の中で地方の色の出たものも有るにはあつたが、此れが最も勝れてゐる。暴風雨の朝の空模樣から、人の樣子から、家の樣子から、所謂周圍の空氣が表れてゐる。それが此作の生命で、外に深い意味はないけれど。此種の代表作としては最高點を與ふ。

○同居（芝、しげ子）　何を考へさせると云ふこともないが、何か知ら考へさせる、流行の言葉で云へば無解決無目的の短篇だが、女でなけりや書けないと思はせるやうな書きぶりも好く、氣の利いて居るのも短篇らしくて好い。一寸顏を出すだけだが倉島の娘がうまく表してあ

る、尾本の主人も好い細君も好いには好いが篇中の主人公であるだけ、此人の爲に今少し書くことを惜まなかつたらば更に好からうと思つた。

○令孃（東京、喜久）　姉と妹が暗默の間に別々の方向を指してゆく心の中が、明かに分るやうに書きわけてある、常住座臥の何でもない遊びことのうちに人生の一大事も含まれてゐると云ふやうな暗示も見へる、華やかな上流の家庭と、若々しく動揺してゐる人と、眞面目に幸福なな心を持つた妹と、それ〴〵織り交ぜて、美しい光の半面とを表はしてゐる、正しく眼前の女の世界に開展されつゝある事實であらう、何處が好いとか、わるいとか云ふやうな作ではないが、全體に女性の情調が流動してゐるから、女子文壇獨占の材料として之を頂んず。

○木偶（常陸、秋山欣子）　此作を透して現代の女性の思想を窺ふことが出來る、且又此作は彼等の思想を發表しやうとするが目的であつた、迷つてるやうな、醉つてるやうな、夢みてるやうな覺めてるやうな、動揺の空氣に呼吸してゐる現代の女性は皆斯うした思想を抱いてゐるのであらう、着眼を此處に定めたのは確に好かつたが、一歩進めて藝術的に之を究斷すると、描寫の力が弱い、弱いと一言に斷じ去るのは酷であらうけれど、短篇としては少し急所を逸してゐる、少しくどすぎるも少しはつきりと描いて欲しかつた。

○女（本所、江原田鶴子）　一言にして云へば才筆だ、才筆甚だ好し、才筆家は自ら考へて、此筆に何を盛らうかと云ふことに深く心を留めねばならぬ、筆は一つの道具に過ぎない此道具の働かない人、持たない人は論外だが利器を具へて居る人は、刻むものを選ばねばならぬ、而して好く刻まねばならぬ、初心者の爲に一言才筆の用を辨じて置く。借て此作の中で十七の女が二人の子の阿母さんであると云ふ處が一番好い、妾さんと姉さんは劣る、寧ろ初めの一つに全力を注いだ方が好かつたかも知れぬ。

○渡鳥（本郷、鉦子）　一篇の戀懺悔、誠に哀な話だ、話の筋は極く單純だが却つて取まとめやうとしなかつたので好い。極力、秀さんの戀に敗れた感情を表はさうと試みた、如何にも女性の作たることは裏書を辭しない、秀さんが遥笑の外に人を見ざるが如く、此作も一圖に秀さんに深く〳〵と觀察を鋭くしてゐる、女の作は斯くあるべしと思はるゝと共に外の作を書く時、異つた人間、違つて世間を描寫する時には何うあらうかと云ふ不安心が伴ふ、此作ばかりではない女性の作には皆然う云ふ觀察がついて廻る。

○寺（山形、きみ）　此作が異彩を放つて居る理由は、田舍のお寺の生活と云ふものが、背景になつてるからだ。成程斯んなものだらうと合點が行く、描寫もしつかり根抵がある、何處と云つて指すやうな缺點もない。全體に濕り氣の少いのが難と云はゞ難であらう、言はゞ情味が乏しいのだ、其代り文章に力が籠つてゐるから大いに讀み甲斐がある。

○印象（大分、南海漁婦）　むつかしく言へば本能の衝動から自然に起る第一印象である、よほど美文式で心理の解剖に努めて居る、人生はもう少し複雜してゐる筈だけれど、人生に一歩踏出した處女の感想は此位なものであらう。

○心の底（松山、ぎよう子）　女と女との間にも戀はあるものだと聞いて居た、明星さんの所謂浪情が然うであらう、此篇は女同士の戀愛を描くことが主ではない、一方の對手の人の性格を或る處まで描いてみやうと云ふのが發足點であつた、それがかなり描けて居ると思ふモデルもあるらしい、モデルが無くては斯う自然に或る女――明星さんのやうな二重性格の人――は描きにくからう。

○二階から（芝、陶山すゑ）　此ほど主觀の勝つた作は集つた中にも少かつた、近頃の批評家の說に據ると小說に主觀は禁物のやうだ、けれども嚴密に言つて全然主觀を排し得るか何うか、人格の大きい人の作つたものには大きい主觀が現れてゐる、それが又其作の貴い所以であらう、劣等な人間がくだらぬ主觀を持つて書くからくだらなくなるので、其處は人格の高下に由つて相場も極るわけだ。此の『二階から』は主觀を主觀らしく現はしてあるので、謂はゞ態度に於て小說らしくないのだ、けれども作者の心持は全く痛切に響いてゐる、何の彈力も權威もない客觀描寫より、寧ろ此方が勝つてゐる、近代女性の思想が全篇に閃いてゐる。（以下四篇の批評は誌面の都合により略す）

本號掲載の小說を個々に略評すれば右の通りです、何にしても小說を主として作品を募つたゞけに、好い作が多く集りました、殊に秀逸中にも認むるに足る作は少からずあります、入賞と秀逸とは然まで段は違はないので、ほんの一步の差です、入賞に洩れたからとて落膽せず此等の作家は大いに發展に努むべきです、なほ掲載し得なかつた多大の寄稿家諸孃にも一層自ら其力を勵まして好い作を心掛られたいものです。（記者）

各欄選評餘談

▲詩は前の增刊に比して劣るとは思ひませんけれど、上位に置いた二三の作を除いて、全躰の調子に惰氣があり、混迷の樣子が見えて居るのは甚だ殘念です、前の增刊に於ても述べた通り、詩壇は未だ全躰に振興しないものと思はれます。

▲和歌は甚だ盛んでした、それに上手な人は一人で十首あつても十首ながらうまい下手な人は十首二十首あつても皆まづい、概見するに新派の空氣は餘程一般に行き渉つてゐるやうです、これでなくてはならぬと欣ばしく思ひます。

▲小說に次いで多く集まつたのは美文でした、しかし其成蹟は豫想程にも參りませんでした、其れは矢張り諸孃が應募の主力を小說に移されたかと思はるゝ節もあるので、勢免かれないと思ひました、さて其作品は樣々に分類するとが出來やうと思ひますが、例に依つて抒情的感想の披攊が多數を占めて居た、これは本誌獨特の熱烈清醇のもので、たしかに青春の誇りとも云ふべきです、其表白の技巧もます〳〵圓熟して來たしかし其れが大抵一樣で其間に軒輊を立てるのが難しい點もありました。

▲日記文と書翰文とは次いで多く集まりました、日記文は通常號のよりも寧ろ不成蹟でいさゝか失望しました、が、書翰文は一躰に好成蹟を收めました、其題材の選び方も多方面で直ちに生活に渉り趣味と實用とを兼ねたのが多く、止むを得ず沒になつた中にも佳作が多くありました。

▲是れに反して新論文は例に依て不成蹟でした、が、これは今回に限らないので漸次によくならうと思ひます。

▲俳句は一人平均十句位の投句がありましたが、數へる程の人數を外にして殆んど眞伎倆が分りませぬ、一言に云はゞまだ〳〵振はない方でありませう。（記者）

雜報

○暑い〳〵と云ふうちに早や立秋となつた、暑さには大分慣れて來た樣ではあるが、季節變りて雲の往來急しく、幾度となく降り損ふ雨て却て蒸し暑い、しかし追がに朝夕は冷氣を催うして、庭の桔梗や女郎花が風にそよぐ、虫賣りが大路を流して行く、酸漿や玉蜀黍が市に出る、其れ等の景物にも爭へない時の移りを見るのてあります。

○月の七日が名物の兩國の川開きてした、煙火は當夜を初め彼方此方で催ふされた。文士の方々て避暑地に出掛け旅行したものも大分あります。富士登山は益々簡便の設備が出來て容易になつた、かの盲人の登山や、近くは此の花合婦人團の目賀田男爵夫人外十一名の一隊が、折柄の不良な天候にかゝはらず登山を了へた壯擧がありました。

○大阪の大火は新聞て見ましたが實に稀有の大慘禍てあります。同地には誌友も澤山にあるとてあり自然被害の方もお有りになるとだらうと、洵に御同情に堪へません。炎暑の時てありますから一層御自愛を望みます。

次の增刊に注意せよ

本誌の第四增刊は**家庭日記**と定めました、女の手に成りし最も進歩的の日記を發表し得るは我が『女子文壇』獨特の能力であらうと信じますから、讀者諸孃も記者の意氣込を諒察して面白い日記を作つて下さい、日記を主として外に各種の作品を募ることも亦いつもの增刊の例にならひます、懸賞の方法、締切の期日、投稿の規定等は別項廣告欄内に詳しくありますから見落さないやうに注意をねがひます。

明治四十二年八月十二日印刷
明治四十二年八月十五日發行

定價金貳拾錢

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎
印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎
印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十六十二番地　電話（本局六〇七番）　女子文壇社

特約販賣元　○東京堂、東海堂、北隆館、上田屋、至誠堂、良明堂

明治四十二年八月十五日發行
（每月一回一日發行）
女子文壇
臨時増刊
短篇小說
第五年第十一號

【東京秀英舍印刷】